

【書籍発売中】 田んぼで
エルフ拾った。道にス
ライム現れた

幕霧 映(マクギリス・バエル)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

【少年がエルフを拾った日、世界は変貌した】

ある日の学校帰り、道端で白い髪の美少女に出会った主人公。

妙に耳が尖った彼女は、自分を『異世界から来たエルフだ』と言った。そして『この世界にモンスターが襲来してきている』とも。

当然信じられる筈も無く、無視して歩き出そうとした主人公だが、一瞬目の前に立ち塞がる、ゲル状の怪物《モンスター》を見て、啞然とするのだった。

■ “フルフェイスパンケーキ”さんが田んぼエルフの二次創作を書いてくださりま

した！ 是非こちらもどうぞ！

<https://syosetu.org/novel/234924/?s=09>
■【書籍化決定しました！ もう発売してます!! 書き下ろしエピソード多数収録で
す!】

目次

第一部『魂の在処』編

一話『非日常は田んぼに落ちてる』

1

二話『幸せの魔法』

11

三話『厄日がエブリデイ』

28

四話『絶望は空から降ってくる』

38

五話『進化する生命、退廃する文明』

50

六話『変異種』

61

七話『動乱する世界』

75

八話『不穏なる影』

84

九話『終わる世界』

94

十話『排殺騎士』

103

十一話『神よ、無貌なる天使たちよ』

115

十二話『其は、天を焼き焦がす灼炎』

128

十三話『公務員（いのちがけ）』

141

十四話『飽和せし者』

153

十五話『邂逅する異郷人』

165

十六話『終焉の序曲』

177

十七話『魂はどこへ宿るか』

190

十八話『醜悪なる流星』

202

	十九話 『次元を翔けし者』	212			
	二十話 『“現実的”絶対者』	226			
	二十一話 『灰園の大賢者』	239			
	二十二話 『決着』	252			
	二十三話 『龍の血晶』	263			
	二十四話 『魂の在処』	280			
297	E x 『精霊王と彼女のすべて』				
	二十五話 『たとえ、そこに君が居なくて』	315			
	『も』				
	E x 『モンスター凶鑑』(一部抜粋)				
330	E X 『臆病者の帝王くゴブリン・エー』				
	十話 『裏切り者と理想』	482			
	九話 『起動、精霊王の義眼』	468			
	八話 『無明の団欒』	456			
	七話 『黒曜石』	446			
	六話 『熾天狩り』	434			
	五話 『ただ息をする、人の残骸』	418			
	四話 『灰色の情景』	407			
	三話 『神の存在証明』	396			
	二話 『頂点の怪物』	383			
	一話 『始動する物語』	370			
	第二部 『神の存在証明』編				
	『ス』				
					344

596	十九話『The Birthday』	583		
	十八話『誰』		583	
568	十七話『理想力学と次元式救世論』			
	十六話『樂園の天使たち』		553	
541	十五話『異界生命体対策本部』			
	十四話『綺語』		529	
516	十三話『無かったことにしよう』			
	十二話『地下作戦会議』		506	
	十一話『理想砕く神威』		493	
				二十話『異端者の聖剣』
				EX『透明人間の話』
				617 608

第一部『魂の在処』編

一話『非日常は田んぼに落ちてる』

晩夏。

稲穂が揺れる田舎道、かんかん照りな青空の下。俺はワイシャツの胸元をパタパタ仰ぎながら自転車を押していた。

気温は優に30度を越えているだろう。シャツがべったり背中に張り付いて気持ち悪い。

地球温暖化が嘘か本当かなど散々議論されているが、少なくとも俺は夏が来る度に実感する。ファツキンホツトだ。軽井沢にでも逃げたい。財布に300円しか入ってないけど。

「あー……クソ。なんだってんだよ……」

額から落ちて目に入った汗を袖で拭う。

陽炎かげろうに歪む景色の向こう側に、忌まわしい坂道がまだまだ続いて――

「……へっ?」

――思わず自分の目を疑う。脇の水田に、誰かが落ちているのだ。

腰まで泥に埋まっけていて身長は分かりにくいだが、そこまで高くはない。真つ白な長髪を後ろに束ねている。

近所の婆さんが滑り落ちでもしたのか……？

「大丈夫ですかー？」

遠くから声を掛けてみるが、反応が無い。こちらに向きさえしない。ただ呆然と明後日の方角を見て突っ立っている。

良く見れば服装はワンピースっぽい。農作業中というわけではないだろう。

……熱中症とかで動けなくなってしまうてるのかもしれない。

制服を汚したくはないが、このままじゃ命が危ない可能性もある。助けなければ。

俺はスニーカーを脱いでからズボンをたくし上げて、水田へ踏み込んだ。

「あのっ!?」 聞こえてたら返事してください!」

ひんやりした水田をじゃばじゃば歩いて近付き、そう叫ぶ。

そこでやっと彼女は俺の声に気が付いたようで、こちらへ振り向いた。

——そこで、絶句する。白髪ゆえに勝手に老婆だと思っていたがその顔は予想外に

若々しく、中学生程度の女の子に見える。

外国人、あるいはアルビノというヤツなのだろうか。

目鼻立ちが恐ろしく整っていて、まるで人形のようなようだ。

「……ー、ー、ー？」

「……は、あ、えと、こんにちは。い、いや……な、ナイスミートウー……う！」
やはり外国人なのか、少女は無表情のまま、聞き覚えの無い奇妙な言語で語りかけてきた。

俺がアタフタしていると、何かを考え込むように細い指を顎に当てる。そして近寄ってきて大きな赤い瞳で俺の目を覗き込んできた。

向こうの瞳孔が細まり、何度か瞬きをする。

そうして見つめ合うこと数秒、彼女はパチンと指を鳴らした。

「あ、あ、あ……ボクは……いや違うな、セツシヤ……ああ、雌めすの一人称はワタシなのか」

「は……？」

「君の母語はこれで合っているかな。景色を見た限り高度な農耕民族のようだが……あれ、私の言葉通じてるかい？」

先程とは打って変わって、少女の口から紡がれたのは流暢な日本語だった。
泥を掻き分け、少女は俺の方へ詰め寄ってくる。

「え、ちよっ……」

「通じてるようだ。体の造形も近い……似たような進化を辿ったのだろうか。ちよっ

と失礼……ふむ。性器も私の世界の猿人族と大差無いな……」

「ひああつ!? 股さわるな! おい!? なんなんだお前! 痴漢だぞ! 女の子だからって何でも許されると思うなよ!」

俺の体をべたべた触ろうとしてくる少女の魔の手から逃れるため、俺は後ろに大きく飛び退いた。

が、そのせいで足がもつれて頭から思い切り水田へダイブしてしまう。

全身が泥に濡れてひんやりする。口に入った泥を吐き出しながら少女を睨んだ。

当の本人は不思議そうな顔で『大丈夫かい?』と言いながら俺へ手を差し伸べている。

俺はその手を乱暴に払い除けて立ち上がった。

「助けは必要無さそうだな。次からは気を付けたまえ」

「いや完全にお前のせい……」

「私がおなのかー」という質問には答えよう。私はステイルシア。こことは別の世界から来た者だ」

俺の抗議を遮りながら、ステイルシアを名乗る少女は鈴を転がしたような美声で無感情にそう告げた。

……俺はやべえ奴と関わってしまったかもしれない。こういうの『電波』とかって言うのだったか。

とにかく逃げよう。これ以上こいつと関わったらロクな事にならない気がする。

『空から降ってくる女の子』とかと同じぐらい面倒を呼び込みそうだ。

「す、ステイルシア、ちゃん？ 俺ちよつと用事あるから帰るね！」

「そうか。気を付けて帰るといい」

意外と素直なステイルシアに内心安堵しながら、俺は水田から上がりスニーカーを履き直して歩きだした。

はあ……酷い目にあつた。帰ったら洗濯機に制服ぶちこんで……いやここまで汚れたら前洗いしなきゃ駄目か。めんどくさいな……

ぺたぺた

それはそうと、明日はお気に入りラノベの新刊が発売する日だ。朝からバスで本屋に買いに行こう。

そう思うと嫌な事も全部吹き飛ぶ気がする。今からワクワクしてきた。

「楽しみだなあ」

「ああ、全くだよ」

「いやちよつと待て」

俺が物凄い速さで振り向くと、そこにはニコニコ顔で佇むヤバスイテイルルシンアアの姿があつた。

良く見ると裸足で、泥に濡れたレースのスカートから細い足が伸びている。
なんで着いてきてるんだコイツ。

「着いてくるなよ！」

「それは無理な相談だ……例えばもし君が突然たった一人で未開のジャングルに放り込まれ、そこで優しそうな人に出くわしたら何がなんでも着いていくだろう？ それと同じだ。私は今、凄く困っている」

「自分の家に帰れよ！」

「家が無いから君に着いていつてるんだらうっ！ お腹空いたし人肌が恋しいんだ！」
「堂々と浮浪児宣言すんじやねえよ！」

くわっ！ という効果音が付きそうな程の迫力でステイルシアは言った。

その鬼気迫る雰囲気には圧され、俺はとりあえず話を聞いてみる事にする。

「はあ……家出でもしたのか？ きつと親御さんが心配してるぞ」

「私は、とある事情により自分の住んでいた世界から弾き出されたんだよ。家出と言うよりかは『追い出された』に近いな」

「はいはいそういう設定ね……そんな陳腐な設定じゃ売れないよー」

「その意見は一体どこ目線なんだ……あつ、そうだ。これを見たまえ！」

ステイルシアは、自分の髪をかき揚げて耳を露出させた。

それがどうした——と返そうとして、言葉を失う。

長いのだ。耳が。妙に尖っていて、ピコピコ上下している。

呆気にとられる俺を見て、得意気な顔だった。

「……なんだそれ」

「私はエルフだ。先程ちよつぴり君の記憶を覗かせて貰ったが、知識としては知っているのだろうか？」

「えー、いや、は？ マジ……？ ちよ、触って良い？」

「あうっ」

ステイルシアの耳を掴み、むにむにしてみる。

……本物だ。温かくてすべすべで、ほんの僅かに脈動を感じる。

それでも信じられなくてステイルシアを見返すと、顔を紅潮させながらびくついていった。

俺は咄嗟に耳から手を放す。

「あつあつ、あつ……」

「ごめんごめん!？」

「耳は敏感なんだよ！ 全く、礼儀がなっていない……これだから最近の若者は……」

ステイルシアは自分の体を抱き締め、ブツブツ言いながらこちらを睨んでくる。なん

ない木の棒でゲル状の化け物をぶっ叩いた。

すると化物は、アルミホイールを丸めた時みたいなの歪な断末魔を残して消える。後には赤いビー玉のような物体だけが残った。

「えっ……えっ？」

「どやあ……」

「いや『どやあ』じゃなくて！ なんだあれ!？」

「うん……？ 君、その年でスライムも見たこと無いのかい？」

スライム。

某国民的RPGでの最弱モンスターとして名高い——でも原典のTRPGの方では結構強いポジションな——アレ。

俺は『あんな怪物この星に存在しない』とステイルシアに説明した。

「……ふむ」

顎に手を当て、考える素振りをするステイルシア。

それから、少しふらふらしながら目を細め——ぱたんと、倒れた。

「おい!？」

「お腹空いた……」

地に伏せた状態のまま俺へ両手を差し出し、上目使いで『おんぶ』と要求してくる。

俺は溜め息を吐きながらその手を取り、背中におぶった。
柔らかく、軽い。女の子の感触だった。

「……あのさ、おんぶするのは良いんだけど」

「どうしたんだい？」

「頭に当たって痛いからその木の棒捨ててくれない？」

「やだ」

????????????????????????????

iiiee
【溶解性粘液生命体】脅威グレード：E

二話『幸せの魔法』

「はあ、はあ……重てえ……ただでさえしんどいのに余計な荷物が増えた……」

「乙女を重たいとか言うもんじゃないよ」

「背中ではなんか変なのが喚いてるし……」

「ねえ」

ひいひい言いながら長い坂を登り切り、俺はやつと自分の家の前まで辿り着いた。

立ち止まった事で察したのか、背中のステイルシアは俺があげた弁当の残りの卵焼きをもぐもぐしながら『立派なお家だね』と言う。

俺の家は、古びた大きい武家屋敷だ。父母を早くに亡くし祖母と二人で暮らしていたが、その祖母も半年前に死んでしまった。なので今は一人暮らし。

祖母は売って良いと言っていたが、唯一の家族との思い出が詰まった家を手放せる訳が無かった。

「ただいま」

立て付けの悪い引き戸をガラガラ開けて中に入る。

俺はステイルシアをおんぶしたままバスルームの所まで連れて行き、浴室で下ろし

た。

まずは泥を落として貰わなければ。

「とりあえずシャワー浴びろ。着替えは……嫌じやなきや俺の貸してやるから」

「しやわー……?」

「このノズル持つて、そのレバー上げろ」

「へえ……? わああつつつ!!」

「馬鹿なんで顔に向けた!」

『あばば』と顔面にジェット水流を受け続けているステイルシアに怒鳴りながら急いでレバーを下げて水を止める。

ステイルシアはびちゃびちゃになったまま感心したように水の出口を見詰めていた。

「この銀色の所でお湯を作ってるのかい? どんな魔晶石が……うあつつい!」

「馬鹿だろお前。あと一応言っとくけど服は脱いでから浴びろよ。服ごと洗うとか小学生みたいな事考えるなよ」

「……あ、当たり前じゃないか」

ピシヤリ、と風呂場の扉を閉めてから俺は今日何度目かも分からない溜め息を吐いた。

ひとまず泥まみれになった制服を脱ぎ洗濯カゴに放り込む。

それからステイルシアに着せるためのゆったりとしたスウェットをダンスから取り出した。

……臭いとか言われたらショックなので一応ファブリーズを吹き掛けておく。

「はえーっ、凄いな！ この、しゃわーっっていうの！ 家の中で水浴びが出来るんだ！」

「次は俺が入るから早くしろよー！」

「はーい」

バスルームの磨りガラス越しに、水飛沫の音とステイルシアの呑気な声が聞こえてくる。

その音に耳を傾けながら、俺はポケットから取り出したとある物体を机の上に置いた。

無機質な……しかしどこか肉感的な赤いビー玉。

先ほどの、暫定『スライム』が落としていったモノだ。

俺はこんなの拾いたくなかったが、ステイルシアに言われて仕方なく持ち帰った。

「……あの怪物、なんだったんだろ」

それだけじゃない。

勢いで連れてきてしまったが、ステイルシアについても謎が多い。

あの耳はなんなのか。別世界伝々の話は本当なのか。そもそもなぜ田んぼに落ちて

たのか。いやそれは馬鹿だからか。

「はあ……」

もしたただの家出電波少女だった場合、俺は中学生ぐらいの女の子を家に連れ込んでる事になってしまう。

親も探してるだろうし誘拐で訴えられても不思議じゃない。

流石に捕まりたくはない……そう頭を抱える。

と、その時背後で浴室のドアが開く音がした。

「はあー、スツキリしたよ」

「ちゃんと洗つ、た、か……」

振り向くと、そこには産まれたままの姿のステイルシアが長い髪を後ろで纏めながら立っていた。

陶器のように白くキメ細やかな肌を惜しげ無く露出させ、形の良い胸とか諸々の大事な所もノータイムで俺の視界に入ってくる。

どんな裸婦像も霞む至高の芸術品がごとき肢体——

「あ、そうだ、服は——」

「わああああああああつ」

!!!???

「おうふっ!？」

脇に置いてあつたスウェット上下を丸め、ステイルシア目掛けて全力投球する。それを胸で受け止め『おっとと』後ろに下がった隙に扉を思い切り閉めた。

あ、危ねえ……なんとか直視は避けた。

下半身にズンとくる感覚に自己嫌悪しながら、項垂れる。

「良い投擲だ……クク、私が騎士団に口を聞いてやつても……」

「ふざけてないで早く着ろ」

それから数分後、灰色のスウェットに身を包んだステイルシアが出てきた。

ぶかぶか過ぎるせいで下のスウェットが下がってしまふのか、腰の部分を何回も折り重ねている。

「この服……んっ、裏地ザラザラしてるせいで色んな場所擦れるんだけど。変な声出そうだよ」

ステイルシアは、ソファに座っていた俺の横にぽすと収まった。

しばしの間そのままぼーっとしていたが、正面の机に置いてあつたビー玉を見て顔色を変える。

「これっ、なんで……どこで……!?」

「いや、さっきのスライムから出てきたんだろ。お前が拾えって言ったんだぞ」

「あ、あー……あはは、そう、だったね」

妙に歯切れ悪く、ステイルシアが首を縦に振った。物忘れが激しいにも程があるだろ。

「お前さっきのあれが何か知ってるのか？」

その問いに、ステイルシアは顎に手を当て少し考える素振りをする。

それから、なぜか俺の目を覗き込んでくる。赤い瞳孔が細まり、何度か目を瞬かせた。またさつき急に日本語を喋れるようになった時と同じ動作だ。

『記憶を覗いた』などと馬鹿げた事を言っていたが。

「……なるほど。あれは……そうだな。君の知識に当て嵌めて言うのなら、”モンスター”だよ」

「モンスター……？」

「ああ。人に対して明確な悪意を持ち、攻撃してくる怪物。さっきのあれは比較的程度の低いヤツだ。……でも本来、この世界には実在しないんだろう？」

俺は頷いた。今まで十七年余り生きてきたが、あんな変テコな見た事も聞いた事も無い。

「恐らくヤツらは、私と同じ世界から来た存在だ」

「はあ……」

「私の世界では、厄介なモノを別世界へ捨てるというのが流行っていてね。前までは人や物品だけだったんだが……モンスターも送り始めたらしい。まずは弱いのを送って実験しているんだろう」

気の抜けた相槌を打ちながら、俺はステイルシアの手に摘ままれたビー玉を見詰める。

「……あのさ、これマジで、正直に答えて欲しいんだけど」

「なんだい」

「お前が別世界から来たって、ガチな話なのか？」

「え、信じてなかったの？」

信じられるわけねえだろ、と心の中でツツこんだ。

良く考えればさっきの怪物だって『別世界から来た』なんて馬鹿げた理由よりかは新種の生き物とか考えた方がまだ現実味がある。

「……どうすれば信じる？」

「どうすれば……ははっ、魔法とか？」

自分で言ってる笑ってしまう。

俺の言葉に、ステイルシアは目を瞑って右手の人差し指をピンつと天井に向けて立て

た。なにやら変な呪文みたいなのをぼそぼそ呟いている。

年下相手に意地悪し過ぎたか。俺は冗談めかして『わかったわかった』と適当に嗜めようとして――

「――フアイア」

「お、おとおおおつ!?!」

――人差し指の先端から、真っ赤な炎が吹き上がった。凄まじい熱気を放ち、木製の天井を僅かに焼き焦がす。

驚きのあまりソファからずり落ちた俺を満足げに見て、ステイルシアは炎を霧散させた。

「はっ……!?! はあっ……!?!」

「ご明察かな、異界の人」

棒マツチ程まで小さくなった炎を指先に灯し、ステイルシアは皮肉に笑う。

――なんだこれ、なんだこれ、なんだこれ。頭を無数の疑問符が支配した。手品マジック――いや違う。そんな生易しいものじゃない。

「マジ、なのか……」

「何回も言ってるだろ?」

緊張で舌の根が渴いて上手く言葉を紡げない。

あまりの異常事態に、心臓がバクバク脈打つ。

目の前のあどけない少女が、とんでもない厄ネタに見えてきた。

「あと、この赤い玉の事だが……ちよつと口を開けたまえ。あーんだよ、あーん」

「あ、あーん……？　むぐっ!?」

言われるがままに口を開けると、ビー玉を勢い良く口に投げ込まれた。

そのまま喉と食道を通過し、胃袋にストンと落ちる感覚。

やばいやばいやばい！　あんな化物から取れたもんなんて食ったら絶対に病気か食

中毒になる！　俺の胃袋はナイーブなんだぞ！

喉に指を突っ込んで吐き出そうとするが、なぜか出てこない。

「無駄だよ。もう消化されてる」

「ん”ー！　んー!?（ああああ!?）」

「それを……モンスター の体内で結晶化した”魔核”を体に吸収すると、血中の魔力濃度が濃くなつて身体機能が增强されるんだ。平たく言えば、食べれば強くなると考えて良い」

「んううう!?!（なにそれえええ!?!）」

えぞく事十数秒、吐き出せないと悟った俺はゲツソリした気分でソファに体を預けた。

ひ、酷い目に合った。俺は強くなりたくなんかない。大いなる力には大いなる責任が伴うのだ。スパ○ダーマンだってそう言ってる。

俺は波立った心を落ち着かせるため、テレビのリモコンを取った。

特に見たいものは無い。現実逃避が目的だ。

適当な温泉番組とか、大御所芸人のトーク番組とか、脳ミソ空っぽにして見られそうなのはやってないかー

『緊急速報です！ 世界各国で発見された謎の粘液生命体ですが、バットや物干し竿による殴打、それが無ければ踏みつけても対応できる事が判明しました！ これから有識者の話も交えて対処の手順をー』

ぼとり、と手からリモコンが落ちた。

「ええ……？」

……拝啓、おばあちゃん。

どうやら世界は、俺が思ったより深刻な状況にあるようです。



「凄いねえこの板。サラサラしててあつたかいよ」

「こらテレビの画面に触るな。汚れるだろ」

非常事態だからか何度も同じ内容をグルグル放送しているテレビを点けたまま、俺はノートパソコンで情報収集をしていた。

分かった事と言えば、六時間ほど前に世界各国の上空で正体不明の”黒いオーロラ”が観測された事。

それを境に謎の生命体……あのスライムが大量発生した事。

そしてこれはまだ都市伝説レベルらしいが、それを殺した際に出る赤いビー玉を飲み込むと筋力や身体機能が強くなるという事。

そのため都会の方では気合いの入った若者たちの間でゲーム感覚の”スライム狩り”なるものが行われているらしい。

……ここまで全て、ステイルシアの言葉と一致している。

「はぁ……」

頭が痛くなり、ぱたんとノートパソコンを閉じた。

何が”スライム狩り”なんだか。なんで現実世界でレベリングしなきゃならないんだよ。ド○クエをしろド○クエを。

全く、情報量が多過ぎて胃が痛くなる。

「……こんな時に婆ちゃんが居ればなあ……」

うちの祖母は、戦後の動乱を駆け抜けたせいかとても強い女性だった。

老いた女手一つで俺を育て、俺が高校入試に受かったと聞いた次の日に倒れて寝たきりになってしまった。

それからは、以前より兆候があつたアルツハイマー型認知症が一気に悪化して、俺の事も自分の事も忘れてゆつくり子供に戻りながら死んでいった。

「……お婆さんがいるのかい？」

「ああ。もう死んじまつたけど」

小さな仏壇で微笑む写真を指差しながらスタイルシアに言うと、少し複雑そうな顔になった。

形の良い眉がひそめられた、正に苦虫を噛み潰したような表情。

「……とても、羨ましいよ」

「なんでだよ」

「君みたいな孫が居て、死んだ後も誰かの心に残り続けて。さぞかし立派な人だったんだろう……私とは、大違いだ」

中学生程の見た目には似つかわしくない、疲れ果てた枯れ木みたいな声色でスタイルシアは言った。

「お前だつてまだまだ若いだろ。俺より下の癖に人生語るな」

「……? 私は君より軽く1000歳以上年上だが」

「えっ」

「えっ」

顔を見合わせたまま、しばらく場を沈黙が支配する。

……そういうや、さつきこいつ自分の事をエルフだつて言ってたな。

エルフは多くのファンタジーモノにおいて長命かつ美形として名高い。

蛍光灯を浴び煌めく白髪から覗く長耳を見ながら、俺は頭の中で納得した。いや100歳以上なのは流石に受け入れにくいけど。

「……え、一応、敬語とか使った方が良かったりしますか?」

「いらないよ。敬うやまわれるほど大層な人間でもないからね」

「そ、そっか。そうだよな」

「そうだよなとはなんだ」

それから俺はシャワーを浴びて汗と泥を流し、部屋着に着替えた。まだ夕方だが今日は色々あつて疲れたから早めに布団を敷いておく。

ステイルシアはと言えば、俺のパソコンで某アンパン男や猫型ロボットなどの子供向けアニメを熱心に視聴していた。

「こ、このバケモノめっ! なんで頭部が無いのに飛行魔法が使えるんだ!? それにこんなアホ面晒した獣人なんかのために身を削るなんて信じられない……!」

「ちなみにお前が一番アホ晒してるぞ」

「あああああ食パン男が撃墜されたああああ!!! 私か……私が君を死なせはしない……」

「感情移入が凄いいよお前」

画面に釘付けのステイルシアを放置して、俺はキッチンに立った。久しぶりに二人分の食事を作るからなんか緊張する。

冷蔵庫の中身と相談した結果、今晩は挽き肉のハンバーグで決定した。

背中に誰かの存在を感じながら立つキッチンはとても懐かしくて、少しだけ口元が綻ぶ。

婆ちゃんやんはハンバーグを作る際にパン粉などの『つなぎ』を混ぜるのが嫌いだったから、俺のハンバーグはひき肉オンリーだ。

纏まりにくくて手間が掛かるが、その分とても美味しい。そこのファミレスには負けない自信がある。

こねた挽き肉を油の引かれたフライパンに乗せて経過を見守る。

「……うし、火は通ってるな」

菜箸で小さく穴を開け、出てくる肉汁が透明な事を確認したら完成だ。

良い匂いを嗅ぎ付けたのか、ステイルシアは俺の後ろで肩越しに二つのハンバーグを

まじまじと見ていた。

「……それ、私も食べて良いの？」

「当たり前だろ」

野菜と一緒に盛り付けたハンバーグを食卓に並べ、二人で向き合って座る。

誰かのご飯を食べるのに慣れていないのか、ステイルシアはぎくしゃくと居心地が悪そうに床に座った。

「頂きます」

「い、いただき、ます」

俺の真似をして皿に手を合わせたステイルシアと一緒に食べ始める。

箸の使い方は分からないだろうからフォークを渡している。

でもなぜか皿と向き合ったまじじつとしていた。

「どうした」

「……うん、いや、もうちょっと見てたくて」

「なんだよそれ……」

俺が半分ほど食べ進めた辺りで、やっとステイルシアは口を付けた。

はむ、と小さく口に含んで目を見開く。

「……おいしーい」

「婆ちゃん直伝だからな」

「……ほんとに、おいしいよ」

一心不乱に口に詰め込む目の前の少女を見て、思わず笑ってしまった。いや少女じゃないか。

食べ終わったのを見計らって皿を台所に下げる。

ステイルシアの口元にソースが付いたのでティッシュで拭いてやった。

「覚えてる食べ物の中で一番美味しかったよー」

「そりゃ良かった」

それから三十分。

皿を洗い終わると、窓から見える外はもうすっかり暗くなっていた。

世間は物騒だ。玄関に行つて鍵とチエーンを確認しておく。

……よし、万全だ。こんな田舎まで危ないヤツは来ないだろうが、念には念を入れておくに越した事は無い。

ふと、ステイルシアの方を見ると俺のノートパソコンと向き合つてカタカタ震えていた。

何があつたんだ。

「どうしたー?」

「ね、ねえ、ぼそこん弄ってたらなんか変な所に飛んだんだけど。裸の女の人がいっぱい居るよ……」

「ああ……ああ!? おまつ、これエ〇クスビデオじゃねえか! 消せ消せ! どこから飛んだ!」

「お気に入りサイトの所からだよ。こういうのが好きなんだね。ええと、ひとつづまれば?、野獣と化したせんぱー」

「あ” あああ” ああ” ああ” あ” あ!!!」

ステイルシアは一週間パソコン禁止になった。

三話 『厄日がエブリデイ』

ミンミンミンミンミンミン

「あー、あつづい……」

ステイルシアを拾った次の日、俺は汗ばむような暑さと蝉の鳴き声で目を覚ました。壁掛け時計に目を向けると、時刻はキツカリ八時。今日は休みだから二度寝しても良いかもしれない。

ステイルシアはもう起きていたようで、ソファの上でぺたんと女の子座りして明後日の方向を見つめている。

「ステイルシアー……二度寝したいから、もし腹減ったら冷蔵庫に作り置きしてる煮物食べてくれ」

俺の声に肩をビクツと跳ねさせて、ステイルシアはこちらへ振り向いた。

まるで我を忘れたかのような顔で、虚ろな赤い瞳が俺を写す。その途端ハツとして何度か瞬きした。

「どうかしたか?」

「あ、あー……おはよう。うん、大丈夫だよ」

釈然としない様子を不審に思いながらも、俺はもう一度布団に寝転がった。欠伸しながら寝返りを打つ。

九時ぐらいまで寝るか……

「そう言えば昨日、明日は朝から」らのべ」つてのを買いに行くつて言つてなかつたわけ？」

「忘れてた！」

「わっ」

薄い毛布をはね除け、俺は勢い良く立ち上がった。

今日は俺の購読しているライトノベルの続刊が発売する日だ。

数量限定の特典が付いているから転売ヤーも多い。早く買いに行かなければ。

急いで顔を洗って歯磨きをし、パジャマから着替える。

そして、寝グセで跳ねた髪の毛を撫で付けながら玄関を出ようとーして、なぜか玄関口には仁王立ちしたステイルシアが立ちふさがっていた。

「待ちたまえっ」

「なんだよ」

「私も行きたい！」

「嫌だよ！」

「いーきーたーい！」

「うるさいぞ千歳児！」

「ぐっ、ぬぬぬ……！」

白髪の美少女とか連れ回してたら目立つにも程があるだろ。

ただでさえ物騒なのに、なんでわざわざ禍根を連れていかなきゃならないんだ。

「……どうしても、嫌なのかい？」

「ああ。本屋に行くだけだからすぐ戻るぞ」

「連れていかないと言うのなら、私にも考えがある」

ステイルシアはこちらを見据え、深く息を吸った。

な、なんだ、まさか例の魔法でも使う気か……!?

「や、やめろ」

「……な」

「やめろってば！」

不敵な笑みを浮かべたままにじり寄ってくるステイルシアに、頬を汗が伝う。

あんな炎を攻撃として向けられたら、俺なんてきつと骨さえ残らない。

「やめー！ー！」

「置いてくなら留守の間、君の大好きな【人妻脅迫！サッカー部員たちの逆襲】でも見

てようかなー」

「あばっ」



「ねえ！ 凄いや、凄いやこの箱！ 竜車より速いやっ！」

「……ああ、うん。目立つからあんまり騒がないでね……」

街へ向かうバスの中、外の景色を夢中で眺めるステイルシアを尻目に、俺は心の中でさめざめと泣いていた。

……なんで俺のいつも見てるAVの題名をこいつに知られてるんだ。しかも昨日のとは違うヤツだぞ。

このままでは俺が人妻好きだということがバレてしまいうーいや、もうバレてるか。つらい。つらたんだ。マジびえん。

「はあ……」

ちなみにステイルシアには、俺が中学生だった頃に着てたフード付きのパーカーと帽子を二重に着させて、耳と髪の毛を隠している。

この状態ならただのスレンダーな女の子にしか見えないし、近寄られて顔を覗き込まれたとしても、めっちゃくちゃ可愛い程度の感想しか抱かない。

「はあああ……」

……なのに、なぜか車内中の視線がこちらへ集中している。それも『軽蔑』や『憐れみ』の視線だ。胃が痛い。

どうして……と原因を探していると、とても大事な事に気がついた。

上機嫌なようで小さく鼻唄を歌いながらニコニコしているステイルシアの、両胸の頂点辺り。

そこに、浮かび上がってはいけない二つのものがくつきりと浮き出てしまっていた。

ーあ、こいつ、下着着けてない

「おま……」

「さつきからどうしたのさ」

足をばたばたさせながら俺を見てきたステイルシアから全力で顔を逸らした。

……やばい。

これ周囲からしたら、俺が自分の妹とかにブラジャーも着けさせずバス乗らしてる腐れ外道に見えてるんじゃないか。

断じて違う。どちらからと言えば被害者は俺の方だ。

この世の理不尽を噛み締めながら、俺はバスの停車ボタンを連打した。

……近くにランジェリーショップあるかな。

「降りるぞ」

「うん」

乗客の刺すような視線にうつむきながら、ステイルシアの手を引いてバスから降りた。

確か……この辺にデパートがあつたはずだ。その中で探そう。

「迷子になるから着いてこいよ」

人混みを掻き分け、俺は大きな建物の前で立ち止まった。

この近辺ではかなり大きいデパートだ。

入り口にあつたマップでランジエリーショップの場所を探す……三階か。

エレベーターに乗り、やけにピンク色な店の近くまでやって来た。

品棚の陰で、ステイルシアに『下着買ってこい』と言つて三千円を握らせる。俺が買いいに行くわけにもいかない。

「良いか……!? 店員さんに任せれば多分大丈夫だからな！ 変な事すんなよ！ あと、もし耳見られたらボディピアスですつて答えとけ！」

「むう……私だつて買い物ぐらいした事あるよ。そんなに心配しなくても平気さ」

ふんす、と自信ありげに歩いていく小さい背中を見送りながらため息を吐く。

そそっかしい妹が出来たような気分だ。心が休まらない。

ベンチに座り、リュックから朝ごはん代わりに持つてきた紙パックの野菜ジュースを

取り出して、口へ流し込む。

ぬるくて美味しくない。でも今日初めての糖分だから、少しずつ頭が回るようになってきた。

「かわいい……！　が、外人さんですか!?　写真取って良いです……!?　あとツイッターにも！　わあ、耳すごい……！」

「……?　好きにしまえ。あてこの耳は、ほでいびあす」らしい」
「しゃべり方もかわいい……！　おしゃれですね！」

なにやらステイルシアと店員さんが話し込んでいる。声は聞こえないが、向こうが笑顔なので問題を起こしたわけではないと思われる。と言うかそう信じたい。

それから数十分後、ステイルシアがレジ袋を持ってランジェリーショップから出てきた。なぜか複数名の頬を赤くした店員さんに見送られている。

当の本人は疲弊した様子で、フードを深く被り直していた。
「おーい、下着買えたよー」

ベンチに座った俺を見つけると、ステイルシアはこちらへ呼び掛けながら袋からヒラヒラした布を取り出して見せ付けてきた。ーパンツだ。

店員さん達や他の客がギョツとした顔で俺を見る。

「おい！　それっ、早くしまえー！」

「え……彼氏さんですか？」

「恋仲なんかよりもっと深い関係だよ……ふふ」

「保護者ですからあ！」

俺は半ば引きずるようにステイルシアをランジェリーショップの遠くへ連れてきた。

ひ、酷い目にあつた。あの店員さん犯罪者を見るような目してたぞ。ちよつと泣きそうだった。

確かに客観的に考えて俺みたいな冴えない奴が美少女と下着買いに来るとか不穏な臭いしかなないが。

あれ、目から生理用食塩水が分泌されてきた……

「……本屋いっ」

「この世界の書肆しよしか。私も興味あるよ」

本屋はここと同じ階だ。早いところ買いに行かなければ。

この落ち込んだ気持ちを読書で慰めよう。



「……売り切れてる」

ラノベ新刊コーナーの棚に、ぽっかり空いた空白。

店員さんに聞いてみたら、入荷した数が少なくて早く売り切れてしまったらしい。

がくつと肩を落とす。

「ねえ、この本の表紙にエルフが描かれてるよ！」

「クソラノベだぞそれ」

「そうなんだ……」

それから何店かの本屋を巡ったが、いずれも目当ての本は見つからなかった。

……もう帰るか。特典は諦めて、大人しく電子書籍版でも買おう。なんか疲れた。

それから十数分後、バス停に設置されたベンチの上。

猫みたいにビニール袋をかしやかしやさせて遊んでいるステイルシアを尻目に、暇な俺はSNSで特典付きが買えたとツイートしている友人に恨みの返信リプライを送る作業をしていた。

「……ん？」

その時、死んだ目で画面をスワイプしていた俺の目に、とあるツイートが止まった。

何人かの女性が写った写真付きだ。普段俺の元に回ってくる事がない類いのパーリーピーポーな雰囲気を感じる。

俺のフォロワーしている誰かがリツイートしたのだろう。

【バイト先にやばい子が来た!!!芸能人よりカワイイ!なんか陰キャっぽい奴と一緒に来てたけど笑笑】

妙に癪に障る文面。

そのまま貼付された写真の方へ目を向けると、その中心には見覚えのある少女が数人の女性に囲まれて無表情で佇んでいた。

絹みtainな白髪、血より赤く大きな瞳。

アイドルが路傍の石ころに見えるレベルの美貌を備えたその少女は、まるで今俺の横にいるステイルシアのようであらう。

「……え、なんでお前ツイッターで拡散されてんの?」

「ついたー……? ああ、さっきの人たちが言ってたな。回覧板みたいなものだろう?」
「世界規模のな!? ああああ……どうしてこうなるんだよ……!」

焦りに髪をわしやわしやしながら確認すると、既にいいねの数は1000を越えていた。投稿から十数分でこれだから、もっと増えるだろう。

あと俺のこと陰キャって書いた店員許さないからな。

「や、厄日だ……」

「生きてりやそのうち良いことあるよ」

「大体お前のせいなんだよなあ……」

四話 『絶望は空から降ってくる』

「じゃあ行ってくるから、腹減ったら冷蔵庫のブリ大根チンして食べるよ」
「あ……ちよつと待って！」

休みが終わり、月曜日。

学校に行くため制服に着替えた俺は、玄関で靴を履きながらリビングのステイルシアにそう呼び掛けた。

するとステイルシアは小走りやって来て、俺へ何かを差し出す。

ステイルシアの手に乗った小さい箱のようなそれは、揺れる度の中からジャラジャラと変な音が聞こえてくる。

……なんだ、これ？

「弁当か？ 悪いけどもう持ったぞ」

「違うよ。もっと良いものさ。昨日がんばって用意したんだ。学舎まなびやに行くんだろ？ お守りみたいなものだよ」

「お守り……？ いや、良く分かんないけどバスに遅れるから行くわ」

「うん、いつてらっしやいだね」

ステイルシアから貰った小箱をリュックに振じ込み、俺はチャリでバスの停留所まで急ぐ。

……なんだか、いつもと比べて自転車を漕ぐのが楽になった気がする。

あのビー玉……ステイルシア曰く「魔核」を取り込んだせいだろうか。身体能力の増強、と言つてもこのぐらいなら日常生活が楽になつて良いかもしれない。

停留所の横に自転車を置き、鍵をかける。

それから数分でバスが来た。

俺の家からバス停までチャリで三十分。そしてバス停から高校までは更に一時間も掛かる。

ほぼ無人なので先頭の椅子に座るとすぐに発車した。

そう言えば……あの箱に何が入ってるんだろうな。暇だから見てみるか。

俺はかばんから小箱を取り出した。やはり、中からジャラジャラと奇妙な音が聴こえる。

その蓋に指を掛け、少しワクワクしながら開けた。

「箱の中身はなんじやらほいつて、な……」

ー目を疑う。

箱の内部に詰まっていたのは、深紅のビー玉。ジャラジャラという音はこいつらが犇めき合う事によって発生していたらしい。

……”魔核”だ。

「ええ……」

10、20、30ーいや、もつと。

蓋の裏側にはマジックペンで「君が料理作つてる間とかに家の周りでこつそり集めてました！ご飯のお礼だよ！≧▽≦」と書かれている。俺そっくりな字だ。

俺は放心状態のままボタンと蓋を閉め直した。

……とりあえずしまっておいて、帰ったらステイルシアに突き返そう。

箱をリュックの一番奥のチャックが付いてる場所に入れて溜め息を吐いた。

悪気は無いんだろうけどなあ……カルチャーショックと言うか、価値観の違いと言うか。

◆ 世界一つ跨いだ意識の差は難しい所だ。

「うーっす……」

学校へ問題なくたどり着き、小声で挨拶しながら俺は自分の教室へ入った。なにや

ら、いつにも増して騒がしい。

クラスのカーズトトップ連中が教室の中心で騒いでいる。

「おお！ 来たな我が同胞！」

「ふふ……盟友よ、ジャツジメント・アポカリプスは近いよ……」

そんな中、俺が向かうのは当然の如く隅っこでニヤニヤしてる二人のグループ。

俺と合わせて三人、クラスの底辺と言っても良い。

一人は番台ばんだい 綱吉つなよし。

『一昔前のオタク』をそのまま落とし込んだような風貌と性格で、眼鏡を掛けた太った男だ。そのせいか年中夏服を着ている。たまに臭い。麻雀とポケモンが鬼のように強いがやってくれる友達あつたが居ないと嘆いている。

もう一人は阿頼耶識あらいやしき 櫛名田くしなだ。

こいつを一言で説明するのなら『本気で自分を神と思いついでいる精神異常者』だ。成績優秀でスポーツも万能。それなのに父親が結構大きい新興宗教の教祖らしいからそのせいでこうなったのかもしれない。

整った女顔なのでクラス替えした当日は女子から人気だったが、次第にヤバイ奴だと発覚して底辺落ちした。

話してみると意外と良いやつだ。頭おかしいけど。

……うん、ロクなヤツが居ない俺の周り。

でも人間は一人では生きていけない。そしてこのクラスで俺と仲良くしてくれるのはこいつらしか居ないわけで。

「むはっ、むははは………！ 同胞よ！ ついに、ついに吾の時代が来たのだ！」

「何がだよ」

「ニユース見たかい？ 各国に謎の生物が現れて、それを殺して落とす玉を食べれば強くなるってやつ。それでバンダイが盛り上がってき。まあボクは神だからそんなの必要無いけど」

「赤い玉を食べれば強くなるという噂だ！ 現実世界でレベルアップモノは鉄板だからな………！ そして………これを見るのだ！」

バンダイはズボンのポケットをまさぐり、取り出した何かを俺に見せ付けてきた。

手に乗ったそれは、三つの赤いビー玉。……本物っぽい。なんでこいつが持つてるんだ。

「へー………」

「実物だぞ！ 吾の家の溝にスライムが挟まってな！ クラスのカーストトップ連中も”スライム狩り”に励んでいるらしいが、奴らの中では多い者でも一つや二つしか見つけられていない！ これで吾も下克上し、イケイケな学園生活を……！」

「おいうるせえぞ陰キャどもー」

「ひいひいひい!!! ごめんなさいひいひい!!!」

ヒートアップし大声で演説していたバンダイに、クラスのヤンキーから怒号が飛んだ。バンダイは悲鳴を挙げながらジャンピング土下座する。

額から伝った汗がぼたぼた床に落ちる。女子たちの冷たい視線が突き刺さった。

「ぐ、ぐぬう、奴らめ……今に見ている……」

椅子に座り直しながらバンダイが悪態をつく。

「どうやら、クラスが騒がしいのはこの”魔核”を手に入れた数を競いあっているかららしい。」

……俺は気まずくなりながらリュックのポケットを撫でた。

間違っても『うちのエルフが40個ぐらい取ってきました』なんて言える空気ではない。

「よし……貴様! これを受け取れい!」

しばらく沈黙していたバンダイは何かを思い立ったように、俺の前に魔核を置いた。

「……? なんだよ」

「ふはは……桃園の誓いだ! それを食え! 我ら、生まれた時は違えど死ぬときは同

じ! 必ずあの陽キャどもを見返し、そしてコスプレイヤーの彼女を作ろー」

「いらねえよ」

「ボクには必要無い……なぜなら神だから」

「なんでだあああ!!!」

「うぜえええ!!! クソデブがよおおお!!!」

「ひいいいい!」



「帰り、アニマイトにでも行かぬか?」

帰りのホームルームが終わり、俺が教科書類をリュックにしまっていると、バンダイが机に近付いてきてそう言った。

ちなみにクシナダは毎回迎えるの車が来るから早々に帰った。

俺はバンダイに行くーと言いかけて、ステイルシアの事が脳裏を掠めた。

速く帰ってあいつのご飯作ってやらないといけないんだった。昼の分しか作り置きしていない。

「あー、悪い。ステイ……ペットが待つてるから無理だ」

「なぬ……犬でも飼いはじめたのか。良い傾向だな! 祖母が亡くなつてから貴様はどこか寂しそうだった。いつか家に見に行つても良いか?」

「は、はは、機会があればな」

それから俺とバンダイは学校から出て、他愛も無い話しをしながら駅まで歩いていった。

バンダイは前の日から店に並んだお陰で例のラノベを買えたらしい。狂ってやがる。しばらく内容について熱弁を振るっていたが、それでも話題が無くなった頃にふと、といった感じでスマホを取り出した。

「そういえばこれ見たか？」

「ん？」

バンダイが見せてきたスマホの画面には——ステイルシアが写っていた。恐らくツイッターからだろう。顔が強張りそうになるのを必死に抑える。

「あー、それなー、うん、いや、知らないなー！」

「知らないのか!? ったく、貴様は世情に疎いにも程があるぞ……まさかこの『ネットアイドル：エル★フィーナちゃん』も把握していないとは」

「おいちよつと待て」

いや誰だよそいつ。なんだそのふざけた名前は。

ステイルシアに掠ってすらないぞ。

「なんだよそれ!?!」

「先週の土曜日にツイッターに現れた超新星！ エルフのような長耳の美少女！ 純白

のまつ毛に縁取られたミステリアスな赤い瞳が魅力でー」

……あ、エルフだからエルフィーネなのか。そんなどうでも良い納得をしながら頭を抱える。

試しにグーグルで検索をかけてみると、掲示板サイトなどで幾つかスレが立っていた。

『「リアルエルフ」エル★フィーネちゃんについて語るスレ』だの、「エルフィーネ搜索スレ」だの。

「はあ……」

「まあ、貴様のような人妻マニアは興味無いかもしれんな」

「うるせえよ誰が人妻マニアだ。熟女もイケるわロリコン」

「そ、そうか……」

……まあ、広まってしまったものは仕方がない。ステイルシアには出来るだけ外出しないようにしてもらおう。

複雑な顔をするバンダイから目を逸らし、今日の夕飯を何にしようか考える。

昼は魚だったから夜は肉にするか。いや、確か冷蔵庫に鮭があつたな……

「……あれ、お、おい、なんか、空が変ではないか?」

物思いにふけっていると、横からバンダイが肩を揺すってきた。

……空？ 空がどうしたんだ。

俺は首をもたげ、青空を見上げるー

「なんだ、あれ」

ー空にかかっていたのは、ドス黒いオーロラ。

まるで絵画に墨汁を撒き散らしたかの如く、晴れ晴れとした空に真っ黒な亀裂が走っている。

あれ、は……？

「きゃあああああ!!」

「っ、……!?!」

右手の方向から悲鳴が聞こえる。

そちらへ向くと、そこには緑色の皮膚を持った小学校低学年ほどの子供が何十人も立っていた。

子供と言ってもそれは身長だけの話で、顔はむしろ凶悪と言って良い。海外の死刑囚みたいな風貌だ。全くの無毛なのも気味が悪い。筋肉もそれなりにある。

そして、各々がこん棒や槍などの武器を携えていた。

心臓が早鐘みたいに脈打つのが分かる。

「な、なんなのよアンタら!?!」

OL風の女性がその集団に怒鳴った。

そいつらは言葉なのか呻きなのかも分からない奇妙な鳴き声を挙げながら女性へと振り向く。

「×、×」

「な、なによ！ なんだったん、の……よ、お」

——先頭に立っていた緑人が飛び上がり、小柄とは思えない凄まじい速度で女性にこん棒を振りかぶった。

横風ぎに殴打された女性の頭部は、熟れた柘榴ざくろのように爆散して周囲に真っ赤な脳漿を撒き散らす。

「あ、え……う？」

ゲギャゲギャと嗤わらいながら四つん這いになって死骸を貪る緑人たち。

湿った舌が新鮮な肉を舐め回す水音が鼓膜を揺らす。

——さて、おかしい。状況が飲み込めない。

横で嘔吐するバンダイが見える。それが俺の意識を一気に現実へ引き戻した。

——殺される、殺される、殺される、逃げなければ。

「逃げるぞ……！」

「あ、えつ、し、しかし、助けなければ……」

「もう助からねえ……！」

バンダイの手を引き、俺は奴らと真反対の方角へ走り出した。

……奴らはあの集団だけではないらしい。更に遠くからも骨肉が碎ける音と悲鳴が聞こえる。

俺は、ビルとビルの隙間へ入り込んだ。

五話『進化する生命、退廃する文明』

「ひい、ひい………！　こ、こんなには足速かったか？　貴様……う！」

「良いから走れ！」

ゼヒゼヒと呼吸を切らすバンダイの手を掴んで、俺は暗い路地を全力疾走する。

邪魔な障害物を回避し、時には蹴り壊す。身体能力の向上を実感すると同時に、ここまで無茶しても少ししか息切れしない自分を若干怖く思った。

一分ほど走って、寂れた廃墟を見つけた。あそこなら隠れられそうだ。

素早く入り込み、壁の陰に隠れて座り込む。

「ぜえ、ぜえっ………な、なんなんだ、あのバケモノたちはっ!?　お、女の人の頭が、頭が………うぷっ」

再び嘔吐するバンダイを横目で見ながら、俺は無意識に自分の歯がガチガチと震えている事に気が付いた。それを抑えるため、力強く歯を噛み締める。

……死体を直接見るのは人生で二回目、祖母の通夜以来だ。

祖母の『死』は、死に化粧がしっかり成されていて綺麗な印象を覚えたが、先程の『死』は惨たらしく残酷なものだった。

数秒前まで普通に生きていた人間が、単なる肉の塊へ変わる光景。

腹の底から湧き出るような恐怖が、俺の心を支配していた。

……その時ふと、ステイルシアの言葉を思い出す。

『私の世界では、厄介なモノを別世界へ捨てるというのが流行っていてね。前までは人や物品だけだったんだが……モンスターも送り始めたらしい。まずは弱いのを送って実験しているんだろう』

確かに、こう言っていた。

最初に現れたヤツが”スライム”だとしたら……さっきの緑小人は、”ゴブリン”ってどこか？

まずは弱いのを送って実験しているーという言葉からして、段階的に送るモンスターを強くしているのは想像できる。

「黒い、オーロラ……異世界から、モンスターが送られてきたのか……？」

「な、なにを言ってるのだ友よっ！　そういう話は嫌いじゃないし大好きだが、今は貴様と中二談義に興じていられる状況じゃないのだ！」

ギシッ

「ひいひいひい！」

「汗くせえから寄るんじゃないやねえよ……ほら、お前が急に立ち上がるから足場の木材が軋

「ただだよ」

バンダイは半泣きで足元を確認し、安心したように大きな溜め息を吐きながらへたり込んだ。

「わ……吾も、ビビリ過ぎかもしれんな。貴様を見習うべきだ……ようし、やられっぱなしってのも癪だ！　こんなんじやレイヤーの彼女もできん！　奴らに打って出るぞ友よ！」

「なんでお前はそうゼロか百かしか無いんだ……」

『へへっ』と洋画で序盤に死ぬ陽気な友人キャラみたいな笑い方をしながら、バンダイはポケットをまさぐる。

しかし、なぜか少しずつ顔が青くなっていった。

「どした」

「な、無い……」

「え？」

「ビー玉、落とした……」

丸い顔をムンクの叫びみたいに歪めながら、バンダイは地面にうなだれる。

確かこいつポケットに入れてたな。さっき走った時に落としたのか。

いやまあ大した問題じゃないけど。あと40個以上あるし。

向こうの武器は七十センチ程のこん棒と、腰に刺した石のナイフ。

大した武器じゃないがこちらは丸腰だ。リュックから魔核を取り出している時間も無い。

「■■■■■■■■！」

「っ……」

地面を蹴って飛び上がり、ゴブリンは恐ろしい速さで俺に突撃してきた。

空中で振りかぶられたこん棒がやけにゆっくりと見える。食らったら死ぬと本能で理解した。

無理だ。かわせなー

「あ……ぐ、う!？」

「■■■■■■!!!」

こん棒が頭を打ち砕く寸前で、咄嗟に腕を挟み込みガードした。

メキヤメキヤ骨が砕け散る音。それでも力を殺しきれず、俺の体が吹き飛んで建物の内壁に勢い良く叩きつけられた。

「か、はっ」

背中を打ち付け肺から空気が押し出される。

左腕が焼けるように痛い。状態を確認すると、前腕の骨が砕けてあらぬ方向へ折れて

いた。真つ赤な傷口の奥に骨らしき白い物が見える。

ダクダクと噴水のように湧き出る赤い血潮に顔をしかめた。

「■■■■」

こん棒を肩に乗せ、ゴブリンは機嫌が良さそうに歩み寄ってくる。とどめを刺すつもりだろうか。

……近づいたところで、顎に一発かましてやる。バケモノとはいえ人型だ。脳を揺らせば昏倒するだろう。

「こっ……！……なくそ！……わ、吾の友達になにすんだ貴様ああ！」

べしっ、という音と共にバンダイが叫んだ。

泣きながら折り畳み傘でゴブリンをぶつ叩いている。もちろん全く効いていない。

ゴブリンは『なんだこいつ』という顔でバンダイの方を向く。

……チャンスだ。

俺は痛みを堪えながら立ち上がり、背後からゴブリンの首を締め上げた。昔見た格闘技の試合を思い出しながら全力で裸締めスリーパーを入れる。

無事な方の腕でゴブリンの喉仏を思い切り圧迫した。

「■■■■■■!!?!?!」

「っ、暴れんなよ……！」

口端から泡を吹きながら、ゴブリンが手足を滅茶苦茶に動かして抵抗してきた。思わず拘束が緩む。

完全に決まった裸締めからは逃れられないーなどどこぞの格闘漫画で言っていたが、それは人間同士の話。

人外の膂力を持ったこいつには該当しない。

まるでデカイ昆虫を抑え込んでみたいだ。小さな体に恐ろしい密度の筋繊維が詰まっているのだろう。

「が、ぐっ!？」

ゴブリンの振り回した拳が、俺の側頭部を抉った。

一瞬だけ意識が遠退いて、完全に腕から逃れられてしまう。

ゴブリンはそのまま転がるようにして俺から距離を取り、首の辺りをおさえながら過呼吸になっていた。

……幸い、かなりダメージは残っているみたいだな。このまま終わりにしてやる。

ゴブリンが落としたこん棒を手に取り、地面に倒れた奴へと近付いていく。

「■■■■■■……！！■■■■■■！」

奴は地面に伏せたまま俺を忌々しげに睨んだ。そして、手に握っていた三つの赤いビー玉を口に入れる。

俺の変化に気が付いたのか一瞬躊躇う様子を見せる鬼だが、自らを奮い立たせるように吠えながら走ってくる。

先程と比べ、とても遅く見えた。

俺は崩れかけの壁に手をかけて、その一部を抉り取った。そしてコンクリートの破片で奴の頭をぶん殴る。

卵を割るようなパギヤ、という嫌な感覚が手に伝わってきた。

「■■■■……!?!」

頭蓋骨を陥没させて、鬼はよろけながら地面に倒れる。

その後なんとか痙攣して、完全に動きを止めた。

肉体が灰になって深紅の球体だけが残る。

……勝った、のか……?」

「す、凄いぞ友よ! こんなバケモノに勝つなんて……! 絶対に死んだと思ったもん

吾たち!」

「お、おう……」

大はしやぎで叫ぶバンダイを見ながら、俺は地面に座り込んだ。

スマホを取り出しニュースサイトを開く。トップには『世界各国の人口密集地に謎の人型生命体』と記されていた。

……やっぱり、前の”スライム”と同じか。世界中でここと似たような現象が起こっているらしい。

『人口密集地』という言い方からして、俺の家の近くには大して湧いてないだろうが……ステイルシアは大丈夫だろうか。

????????????????????????????????

i l e 2
【リトル・ゴブリン矮駆侵虐妖生命体】脅威グレードD—

i l e 2 | A
【ホブ・ゴブリン中駆侵虐妖生命体】脅威グレードD

六話『変異種』

「お、おおお……なんでこんなに持つてるんだ貴様……？」

「……ちよつとな」

廃墟の中、俺とバンダイは床に並べた二十個以上のビー玉を見ていた。

……こんなの食いたくはない、食いたくはないが、この地獄を生き延びるためには必要だ。背に腹は変えられない。

「二人で十個ずつ食うぞ」

半分をバンダイへ渡し、俺はもう半分を自分の口に詰め込んだ。

……ガラス質なようで、中身はふやけたグミみたいにグニグニした感触。僅かに血らしき味もする。酷い味だ。

「つふ、う……」

飲み込んだ瞬間に、体内を熱が駆け巡る。筋肉が重厚になり際限無く力が入るようになる。肺活量や心拍数も大きく上がった気がした。

ふとバンダイの方を見ると、冷や汗をかきながら魔核と向き合っている。

「いや……いぎ食べるってなると躊躇するんですけど……だってビー玉じゃんこれ

……」

「おい？」

「それに大体、こういうアイテムって何らかの代償が付き物だし……寿命とか減ったらフルダイブのVRゲームが発売するまで生きるっていう人生の目標が果たせないし……」

「おい？」

「吾、お腹弱いし……」

「おい……？」

ぶつぶつと何かを呟きながら、バンダイは俯いた。

それから何かを決心したように顔を上げる。

「よし決めた！ 吾は食わんぞ！」

「なんでだよ……」

「とにかくくっ！ これは貴様に返す！ だから貴様が吾を守ってくれ！」

「清々しいなお前」

キツパリ言いながら魔核を全て差し出してきたバンダイから、溜め息を吐いて受け取った。

こいつの事だから喜んで食うと思ったが、実際そうでもないらしい。

俺は返ってきた魔核を口に入れて飲み込んだ。

「おおう……一気に入くいな貴様は……」

「あのバケモノ見たろ。こうでもしなきゃ殺されるんだよ」

そう言いながらゴブリンの方へ振り向くと、既に肉体は灰になっていて、その上にスライムより二周り大きい赤珠が鎮座していた。

ゴブリンの魔核だ。予想はしていたがスライム以外のモンスターも魔核を落とすらしい。

俺はゴブリンの魔核を拾い、ゴチユリと噛み砕いた。

「ふう……」

壁際に座り込み、これからどうするかを考える。

大通りの方からは今も悲痛な叫び声が聞こえてくる。

……警察の機動部隊や自衛隊が鎮圧に来てくれれば良いが、全国で同時多発的に起こっているなら、この街に割ける人手がそこまで多いとは思えない。

この廃墟だっていつまでも無事とは限らない。それに食料もほとんど無いんだ。

……なら、食料や水道設備が整っている学校などを目指すべきだろう。学校には非常用の電力や食料、寝袋などが置いてあると聞いた事がある。

「行くぞ、バンドアイ」

「え、行くって……アニマイトに？」

「頭沸いてんのかお前。学校だよ」

注意しながら廃墟を出て、通りの方へ歩いていく。

……風に乗って、嘔^むせ返るような血の匂いがする。先にある惨状は容易に想像できた。

だがどうせいつかは見なければいけない。俺は意を決して一歩踏み出した。

「……っ、ひっ、どいな」

それは、正に地獄と呼ぶに相応しい光景だった。

肉片がそこらに飛び散り、死体を中心に幾つもの血溜まりが形成されている。

ゴブリンの死体は仲間に共食いされていて、食った側のゴブリンが肥大化して先程の

”鬼”へ変貌している。

……殺せたとしても、少しでも死体を放置すればどんどん強い個体が発生していくのか。恐ろしい生体だ。

「な、なんだよこいつ!?! 倒したのに、でっかいのが……!」

「やべえって、やべえって!」

「男なんだからそのぐらい殺しなさいよっ!?! ”スライム狩り”したんでしょ!?!」

その時、遠くから切羽詰まった男女の声が聞こえてくる。

そちらを見るとそこに居たのは俺と同じ制服の学生。クラスメイトだ。四人居る。大型のゴブリンに壁際まで追い詰められていた。

「っ……」

全力で走り、二秒足らずでゴブリンの背後まで移動した。

俺の気配に気が付いて振り向いた瞬間に顎へ右ストレートを叩き込む。

「■■■■!?!」

「くたばれ……!」

のけぞったゴブリンに追い討ちをかけるため、鳩尾に膝蹴りを入れた。地面に倒れた所で頭を何度も踏み潰す。

そこでやっとゴブリンは灰になった。

……不意討ちしたお陰で楽に倒せた。でも拳が割れるように痛い。次は武器を用意しよう。

「大丈夫ー」

「っ、どけカス!」

『大丈夫か』と言おうとして、クラスメイトの一人に突き飛ばされた。

そいつはゴブリンの灰の山を必死の形相で漁って、見つけた魔核を自分のポケットに

しまいこんで逃げていった。

残った奴らも、一瞬迷ってからそいつを追いかけていく。

「いつてて……」

「だ、大丈夫か友よ!?! 助けてやったのに……あの陽キャどもめ。我らをなんだと思っ
ているのだ……」

「……あいつらは俺らの事なんて気持ち悪い虫ケラとしか思っ
てないよ」

ズボンに着いた土を払いながら、深い溜め息を吐いた。

学生の間において、スクールカーストと言うのは生態系と同じだ。頂点が肉食獣で、
俺らみたいな底辺は虫ケラ。

そんな気色悪い害虫が自分を助けたなんて認めたくないし、向こうからしたら感謝す
る理由も無いんだろう。

まあ、今更この程度じゃムカつきもしない。こんな慣れっこだ。

「……じゃ、気を取り直して学校にー」

「■”■”■”■”■”■”■”■!!!」

ー耳をつんざく咆哮。

同時に、真横にあったビルが巨大な五指の形に抉れた。

「んだよ……今度、は……っ!?!」

それは、恐ろしく巨体だった。

さっきの”鬼”を更に凶悪に、更に巨大にしたような風貌。

表皮に太い血管がいくつも浮かび上がり、赤熱した傷跡はこの個体の歴然を感じさせた。

身長は軽く八メートルを越えている。巨鬼^{オーガ}とでも呼ぶべきか、恐ろしく巨大なゴブリンはビルを薙ぎ倒しながら俺へ向かってきた。

——あ、こいつは無理だ。そう直感した。

「あ、あばばば……」

「しつかりしろ！ 逃げるぞ!？」

バンダイを担いで、巨鬼と反対の方向に猛ダッシュする。

奴が走る度にアスファルトの地面が陥没して地鳴りが起こる。まさに生きた災害。キングコングも真っ青だ。

こういうのは怪獣映画から出てこないで欲しい。

「は、発砲する!？」

巨鬼の進路の先、拳銃を構えた警官が俺へそう言った。

それから幾度かの銃声、発射された銃弾は巨鬼のブ厚い胸板に食い込んで止まった。まるで効いていない。

駄目だ。拳銃ピストルなんかじゃ熊さえ殺せない。あの怪物にダメージを与えるにはせめて
猟銃ライフルでもなければ。

しかし多少の痛みはあったのか。

巨鬼の標的が俺から警察官の方へと向いた。

あつという間に握りつぶされ奴の超常の握力で警察官の体がミンチになった。

ポリポリという咀嚼音に耳を塞ぎたくなる。

「はあ、はあ……！　撒いたか……!?!」

「あ、ああ。もう追ってきいてないぞ」

その言葉に安心し、思わず地面にへたり込む。

なんとか、助かった。あの巨鬼を倒すのは今の俺じゃ絶対に無理だ。次元が違いすぎる。

ビル群の向こう側からあいつの暴れまわる音が聞こえてきた。おもちゃのジオラマ
みたいに崩壊する街。

まるでゴジラだ。本当に規模が違う。

……とりあえず、もう少しあいつから距離を取ろう。

そう思いながら、俺は立ち上がる。

「君たち、こっちらへ」

「…………え？」

その時、背後から男の声が聞こえた。

振り向くと、そこに立っていたのは白フードの集団。

全員が純白のコートを着込み、胸のバッジには『神の存在証明』と記されている。総勢二十人ほど。

…………なんだこいつら。危ない宗教か何か？

俺たちに声をかけた先頭の奴は、手に持ったアタツシユケースを地面に置きながら横に停めた車の扉を開ける。

「…………誰ですか？」

「私たちはしがない慈善団体ですよ。この街の人々を救済しに参りました。この車に乗りなさい。我々のシエルターか、ご希望なら自宅までお送りします」

白フードの男は、丁寧かつ穏和な口調で俺にそう告げた。

…………凄まじく胡散臭い。

シエルター？ しかも救済とはなんだ。

「救済？」

「ええ、そう。救済です…………おい、組み立ては終わったか？」

「(イ)ちらぐ」

部下らしき別の白フードが、男に黒い筒上の物体を差し出した。恐らくアタツシユケースに入っていたのだろう。

近年のバトルロワイヤルゲームなどで良く見かけるそれは、ローケットランチャー携帯式対戦車弾というヤツだった。

……本物、か？ そんなわけが無いが、なぜか頬を汗が伝う。

「この街から異界徒どもを一掃します」

ビルの隙間から見える巨鬼^{オーガ}へ、ロケットランチャーの照準が合わせられた。手袋に包まれた男の指が、引き金を引く。

——瞬間、何かが弾けるような音。

「っ！ マジ、かよ……!?!」

轟音と共に発射された巨大な弾丸は、巨鬼の肩に命中して大爆発を起こす。

奴の肩が根元から吹き飛び、洪水のように血液が吹き出た。

嘘だろ、本物の兵器……!?!

「■■■■■■■■!?!」

巨鬼が、苦悶の声を上げながらこちらを向く。そして傷口から蒸気が発生したと思つた瞬間、肉がもりもりと膨張して腕を再生させた。

「ほう、欠損部位の再生も可能なのか」

怒りの咆哮と共に突進してくる巨鬼を見ながら、男は冷静にそう分析する。

ロケットランチャーでも一撃では殺せないのか。

俺がその生物として常識外れな耐久力に唾然としてしていると、奴らの車から声が聞こえてきて『乗りなさい』と言われた。

選択肢はほぼ無いような物だった。巨鬼から逃れるため、俺とバンダイはそこに乗り込む。

「どこまでお送りしますか」

「……俺は、家まで」

「わ、吾は、安全な場所まで……」

『承知しました。では道案内をお願いします』と言って、ドライバーは車を発進させた。背後から、銃声と爆発音が聞こえてくる。

……一体何者なんだこいつらは。目的はなんだ？ 軍ではないだろうに、なぜあんな兵器を持っているんだ。

「……何が目的なんですか？」

「ただ、善を成す事です。それこそが我が主の存在証明になります」

わけの分からない解答をしながら、運転席の白フードが瓦礫の街を縫うように車を走らせる。

そうして数十分後、俺の家の近くで車が止まった。

俺は車から降りて運転席へ頭を下げる。

「あ、ありがとうございしました……？」

「いえ、人は助け合いですから。力を持つ者は、持たざる者を庇護する義務があるので
す」

微笑んでそう言い、白フードの乗った車は去っていった。

……本当に、何もされなかった。どこかに連れ去られるのかと身構えていたが。

若干拍子抜けな気持ちで、俺は家まで歩いていく。

坂を登り、祖母の残した武家屋敷が見えてくる。遠くから見た感じ破損は無さそうだ

……良かった。

「ただい、ま……」

「おかえり。朝のあれ役に立ったろ？ そろそろ第二波が来るかもとは思ってたんだ」

家の前まで来ると、玄関口の段差にステイルシアが座っていた。

いやそれは良い。その近くにあった『モノ』を見て俺は、口をぽっかり開けたまま固

まってしまう。

——ステイルシアの目の前、家の敷居を跨ぐ直前の巨鬼が、その体勢のまま胸に大穴をブチ抜かれて死んでいた。

「あ、あ……!?!? なんて、こいつが……!」

「ああ、これかい? 私の魔力を嗅ぎ付けてきたみたいだね……まあ大した奴じゃなくて良かったよ。君とお婆さんの、大切な家を守れて良かった」

そう言いながらステイルシアは、その端正な顔をにぱつと笑顔にした。

ステイルシアが倒したのか……? こいつを。俺は少しずつ灰になっていく巨鬼を唾然と見る。

ロケットランチャーでさえ腕を吹き飛ばすのが精一杯だったのに、胸部がくり抜かれたみたいに直径三メートル程の風穴が空いている。一体、どんな凄まじい力で攻撃すればこうなるのか。わけが分からない。

「……お前、今日こんな事が起こるって知ってたのか?」

「ううん、単なる予想だよ。ヤマカンってやつだね。スライムを送るのに成功したならきつと奴らはすぐ次に移る。だから君に魔核を持たせた。本当は私が着いていきかけたんだけど……場所が学舎じゃ、流石に無理があるだろ?」

……もしかして、本を買いに行く時に着いてきたのも、俺を守るためだったのか?

当の本人はにこにこしているだけで何も言わない。

「……まさか、先週着いてきたのも」

「それは君とお出かけしたかっただけだよ!」

「なんだお前」

????????????????

i
l
e
2
l
e
x
『テイ
タ
ノ
ス
オ
ー
ガ巨
驅
侵
虐
妖
生
命
体』
脅
威
グ
レ
ー
ド
C

七話『動乱する世界』

「全国に出現した謎の武装集団は、指定宗教団体『神の存在証明』の信者たちであると判明しました。彼らの用いる兵器は米軍基地から盗み出された物と推測されますが、国より迅速に動き多くの人命を救った彼らを英雄視する世論も――」

「大変そうだねえ……外は」

「……そうだな」

緑茶をすすり、ぷはつと溜め息を吐くステイルシアを尻目に俺はテレビのニュースを渋い顔で見ている。

……『神の存在証明』。昨日俺を助けた白フードの集団だ。

結果を言えば、ゴブリンたちは自衛隊や機動部隊……そして『神の存在証明』の力によつて大方が鎮圧された。

まだ残っている所もあるらしいが、すぐに討伐されるとの事だ。

全国での死者は推定で五千人。怪我を負った人も含めれば十万人を越えるらしい。そんな大変な事になってるからもちろん学校は休みになった。

だからこうして、朝っぱらからテレビを見ながらスタイルシアと煎餅をかじっている。

画面の向こう側では大層な肩書きを背負った専門家やらコメンテーターたちが、やつらはアメリカの新型兵器だのエイリアンだのと苛烈な論争を繰り広げている。

「この……りよくちや？ おいしいね。すぐトイレに行きたくなるのが難点だけど」
「カフェインが多いからな」

まったりするスタイルシアに反して、俺の心情は穏やかではなかった。
スライム、ゴブリン……次は、何が来るか。

第二波のゴブリンでさえ人間社会にここまでの打撃を与えたんだ。
これより強いのが来たら、世界は一体どうなってしまうのだろうか。

「……どうしよう、婆ちゃん」

無意識に、ぼそりと口からその言葉が出た。

……あの人はもう居ない。俺は一人で祖母の残したこの場所を守り続けなければいけないんだ。

「一人じゃないよ」

「……？」

その言葉に、俯けていた顔を上げる。

ステイルシアの赤い瞳が、俺の像を写して猫のように細まっていた。……思考を読まれたのか。

「……私は君のお婆さんみたいに立派な人じゃないし、その人以上に君を強くしてあげる事もきつとできない」

『でもね』と言つてからステイルシアは更に続ける。

「どんな強い人にも、そよ風で倒れてしまうぐらいに心が弱くなる日は必ずあるんだ。恥じる事じゃない。そういう日は、近くにいる人に甘えて良いんだよ」

『私とか！』と言わんばかりにステイルシアは笑顔で両腕を広げた。それについて笑つてしまう。

なんか、こいつを見てると全部大丈夫な気がしてきた。いや気のせいなんだろうけど。

「ぶっ……げ、元気出たよ。ありがとな」

「そうでしょ。伊達に千年は生きてないよ……んっ、ごめつ、ちよつと、喋るのに集中し過ぎた……トイレ行つてくる！」

「子供じゃないんだからいちいち言うなよ千歳児。漏らすなよ」

「ああああ……なんでこんなに廊下が長いのか……」

余裕無さげにトイレへ走っていくステイルシアを見送り、俺は再びテレビへ視線を写

した。

「どこの局もゴブリン事件で持ちきりで、同じような内容ばかり放送している。

面白いのはやってないか、出鱈目にチャンネルを回していると、とあるニュースが俺の目に止まった。

「昨今の異常事態を受け、新たに対策本部を特設する事が決定しました。対異常生命体専用の駆除機関を編成し、更には未知エネルギー凝固体、通称“アカダマ”を入手または摂取した民間人にも協力を——」

今回の被害で事の重大さに気が付いたのか、国も本格的にモンスターへの対応を始めたらしい。

これで対抗出来ると良いが……あの巨鬼のバケモノっぷりを見ると、どうしても不安になってくる。

『魔核を取り込み一人で中型のゴブリンを倒した英雄』として表彰されている若者を見ながら俺はそう思った。

恐らく一人の英雄像を作り上げて、それを旗印に民間人に協力を募りやすくするのが狙いだらう。

ちなみに、先日ステイルシアが倒した巨鬼の魔核は結局発見出来なかった。本人曰く『焦ってて心臓ごと吹き飛ばしちゃった』との事。わけが分からないよ。

「ふう……あ、あと二メートル遠かったら出てた……老人に優しくないとこの家は……」
ほっとした様子の子のステイルシアが手を拭きながら居間に返ってきた。

俺の横の座椅子にぼすつと座って、テレビの情報に耳を傾ける。

「魔核を取り込んだ民間人にモンスター討伐の協力を仰ぐって……ギルドみたいな事するねえ、この国の政府」

「やつぱり、そつちの世界には冒険者ギルドとかあるのか？」

「大昔の話だけだね。最近はおつぱら勇者兵が……いや、この話はやめとこう。胸くそ悪いから」

今まで聞いた事が無いぐらい冷たい声でステイルシアはそう呟いた。

……まあ、向こうの世界の事はどうだって良い。

大事なのはこちらの世界でどうモンスターに対抗するかだ。

「……ステイルシア、次はどんなモンスターが送られて来ると思う？」

「そうだねえ……正直言うと、あまり予想できないんだ。ゴブリンが来たから次はハーピーかオーク、それともサイクロプスか……はたまた、調子に乗って竜種の末端まで出してくるか。向こう次第だからね」

……次に来るモンスターの種類は絞れない、か。

特性や強さが分かれば被害を抑える事も出来るかもだったが、分からないものは仕方

がない。

それに……本当に聞きたい事は、もう一つある。

魔核を食らった魔物の、異常な変化についてだ。

「……昨日、ゴ布林同士が共食いして巨大化するのを見たんだけど。あれはなんだ？」

「ああ……見たのかい。あれは“昇華”だよ」

……”昇華”？ なんだそれ。

俺が疑問そうにしていると、ステイルシアは引き出しの中からスケッチブックを引っ張り出してきて、そこに『モンスター生態について！』とでっかく書いた。

「良い機会だ。このステイルシア先生がモンスターについて、じっくりこつてりばつちやり教えてあげよう！」

「擬音が気持ち悪いなお前な」

鼻唄を歌いながら紙面にマッキーペンを滑らせるステイルシア。

数分後、書き上がった何かの図をどや顔で『でんっ』と言いながら見せてきた。

「……なんだよそれ？」

「モンスターの進化図だよ。これはゴ布林の場合だね」

良く見れば、それは何体かの大きさが違う人型生物の絵だった。矢印でどれがどう変

化するか書いてある。

下手すぎて大まかな形とサイズしか違いが分からないが。

【ゴブリン（通常種）↓ホブゴブリン↓ゴブリン・エース

ゴブリン・ジエネラル（亜種）↓ゴブリン・キング】

オーガ（突然変異）

「ぎつとこんな感じさ。昨日家の前で倒したのは『オーガ』だね」

「……………俺が見たのは、通常種とホブ。あと変異体のオーガだけだな。」

「……………いつの言う『エース』個体も『ジエネラル』個体も見えてない。」

「……………オーガが一番強いのか？」

「いいや、エースが最強だよ。オーガは凶体ばつかデカくて頭が弱いし、キング個体の統率にも反発するし……………通常種より少しマシぐらいじゃないかな」

「マジかよ……………けど俺はエースもジエネラルも見なかったぞ」

「進化個体が発生するのには時間が掛かるからね。今回は早急に数を減らせたから大丈夫……………まあその場合もつと厄介なのが出ることもたまにあるんだけど、きつと問題無いよ」

本気でゾツとする。あの身体能力の怪物たちが更に強化されて尚且つ群れとして統率されるなんて考えたくも無い。

「お前の世界で、人間はゴブリンにどうやって対応してたんだ？」

「種として絶滅させたよ。国が駆除を始めてから三日ぐらいで」

「……………え？」

「まあ、正確には『魔核まで戻した』だけだね。モンスターというのは基本的に不滅なんだ。核を放置すればすぐ復活するし核を取り込んででも取り込んだ人間が死んで土に還ればまた発生するし……………だから別世界に送る必要があったんだね」

別世界に転移伝々の話で多少察してはいたが、どうやらステイルシアの世界はそこらへん物凄く発展しているらしい。

一つの種を絶滅させるなんて今の人類でも簡単な事じゃない。

中世ファンタジーな世界を想像していたが違うらしい。

「……………凄いな、そつちの世界は」

「いいや、こつちの世界の方が何倍も素晴らしいよ。技術を破壊のためでなく人々の豊かさの為に役立ててる。それにこの国は戦争をしないんだろ？ そんな国家が存在できる世界がどれだけ凄まじいか」

「そうかなあ……………」

「そうだよ」

そう言ってから穏和な笑みでお茶を飲むステイルシアを見ていると、俺のスマホが誰かからの着信を鳴らした。……バンダイからだ。ラインがきている。

【おい！ テレビとかSNSで、中型のゴブリンを一匹倒したとかのたま奴が英雄視されてるぞ！ 貴様なんか二体も倒してたよな!? これを世間に知らしめれば貴様は真の英雄になって、吾にもコスプレイヤーの彼女が出来るぞ！】

【知らしめねえよ。あとなんでお前はちゃっかり御零れに預かろうとしてんだ】
適当に返信してスマホの電源を落とす。

それからソファに寝転がって天井の木目を見ていると、ステイルシアにちよんちよんと肩を叩かれる。

振り向くと、テレビゲームのソフトを持ったステイルシアが立っていた。

「ねえ、二人でこれやろうよ」

「うん……? ああ、ドラクエか。このご時世にやるゲームじゃねえだろそれ」

「良いから良いから！ 私は魔法使いやるね！」

「クソ打たれ弱いぞその職……」

八話 『不穩なる影』

「……よし、行くぞステイルシア」

「すーぱーって所にお買い物に行くんだっけ？ 私はハンバーグ食べたいな」

「ひき肉もちゃんと買うから安心しろ」

食料の買い出しに行くため、ステイルシアと俺は玄関に居た。

耳は帽子とパーカーでガッチリ隠してある。髪も出てない。これなら目立たないだろう。

先週ぶりの外出とあつてテンション高めなステイルシアは、前にスライムをぶつ叩いた例の棒を振り回しながら鼻唄を歌っている。

「ふふん、ドラクエならこれは『ひのきのぼう』だね。さあ冒険の旅に出発しよう！」

「多分それひのき檜じゃないしスーパーまで片道二十分ぐらいだぞ」

「細かい事はいいんだよっ！」

それから、二人で意気揚々と歩き出した。

気温はまるで夏が最後の抵抗をするみたいに、先週からずっと上がり調子だ。クソ熱い。

十分程すると、さっきまで元気いっばいだったステイルシアが、ぐでーつとしながら俺に寄りかかってくる。

「どうした」

「ね、ねえ、フード脱いで良い？ 暑くて溶けちゃいそうだよ……」

白い顔に玉のような汗を浮かばせながら、助けを求めるようにステイルシアが言ってきた。

……確かにこの真夏日にパーカーはキツイな。

でも、周りにはまばらだが人が歩いている。ここで脱がせたら確実にバレてしまう。

俺はリュックから取り出したスポーツドリンクを渡した。

「向こうに着いたらアイス買ってやるからこれで我慢しろ」

「うう……じゃあガリガリくん買ってね！ ぜったいだよ！ リッチじゃなきや駄目だよ……」

「安上がりだなお前な」

そうこう言いながら歩き続け、遠くにスーパーが見えてきた。

……かなり混んでるな。田舎だからいつもはガラガラなのだが、街の方の店が軒並み駄目になったからこちらに流れてきたらしい。

俺は列の最後尾に並んだ。

目の前にある長蛇の列を見て絶望したのか、ステイルシアは『ああああ!』と叫びながら頭をわしやわしやした。珍しくイライラしている。

「昼飯は何にするか……」

「ハンバーグが良いな!」

「……あ、ひき肉完売だつて。ハンバーグ無理だ」

「ハンバーグが良いなつ!!」

「……怒ってる?」

「暑過ぎてきれそーだよ!!!」

普段飄々^{ひょうひょう}としてるだけに、何か言うたびキレ気味に返してくるステイルシアは何だか面白い。いや本人からしたら死活問題なんだろうけど。

……と言つても、割りと本気で辛そうだし。家に帰らせるか。弱いモンスターなら出てきても俺一人で対応できるし。

「じゃあ先に帰つてて良いぞ。俺が一人で買い物してくるから」

「ううん……その間に君がモンスターに襲われたらどうするのさ……」

薄い唇にスポドリを流し込みながら、ステイルシアがそう言った。心配し過ぎだろう。

「ここ田舎だから大丈夫だろ。人工密集地に多く現れるつてニュースで言つてたぞ」

「……それなんだけどね。多分、向こうの世界では『自分の世界と同じもの』を印にして転移を実行してるんだ」

……『自分の世界と同じもの』？ 意味が分からない。

「どういう事だ？」

「例えば……私の世界には、この世界でいう『犬』が居ないんだ。『猫』も『熊』も居ない……でも、人間だけは同じように存在している。だからきつと、向こうの世界では『人間』が多い場所に条件付けしてモンスターを送ってるんだ。それが一番安定するから」

……つまり、『どちらの世界にも存在する種族』の居る場所にモンスターを送るということか。

「……そして、私は人間ではなくエルフだ。向こうの世界から見れば悪目立ちする……星空に浮かぶ六等星の群れに一つだけ一等星が混じっているようなものだ。私が近くに居るとモンスターに出会うリスクが上がってしまう」

申し訳無きように、ステイルシアが言った。

まあ、それを含めてもステイルシアと一緒にいた方が安全だろう。兵器でも対抗できない怪物を消し飛ばせる奴なんて他に居ない。

……それに、そうじゃなくても。

損得勘定で人を見捨てる人間になつてはいけない。婆ちゃんはいつも言っていた。

「気にすんな。お前自身は悪い事をしたわけじゃないんだから堂々としてれば良いだろ」

俺がそう言うと、驚いたように何度か目をパチクリさせてから小さく微笑む。

真つ白な前髪に向こう側に、優しく細まった真紅の瞳が見えた。

「……本当に、やさしい子だね。君は」

ステイルシアは背伸びして俺の頭を撫でようとしてきたが、身長的に手が届かず諦める。

しゃがんでやろうかと思ったが、中学生ぐらいの女の子に撫でられる高校生は絵面的になんかアレなのでやめておく。

十分後、列が進み俺達も店内に入れるようになった。

スーパーの中はよく冷房が効いていて涼しい。

俺は真つ先に食品コーナーへ向かった。

「昼飯なにが良い？ あ、ハンバーグ以外でな」

「うーん……なんでも良いよ。今まで食べたのどれも美味しかったのは分かるけど、味が思い出せなくてね」

「どういう事だよ……」

とりあえず、手頃な惣菜や肉類、魚介と緑野菜を大量に買い込んで店を出た。これだ

けあれば向こう一ヶ月は大丈夫そうだ。

リュックからエコバッグを取り出し、パンパンに食品を詰める。

持ち上げると肩にずしっとくる感触。魔核を取り込む前だったら間違いなく持ててない。

「私も半分持つよ!」

「いいって。お前みたいなちんちくりんじや無理だから。熱中症と疲労骨折で死ぬぞ」

「むう……私を誰だと思ってるのさ。ちよつと見てなよ」

ステイルシアは俯き、ぶつぶつと何かの呪文を唱え出した。

何かの魔法だろうか。

「**強化**」

唱え終わると同時にうつすら赤くなったステイルシアの手が、俺の肩に掛かったナイロンの袋を掴み取る。

そしてそのまま軽く持ち上げた。

「おお……」

「ふ、ふふん……! ”身体強化”だよ。心拍数と体温を上げる事で新陳代謝を活発にし、身体能力を底上げするん、だ……うぐつ」

「え、体温を上げるってそれ……おいつ!」

汗ダラダラで得意気に説明をしていたかと思つたら、すぐ地面にぶつ倒れた。こんな時に体温なんて上げたら倒れるに決まつてる。

「アホだろお前……立てるか？」

「え、もう立つてるよ……つてあれどうして地面が正面にあるの……」
だめだこれ。

暑すぎて『あー』とか『うー』しか言えなくなっているスティルシアの口に冷えたお茶をたくさん流し込み、おんぶする。

最悪だ。荷物が増えた。

長い坂道を登りながら、俺は溜め息を吐く。

こんなザマなら着いてこなくても変わらないんじゃないか、と思つた。

それから坂を登ること数分、腰をよじりながらスティルシアが口を開く。

「うー……ねえ、おしっこしたい……」

「三十分ぐらいだから我慢しろ。それとも野ションでもするのか？」

「それでも良いかな……君にはおっぱいもアソコも見られてるし今さら変わんないよね」

「女のプライドどうしたお前」

背中であらされたらたまつたモンじゃない。俺は足取りを速める。

そうして歩き続け、想定以上のペースで家の近くまできた。

「おーい、もうすぐ着くから頑張れよ」

「……」

「……え、うそ、漏らした？」

「いや違うよ。そつちはあとちよつと大丈夫。……あれ見て」

ステイルシアの指す先を見ると、そこには緑色の肌を持った細身の人型が立っていた。

……中型の、生き残りか？ でも体はアレよりかなり細い。あれみたいなゴリマツチヨと言うよりかは、極限まで引き絞られた感じだ。

「■■■■■■■■」

俺達に気が付いたのか、緑の人型がこちらを振り向いた。

俺の肩に顎を乗せたステイルシアの耳がピコピコ上下する。

分析するようにじいっとゴブリンを見ていた。

「おい、どうしー」

『どうした』と言いかけて、凄まじい破裂音に鼓膜を叩かれる。

咄嗟に前方を向くと、一寸先には腕を振り上げた体勢のゴブリンが立っていた。

さつきまでこいつの立ってた場所には馬鹿デカいクレーターが出来ている。

ー速すぎる。まるで見えない。一瞬で間合いを詰められた。俺の培った申し訳程度の戦闘経験が、咄嗟に状況を把握した。

間近で見ると、遠目からは細身に感じた肉体は、皮膚の上から太い筋繊維の一本一本が目視できる程の筋肉質の塊で。

いしゆみ弩の如く引き絞られた腕は、易々と俺の頭蓋を打ち砕くと推測できた。

「つ……ドネーション……!」

「■■■■■■?!?!」

が、それは未遂に終わる。

ステイルシアの声と同時にゴブリンの脇腹が抉られたみたいに消し飛んだ。

傷口からピンク色の臓腑を撒き散らすゴ布林だが、すぐに傷を再生して怯えた様子で逃げていく。

「んっ、う……逃げられた、制御が甘かったか……」

「おい!?! なんだ今のゴ布林、あんなの知らないぞ……!?!」

深刻な表情で呟くステイルシアに、俺はそう言った。

未だ地面に残された巨大なクレーターが、奴の苛烈なまでの筋力を見間違いでないと雄弁に訴えてくる。

明らかに異常だ。あの細身に巨鬼オーガと同等かそれ以上のパワーが秘められているなん

て。

「……ゴブリン・エースだ」

「え？」

ゴブリン・エース。

ステイルシアが言うに『最強のゴブリン種』だった筈だ。

でも、モンスターが進化するには時間と個体数が必要だと聞いている。あと早期に大幅に数を減らせたから大丈夫だとも。

「なんで……」

「わかんつ、ないよつ……エース種が発生するには、少なくとも100は共食いを重ねなきゃいけないし……そんな個体が、自然に発生するわけない……だからどこかに群れがあると思うんだけど……」

しめやかに目を閉じ、ステイルシアは『確実な事は何も分からない』と言った。
「んうつ……でも、も。一つだけ、確かな事があるよ」

妙に艶っぽい声を出しながら、切羽詰まった声色で呟く。

「……なんだよ？」

「おしつこ漏れる……」

「待て待て待てえええ!？」

九話『終わる世界』

その日は、朝からひどく嫌な予感がした。

普段は煩い^{うるさ}いまでに喚き散らしている羽虫たちの声が全く聞こえない。

氷岩みたいな分厚い灰色の雨雲が空に覆い被さっている。

空気が冷たく、やけに透き通っていて逆に背筋が震える。

魔核を取り込んだ事で研ぎ澄まされた感覚器官が、これから世界に起こりうる何らかの異常を俺に分からせた。

「……」

「くふあああ……んう、あれ、どうしたのさ。変な顔で外見て」

「いや真顔だし。あと何でそんなに眠そうなんだ」

ぶかぶかのパジャマに身を包んだステイルシアが、瞼を擦りながら居間に入ってきた。

大きなあくびをしていても眠たそうだ。

「昨日は遅くまで君のツイッターできのこの山派どもと喧嘩してたからね！」

「人のアカウントで何してんだお前」

こいつ、夜いつもスマホ借りにくると思ったらそんな事してたのか。迷惑でしかない。

ステイルシアの手からスマホを奪い取り、ツイッターを確認する。プチ炎上していた。

ダイレクトメッセージを見ればきのこの山派のアカウントから何件か殺害予告されている。

お菓子界限シビア過ぎるだろ。

「はあ……パソコンの方でお前用のアカウント作ってやるから、ネットで暴れるならそっちでやれ」

「ええ、他人の名義で引つ掻き回す方が楽しいから要らないよ!？」

「実はまあまあ性格悪いよなお前」

それからステイルシアは、『今日はエヴァのDVD見直すかなー』と言いながらソファに寝転がってしまった。

……最近、こいつのニート化が激しい。いやあまり外に出れない以上は仕方がないんだけど。健康に悪いから少しは動いて欲しい。

『太るぞ』とか注意しても全く効果無いし。

自らの容姿に頓着が無いのだろう。今も、めくれた服のすそからほつそりした白いお腹が見えている。

どうかガツンと言葉で衝撃を与えて、この生活態度を改善させられないものか。

「……お前、前の世界で言われて傷付いた言葉とかあるか？」

「うーん？ 老害とかかなー？」

「リアルなのやめろ」

ごろごろしながら、生気の無い声でステイルシアはそう言った。

嫌な記憶を思い出したのだろうか、目からハイライトが消えている。

この見た目で老害って言われるとかこいつ異世界でどんな扱いされてたんだよ。

俺は溜め息を吐きながらテレビのリモコンを取り、電源をつけた。

……ゴ布林事件から一週間。

世間では復興ムードが色濃く、今やっているニュースでも徐々に元に戻りつつある街並みが映し出されている。

俺は、それを見て顔をしかめた。

……きつとすぐに、『次』が来るからだ。

ゴ布林より更に強い何かに、また崩される。

まるで賽さいの河原だと思った。いくら頑張つて崩れた文明を直しても、異世界から捨て

られてくる廃棄物モンスターにすぐ壊されてしまう。

「……何様だよ、クソが」

「……え、ご、ごめんね?」

「いやお前じゃないよ……モンスターの事だ」

「そ、そっか、そうだよね。君はそんな事言わないもんね……」

びくつ、として謝ってきたステイルシアに否定する。

……駄目だ。考えれば考える程、気が滅入ってしまう。とりあえず朝飯でも作ろう。

「~~ス~~テイルシア、何食べー」

『~~ス~~』

~~ス~~~~ス~~何食べたい、と聞こうとした時、俺の携帯からけたたましいサイレンが鳴り響いた。

なんだと思ひながらポケットから取り出して画面を確認する。

画面にはデカデカと『緊急警報』の文字が記されていた。

「つ……!」

勢いよくカーテンを開けて、窓から空を確認する。

ーそこにあつたのは、街の方を中心に黒くひび割れた空。前とは違いこちらの方にまで亀裂が広がっている。

前回の『黒いオーロラ』よりかなり規模が大きい。

それから、スマホに遅れてテレビの方でも緊急速報が始まった。

ローカル局のアナウンサーが『外にいらつしやる方はお近くの学校などにー』と注意喚起しているその後ろで、何体もの空を飛び回っているなにかが見えた。

「あ、あ……」

ー蝙蝠の羽が生えた巨大なトカゲ、とても形容すべきだろうか。

中天を羽ばたき、口に紅炎を溜める姿はまるでお伽噺のドラゴンだった。

いや、実際にそうなのかもしれない。

「……ワイバーンだ」

テレビを覗き込みながら、ステイルシアがそう言った。

「……どのぐらい強いんだ？」

「うーん……この世界で言うなら、たぶん第一次大戦時の戦闘機と同じぐらいは強いよ」

「ピンと来ねえな……」

画面内に映っている限りでも四体は居る。全体的にはもつと多いだろう。

しかし旧式の戦闘機程度の戦闘能力なら、きつと現代兵器を持つてすれば対処できなくもない。

俺は、少し安堵しながら溜め息を吐こうとー

「待って、ワイバーンだけじゃない」

「は……？」

そう言われて、ステイルシアの指差す先を見る。

そして気がついた。天を舞うワイバーンを見ていたせいで分からなかったが、上空よ

り悲惨なのはむしろ地上だった。

街に犇めくのは幾多の怪物たち。

象みたいな皮膚を持った一つ目の巨人。

獅子の頭、蛇の尾を持った獣。

手足を滅茶苦茶に動かしながら疾走する腐乱した老人。

担いだ大剣で易々とワイバーンを狩る黒い騎士鎧。

ビルを喰らう形容しがたい姿の巨大な軟体生物。

それらが街で暴れ回っていた。

その様はさながら、怪物どもの百鬼夜行。

パツと目に付いただけでこれだ。実際にはもつと種類がいるだろう。

「おい!? どうなっただけだよ……! 送られてくるモンスターは一種類ずつの筈じゃ

……!?!」

「こんな一気に、おかしい……奴らは焦ってるのか……？　でも、なぜ……」
「ステイルシア!？」

「あ、ああ、ごめんね、ちよつと考え事してた」

顎に手を当て思考に耽っていたステイルシアの肩を揺すり、現実を引き戻す。

なんで、なんで、なんで。無数の疑問符に脳を支配され、俺は混乱の極地にあつた。

「見た感じ……龍種とか魔族とか、上位種のモンスターはまだ送って来てないっぽいね
……でもそれ以外はほぼ居るよ。この星の人類はもう駄目かもね……これから上位の
奴らも来るだろうし」

「駄目、って……」

「けど、君の事は私が絶対に守るから。モンスターを全て駆逐するなんて私には無理だ
けど、この場所だけは必ず守り抜くよ」

にへら、と笑ってステイルシアが言った。

それでも状況が呑み込めず啞然としていると、またスマホが鳴り響く。

今度は警報じゃない。着信だ。……バンダイから。

「無事か!？」

『……い、今、ロッカーに隠れてる……っ！　あまり、大きい声を出さないでくれ……!』

電話の向こうで、バンダイが絞り出すような声で言った。

「どういう状況だ……?」

『先週の騒動で吾のアパートが駄目になってな……か、家族で、”神の存在証明”の施設に住ませて貰っていたのだが、突然怪物どもが侵入してきて……は、はは、それで、こんなホラーゲームのモブみたいな状況になってるわけだ』

半ば諦めたような声で、バンダイが笑った。

「い、今から行くから……! 建物の場所教えろ!」

携帯を耳に当てたまま靴をつっかけ、ステイルシアに『留守番してろ』と言う。

……汗臭くてキモオタでどうしようも無い奴だが、友達だ。見捨てる事なんて出来ない。
い。

「え、私も行った方が……」

「そしたら誰がこの家守るんだ」

「で、でも、君が死んじやうかもしれないでしょ」

「……この家は、俺なんかの命よりもずっと大切なんだよ。とにかくモンスターが来たら追っ払ってくれ!」

「あ……」

裾を掴んできたステイルシアの手を振り払い、自転車に乗って走り出す。

……間に合うと良いが。いや、そもそも間に合ったとして俺があのだ獄で生き残れるのか。

まあ……考えても仕方がない。

今は走る事だけ考えよう。

十話『排殺騎士』

「はあ、はあ……っ！」

チャリを飛ばし数時間。俺は街まで辿り着いた。

全身汗びっしょりで気持ち悪い。俺はうるさい心臓を無視して、バンダイに『まだ無事か』とメッセージを送った。

数秒後、打ち間違いの酷い文面で無事だという旨が返ってくる。

「……分かつてはいたけど、ひでえな」

崩壊した瓦礫、あちこちで起こる火災。暴れまわる怪物たち。

絵に描いたような世紀末だ。

ワイバーンの吐いた炎でドロドロに溶けた地面を避けながら、俺は歩き出した。粉塵が目に入らないようにパーカーのフードを深く被る。

まばらだが、街にはモンスターと戦闘している人々も居た。

白フードの集団、機動部隊らしき大盾を持った警察官たち。そして……私服の、胸に徽章きしょうみたいなバッジを着けた若者たち。

恐らく、国が募集していた魔核を取り込んだ一般人たちだろう。

「うわああっ！ わあああ！ 来るなあああ！」

「……………」

近くで聞こえた悲鳴に振り向く。

そこには、半魚人みたいな外見のモンスターに詰め寄られて、手に持った剣みたいなのを振り回している男の姿があった。

……不意打ち出来そうだな。助けるか。

倒壊した建物の残骸から鉄骨を漁り出す。折れた箇所が鋭利に尖っていて槍みたい
な具合だ。

それから一気に距離を詰め、背後から魚人の首目掛けて鉄骨を突き刺した。

パギリ、と。

頸椎だろうか、首肉を抉った先で骨の碎ける感覚。更に扶るように捻り込む。

魚人は青い血を吹き出しながらダランと力を失った。

すぐに灰となって大きな赤玉を残す。

俺はそれを噛み碎き、尻餅を着いた男に手を差しのべた。

「大丈夫か」

「ひっ、ひっ……………」

錯乱し、ズボンの股を濡らしている男から目線をずらすと、横にこいつの持っていた

武器が転がっていた。

うっすら赤く煌めく銀の刀身を持った、大ぶりのナイフ。政府から支給された対モンスター用の武器かもしれない。少なくとも鉄骨よりはマシそうだ。

俺はそれを拾い上げる。

鉄骨の槍とナイフの不格好な二刀流。でも無いよりは良い。

「ふっ……い！」

凄まじい勢いでこちらに突進してきた別個体の半魚人の胴に、鉄骨を突き刺す。だがそれだけでは止まってくれない。

刺さったままの鉄骨を蹴り上げて接近を阻害しながら、顔面に全力でナイフを投げた。

「■■■■!？」

運良く眉間に命中したナイフが半魚人の脳を貫き、活動を停止させる。

残った灰の山からナイフと魔核を回収し、俺は荒くなった息を整えた。

……半魚人。単純な戦闘力なら中型ゴブリン以上、オーガ未満ぐらいか。一対タイマン一ならギリギリ勝てるな。

二つ目の魔核を咀嚼しながら、そう思——

「っ……!？」

——その時、背後から恐ろしい寒気を感じて振り向いた。

視界の端に迫ってきていたのは、にちやりと微笑む腐敗した老人の顔。

テレビの中継に映っていたモンスターだ。四本の手足がまるで別々の生き物みたいにウネウネ動いて、ムカデやヤスデに似たような嫌悪感を覚える。

「ぐっ……らああああー！」

咄嗟に距離を取りながら、槍投げの要領で鉄骨を投擲する。

放物線を描いて飛んでいった鉄骨は、腐人の頭部を易々と貫通した。

「%#○\$・&#↓↓」

……が、有効打にはなっていない。

それどころか、頭部に空いた穴からピンク色の触手が何本も生えてきて、刺さった槍を絡め取った。

そして、うねる肉の触手から更に黄色い骨が成長してきて——アーチ状の『なにか』を形作っていく。

「マジ、かよ……っ！」

数秒後、腐老人によって作られたのは、肉の弦に鉄骨の矢をつがえた巨大な弓。

さながら『肉の弓』とでも呼ぶべきか。

ビキビキと引き絞られ、骨がしなる。

極限まで弾性を蓄えた筋肉質の弦は、数瞬後の爆発的な破壊力を予期させた。

「っ、ふ……」

バビユンツ、と。

仮にも生物の体から出てはいけない馬鹿げた発射音と共に、矢は放たれた。

反応する間も無く、肩に感じる熱――身をよじり、なんとか直撃は避ける。

しかし擦っただけで左肩の肉をほぼ抉り取られた。付け根がぶらぶら揺れて、胴と皮一枚で繋がっている状態。

俺の背後にあつたビルが、鉄骨矢の破壊力によつて倒壊するのが見える。

ゾツとした。もしまともに受けてたら即死だった。

「くそ、が……」

無理だ、勝てない。

ばちやばちや吹き出る血液に、チカチカと眩む視界。

意識を保っているのが奇跡だ。血が出すぎたせいで思考も纏まらない。

ふらつきながら逃げようとするが、すぐ追い付かれてしまう。

「%&#・#&#&\$↓←↑」

手負いの俺を見てケタケタ嗤わらいながら、腐老人が手を伸ばしてくる。

本気で、まずい。

ゴブリンや魚人と異なり、地球の生物と身体構造があまりに違い過ぎる。だから明確な弱点が分からないし、不意討ちのしようも無い。

眉間に穴が空いても動いてるのが何よりの証拠だ。

「%・#◇%◇%◇\$←←←!」

腐老人は逃げる俺へあつという間に追い付き、ブレード状に変形した触腕を振り上げる。

そして、それを振り下ろー

「# \$# # & # → ← ? ! ? !」

ー振り下ろそうとして、空から飛来した黒騎士によって真つ二つにされた。

黒騎士はそのままの勢いで大剣を持ち替え、腐老人を更に横風ぎにした。

十文字に切り裂かれた腐老人は、焦った様子で体の断面から無数の触手を生やして分断された体を接続しようとする。

しかし恐ろしい速度で無数の斬撃を見舞う騎士に再生が追い付かず、やがて数秒で灰と化した。

「……」

「っ……」

騎士は、ゆっくりと俺の方に振り向いた。兜の目の部分に灯る紅い光が俺を見据える。

感じるのは、圧倒的強者の風格。

漫画やアニメ特有の鬪気オーラなど素人の俺に見えはしないが、それでもそれに似たものを覚えるぐらいの。

……猛獣から逃げる算段を立てていたら、戦車がやってきたみたいない気分だ。
どうする……？

「食え、坊主」

「……へっ？」

兜の中から聞こえたのは、くぐもった男声。

灰の山から拾い上げた魔核を俺に差し出ししながら、確かにそう言った。

「な、なんで、モンスターが喋って……」

「オレはモンスターじゃない……貴公きこうとは別の世界からやってきた……人間だ」

天空から飛びかかってきたワイバーンを一刀両断しつつ、騎士は言う。

「……異世界から来た人間。ステイルシアと同じか？」

「とにかく、さっさと魔核を取り込まんか。そのままでは死ぬぞ」

俺はその言葉にはっとして、急いで口に腐老人の魔核を入れた。

ゴブリンやスライムの物より遥かに濃密な血の味。

それに顔をしかめていると、切断された肩の傷口からパキパキと赤い結晶が生えてくる。

「……………」

結晶は、俺の腕と同程度の大きさまで成長してから砕け散った。その中から出てきたのは、傷一つ無い左腕。

……ゴブリンの時で魔核を取り込めば傷が治るのは知っていたが、こうして実際に欠損した自分の部位が生えてくるのは、なんとというか、きつい。

「……………ほう、かなり治りが速いな。その若さで既に『飽和』しかけているのか……………」
手をグーパーして感触を確かめていると、騎士は『着いてこい』と言って歩き出した。
一瞬戸惑ったが、とりあえず後を追う。丁度バンダイの位置情報も向こうの方面だ。
しばらく歩くと、路地裏の一角にある段ボールが沢山敷かれた場所に辿り着いた。
この騎士に保護された人たちだろうか、十数人がそこに固まって震えている。

「……………」

「数日前にこの世界に飛ばされてな。普段はここで暮らしている。オレの城だ」

段ボールの上にどかかと胡座をかいて座り、騎士は言った。……………ステイルシアより遅

く転移してきたんだな。

と言うか、この段ボールの山に住んでるって……

「もしかして、ホームレス……」

「城だ」

「え、ホー……」

「城だ。キャツスルだ」

有無を言わさぬ迫力でずいつ、と迫ってくる騎士にコクコク頷いた。

ちよつと面白いなこのおっさん……つていや、そんな場合じゃない。バンダイを助けに行かなければ。

「あの……保護してくれるのはありがたいんですけど、今友達が大変で。助けに行かないやなので、俺は大丈夫です」

ホームレス騎士に背を向け、俺は歩き出そうとした。

が、すぐ後ろから肩を掴まれて前につんのめる。

な、なんだ……？

「オレも同行しよう。この苦境でも友を見捨てないその心意気、気に入った」

「おっさん……!」

「お兄さんだ」

正直、この街を俺一人で生き抜くのは難しい。

強い味方が手に入るのは好都合だ。

俺はバンダイから送られ来た位置情報を頼りに、騎士と二人で路地裏を進む。

「……そう言えば、お名前つけて聞いても良いですか？」

「そうだな、”掃除屋”^{エリミネーター}とでも呼んでくれ。ホームレス仲間……あついや、同胞にもそう呼ばれている」

騎士……エリミネーターは玲瓏とした声でそう言った。

やっぱりホームレスなのか。そりゃ、転移して数日じゃ住居なんてどうにもならないだろうけど。

ホームレス騎士^{ナイト}とか、字面がアレ過ぎる。

「……です」

そうこう思いながら歩いていると、一件のビルの前で位置情報が到着を示した。

真っ白な高層ビル——今は焦げ付いているが、THEE宗施設といった感じだ。

「ほう……ここか。良い物件だ。敷金とか幾らなんだろうか」

「住もうとしますか？」

「……してない」

先にズカズカ進んでいくエリミネーターの背中を追う。

中に入ると建物内は凄惨な有り様で、数々のモンスターの巢窟と化していた。

体表からマグマのような粘液を吹き出している巨大なカエルや火吹きトカゲなどが多く居るせいで、一階のフロアは気温がかなり高い。正に灼熱地獄だ。

「やばいな……」

「活路をこじ開ける。駆け抜けるぞ坊主」

「へ？」

エリミネーターは大剣を上段に構え、そう言った。

「術式装填・”アイオライト”」

大剣の刀身に、青い魔方陣のようなものか浮かび上がる。

「ふん……」

エリミネーターがそれを振り下ろした瞬間、レーザービームと見紛うぐらいの凄まじいジェット水流が大剣から発射された。

螺旋回転しながら放たれた水流は、進路上に立っていたモンスター達を一体残らず吹き飛ばして直進する。

「ーなんて威力だ。」

剣からビームが出るのは創作物じゃデフォだが、現実で見ると恐ろしい。

「チイツ……」 全員に気付かれた！ 坊主、お前の友人が居るのは何階だ!？」

「そりや気づくでしよ……えっと、た、多分、四階……」

「よーし……ならば全速前進だ！」

「あああああああ!?!」

エリミネーターは俺の髪の毛をガシツと掴んで、引きずるように走り出す。デコボコした地面にガンガン手足がぶつかる。

痛い痛い痛い!?

十一話『神よ、無貌なる天使たちよ』

「ふう……エレベーターがまだ機能していて助かった。奴ら全員を相手するのは流石に骨が折れる」

「俺は物理的に骨が折れてそうなんですけど……」

炎の道を抜け、俺とエリミネーターは滑り込んだエレベーターの内部で話していた。

無理に引きずられたせいで体中が痛い。多分全身打撲している。

それを我慢しながら立ち上がり、俺は壁に光る『4F』のボタンを押した。

軋む音と共にエレベーターが上へ上り始め、体に重圧を感じる。

……四階もモンスターの巣窟になってしまっているのだろうか。

俺はゴクリと生唾を飲んだ。本当に、生きた心地がしなー

「■■■■!!!」

「っ……!?!」

「……下がれ、坊主」

ーバコンツッ！ という鉄がひしやげる音と共に、エレベーターの扉が大きく凹んだ。

揺れながら上昇が止まる。ここはまだ三階の筈だ。

外部からモンスターに攻撃されて昇降を止められた……？

エリミネーターは扉に向け剣を構え、深く息を吸う。

「術式装填。”カーネリアン”」

エリミネーターの大剣に葉脈に似た紅蓮の赤線が走る。それと同時に、ドアに向けて極大の炎の螺旋が放たれた。

そして……その先に立っていた存在を見て目を疑う。

「マジ、かよっ……！」

——融解しながら抉り抜かれた鉄扉の先に居たのは、凄まじく引き絞られた肉体の緑人。

そいつは、好戦的な笑みを浮かべながらエリミネーターを睨んでいる。

……”ゴブリン・エース”だ。

三階のフロアにはこいつしか居ないようだった。否。床に散らばる数多の魔核——他のモンスターは、全員こいつに殺されている。

そして、俺はある事に気が付く。

横腹に丸く抉られたような傷跡が付いているのだ。

つまり……前にステイルシアが撃退したゴブリンエースと、同個体。

「■■■■■！」

「……先に行け坊主。お前を守りながらでは、こいつは少し分が悪い」

「え……」

「その短剣を貸せ」

ゴブリンエースと睨みあつたまま、エリミネーターはそう言った。

言われるままにナイフを渡すと、エリミネーターはその剣身に指を触れさせる。

「……術式刻印。”ダイヤモンド”」

触れた指先から、銀色の葉脈がナイフを侵食していく。

「なんですかこれ……」

「武器の強度を増させた。これなら龍種の爪とカチ合つてもそうは折れん。それで友を救いに行け」

そう言い切つた瞬間、見計らつたかのように、ゴブリン・エースが目にも止まらぬ速さでエリミネーターへ突進した。

エース個体の繰り出した正拳を大剣の腹で受け止めながら、エリミネーターは後ずさる。

ゴイイーン！という、骨と鉄の打ち合う音が響き渡つた。

「■■■■■……!!!」

「ほう、小鬼の分際で武を識るか……ならばオレも答えよう。ほら坊主、向こうは決闘が望みのようだ。速く行け」

「は、はい……」

ナイフを受け取り、俺はゴブリンエースの横を抜けて階段へ走る。どうやら俺には興味が無いらしい。望みは強者との戦いか。

階段を駆け上がり、四階へと向かう。

曲がりくねった段差を抜け、ひしゃげて開かなくなった扉を蹴り壊した。

「……………」

ー四階の光景は、想像を絶するものだった。

モンスターが居るのは予想通り。地面に転がる住民たちの死体も予想通り……しかし、そのモンスターの風貌は異様そのものだった。

白く煌めく翼を背中に生やしたそれらは、絵画などで見覚えのある神聖な存在と酷似している。

”光の剣を持ったのっぺらぼうの天使”。そうとしか表現しようが無い外見の怪物たちがー四体。

そいつらが、一斉にこちらへ振り向く。

『カミ、ソノ証^{シヨウサ}左ヲ、ココニ』

『アア、カミ。カミ。スバラシイ。スバラシイ。ワレラノセカイニハ無かった。イラツシヤラナカツタ観念デ、概念ダ』

『ノウミツナ信仰のイブクこの建造物ニテ、ワレラはカミを生み出す』

『ソウ、今こそ、神の存在証明ヲ……ソノ式にキサマは不要ダ』

——言葉を、喋っている。

エリミネーターと同じ、異世界の人間かと一瞬だけ思ったが……すぐに、違うと気が付く。

頭部に浮かぶ光輪がそれを物語っている。

恐らくは単純に知能が高ただけだろう。

……バンダイは、どこだ。

天使たちに注意を配りながらフロアを見渡すと、奥にあるロツカーがガタツと震えた。あそこか。分かり易いなおい。

「はあああ……！」

接近してきた天使によつて躊躇い無く振り下ろされた光の剣を、上体を反らす事で回避する。僅かにかすつた前髪が切れて宙を舞う。

——かなり、速い。腐老人の核を取り込む前だったら絶対に見えなかった。

後ろの壁が斜めに焼き切られる。ひやつとした。コンクリがまるで豆腐のようだ。

「ビームサーベル、かよっ……!」

悪態を吐きながら天使に前蹴りを食らわせる。

呻き声を上げながら後ずさる天使へ追撃を加えようとし、背後で剣を構える、もう一体の天使の姿を見た。

「っ……クソが……!」

『ココマデ強力な先住生命は初めて見た。ソノ肉ト脳漿は、良い供物トナルダロウ……』
光剣の形状が、ブレード状から槍状へ変化する。突き出された炎槍を辛うじてナイフで防ぐ。

数秒の鏢^{つぼせ}迫り合い。

力では俺の方が勝ってるのか、天使は後ろに飛び退く。

が、その左右には俺に光の弓をつがえた天使が二体立っていた。

……流石に、分が悪いな。

四対一なのに加え向こうは飛び道具も持っている。正面からやるのは得策じゃない。隙を見計って、バンダイを連れて逃げよう。

『……ニゲヨウとしている ナ』

『メンドウダ。足をネラエ』

『いや、"ミワザ"を、ツカウカ?』

『ソウダナ……例の厄介なゴブリン二使うツモリだったが、逃げられては元モ子モ無い。オレガ時を稼ぐ』

四体で何度か問答を繰り返したと思った瞬間、一体の天使が突進してくる。

武器の形状は最初の剣へと戻っていた。

残りの三体は、腕を天井に掲げて三角を描くように立っている。

その三角の中心には、小さい真つ黒な球体が浮かんでいた。

だんだんと巨大化していくソレは、見ているだけで本能的な恐怖を覚える程の圧倒的な力の塊だった。

ーアアレは、まずい。

奴らの言う”ミワザ”……いや、御技みわざか？

恐らく、複数体で使用する大技だろう。そういうのは大概ヤバイ。

『ニガサンゾ』

振り下ろされた炎剣を防ぎながら、俺はバンダイの入ったロッカーに叫ぶ。

「ぐ、うっ……！ おいバンダイ！ 出ろ！ あれを打たれる前に逃げるぞ！」

「えええええっ!? なんでバレてるのおっ!?」

「っ、らああああ!!!」

ナイフを思い切り光剣へ叩き付けるーパキンと、向こうの剣がへし折れた。エリミ

ネーターのしてくれた強化が効いているらしい。

武器を失いガラ空きになった天使の喉笛をナイフで掻き切る。

灰になるまで待っている時間さえ惜しい。首から鮮血を吹き出しながら崩れ落ちる天使の胸部へズボッと手をつ突つ込み、無理やり魔核を引き抜いた。

それを咀嚼しながら、バンダイの手を引く。

「行くぞー！」

「と、と……友よお”お”お！ 助けに来てくれてありがとう”ね”ええ”え”え!？」

「鼻水つくから抱き付いてくんな……」

号泣しながらすがりついてくるバンダイの手を引き、階段へと急ぐ。

この調子なら、発動前に逃げられー

『イか、せん』

ー紅蓮の弾丸によって、階段が破壊された。瓦礫によって塞がれ通れそうにない。

焦燥に駆られながら振り向くと、そこには右手を突き出した体勢の、ほぼ灰になった

天使がいた。

最後の力だったのだろう。数秒後には完全に崩れ落ちる。

が、天使たちの黒球はもう完成間近に見えた。

大きなバランスボール程まで肥大化した黒球に、空気が震える。

……階段の瓦礫をどかすのは間に合わない。なら。

「屋上に行くぞ……！」

このマンションは四階建て。今の俺なら、多少の怪我を覚悟すれば地面に着地できる高さだ。

屋上への階段を全速力で上がる。

走って、走って、屋上に通じる扉を開き——

『『『ロウ・ドミニネーション』』』
『『『下位時空掘削魔術』』』』

——その声は、地獄からの呼び声が如き禍々しい感情を孕んで俺の耳を焼いた。

「ま、ず……！」

瞬間、前方の地面から漆黒の球体が飛び出てきた。

天井ごとフロアをブチ抜いてなお威力を失っていない球体は、

まるで意思を持っているかのように俺へ突っ込んでくる。

咄嗟にしゃがんで回避する。

すると、球体は地面を抉りながらUターンして俺を追尾してくる。

「追尾、すんのかよっ……！」

迫りくる黒球の通った後を見て戦慄する。

溶けるとか砕くとか、そういう次元ではない——まるで空間ごと切り取ったかのように

に丸く消し飛んでるのだ。

さながら動くブラックホールだ。

……さつきの天使の声、『ロウ・ドミネーション』とか言ってたな。

ステイルシアがゴブリンエースを撃退した時の魔法も確か『ドミネーション』だった筈だ。効果も似ている。

いやそれが分かった所でどうしようも無いが。

「ぐっ……と、友よっ！ 吾を助けにきてくれた貴様が死ぬのはあまりに不憫だ！ ここは吾が食い止めるから先に行け！」

「お前デブだから肉壁としては高性能そうだけどあれは無理だよ!!」

「酷いっ!」

ガビーン、と顔を歪めるバンダイを無視し、必死に黒球から逃げ回る。

ーが、すぐに限界が訪れた。

一撃目を無理な態勢で回避したせいで、二撃目にどうしても回避不能な状況に誘い込まれた。

「が、あっ!」

抉り飛ばされたのは、腰。

どんな鋭利な刃物でも不可能な、凄まじく平坦な断面。そこから噴水みたいに血液が

吹き出る。

「つ、ふうふう………！」

「……こんな所で、死ねるか。」

全身を駆け巡る熱い魔力の感触。イチかバチかそれを腰に集中させた。すると、傷口からゆっくりではあるが赤い結晶が生えてくる。

こうすると局所的に傷の治りを速められるらしい。

……しかし、それでも。あまりに遅い。

既に軌道修正を済ませた黒球は、また俺に向かってくる。

「……万事、休すか？」

痛みに研ぎ澄まされた思考をフル回転させ、この状況を打破する方法を模索する。足は動いてくれないし、そもそもアレを防ぐのに物理攻撃なんでもつての他だ。

ステイルシアみたいに魔法とかを使えば良いが、そんなのイメージ出来ない。

……いや、たつた一つだけある。何度も間近で見た、あの技術が。

「術式、装填………」

指先に魔力を集め、ナイフへ血管を伸ばすようなイメージをする。

……『術式装填』。エリミネーターの技だ。ついさつき見たから鮮明に覚えている。

俺に使えるかは分からないが、諦めるよりはずっとマシだ。

「おい、おい!? 来てるぞ!? ねえ!?」

うつすらと、少しずつナイフに青い線が走り始めた。

黒球はもう眼前まで迫っていた。やるしかない。

ナイフを握り締め、エリミネーターの動きを思い出しながら構える。

「アイオライト……!!!」

体からすつと熱が抜ける感触——ナイフの刃から、ジェット水流が噴出された。

エリミネーターの物には劣る、だが人体ぐらいならば余裕で切断できそうな水の奔流。

……でも、成功したと喜んでいる場合ではなかった。

明らかに押し負けているのだ。

黒球は、水流を吸い込みながら変わらず直進してくる……少しは遅くなっているが。

「くそがあああ!!!」

「す、凄いだぞ! ……つてあれ、全然防げてくないか!? どうするんだ!」

「根性だよ!!!」

「発想がパワー系の人過ぎるぞ貴様!」

しかし、奮闘むなしく。

俺は黒球に飲み込まれ、磨り潰されようと——

「……………
レジスト

「……突如として黒球が薄らぎ、霧もやに変わって霧散した。

「……ごめんね。私はあの家よりも、この世界よりも……ずっと、君が大切なんだ」

鈴を転がしたような耳心地の良い声は、今や聞き慣れたもので。

……同時に、この場では絶対に聞くことが無いと思っていたもので。

「ステイル、シア」

「うん。君の大好きな、君を大好きなステイルシアちゃんだよ」

左手に炎を纏わせ、茶目つ気たつぷりに片目をパチツと閉じて。

この地獄に、一人のエルフが降り立った。

file5811 セラフェイス【熾天使】脅威グレードC-

file21error 【ゴブリン特異個体『夜叉』】脅威グレードB+

十二話 『其は、天を焼き焦がす灼炎』

風になびく銀の長髪が、月光を浴びて煌めいている。

その様は、整った顔と相まって息を呑むほど神秘的で。

もしこれが初見だったら惚れてしまっていたかもしれない。中身がポンコツだと知っているから問題無いが。

「……どうして、この場所が分かったんだ？」

「君はこの世界の住人の中ではトップクラスに魔力量が多いからね。簡単に探知できたよ……最初は大人しくお留守番しようと思ってただけど、我慢できなくて来ちゃった」

にぱつと破顔させ、柔らかな笑みでステイルシアはそう言った。なんだそのGPS並の便利機能。

俺が啞然としていると、横でバンダイがワナワナ震えている事に気が付いた。

「えええええっ!!? お、おい友よ！ ネットアイドル・エル★ファイーネちゃんだぞ！ 握手して貰わねば！ あとツーショットを撮ってSNSに拡散して一躍時の人いちやくとならなければ！」

「死にかけたばっかりなのに承認欲求が凄いやお前」

『ふおおお！』と叫びながらバンダイがステイルシアに駆け寄っていく。

ステイルシアは少し顔をしかめて後ずさった。

「わ、わ、吾っ！ 貴女のファっ、ファンです！ よよよ良かったらっ！ あ、ああああ

あ握手とかー」

「うわ、汗くさっ」

「ーっふっ」

「バンダイイイ!!!」

倒れてビクビク痙攣するバンダイに駆け寄る。す、ステイルシアめ。人のコンプレックスを堂々と抉りやがって。

バンダイは『声、かわい……すこ……』と言って泣きながら頬を紅潮させている。何かにもまずい方向に目覚めてしまったのかも知れない。

「……にしても、酷い有り様だ。君とお出かけした街がまるで別物だよ。私はすぐに忘れてしまうというのに。これじゃ二度と思いい出せない」

暗くなった空にはためくワイバーンの群れを見上げながら、ステイルシアはぼそりとそう言った。

「不愉快、だね……」

ワイバーンやその他の空中にいたモンスターたちが、一体残らず燃え尽きる。

空にかかっていた雲まで届いた炎は、それらを吹き飛ばして美しい星空を露出させた。

あまりの眩まぼゆさに一瞬だけ世界が真っ昼間みたいに明るくなる。

「ごらん、ゴミが消えて綺麗な夜空だ。ああいうのなんて言うんだっけね……汚い花火、だっけ？」

焼き焦げながら隕石のように墜落していくワイバーンたちを見て、ステイルシアはパンパンと手を払った。

それに何か言おうとして……俺の喉から、こひゅつと空気が漏れた。

その時初めて、俺は自分の足が震えている事に気が付く。

「……あまりに、次元が違い過ぎる。」

ゴブリンエースを一蹴した時点でかなり強いのは分かっていたが、想像を遥かに越えていた。最早”異常”だ。

あまりに隔絶した力の差に思わず身震いする。

……そして、こいつでさえ『全て倒すのは無理』と言う上位のモンスターたちは一体どんな怪物なのだろうか。

「ねえってば」

「つ……、お、おう、どうした」

「一応家には防壁を張ってきたけど、あくまで即興のやつだから。早く帰った方が良いでしょう」

「ーそうだ、忘れていた。」

ステイルシアがこちらに來たという事は、家を守る者が居ないという事。

『防壁』とやらを張ってきてくれたらしいが、それでも不安だ。

「悪いバンダイ！ この下の階にエリミネーターって奴が居るから、そいつに保護してもらってくれ！」

「えっ」

バンダイにそう言い残し、俺はステイルシアを抱えて背の低い隣のビルに跳び移った。

……行きの時よりはかなり肉体が強化されたが、今の俺の足でも一時間はかかりそう
だ。

それでは間に合わないかもしれない。何か良い移動手段は無いか……

「あつ、ちよつと待って」

「なんだよ!?!」

「家の座標は覚えてるから、転移魔法を使えば一瞬で飛べるよ」

「……マジか」

ステイルシアは呪文を唱え、手の平から黒いもやを発生源させた。次第に広がり、最終的には車が1台通れる程までに巨大化する。

「……お前つて、頭以外は本当にハイスペックだよな。どこでもドアかよ……」

「ふふん、凄いでしょ。ステイえもんと呼びたま……え、あれ今バカにされた？」

「これに入れば良いのか？」

「ねえ馬鹿にした？」

「ちよつと勇氣いるな……」

「ねえ」

俺は黒い靄に足を踏み入れた。瞬間、浮遊感を覚える。

視界が濃密な闇に囲まれて何も見えなくなった。酸素が薄くなり、胸が苦しくなる。

その数秒後、闇が晴れて視界が鮮明になった。

俺が立っていたのは見慣れた坂道。ちょうど、ステイルシアと初めて出会った場所だ。

「よつ、と。おや……？ 少しズレたみたいだ。私も老いたな」

「お前が田んぼに落ちてた場所だぞ」

「ひんやりしてて気持ち良いからね」

俺は駆け足で家に急ぐ。

以前より遙かに速く登れる坂道に、少なからず違和感を覚えながらも家までたどり着いた。

家を囲むようにして、半透明の四角い立方体が発生しているのが見える。あれがステイルシアの言う『防壁』か。

「……？」

しかし、その防壁の前に奇妙な人影があった。

モンスターではない。老いさばらえた老婆の人影。

近付くにつれて良く見えるようになる。その人”に、俺は自分の頬に嫌な汗が伝うのが分かった。

「なん、で」

「……あれは」

——家の前に佇んでいたのは、間違はなく俺の祖母だった。

”祖母”はこちらに気が付いた素振り、ニコリと微笑みながら振り向いてくる。

「ばあ、ちゃん……？」

——ありえない、ありえない、あり得ない。

この状況に猛烈な違和感を覚えながらも、思わず近付いてしまう。

”祖母”は……祖母の姿をした”ナニカ”は、俺の記憶の中にあるそのままの表情で俺へ手を差しのべー

「ドミネーション」

「あ」

「ー」祖母”は。

腹に風穴を空けて、苦悶の表情をしながらドロドロした黒い液体に変わった。ぐにやりと歪んで崩壊する顔が、網膜に焼き付く。

「ドツベルゲンガー」

「無貌の影だ。人間の記憶を読み取り『その者の最も大切な人』に変貌して不意を打つ怪物……私の一番嫌いなモンスターだよ」

地面を這いずって逃げようとする泥に、スティルシアが至近距離で火球を打ち込んだ。

地面のアスファルトごと抉り、”無貌の陰”とやらを跡形も無く消し飛ばす

「っ……っ……っ」

残った魔核を見ながら俺は呆然とする。

偽物とはいえ、祖母の姿をした存在が死ぬ光景に酷く精神を揺さぶられていた。

「……家、入ろっか？」

「……ああ」

ステイルシアに手を引かれながら、玄関をくぐる。

消えかけた祖母の香りに代わって家に染み付き始めている、ステイルシアの甘い香りに鼻腔をくすぐられた。



「はあ……」

俺は、ソファに寝っ転がりながらぼーっとしていた。

ステイルシアの见ているテレビニュースの内容を流し聞きし、今日何度目かも分からぬ溜め息を吐く。

……外は、目を背けたくなるような大惨事だ。

ステイルシアがワイパーンを壊滅させたお陰か、あるいはエリミネーターが居るから……あの街はモンスターを押し返しつつあるらしいが、他の場所は殆どどうしようも無い状況だと放送している。

人々が逃げ惑い、潰され、切断され、千切られる。

正に死の見本市だった。

……それを見て、俺の胸中に一つの疑問が生まれる。

あれだけ強いステイルシアが本気でモンスターを駆除しようとするれば、あの人たちを救えるのではないかと。

「……なあ、ステイルシア」

「なんだい？」

「もし……もしの話だけど。お前が本気でやれば、モンスターはどのぐらい殺せるんだ？」

その質問に、ステイルシアは少し思考する素振りをした。

「……良くて、この星の六割かな。しかもそれは『周りへの被害も魔核の残留による復活も考慮しない』場合の数だ。巻き添えを考えると、私が前線に出た方がかえって死者は増えるんじゃないかな」

「マジかよ……」

「だけど、分かったのは悪い事ばかりじゃない」

俺が持つて帰ってきた赤いナイフを見ながら、ステイルシアは言った。

……どういう事だ？

「このナイフを調べてみたんだけどね……刃に魔核を練り込んである。

どうやったかは分からないけど、魔核を武器に加工する技術がここの人類には存在しているらしい。私の世界でも不可能だった技術だ」

魔核を武器に練り込む……か。道理で異様に切れ味が良いと思った。

ちなみにエリミネーターの施してくれた『術式刻印・ダイヤモンド』はいまだ効果を失っておらず、刀身には変わらず銀色の葉脈が走っている。

「そっぴいやこの武器、まあまあな強さの付与魔術が掛かっているけど……誰がやってくれたんだい？ 君じゃないよね」

「ああ、エリミネーターっていう騎士がやってくれたよ。多分お前と同じ世界の住人だ」

「……ふーん」

ステイルシアはナイフをまじまじと見つめる。何故か機嫌が悪そうだ。

すると、細い指先をナイフに触れさせた。

銀色の葉脈を押し退けるようにして、指から深紅の亀裂が刃に侵食していく。

「おい？ 何してんだ」

「私の方が強いのは作れるのに……それにこういう特別な武器をあげるのって、漫画とかゲームなら私の役目じゃん……？ なんでそんなどこの馬の骨かも分かんない奴に

貰ってくんのおさ……」

「おさ……」

「原型ないぐらいに強化すれば私が作ったって事になるかな……？ なるよね、そうだと

よね……」

「自己完結すんな」

どんどん赤い亀裂が大きくなっていき、ナイフが『もう無理だつてば！』と悲鳴をあげるようにギチギチギチという金切り音を発する。

その金切り音がピークに達した頃、やっとステイルシアは刃から指を離す。

その頃には、ナイフの外観は大幅に変化していた。

さつきまでとは裏腹に、刃には禍々しい模様が入っている。

しかし、赤と銀の葉脈が絡み合って刀身に幾多の魔方陣を描く様には、一種の神聖ささえ感じた。

「……このナイフに何したんだ？」

「使い切りの時空魔術ドミネーションを三回分、あと物体に触れた瞬間に『超振動』の魔方陣が発動して対象を無理やり押し押し切れるようにしたよ！ そして破壊不能属性を……」

「待て待て待て!!？」

なんだその最近の広告とかで良く見る『ログインボーナスで最強!』を謳い文句にし

たソシヤゲみたいな性能は。

馬鹿なの、死ぬの？ そう言いたくなる衝動を抑え、俺はそーっとナイフをダンスの上に移動した。

爆弾を持っているみたいなのが分だ。何かの拍子に暴発とかしたらどうなってしまうのだろう。

震えが止まらないよ。俺が超振動しそうだよ。

「それでも上位のモンスターには殆ど通用しないから気を付けてね」

「……いや、お前の世界ゲームバランスの調整ミスってない？」

「くそげーだったよ」

十三話『公務員（いのちがけ）』

「術式装填・カーネリアン……ってまた駄目だ。どうしても途中で途切れるな……」
バンダイを助けた次の日、俺は家の縁側えんがわで包丁に指を当てながらそう呟いた。

術式装填。

ステイルシアに聞いたところ、魔力が通りやすい金属を媒介にする事によって、魔法の才能がある人間が体に生まれ持つ『魔管』無しで魔法に似た現象を引き起こす原理の技術らしい。

だがその分パワーは魔法に劣るため、向こうの世界で使う者は物好きと才能が無いやつしか居なかったのだとか。

ステイルシアは『ほぼ魔法の劣化版だよ！ オワコンだよ！』とも言っていた。散々な言われようだ。エリミネーターが泣いてるぞ。

……しかし俺には、魔法の才能は無いらしい。

だから『近づいて殴る』以外の戦法を取るにはこれしか無いのだ。

昨日俺が見たエリミネーターの“術式装填”は全部で二種類。

凄まじい水圧で水を発射する『アイオライト』と、炎の螺旋を撃ち出す『カーネリア

ン』だ。

練習を積んだ結果、俺はアイオライトの方は完全にマスターした。

試しに近場にある森の大木に向かって全力で撃つたら、余裕で幹ごと吹き飛ばす事が出来た。

これならモンスターにもきつと通用する。

……しかし、『カーネリアン』の方はいくら練習しても出来そうに無い。

何故かとステイルシアに聞くと、俺の適正属性が水なのだと言われた。逆に炎は苦手らしい。

どっちかって言うとカーネリアンの方がかつこ良かっただけに悲しいが、贅沢は言えない。あくまでサブウェポンとして考えよう。

「……昼飯、作るか」

縁側から立ち上がり、居間の方に移動する。

床にぐでーんと伸びていたステイルシアが、俺に気が付いて顔を向けてきた。

「まーだあのオワコン魔術の練習してたの？ 君ってばセンスは抜群なのに、魔法には全然適正無いんだもんねえ……」

「うっせえお前の昼飯だけきりぼし大根にするぞ」

「うわあああごめんね!？」

必死にすがってくるステイルシアを無視してキッチンに立ち、シャツの袖を捲る。まだまだ食材には余裕がある。何を作るか――

「……あれ、電話がきてるよ」

プルルルル、と鳴り響いた固定電話に作業を遮られる。誰からだろうか。俺は受話器を持ち上げ、耳に当てた。

「どなたですか？」

『おお……？ おお、坊主の声だな。オレだ。エリミネーターだ』

受話器の向こう側から聞こえたのは、エリミネーターの声だった。

なんで俺の家の番号を知ってるんだ……？

『坊主、スマートフォンを落として行っただろう。階段を登る時にポケットから落ちたのが見えてな』

そう言えば、昨日からスマホが見当たらなかった。

ステイルシアが持つてるのかと思って気にしてなかったが、落としてたのか。

「ありがとうございます……」

「ねえねえ、電話の相手だれっ？ 女の人？」

俺の肩口から覗きこむようにひよこつと顔を出してきて、ステイルシアが聞いてきた。

電話中だから無視する。

『いや、なんて事はない。結局例のゴブリン・エースも仕留め損なってしまったしな……』

「そうですか……あ、そういえば、バンダイってヤツ見ませんでした……?」

「ねえつ!!! 無視しないでよ!!!」

『ああ、中々に気の良い奴だ』

「すーっ……わあっ!!!」

「いやうるせえな!? メンヘラの人かお前は!?!」

耳元で大声を出してきたステイルシアに、つい反応してしまう。

謎に満足げな顔が癪に触った。

『なにやら騒がしいな……同居人でも居るのか?』

「ペットです!」

「彼女だよ!!!」

「馬鹿じゃないのお前?!」

『なんか楽しそうだな! まあいい、暇ができたなら取りに來い。この街に居たモンスタードもはオレたちが軒並み掃討そうとくしたから安心しろ。この世界の戦士たちも中々やるものだ』

そう言い残して、プツツと通話が切れた。

俺は顔をしかめながら、キツとステイルシアを睨む。

「なにが彼女だよ……」

「だって、赤ちゃん作れる体の男女が一つ屋根の下に暮らしてるんだよ!」

「言い方が嫌らしいなお前な」

「そして、あまつさえ私は君に裸も見られてるんだよ!」

「いや……まあ、そうだな」

「これもうせつくすだよ!」

「それはちげえよ!」

『論破してやった』とばかりに叫んだステイルシアにツツコミを入れる。

「こいつの性認識どうなってるんだ。」

「大体、仮にも女の子がセックスとか言うんじゃねえよ! ビッチだと思われるぞ!」

「び、ビッチ!? はーんっ! 馬鹿だね! こちとら千年以上処女やってるんですけど

!」

「それを誇らしげに語るのもどうなんだよ……」

半ギレ気味にぎやーぎやー騒ぐステイルシアを尻目に、溜め息を吐く。

さっさと昼飯を作ろう。大声を出してたら余計に腹が減ってきたー

ピンポン

ーっつと、その時、今度は間の抜けたチャイムが俺の作業を中断した。

……呼び鈴だ。誰か訪ねに来たのだろうか。

「はいはい……今行きまーす」

気だるげに返事をして、俺はガチャリと玄関の扉を開けた。

大方、近所からのお裾分けか何かの集金だろう……

「こんにちは。こちらは湊^{みなと}海江^{うみえ}さんのお宅ですね？ 私はこういう者ですが」

ーっそんな俺の楽観的な思考は、扉の先に立っていた”そいつら”によって一瞬で打ち砕かれた。

祖母の名前を口にしながら、何かを見せ付けてくるスーツ姿の女。

その背後には四人の武装した男たちが待機している。全身を堅牢なプロテクターで固め、大層なアサルトライフルを装備して。

……そして、女の持つ手帳は刑事ドラマなどで良く見る物に酷似していて。

「……警察、官……？」

「いえ、所属は新たに設立された『未知生命体対策本部』ですが……まあ、警察官と思っ
てくられても構いません。その方が話が円滑に進みそうです」

そう言って、女は品定めするように俺を見つめる。

……まずい、明らかにヤバい組織じゃねえか。

そもそもなんで俺の家に来たんだ。ステイルシアの存在がバレでもしたのか……？

「細身でやや長身、赤みがかったブラウンの瞳……外見の証言とも被りますね。まさか

こんな少年が……」

「あ、あの……？」

「ああ、失礼しました。私は荒城ツカサと申します」

アラキ、を名乗る女は懐から名刺を取り出して俺に差し出した。

そしてその後、それとは別に一つの茶封筒を鞆から取り出す。

「……」ほん、それでは改めまして『熾天狩り』様。此度は貴方を、政府直属のBクラス

駆逐官として雇用する事が決定致しましたので、ご報告に参らせて頂きました」

「……はいっ？」

してんがり……？ 支店借り？ なんだその惨めなハンドルネームは。まさか俺の

事か？

思わずポカンとしてしていると、女は『駆逐官制度をご存じありませんか？』と言ってくる。
る。

そんなの聞いた事ない。

「あの……そもそも、どうやってこの家の場所を……？」

「あなたは先日、他の駆逐官から武装を奪いましたね？ 恐らくナイフでしょうか。

あの系列の武器を作るのはかなり高価でしてね……コスト面と盗まれた際の安全面のため、GPSを内臓させているんです」

俺は今もタンスの上に置かれたままな、あのナイフを頭に思い浮かべた。

ステイルシアに魔改造されたせいで気軽に使えなくなつたアレだ。

……あれを持ち帰つたせいで家の場所がバレたのか。

じゃあ、ステイルシアが見つつけられたワケじゃないんだな。それに少し安堵する。

と、同時にもう一つの疑問が頭を支配する。『駆逐官』ってなんだ。

「駆逐官制度というのは、未知エネルギー結晶体……通称“アカダマ”を取り込んだ民間人を戦力として雇用する制度です」

俺の疑問が雰囲気で伝わつたのか、アラキはそう言つた。

……前にテレビでやってたやつか。それで俺に協力を求めに来たと。

「基本的には、その戦闘能力に応じてFからAランクまで階級が割り振られます。本来は一律Fスタートなのですが……先日の凄まじい討伐実績を鑑みれば、Bランクスタートが妥当だと判断されました。」

「……見てたんですか？」

「いえ、証言された分だけです。 リザードマン 蜷魚人を二体、 グレートアンデッド 上位腐乱体を一体……そして、 セラフィイス 熾天使四

体と同時に交戦し、そのうち一体を討伐。最後のは貴方のご友人が嬉しそうに教えてくれましたよ」

なんかエリミネーターが倒したのも俺の功績になってるな……というか、四体という言葉い方からしてあの天使たちはセラフィスっていうのか。

……それは今となってはどうでもいいが。

今の問題は『駆逐官』とやらに俺が任命されそうな事だ。

なんでそんな、命がけかつ福利厚生の薄っぺらそうな職業に就かなきゃならないんだ。

渡された封筒を開けてみると、中には膨大な量の書類と【Bランク駆逐官証明書】と記された、俺の名前付きの手帳。

そして……一台の携帯端末が入っていた。

「……これは？」

「怪物の目撃情報を管理し、駆逐官へ位置情報と危険度を伝える端末です」

電源ボタンらしき場所を押してみると、様々なモンスターの外見や能力などの説明がズラッと表示された。

『リザードマン』脅威グレードD+』だの、『上級腐乱体』脅威グレードB-』だの。

他にも300種類近くの情報がある……ってあれ、唯一Aランクの欄にいる『排殺騎

士』って奴の外見がエリミネーターそっくりだ。

もしかしてモンスターとして登録されちゃってるのか？

……それはまあ仕方がないとして。

これは相当便利だな。かなり欲しいが、これが欲しけりやウチで働けとか言われたら困るから我慢するしかない。

俺はそんな傭兵みたいな事して生きてたくないんだ。どうせ報酬も二束三文だろう。あのナイフを持つてた奴もチャラそうだったし。

俺は頑張つて良い大学に合格して、一流の会社に入つて、高収入エリート人生を送りたー

「ちなみに、Bランク駆逐官の手取りは月200万です」

「えっ」

「怪物どもを倒して政府に”アカダマ”を納めてくだされば、更に上乘せされます」

「あつ」

「既に一億近く稼いでいる方もいらっしやります」

「あばつ」

予想外の高給取りに、横からガツンと殴られたみたいな感覚になる。

い、一億……？ まだモンスタアの襲来から一月も経ってないぞ……？

それだけ金があればどれだけ贅沢が出来るだろうか。

きつとラノベを棚ごと買ったり、回らない寿司屋で『お任せ』を注文したりも出来る。綺麗な熟女も寄ってくるかもしれない。

まずい、妄想が止まらない。勝手に口がニマニマしてしまう。

なんか頭がぐわんぐわんしてきた。

「ど、どうされました？」

「……ります」

「え？」

「やります駆逐官！ やらせてください！」

「や、やるんですか？」

「やりますやります！」

肩を掴み、恐らく血走っているであろう目でアラキを見つめる。

手元の書類に乱雑なサインをした。

アラキは少し怯えた様子で『で、では、政府に連絡しておきます。今後は召集することもあると思いますので、その時はよろしくお願いします』と言って足早に去っていく。カチャン、と閉じたドアを見つめたまま、俺は自分の顔が青ざめていくのを感じた。

欲望に眩んだ思考が、サーッと冷えていく。
や、やっちまった……

十四話『飽和せし者』

「はえー……ハイカラで良いねえこの機械。私の世界のギルドにもこれがあれば良かったのに」

『世界中の技術者によって共同開発された、現代科学の結晶』……だつてさ」

政府の奴らが帰つた後。

俺は例のモンスター凶鑑の使い心地を確かめていた。

かなり多機能で、モンスターの位置情報や弱点情報などは別に、駆逐官の希望に応じて武器を開発・支給する『武装発注システム』

更には駆逐官のモチベーションアップを目的とした『ランキングシステム』なんてのも搭載されている。

ランキングで一定以上に食い込むとボーナスも出るらしい。

ランキングか……俺も載つてたりするのかな。

ちよつと緊張しながらページを開き、下の方へスクロールする。

……あ、【総合】の全国七位に『熾天狩り』セラフィス・ハントつてのが居る。これが多分俺だろう。つい

さつき更新されたらしい。

熾天狩りつてなんかカッコいいな。支店借りじゃなくて良かった。

どうやら単純な討伐数ではなくて、モンスターごとに決まっている討伐ポイント的な
のがあるらしい。そりやそうか。スライム十体倒すよりゴブリン一匹倒す方が遥かに
難しいもんな。

ちなみに世界ランクの方に切り替えてみると400位ぐらいだった。

世界にはバケモノみたいなのがゴロゴロいるんだな……

「むう……どうして君がこんなド底辺なのさ。私がナンバーワンにしてあげるよ！」

「不人気ホストにハマった女みたいな事言うな。……というか下に四ヶタ以上いるから
底辺でもないぞ」

「ふっ、知ってるかい……？　どの世界も、頂点以外は全て路傍の石ころと変わんないん
だぜ……」

「うるさいぞニートエルフ」

「あうっ」

ウインクしながらドヤ顔で言ったステイルシアの頭を、丸めたチラシで軽く叩いた。

「うう……ねえ気軽に叩かないでよ！　私に一撃食らわせるのがどれだけ重たい事か知
らないでしょ!？」　そのために幾つの国家が更地になると思ってるのさ!？」

「いやおつかねえなお前」

こいつ前の世界でどんだけ大暴れしてたんだよ……そんなんだから異世界になって飛ばされたんじゃないのか？

ほぼ流刑みたいなもんじゃねえか。

「なんでそうなったんだよ」

「……分かんないよ。覚えてないんだ。思い出せないんだ」

「どういう事だよ……」

犬の尻尾みたいに、耳をしなつと垂れさせてステイルシアは言った。

……本人が触れて欲しくなさそうだし、そこはまあ良いか。

一通り見終わつたモンスター凶鑑を机に置き、俺は立ち上がった。

今日はこれから何の予定も無い。街に行つてエリミネーターにスマホを返して貰おう。

あれが無いと不便だし……なにより、祖母との写真がいっぱい入ってる。

「俺これから街に行くけど……」

「私も行くよ!!!」

「食い気味に来るよなお前。じゃあ例の……『魔法防壁』？ っての張つといてくれ」

『わかつたよ!』と元気良く返事して走っていくステイルシアを尻目に、俺はタンスの上から例のナイフを手を取った。あのチート性能のヤツ。

こんな世界だ。外に行く時は必ず万全を期した方が良い。ナイフの刃に手拭いを巻き、それを鞘代わりにして腰に装備しようとする。

「いてっ……」

と、指先に走る鋭い痛み。

顔をしかめながら確認すると、ナイフの先端部分の手拭いがめくられて、血の付着した銀刃が露出していた。

指を切ったのか……幸先が悪いな。一応絆創膏でも張っていかか。

そう思いながら、指先を確認し――

「……へっ?」

――そこにあつたのは、予想外の光景。

血が出過ぎだとか、逆に全く出ていないとか、そういう問題じゃない。

傷口から顔を出していたのは、血液ではなく血のように赤い結晶だった。

それが、雨後の筍みたいに指からメキメキと成長している。

「はっ……はあああつ?!」

「どうしたの!?! また私が喧嘩売ったツイッターのフェミニストから殺害予告が来たの!?!」

「ちげえよ馬鹿! あとふざけんな!」

『じゃあなにさ……』と眩きながら、ステイルシアが俺の指を覗き込んでくる。

そして、発生する結晶体を見て絶句した。

大きな目を見開き、唇を何度か開閉させる。

「……」飽和”、してる」

「ほうわ……？」

ほうわ……飽和か。確かエリミネーターもそんな事を言ってた気がする。

どういう事だ？

「飽和、ってなんだよ」

「ううん……分かりやすく説明するとね？ ソシヤゲで言う『限界突破』だよ」

「ピンとこねえなおい……」

仮にもエルフが物の例えにソシヤゲを持ってこないで欲しい。イメージが崩れる。

それに……限界突破？ まるで意味が分からない。

「例えば、10グラムしか塩が溶けない水に100グラムの塩を入れたらどうなる？」

「そりや残りの90グラムは溶けずにそのまま結晶化して……あ」

「そう。それが”飽和”。血中で極限まで濃縮された魔力が、空気に触れる事で魔核状

態に戻る現象だよ」

要するに……魔核を取り込み過ぎて、俺の血液が魔核と同じような性質になってるっ

て事か。

あれ、それって危ないんじゃないよ。俺の体を突き破ってモンスターが発生したりしないよな……………?

「……………それ、大丈夫なのか？ 血からモンスターが生まれたり」

「問題ないよ。魔核というのは謂わば『可能性の卵』だからね。単なるモンスター発生装置ってワケじゃない。君の血に染まった時点で支配権は君にあるよ」

「へー……………？」

「そして……………その可能性に、ある程度の『指向性』を持たせる事も可能だ」

そう呟きながら、ステイルシアはその小さな掌で俺の手首を掴んだ。

特に害が無いなら構わないけど……………魔核が、可能性の卵？

しかもそれに指向性を持たせるってどういう事だ。

「目をつむって……………そうだね、『鋭く尖った槍の穂先』を思い描いてごらん」

言われるがままに目を閉じ、まぶた瞼の裏で鋭い槍の穂先のイメージを試してみる。

鈍い鉄色で、易々と命を抉り取る鋼の鋭端——

「……………つ、初めてでこれか。やっぱり凄いよ君は……………生まれたのが私の世界なら、武人として名を馳せていたかもしれない」

「こや、どづうごう……………っ!？」

ステイルシアの言葉を不思議に思いながら目を開けて……思わず、驚きに喉からひゅつと悲鳴みたいな音が出た。

「血が、槍に変わった……？」

「魔核がモンスターの形を取るのと同じ原理だ。魔力の主である君が貌カタチを与えてやれば、それは如何なる物にも変貌する。……初めからここまでの精度で出来るのは、ちよつと予想外だったけど」

俺の指先から生じていたのは先程までの血晶けっしょうではなく——脳裏に描いていたモノと同じ形状の、赤みがかかった鋼の槍。

細部は少し歪んだりしているが、殆ど想像した通りだ。

……イメージしただけで、ゼロから武器を作ったりできるのか。

作れる物の強度にもよるが……これはかなり使いそうさ。

袖に武器を仕込むみたいな感じで、不意討ちとかにも有用そう。

「私の世界では、魔力が飽和した人間を”飽成ほうせい”と呼んでいたよ。まさか、君がこんなに速くそうなるなんて思わなかったけどね」

「飽和したら、もう魔核を取り込まない方が良いのか？」

「いいや、飽成者が更に魔核を取り込むと、肉体の頑強さに加えて血液で再現できる物質

のサイズと強度が上がるんだ……強くなりたいたら、今まで以上に積極的に取り込んだ方が良い」

なるほど……魔核が血に溶ける上限を越える。そういう意味での”限界突破”か。

「強い飽成者は、全力の私と二分ぐらいならタメ張れるぐらい強力だったよ。気化させた血液を広範囲に散布させて巨大な要塞を具現化してきたりしてね……魔法を使えない中じゃあれが最強だったんじゃないかな」

「マジで大怪物バトルだよな、お前の世界……」

試しに、指から発生した槍が気化するイメージを試してみる。すると槍は、赤いミスト状に霧散して空気に溶けた。指の傷は塞がっている。

「……よし、行くか」

ナイフとモンスター図鑑……あと、念のために「Bランク駆逐官『熾天狩り』」の手帳をリュックに入れて背負った。

「うん、行こっか……あ、私『世界樹のえだ』持つてくるね」

「前まで『ひのきのぼう』だったろそれ」

「細かい事はいいんだよー」



「あ、街が見えてきたよ……って武器を持った人がたくさん居るね」

「フード被つとけよ」

舗装された道を何時間か歩き、やっと街が見えてきた。

転移魔法を使えないのかと聞いてみたが『あの街の座標は忘れちゃった』らしい。

こいつの脳にはもう少し頑張つて欲しいと思つた。

街の入り口には、ステイルシアの言うとおり武装した人間が多く立っている。

恐らく”駆逐官”だろう。

血走つた目で地面に散らばる魔核を集める者もいれば、五人ぐらいで一体のリザード

マンと交戦してる奴らも居る。

金のためにみんな必死だ。いや絶対に俺が言えた事じゃないけど。

「おい、そのベルトのナイフ……お前、”駆逐官”だな？　ここは俺たちの狩り場だ。別の場所に行け」

「はいっ……っ？」

駆逐官たちの横を抜けて通ろうとすると、後ろから誰かに肩を叩かれた。

振り向くと、三人の男が俺を睨んでいる。

カラフルな髪にタンクトップ……明らかにヤンキーと言うか、チンピラっぽい。クソ

怖い。

「いやあの、通りたいだけなんで……」

「そう言う奴に限って狩り場を荒らして行くんだ……お前みたいな学生と違って俺たちは生活がかかってんだよ。おら、どっか行け」

めんどくさいなこいつら……ネトゲでレベル上げの場所を争う奴らみたいだ。

ステイルシアはそいつらを見て『どこの世界でも落伍者の考える事は同じなんだねえ……』と遠い目で呟いている。

いや、真面目にどうするかー

「■■■■■■■■■■！」

「お、おいつ！ すまんそっちに行っちゃー！」

「ひっ、わああああっ!?!」

ーその時、三人組の背後に迫るリザードマン。さっきの個体だ。ところどころ鱗が傷付き手負いに見える。

俺は咄嗟に、道の脇に落ちていた鉄骨の破片を手にとった。

「……術式装填・アイオライト」

「■■■■■■■■■■!?!」

鉄骨に青い葉脈が走る。俺はその切っ先をリザードマンに向けた。

そして、今にも三人を食い殺しそうなそいつ目掛けて水のレーザービームを発射する。

高水圧によって胴と首を切り離されたりザードマンは、喫驚きつきょうに目を見開いたまま灰に変わった。

魔力の伝導に耐えられなかったのか、鉄骨はすぐにボロボロと崩れ落ちる。

質の悪い金属ではあまり威力が出ないのかもしれない。

「え、あ……」

「大丈夫ですか」

「あ、あの、すいません、あなたの、ランクって……？」

恐る恐る、といった様子で聞いてきた男に、俺は少しドヤ顔で駆逐官手帳を見せつけた。

【Bランク】という表記を見た瞬間に男の顔が青ざめるのが分かる。

なんか水戸黄門みたいで気分が良いな。

「つべー、まじつべー……！！ C以上とか初めて見た……！！」

「あの、通つても良いですか……？」

「ど、どうぞどうぞ！ ごめんなさい！」

三人組はビビりながら道を開けてくれた。

なんだこの強キャラムーブ。楽し過ぎるだろ。権力に溺れそうだけ。

これからは、面倒な事が起こる度にこれをチラつかせても良いかも知れない。

「なんか、やり口がなろう系主人公みたいだね」

「うるさいぞ」

「あうっ……」

十五話『邂逅する異郷人』

「ええと……確かエリミネーターの住んでる路地裏は……」

駆逐官たちの狩り場を抜けて数分、俺とステイルシアは荒廃した街を二人で歩いていった。

モンスターはまだ多く闊歩かっほしている。しかし前ほどの数も絶望感も無かった。

駆逐官制度によって対モンスター戦力が潤沢になったお陰だろう。

それにこの街にはエリミネーターが居る。ステイルシアの言っていた『エルフの近くには異界の存在が来やすい』というのが良い方向に働いた。

テレビによれば、現在も厳しい状況が続いている他の人口密集地に比べて異様なまでにモンスターが少ないそうだ。

これで少ないとか他の都市がどれだけ地獄なのか想像したくないな……

「私と同じ世界から来た騎士に会いに行くんだっけ？ あの教科書みたいな魔術使う人」

「ああ、俺を助けてくれた人だから失礼な事とか言うなよ」

『ふーん……』と言いなながら何故かむすつとするステイルシアを尻目に歩き続け、俺はエ

リミネーターの路地裏の近くまでたどり着いた。

モンスターに破壊されて街並みはかなり変化しているが、この一帯は比較的無事だった。エリミネーターが拠点にしているからだろう。

俺は、狭い路地に足を踏み入れようとしてー

「お、坊主か。スマートフォンを取りに来たんだな。オレも友人もポケベル派だから邪魔で困ってたんだ」

「え……？」

背後から聞こえた声に振り向く。

そこに立っていたのは、灰のような色合いの髪を狼の尾みたいに後ろで束ねた長身の青年。180はあるだろう。

薄汚れた作業服に身を包み、空き缶がたくさん入ったビニール袋を持っている。

ボロい格好だが、本人の精悍な顔立ちのせいでそれも一種の野性的な魅力に繋がっていた。

エリミネーター、か……？

予想外に若くて驚いている。もっと禿げ散らかしたおっさんとかかと思ってた。

「よ………鎧は？」

「今は仕事だからな！」

「ええ……?」

エリミネーターはほくほく顔で空き缶の詰まったビニール袋を見せ付けてくる。
仕事って……ああ、空き缶拾いか。ホームレスはそういう事で収入を得ていると何かの番組で聞いた事がある。

『いや強いんだからモンスター狩れよ』というツツコミは何だか言ったら負けな気がして言えなかった。

と言うか……戸籍が無いから駆逐官になれないのかもしれない。

俺がそんな思考を巡らせていると、スタイルシアが横から肩を揺すってきた。

エリミネーターを指差して目をきらつきらせさせている。

「ねえ凄いや！ 本物のホームレスだよ！ この世界にも実在するんだね!」

「お前はお前でデリカシー無いな……」

「おい坊主、なんだこの失礼極まり無いちんちくりんは」

「私はれつきとした大人の女性だよ！」

「うちの千歳児がすみません……いやほんとに」

『千歳児……?』とエリミネーターは不思議そうにスタイルシアに詰め寄り、腰を曲げてフードの中にある顔を覗き込んだ。

そして、驚愕に表情を歪める。

この世界でエルフを見るとは思わなかったんだろう。

一体どんな反応をするのかー

”精霊王”……!?”

ーエリミネーターが、掠れた声でそう呟いた。

切れ長の目が大きく見開かれ、灰の瞳孔が小さくなる。

精霊王……? なんだその芳ばしいワードは。まさかステイルシアの事か?

エリミネーターから発せられるただならぬ雰囲気。

しかし、当の本人はキョトンとして首をかしげている。

「せいいいおうってなにさっ!」

「完全に奴と瓜二つだ……いやしかし、まるで雰囲気が違う……アレはここまで人間に傾倒していない……」

「ねえ!」

顔の半分を手で覆い隠し、エリミネーターはぶつぶつと独り言を呟く。

「何が、どうなって……」

「はつきり言いなよホームレス!」

「別人か……? だが奴には血族が居なかったはずだ……」

「ポニーテールおじさん!」

「エリミネーターさんが折角シリアスやろうとしてるんだから静かにしとけお前！」

あまりに話の腰を折り続けるステイルシアを見かねて、俺はそう言った。

エリミネーターが明らかに重要そうな話してるのに雰囲気ブチ壊した。こういうのってしつかり聞いておかないとまずいヤツだろ。

昔のRPGとかだと会話スキップしたせいで先のイベントが詰むみたいなアレ。

「……いや、問題ない。オレの勘違いだ。性格があまりに違いすぎる。奴はこんなに幼稚じゃない」

そう呟き、エリミネーターはひらひら手を振りながら背を向けて路地裏へ入っていった。

『勝ったよ！』みたいな誇らしげな顔でこちらを見てくるステイルシアを睨む。

……って、ステイルシアがエルフな事には触れないのか？ 自分の世界と同じ存在を見つけたら、普通もつと反応すると思うが。

「あの、精霊王とかは良く分かんないんですけど、こいつ多分エリミネーターさんと同じ世界から……」

「そうだな」

「び、びつくりしたりしないんですか？」

「……？ 何を勘違いしてるのか知らないが、この世界でも特段とくだん珍しい存在ではないぞ。

異界の住人というのは」

「え……？」

なんとなしに放たれたエリミネーターの言葉に、俺は衝撃を感じると同時に困惑する。

異世界の住人がそこまで珍しくない……？ ステイルシアみたいなのが、いっぱい居るって事か？

「オレの世界では昔から、手に負えない咎人とがびとや処理できない呪いの品などを異界へ捨てるというのがありふれた手段としてあったからな。通算すれば軽く四ケタは居るんじゃないか？」

異世界の人間が、四桁……つまり最低でも千人以上はいるって事か。気が遠くなる。生まれた時から日常的に魔核を取り込める環境にある異世界人は、恐らく全員が地球人とは隔絶した力を持つてるはずだ。

その中でも『手に負えない』と言われるバケモノたちがそんなに潜伏してるなんて。……世界から追放されるような罪人である以上、全員が地球のためにモンスターと戦ってくれるわけでもないだろうし。

一応ステイルシアに目伏せして確認すると、気まずそうな顔で『そ、そうだったね……！ いや忘れてないよ!』と訴えてきた。

……帰ったら、婆ちゃんが使ってた物忘れトレーニングの本探すか。

「着いたぞ。そこに座って待っている」

エリミネーターに言われるまま、俺は地面に敷かれたダンボールの上に座った。

横には鎧や大剣、その他いくつかの武装が置かれている。

やっぱりカッコいいな……鎧に大剣とかいうロマン装備。男心がくすぐられる。

「おーうい、エリさん、酒持ってきたぞー」

「おお……ヤスさんか」

ガチャガチャと箱を漁っているエリミネーターを尻目に武器を見てみると、背後から気の抜けた男の声が聞こえてきた。

声の方を見れば、そこに立っていたのは壮年の男。

髭ひげで毛むくじやらの顔に野球帽を被り、ボロボロのジャンパーを着ている。

右手に握られた一升瓶の中には酒らしき透明な液体が揺れていた。

エリミネーターの知り合いか……？ 前に言っていた『ホームレス仲間』かもしれない。

「紹介しよう。この人はヤスさん。この大都会をサバイバルで十年以上生き抜く猛者であり、オレの恩人でもある」

「いや、普通にホームレス……」

「サバイバルマスターと呼べ」

ずいつ、と有無を言わさぬ庄迫感に恐怖を覚えてコクコク頷く。

『ヤスさん』はその時初めて俺達の存在に気が付いたのか、驚いた顔になる。

「おおう、珍しいお客だなあ……エリさんの知り合いか？」

「もじやもじやで熊みたいなおじさんだね」

「別嬪べっぴんな嬢ちゃんも居るなあ……」

「ダンディーでカッコいいおじ様だね！」

「手のひらくるくるとねえかお前」

その後、俺はエリミネーターからスマホを受け取ってリュックにしまい込んだ。

よし……目的も果たしたし、家に帰るかーと、路地裏の外へ足を向けかけて、立ち止まる。

とある事を思い付いたからだ。折角エリミネーターの所に来たんだから、”術式装填”を教えて貰いたい。

これから来るであろう上位のモンスターに対抗するためには、『アイオライト』以外も使えた方が良くからだ。

「あの、エリミネーターさん。お願いがあるんですけど」

「なんだ、言ってみろ」

「俺にあなたの”術式装填”を教えて欲しいんです」

「ほお……構わんが、一朝一夕で扱えるようになる技でもないぞ。まあやってみろ。筋が良ければ弟子にしてやらん事も無い」

俺の言葉にエリミネーターは数秒の間考える素振りを見せてから、脇に置いてあつた銀色の短い槍を投げ渡して来た。

「つ、と」

咄嗟にキャッチし、困惑しながら見返すと『それに魔力を流してみろ』と言われる。

「……術式装填」

目をつむり、槍へ架空の血管を伸ばすイメージをする。

魔力の伝導に槍がキチキチと震え、それを見ていたエリミネーターが息を呑んだ。

「アイオライト……!」

空色の光筋が葉脈の如く銀槍を走り、槍の震えが止まる。

深く息を吐きながらエリミネーターへ目をやれば、無言で槍に触れてきた。

「誰から習った? オレの技にそっくりだが」

「いや、前あなたが使ってたのを真似して……」

俺がそう言うのとエリミネーターは、驚きと悲しみと怒りをごちゃ混ぜにしたような変

な表情になった後に、がっくり肩を落とした。

「……見よう見まねで使えるような技術では無いんだがな。どこの世界にも、化け物染みた才能人は居るといふ事か」

複雑そうな表情で灰色の髪を掻き、エリミネーターは言う。

前にステイルシアも言っていた通り、俺にはかなり魔術の才能があるらしい。運動も勉強も人並みなのに。

モンスターが来なければ一生わからなかった才能だ……いや、死ぬまで分からない方が良かったが。

「はあ……やっつてられんな。オレがここまで何年かかっただと思つて……まあ約束は約束だ。教えてやる」

「エリさーん、酒は飲まんのか?」

「一緒に飲みたいから待つててくれヤスさん。……じゃあ、すぐ使えるのを。パパと見せてやるから適当に真似しろ。出来るんだろオレと違つて才能あるんだから……」

ちよつぴりふてくされた感じで、エリミネーターは武器に魔力を流し始めた。

色とりどりの葉脈が鉄を駆け巡り煌めく。

俺は、それに焦つてメモ帳を取り出した。

「そんなの使えたって上級モンスターには手も足も出ないのに良くやるよね……君も、あいつも」

「いざっていう時、手札が多いに越した事は無いだろ。目眩ましぐらいにはなる」
夕焼けに染まった田舎道、街から帰ってきた俺はメモとにらめっこしながら家路を歩いていた。

……今日エリミネーターに見せてもらった”術式装填”は三種類。

暴風を巻き起こす『プレーナイト』

地面を隆起させる『オーロベルデイ』

紫煙を撒き散らし視界を奪う『ラピスラズリ』だ

しかし三つとも、流石にまだ実践では使えそうにない。

家に帰ったら練習しなければ。

「はあー！ やつと帰ってきたね！ 歩きすぎて足がパンパンだよ……」

「疲れたからっていつもみたいソファ独占すんなよ」

「ええ!! エルフは運動した後そふあに寝っ転がりながらテレビを見てコーラとポテチを摂取しなきゃ死んじゃう生き物なんだよ!!」

「どんだけピーキーな生態してんだお前」

十六話『終焉の序曲』

「……朝、か」

街に行つた次の日。

レースのカーテンから差し込む朝日で、俺は目を覚ました

無意識に開いていた^{まぶた}瞼をくしくしと擦り体を起こす。壁時計を見ると八時だった。

「よっ……とっ？」

ベッドに手を突いて立ち上がろうとして一手にひんやりした、柔らかいすべすべの物体が触れるのを感じる。

不思議に思いながらそちらを見ると、そこには俺の布団に入り込んで規則的な寝息を立てるステイルシアの姿があつた。

……また俺のベッドに入つてきたのか。最近は良くある事だ。

何故こんな事をするのかと問い詰めたら、バツの悪そうな顔で『君に出来るだけ長く私を見ていて欲しいから』なんて意味不明な事を^{のたま}宣つていたが。

「人懐っこい犬かつての……おい、起きろ」

「ん、ゆう……？」

歯切れの悪い語調でにへらと笑うステイルシアを視界の端で捉えたまま、俺はキッチンへと歩いていく。

後ろからぺたぺたと、フローリングの床を裸足が踏みしめる音が着いてくるのが聞こえた。

「……術式装填、”カーネリアン”」

包丁を握り、刃に深紅の葉脈を走らせて消毒する。前から練習していた炎属性の術式装填、”カーネリアン”だ。

蛇口を捻りそれに水を当てると、熱した鉄を急激に冷やした時特有の『ジュウウウウー』という音が発せられる。

「よし」

昨日みっちり練習したお陰で、前まで使えなかった”カーネリアン”は安定して発動させられるようになった。流石に水の”アイオライト”よりは出力が劣るけど。

「……”ブレーナイト”」

”カーネリアン”を解除してから、俺は小さくそう呟いた。

赤色に代わって今度は緑色の管が走り始める——昨日教わった、風属性の術式装填だ。

俺を中心にしてキッチンをそよ風が吹き荒ぶ。

それが少しずつ勢いを増していき、ちよつとした暴風と呼べるぐらいにまでなった時——俺は数メートル先にあるキッチンペーパーを見据えて、虚空を横に薙ぐなように包丁をなぞらえた。

スパッツ、と。

包丁に掠つてさえないキッチンペーパーが風の刃によつて切断された。

そして吹き抜ける風の方向を指先で操作して、キッチンペーパーの切れ端を俺の手元まで運ぶ。

風に乗つてふわりとやってくる紙をキャッチし、俺は満足気に頷いた。

風魔術を利用した飛ぶ斬撃——自然現象で言う、かまいたちを意図的に引き起こす技だ。

本来は室内で気軽に使うようなモンじゃないけど、こういうのは言語とかと同じで非常に組み込んだ方が上達が速い。

だからこうして普通に料理をする時もあえて術式装填を使うようにしてる。目指すはハリー・ポッターの世界だ。

「曲芸師みたいな事するねえ……魔力操作の精密さだけなら、もう私よりも上なんじゃないかな」

「そんなんで良いのか？ 精霊王さま」

「その名前出すのやめてくれないかな……っ!?　なんか、聞き覚えも無いのに胸がゾワゾワするんだ……」

俺が冗談めかして言うと、ステイルシアはげんなりした顔でそう返してきた。

……なんか本気で嫌そうだから、このネタでいじるのはやめとくか。

「あ、そうだ。朝は何食べたい?」

「君が美味しいと思うものが食べてみたいな……きつとそれは今日も、私の覚えてる食べ物の中で一番おいしいものだから」

「なんだよそれ……」



「昨日、前回と前々回の”黒いオーロラ”爆心地である成層圏から、異常な量のエネルギーが観測されました。怪物たちによる被害は未だ各地で続いています。専門家からは第三波が来るのではないかとの推測もー」

「……きつと、もうすぐ上位モンスターがやってくるよ。既に少し時空が揺らいでる」

ソファに座ってテレビを見ながら、ステイルシアは静かにそう言った。

……いよいよ、か。覚悟はしていたが、いざ来るとなると恐ろしいな。

あのステイルシアをして『全ては狩れない』と言わしめる埒外らちがいの怪物。戦うなんて考えない方が良さだろう。

「お前の世界では、上位モンスターにはどうやって対抗してたんだ？」

「うーん……少なくとも、ちよつと前までは災害と同じような超越者として扱われてたよ。意思を持ったハリケーンや津波と同じ、誰も戦おうなんて考えなかった……けど」

綺麗な顔立ちを歪めて、ステイルシアは言葉が続ける。

「……百年ぐらい前に、私の世界に”勇者”が現れたんだ。それから先の事は良く覚えてない」

「勇者……？」

「本当はもつともつと複雑な名称があるんだけどね……この世界の言葉に当てはめるなら間違いなく、”人類を救う勇者”だよ」

ステイルシアはパツと手を広げて、掌てのひらの上に小さな氷の人形を作った。直剣と杖を携なぐさえた戦士の氷象。

「正義の化身みたいな男だね。恐ろしく強くて、おぞましく正しい。奴と奴の間は、僅か七日で地表から上位も含めてモンスターを一掃した」

忌々しそうな顔で、ステイルシアは氷像を握り潰した。

煌めく氷の破片がばらばらと床に落ちて霧散する。

「……」
「モンスター」は、私の世界では星に組み込まれた普遍的なシステムの一つだった。ただ人類に不都合というだけで……それを他の世界に流しなしたら、不具合が

起こるに決まってる」

確かに……地球で最も人間を殺している生き物は『蚊』だが、それを絶滅させてしまえば川が濁ってそこに住む生物も死滅すると聞いた事がある。

一見有害な存在でも、全体的に見れば重大な自浄作用であったりするのだ。

「だから恐らく、私はそれを止めようとして”勇者”に打倒されたんだろう。自分達を苦しめる怪物を守ろうとする私は……奴らの目にはきつと、”魔王”にでも見えたんじゃないかな」

湯飲みに入ったお茶をすすり、目を細めながらステイルシアが言った。

……それで、世界から追放なんてされたのか。

エリミネーターは手に負えない罪人と言っていたが、全ての者がそういうわけではないらしい。

「魔王ねえ……どこの世界に、寝そべってポテチ食べながらツイッター荒らしてる魔王がいるんだよ」

「ついついで遊ぶと履歴が残るから良いんだよね……それと言葉を返すようだけど、同居してる美少女に手を出さずに夜な夜な熟女モノのAVでお楽しみの君もかなりアレだと思うよ」

「自分で自分を美少女とか言って恥ずかしくないのお前」

「うう、恥ずかしいよお……」

「俺はお前が怖いよ」

それから、ステイルシアはクッションに顔をうずめて『二度寝しよつかなあ……』と欠伸混じりに呟いた。

くふあああ……と猫みたいに体を伸ばし、目を閉じて――

「……あ」

「どうした？」

「来る……」

――弾かれたみたいに、ソファから勢い良く立ち上がった。

……『来る』？ 何が？

俺は、その疑問をステイルシアにぶつけようとして――

「……なんだ、あれ」

ひらめくカーテンの隙間から見えた空には、ドス黒い波紋が広がっていた。

そこには、先程までの青々とした夏空の姿は無く。

水面みなもへ大量のインクを注いだような――見ているだけで本能的な恐怖を覚える、ある種の壮大さを感じる光景だった。

『緊急警報、緊急警報』

けたましいサイレンと共に、テレビとスマホがほぼ同時に鳴り響いた。
咄嗟にテレビの画面に振り向く。

「……は、あ？」

——そして、そこに映っていた情報を見て。

俺の口から、勝手に呆けた声が漏れた。

『み、未知生命体の攻撃により……っ！ イギリス領、ブリテン島が、消滅、しましたっ……!?! ほ、他にも、幾つもの国家が苛烈な攻撃を——』

——なんだこれ、なんだこれ、なんだこれ。

現実を受け入れられない。頭がぐわんぐわんする。

無数の疑問符に埋め尽くされた脳味噌が、オーバーヒートしそうになる。

「っ……
プリズム・バリア
■■■■ー！」

「——!?!」

いつになく焦った様子の子のステイルシアが、家の天井——いや、その遙か先……恐らくは“天”に向けて右手を突き出しながらそうさげんだ。

「▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲
!!!!!!」

「ぐっ、う……!?!」

外からガラスの割れるような音が聞こえると共に、形容しがたいナニカの咆哮が聞こ

えてきた。

窓から顔を出してその発生源を探る。

そして――ソレは、すぐに見つけられた。

サイズは、空を覆う程。縦にも横にも軽く一キロはあるだろう。

さっきの黒い波紋に代わって太陽を隠していたのは、”巨大なピエロの生首”だった。

白い皮膚に施された左右で表情の違うメイクはそうとしか表現できない。

真っ赤な唇から露出する鋭い牙で、自分の落下を阻止する半透明の壁を食い破ろうと
している。

「デュアルキャスト
■■■■……!」

「ゴア・ライトニング
■■■■!」

透明な防壁とピエロを挟み込むようにして、生首の頭上に巨大な黄色の魔方陣が発生した。

そこから発せられた直視不能なまでに眩い稲妻が、槍の如くピエロへ突き刺さる。

「!!!?!?
◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

反撃されるのは予想外だったのか、ピエロは驚愕に表情を歪めながらこちらを見てくる。

そして――自分へ掌を向けるステイルシアを見つけると、今度は心底怯えた様子に

なつて遠くの空へプカプカと逃げていった。

ーまるで隕石だ。規模がおかしいだろ。

「ふーっ……ふーっ……ふーっ……」

「やっ……べえ、な」

ぜえはあと肩で息をしながら、ステイルシアは無言でパチンと指を鳴らした。

すると家の周囲に、先程のバリアが何重にも展開される。

そして、けほけほ咳き込みながら床に膝を着いた。

「っ、大丈夫か!？」

「……だいじよぶ、だよ。ちよつぴり、疲れただけだから」

急いでコップに水を汲み、ステイルシアの唇に押し当てる。

コクコクと震える細い首筋を確認しながら、少し安心してー一机の上から聞こえる、

恐ろしくうるさいサイレンに耳をつんざかれた

「……モンスター凶鑑が鳴ってる」

音の元凶は、政府から支給された例の端末だった。

嫌な予感がしながらも、恐る恐る手に取って。

そして案の定、後悔した。

【魯威ランクA 『詠う死神』】

【魯威ランクAー 『ゼノビア』】

【魯威ランクS 『爛れ古龍』】

【魯威ランクS 『戦闘衛星』】

【魯威ランクA 『道化の星』】

【魯威ランクA+ 『最果ての古老』】

【魯威ランクA 『捻れ騎士』】

【魯威ランクS+ 『ドリーマー』】

【魯威ランクS 『モードレット』】 ……………

『指定された位置情報の近くに居る駆逐官は、急いで向かってください』

『そんな無機質な機械音声と共に、プツリと信号は止んだ。』

しかし、それからすぐにまた別の番号から通信が来る。今度は通話だ。

「……………はい」

「つ……………熾天狩り?!? 無事だったんですね?!? 良かった、すぐに来てください!

あなたの力が必要なんです!」

「……………(ぐ)めんなさい」

「ああっ!? ちょっと……! 一部の上位ランカー以外誰も来てくれないんです、このままでは——」

プツン。

端末の通話を切り、コトリと机に置いた。

数秒と経たずに再度着信が来るが、顔をしかめながら無視する。

……こんなの無理だ。あんな化け物の巣窟に行くなんて殆ど自殺行為だろう。

『この星の人類はもう駄目かもね』

ステイルシアの言葉に、やっと合点がいった気がした。

十七話 『魂はどこへ宿るか』

「ふう……あの程度の相手で息切れするなんて情けないよ。どうしてこんなに弱くなっちゃったんだろ。魔法も“ゴア”以上は忘れちゃったし……」

「あの程度、って。ほぼ隕石だっただろアレ……」

憂い顔でぐーっと体を伸ばしながら、ステイルシアは溜め息を吐いた。

様々な創作物で最強クラスの脅威として描かれる隕石だが、ステイルシアからすれば『あの程度』らしい。

「……上位モンスターが来てるつてのに、まだテレビ局は生中継してるんだね。まったくこの世界のマスコミは商魂たくましいよ……」

「たぶん地震とか津波とかと大差ない災害だと思ってるんだろ。それか、ヘリなら現場に行っても大丈夫だと思ってるか。どちらにせよこんな状況でも視聴率稼ぐために必死なんだよ」

ステイルシアの言うとおり、未だテレビには「現場の状況」とテロップが流れた街の惨状が映し出されている。

リポーターの切迫した声はプロペラの羽音に掻き消されてほぼ聞こえない。

しかし上空から俯瞰ふかんした視点ゆえに、街のそこらに異質なモンスターたちが散見できた……一目で分かる。上位モンスターだ。

先程の通知にあつた奴らとは明らかに違う種類のもいる。どうやら、上位モンスターは予想外に数が多いらしい。

俺はモンスター凶鑑を取り出し、食い入るようにテレビ画面を見つめる。

凶鑑の情報と擦り合わせ、特性を探るためだ。

最初に目についたのは、ステイルシアの使う物より遥かに大きい黒い球体……時空掘削魔術を七つ同時に操作して破壊の限りを尽くす、”鳥のようなカタチをしたなにか”……【次元梟ジゲンフクロウ】。ランクは暫定A。

それから、自分の周囲の宙に幾多の本を浮遊させる仮面をつけた子供。

そいつの半径十メートル圏内では人間が動物に変わったり電信柱が大木に変わるなどの異常現象が繰り返されている。

【既成現象改竄者ミライジユ・カットアップ】。ランクは……暫定Sー。

……俺の街にいる、パツと確認できる上位モンスターはこの二体だ。

はつきり言つて異常だ。単体で国を滅ぼせるクラスの化け物が、一つの街に最低でも二体。恐らくステイルシアに引き寄せられたのだろう。

「………いつらか。鳥の方はそうでもないけど、人型の方はちよつとまずいな」

「知ってるのか？」

「うん、奴の権能は『事実の改変』だ。星の法則を捻じ曲げ、世界の道理を書き変える……少し厄介な相手だよ」

事実の、改変……？　なんだよそれ。

わけが分からないが、それが恐ろしい能力な事だけは分かる。

「そ、そんなのが近くについて、大丈夫なのか……？」

「安心しなよ。私の全魔力の八割をバリアの形成に割いたからね。これならもし仮に”勇者”相手でも三分はもつよ」

「いまいちピンとこねえよ……」

とにかく……大丈夫って事か。

それに少しだけ安心しながら、俺は今一度テレビへ目線を移した。

ヘリカメラの視点は先程から移動しており、さっきとは別の場所を映している。

だがそこまで景色は変わっていない。地獄と絶望で一色だ――

「あ」

――画面の右端、ビルの瓦礫を踏み潰すみたいにソイツは鎮座していた。

灰色の鱗と巨大すぎる体躯のせいで、逆に気が付けなかった。

道路を埋め尽くすようにして立ち尽くすその”ドラゴン”に。

「……………いつは、今の私じゃちよつと厳しいかな」

頬に冷や汗を伝わせながら、ステイルシアがそう呟く。

急いで端末の画面をスワイプして、俺はすぐにそれを見つけた。

——【^た爛れ古龍】：ランクS。

凶鑑の写真と変わらぬ威圧感を画面越しにも放ってくるその龍は、長い鎌首をもたげて天を仰いだ。

そして、刀剣の如き牙の生え揃った口を開いたその時——

ジュツ、と。

——天から降り注いだ光の柱によつて頭部を貫かれた。

「っ……………!?!」

「……………あれは」

呻き声をあげながら地面に倒れ込む『爛れ古龍』の背に降り立つ小さい人影。

フード付きのゆったりした白いローブを羽織り、背中には大きな杖が装備されている。

ステイルシアは、目を見開いて画面の中のそのいつを見詰めていた。

「■■■■……………?」

まるでステイルシアの視線に気が付いたように、肩をビクツと跳ねさせてローブの人

影がこちらへ振り向いた。フードから覗くルビーみたく真つ赤な瞳が、確かにステイルシアを捉える。

そしてそれに呼応するみたいに、ステイルシアの瞳孔が細くなつていく。

この動作……記憶を読もうとしてるのか？

「いや、違う、私は、違うんだ。知らない、そんな記憶、見たくない……」

「おい、どうした!？」

赤目フードとステイルシアの視線が交差する。

するとステイルシアは過呼吸になり、頭を抱えながらしやがみこんだ。

「……何がなんだか分からない。」

だが、あの赤目ローブに原因があるのは明白だ。俺は無意味と知りながらもテレビを

睨み――

『みつけた』、と。

「……液晶の向こう。フードの中に隠れた唇が、確かにそう動いた。」

「つ……」

『せんせい……！ 先生、先生ッ！ そこにいらしたのですね！』

そこからは一瞬だった。

地面に立っていた赤目フードの姿が一瞬で掻き消えたかと思つたら、次の瞬間にはカ

メラの前にワープしてきていた。

ヘリの上、放送局のスタツフを押し退けて撮影機材の前に躍り出たソイツは、被つていたフードを引き剥がしてこちらへ呼び掛けてくる。

露出したのは癖のある赤毛に赤目の青年の顔。線が細くインテリっぽい顔付きだ。

「俺達に話しかけてるのか……？」

「あ、あ……やめて、しらないってばあ……私は、あんなのに、戻りたく」

『ああ！ やはり先生だ！ 間違いない……！ あの恩知らずの勇者に謀ゴキられていたのですね！ 私もなのです……ッ！ これから私たち二人でこちらの世界を呑み込み、必ずや奴へ復讐を……む？』

極限まで昂つた様子だった男は、少し困惑した表情で顎に手を当てた。

「おお……そうか。すっかり忘れていた。先生はご病気を患つていた……私とした事が、とんだ不敬だ。どうかお許しください」

ぶつぶつ小さな声で何かを唱えながら、男はずいつとカメラへ自分の顔を近付ける。

『さあ、私の瞳を覗いてください！ さすれば全てを思い出す筈です！ あなたの全盛を……！ ” 精霊王 ” スティルシアを取り戻してください！』

「つあ、つ……」

男の瞳が画面いっぱいに映し出され、スティルシアはそれを見た。

鏡写しのように、互いの深紅の瞳が見詰め合うー

「ああああああ……！ああああああ■■■■■■■■■■!!!」

「ステイル、シア……!?!」

髪を振り乱しながら絶叫するステイルシア。

俺はそれに近づこうとしてー思わず、尻餅をついた。

息を荒くして床にうずくま踞るその少女から発せられる冷たい雰囲気と、息が出来ない程の威圧感。

俺の知るステイルシアとは全くの別物だったから。

「はあつ、はあつ……!?!」

『思い出されたようですね……!?! ではお待ちしております! まずはこの都を落としましょう! ああ……!?! まさか、また先生と一緒に戦えるなんて!』

男の指先から閃光が発せられ、爆発音と共に画面が砂嵐になった。カメラが破壊されたのだろう。

結局、なんだったんだ……?!

俺は一瞬唖然としていたが、ステイルシアに起きた異変を思い出してすぐにそちらへ目を向ける。

「私、は……!?!」

ステイルシアは、妙にギラついた目付きのまますくつと立ち上がった。

そしてそのまま、裸足でふらふら玄関の方へ歩いて行こうとする。

それに底知れぬ嫌な予感がして、俺は咄嗟に肩を掴んで引き止めた。

「おい、ステイルシア！」

「行かないや……」

「さつきから、おかしいぞお前……!?!」

無理矢理こちらに振り向かせ、ステイルシアと目を合わせる。鋭くギラギラしていた

瞳が、俺を見て少し穏やかになった。

が、すぐに戻ってしまふ。

「……私は」

「何があったんだ、アイツは誰なんだよ……!?! 俺に言えよ……!?!」

「わたし、は」

ステイルシアは一瞬だけ泣きそうな顔になった後、しめやかにまぶた瞼を閉じた。

それからまた目を開き、今度はキツと俺を睨んでくる。

「つ、なん、だよ」

「私は……」

初めてステイルシアから向けられた敵意の視線に、思わずたじろいだ。

どうして……と、俺は必死に思考を巡らす――

「私は、君の事なんて知らない」

「……ええ？」

――頭が真っ白になる。

俺の事を、知らない……？ なに、言ってるんだ。

出会ってから今までずっと、一緒に居ただろう。

「君は以前から」ステイルシア”を知ってるんだろうけど、”私”は今日初めて君と話した」

「わけ、わかんねえよ……？」

「はは……優しくて才者な癖に愚鈍な奴だな君は。分からないのかい？ 君のお婆さんと同じだよ」

ステイルシアは、半ば嘲りあざけを含んだ声色で俺にそう言った。

婆ちゃん、同じ……？

「――健忘症……あるいは老年性認知障害アルツハイマー。私はね、新しい記憶を一日以上保持できないんだ」

脳が理解を拒んでいるかのように、俺は頭の中で上手くその言葉を噛み砕けなかった。

……一日しか記憶がもたない？

そんなわけ、ないだろ。だって今まで、普通に。

「変な嘘、吐くな……！」

「嘘じゃないさ……私が毎日君の事を覚えている」ように”振る舞っていたのは、朝に君の記憶を読んで、眠るその時まで君の中にある”ステイルシア”を演じていたからだよ」

『過去の自分自身を演じるなんておかしな事だよねえ……う？』

と笑いながら、ステイルシアは更に続ける。

「自分が出演しているドラマか映画を見ているような気分だったよ。知識としては知っているが体験した覚えは無い……尤も、ボーイミーツガールは嫌いだから感情移入は出来なかつたけどね？」

典型的な『やれやれ』のポーズで肩をすくめながら、ステイルシアは首を横に振った。

その最中……混乱する俺の頭の中で、思い当たる節が幾つも出てきた。

——毎朝起きた時、執拗に俺の瞳を見つめてくる事。

——妙に忘れっぽくて、少し前の事もすぐに忘れていた事。

——『君に出来るだけ私を見ていて欲しい』と言った事。

パズルのピースが揃うみたいに、今までの細かな違和感の全てが今の告白に当てはまった。

一気に真実味を帯びてきた絶望に、横からガツンと頭を殴られたみたいな感覚に陥る。

「……と、いうわけで。私からすれば君は殆ど他人だし、大した思い入れも無い、無いんだよ」

「——っ」

「おっと……傷付けてしまったかな？　じゃあ、さよならだ」

ステイルシアは俺に背を向け、パチンと指を鳴らした。

すると玄関口に大きな黒い霧もやが出現する。転移魔法だ。

「なん、で」

「あの男にちよつと用があつてね……あ、一応は恩人である君に忠言しておくよ、この家からは出ない方が良いでしょう。魔法結界の外に出たらもう何も君を守ってくれないからね」

「まって、くれ」

黒霧の中へ足を踏み入れるステイルシアの背中に、俺は手を伸ばす。

しかし、伸ばした手は霧に阻まれて弾かれた。

「……じゃあね」

ー振り向き様、少し悲しげに微笑んで。

ステイルシアは黒霧と共に消え去った。

静寂に包まれた玄関。

そこに残ったのは、ポツンと立ち尽くす俺だけだった。

十八話 『醜悪なる流星』

それからの事は良く覚えていない。

何も考えられないままリビングに戻って、ソファに座って。

何も映さないテレビとにらめっこしながら、先程までここにいたステイルシアの残り香にすぎるようにクツションを握り締めていた。

——『私は君に大した思い入れが無い』

——『私からすれば君はほぼ他人だ』

「っ……っ……」

先程の言葉がフラッシュバックして、ズクンと胸の奥が焼け爛れたような、張り裂けたような痛みを感じる。

全くの比喩無しに——心に穴が開いたみたいな感覚だった。

俺はこの感情を知っている。大切な人を失った時の気持ちだ。

「はっ、ははは……」

——幸せ、だったのか俺は。

自分の料理を美味しいと言ってくれる人が居た事が。

——『私は君の事なんて知らない』

「……そう、だよな」

浮かせかけた腰を、脱力させて床に落とす。

……俺なんて、アイツに求められてない。

今までだって内心、俺の事を衣食住を提供する都合の良い人間程度にしか思っていないのか。もしかもしれない。

落ち込んだ思考が、どんどんと負の螺旋に吸い込まれていく。

だって、そうじゃなきゃ、俺を残してあいつの方に行ったりなんかしない——

「あ……」

……いや、待て。

その時俺は、重大な事に気が付いた。

一気に顔から血の気が引いていく。

あの男は確か『この世界を呑み込み勇者へ復讐を』みたいな事を言っていた。そしてその後、すぐにステイルシアはヤツのいる街へと転移していった。

——もしかして、あの男と一緒に世界を滅ぼそうとでもしてるのか？

さっきの様子からして恐らく、前の世界の詳しい記憶を思い出したのだろう。考えが変わっても不思議じゃない。

「……」

人類相手に殺戮の限りを尽くすステイルシアの姿を想像して、俺は心がひび割れるような感覚を覚えた。

……そんなの、あいつが可哀想だ。

向こうからすれば他人だとは言えこの一ヶ月と数日、ずっとステイルシアの事を見てきて俺も多少はあいつの人間性を把握しているつもりだ。

……本質的に、優しく穏やかな人間なのだ。あいつは。

複雑な立場やら記憶にがんじがらめにされている様ではあるが、それだけは分かる。だから。

もし、もし……何かの間違いで、ステイルシアが人々に牙を剥くような事があれば、あいつは絶対に後悔する。

自分を責めて、死んでしまうかもしれない。

誰かが止めてやらなければ、そうなってしまふかもしれない。

「……俺に、何が出来る？」

ゆつくりと立ち上がりながら、自問自答する。

押し入れの方へ歩いて行って、嚴重に保管してあった“ナイフ”を取り出す。術者が居なくなっても、刃に刻まれた魔方陣の数々は健在だった。

それを固く握り締めながら、俺は僅かに口角を吊り上げた。

「俺はあいつに求められていない。それが、どうした。」

互いに求め合う必要なんて無かった。俺があいつを助けたいから」行く。

ただそれだけで良かったんだ。

損得勘定そんとくかんじょうで人を見捨てる人間になるな。思いに対価なんて要らない。

ナイフの他に、何本かの包丁と武器になりそうな物をリュックに入れて端末を持つ。

「……行くか！」

勢い良く玄関の引き戸を開けて、俺は外へ一步を踏み出した。



「よっ……と、防壁を張るのにかなり魔力を持っていかれたな……」

「おおう！」

阿鼻叫喚の街、突如として出現した黒い霧の中から一人の少女が顔を出した。

直前に何か嫌な出来事でもあったのか、苦虫を噛み潰したような表情のまま、目の前の男を見据える

少女の目線の先に立つのは、眼鏡をかけた赤髪の優男。痩せぎすと言っても良いほど

に細く、目の下に深く刻まれた黒いクマは疲労というより、この男の内に渦巻く狂気を伝えてくる。

「ふっ、はははは！ どうも先生!! 何だか以前より随分と目が優しくなりましたね!

私に会えてそんなに嬉しいのですか!?! 私もです! 正に相思相愛ですね!」

「……っ、相変わらず馬鹿みたいな魔力量だ。全くどうして、よりによつて君が来てしまったんだろう……ねえ?」大賢者「

「はははははは!! 先生の方こそご健壮なようで何よりです!」

「会話が成立しないのも相変わらず、だね」

”大賢者”と呼ばれた男は、のけぞってケタケタ笑いながら少女へ歩み寄っていく。

「あの恩知らずの勇者め……、先生と私を”異界流し”に処すとはなんと厚顔無知か! 先生! まず復讐の第一歩として原住民どもに魔力を注いで”飽和”させ、最強の軍勢を作りましょう!」

「……適正の薄い人間を飽和させても、理性を無くし暴走して死んでしまうだけの筈だが」

「……? はて、何がいけないのでしょうか? 当面の目標はこの星を手中に納める事なのですから、既存の文明を消し去るために暴れさせるのが得策でしょうか?」

心底不思議そうな顔で、大賢者は少女へ問い掛けた。

少女は目を閉じて、ふるふると首を横に振りながら口を開く。

「……そうか、そうなるか。きつと私も最初はそうだったんだらうな」

「む……？　話が見えませんか。まだ記憶に不備があるのですか？　ならもう一度、私の瞳を……」

「いいや、確かに全て思い出したよ。君から見た私を……醜い女だ」

そう呟いた少女の指先に、小さな青い炎が灯った。

それを「殲滅開始」の合図ととったのか、大賢者の口が張り裂けんばかりに弧を描く。

背から回転させながら巨杖ワンドを引き抜き、勢い良く構えた。

「さあ……やろうか」

「ええ……！　ああ、国落としては久々だ！　それも先生とだなんて！　正に、龍に聖

剣——っ!」

「星炎」

「——」大賢者「は、自らの目を疑った。

マッチ程度のサイズから、いつの間にかビルを呑み込む程にまで巨大化した青い炎の球体。

さながら小さな太陽とでも表現すべき圧倒的な熱量と威容が——自分へと、迫ってき

ていたから。

「ツツツ!?」 フル・レージスト!! 何をするのです、先生!? やはり、記憶が……!」

「言つた筈だ。私は確かに全てを思い出したと……ただ、選んだだけだ。」

■ ■ ■ ■ ■
ウルテマ・アイシクル

辛うじて” 星炎” を防いだ大賢者の背後から、凄まじい轟音と共に冷氣が迫ってくる。

横目で背後を確認すると、ベキャベキャとビル群を薙ぎ倒しながら伸びる巨大な氷の槍が見えた。

「ぬ” ああ” ああ” ああああ” あツツツ!?」

「自分の世界を引つ掻き回し、私を追放した” 勇者” への復讐よりも——この星と、あの子の未来を。私は選んだんだ。」

大賢者は、氷槍を回避しながら怒りに顔を歪める。

「あの子の未来に君は要らない……無論、私もね」

「さつきからあの子あの子と……っ、裏切るのですか!」 私と、私たちの世界を!」

「裏切る……? ククク、変な事を言わないで欲しいな。私は今日、始めから君と刺し違えるつもりでここに来たんだ」

少女の背後に、優に百を越える魔法陣が展開する。

それぞれ色が違い、孕んでいる効果も全て異なる。しかし全てが第一級の威力を持つ事が大賢者には分かった。

その光景に、思わず目を見開く。

「……少ない。」

——拍子抜けたような、半ば失望したような声で大賢者は呟いた。

「なぜ本気を出さないのです？ 本来の貴方なら、一度に10000や20000は平気で撃ち込んでくるはずだ」

「……君程度これで充分という意味さ。こんな簡単な皮肉も通じないと、情けない男だね」

「ほう……？ なるほど、何故かは知りませんが、既にかなり魔力を消耗しているようですね。なるほど、なるほど、くっ、ふふふはははははははははははははははははハハハ!! そうか！ そうか！ そうかアツ！ 今なら私は先生に勝てる！」

大賢者は、心底嬉しそうに笑い声を上げる。

唾を撒き散らしながらポリポリと頭を掻きむしり、頭皮から赤い液体と乾燥した皮が剥がれ落ちた。

それに生理的な嫌悪感を覚え、少女は僅かに後ずさる。

「ふ、ぬっ、エ”へへへえ……つつ！ そうかそうかあつ……！ 消耗してる今なら、

ずつとやりたかった事が沢山できるぞおつ！ 先生を臓器ごとに俯分けしてインテリアにする事も！ 先生の女性器だけを切り取ってオナホールにする事も！ その小振りで柔らかい乳房と尻のお肉をワイン漬けにして食べる事もおツツツ!!!」

「っ、気狂いめ……」

あまりにおぞましい妄言の数々に冷や汗を足らしながらも、少女は準備を終えた背後の魔法陣たちを視界の端で見た。

そして『発射』と、掲げた右手を大賢者へ振り下ろすー

「すーっ……先生、ずつとお慕いしたしております。どうか、我が魔導が貴女にとって美しくありますよう」

ー両腕を広げた大賢者の背後に、万を越える魔法陣が展開した。

「っー!!」

「さあ、フィナーレです……ご安心を。貴女が”私のモノ”に成った暁には、すぐにでもこの星の覇権をプレゼント致しますので」

煌めく星の如く夜空を覆い尽くす、無数の魔法陣を見上げながら。

少女は……ステイルシアは、悲しそうに目を細めた。

眩しさに瞬きする度、瞼の裏側に自分を愛してくれたあの少年の顔が鮮明に浮かぶ。

「……………めんね」

十九話 『次元を翔けし者』

ー走る、走る、走る。

何故か感じる、途方の無い”嫌な予感”に体を引きずられるようにして俺は街への道を疾走していた。

言いつ表せない胸騒ぎと焦燥に耐えるために、足を動かし続ける。

「◆◆◆◆◆!!!」

その時、前方から奇怪な咆哮が俺の鼓膜を叩いた。

そこに居たのは、道を塞ぐようにして立っている小型の赤いドラゴン。俺は走りながら凶鑑を開いた。

……「イフリート」か。ランクはB。以前の俺からしたら圧倒的に格上だ。

「……術式装填・アイオライト、オーロベルデイ」

リュックから二本のナイフを取り出し、それぞれに別の術式を刻み込む。水の”アイオライト”と、地面を隆起させる”オーロベルデイ”だ。

そして、その二つを一気に投擲した。

「◆◆◆◆◆!?!」

イフリートの体表に包丁が突き刺さる。それと同時に術式が作動し、ゼロ距離から水のレーザーが発射された。

それに腹部を貫かれ、のけ反った所で”オーロベルデイ”が作動する。

地面から隆起したアスファルトがイフリートの足を拘束して動きを封じた。

「くたばれ……!」

走る勢いのまま突き出したナイフの一撃が、分厚い深紅の鱗を叩き割って内部の肉を抉った。

そして更にもう一押し——刺さったままのナイフの刃に、赤い葉脈を走らせる。

「術式装填・カーネリアン!」

「!?!?」

——ナイフから発射された炎の螺旋が、イフリートの胸に風穴を空けた。

よろよろと倒れて灰になるイフリートから摩核を引き抜き、即座に噛み砕く。

体が熱くなり、消費した魔力が回復するのを感じた。

「……急ぐぞ!」

自分にそう言い聞かせ、再度走り出す。

強力なモンスターの核を取り込んだお陰か、さつきまでよりかなり体が軽い。これなら予想より速く街に辿り着けそうだ。

「ふっ、ふうっ……っ、はは、来る度にどんどんボロボロになってくた、この街」
数十分後、俺は街の前まで辿り着いた。

あちこちで爆発音や瓦礫の崩れる音が響いており、各地で起こる凄まじい戦闘を俺に伝えてくる。

……今俺の手元に残ってる武器は5000円の出刃包丁が二本と、財布に付いてた金属のチェーン。あとステイルシアが魔改造した例のナイフだ。

ナイフ以外にロクな武装が無いな。焦っていたとはいえもう少し何か無かったのか、さっすきの俺。

もし上位モンスターに対して勝機があるとすれば、ステイルシアがナイフに刻印した五回分の『時空掘削魔法』^{ドミネーション}だけだ。

どういう感じで発動するか分からないから実験しておきたいが、回数に限りがある以上ぶっつけ本番でやるしかー

「っ!？」

ーピカッ、と。街の一角が昼間みたいに明るくなった。その後、ここからでも分かるぐらいの轟音が発生する。

……直感で分かる。あそこだ。あそこにステイルシアが居る。

何かと戦っているのだろうか。

だとしたらきつと、俺なんかじゃ介入すら出来ない戦いのだろう。

しかし、行かねばならない。

たとえ無様に死んだって、あのまま家に引きこもって後悔しながら生き永らえるよりはきつとマシだ。

「……術式装填」

ーアイオライト、ブレーナイト。

二本の包丁に水属性と風属性の葉脈を刻み、ベルトに装着する。咄嗟に発動できるようにするためだ。

そして『引き返せ』と警笛を鳴らす本能を押し返して、街への一步を踏み出した。

「っ、」

足を踏み入れた瞬間、意図せず喉からひゅつと息が漏れる。

……空気が、変わった。濃密な血の臭いに淀よどんでおり、目が染みる。

一体どれだけ人が死ねばこんな有り様になるのか、想像したくもない。

横転した車や隆起した地面の陰に隠れながら、俺は街を進んでいく。

……意外と、モンスターの数自体は少ないな。いや、圧縮されたか、でも言うべきか、強力なモンスターばかりだ。

きつと、互いに魔核を喰らい合って強力な個体だけが生き残ったのだろう。

流石に上位クラスのヤツは見当たらないが……数匹程度でも囲まれてしまえば、俺なんかあつという間に殺されてしまう事だけは分かる。

……幸い、瓦礫や横転した車など隠れられる場所が多い。見つからないように行くしか無いな。

□

「ひいつ、ひいつ……！」「たずつ、げ、エ」

「逃げなさい！ 速く！」「おかあさん、なんで、足が無いの……？」「あああああつ!!」
「……………」

隠れながら進むこと数十分……やつとの思いで辿り着いた街の中心部は、目を覆いたくなるような惨劇の舞台と化していた。

我が子を守ろうとしたのか、小さな死体に覆い被さるようにして死んでいる胸に丸い風穴が空いた女性の死体。

燃え上がる炎に巻かれ、体から蒸発した水分を取り戻そうとするように喉をかきむしりながら死んでいく男。

フクロウのようなモンスターに腹を啄ついばまれ、ピンク色の腸を露出させた少女。

「……………あれは」

その惨劇の中心に立っていたのは、自分の周囲に漆黒の球体を七つ浮遊させたフクロウだった。

その球体の一つ一つが意思を持ったようにビュンビュンと街中を駆け巡り、命を刈り取っていく。

球体の通った後は小石さえ残らず、まるで消しゴムで消された絵画のようだった。

「上位モンスター……」

——次元梟^{ジゲンフクロウ}。

脅威ランクはA、あの時空掘削魔法を常に七つ発動させる化け物だった筈だ。

俺の頬に冷や汗が伝う。

……あの黒球は確か何度回避しても追尾してきた。実際に味わったから恐ろしさは分かる。

それが……七つか。本体の戦闘力がどれ程かにもよるが、補足された時点で負けと思つていいだろう。

息を止め、しゃがみ歩きで慎重に進む。

”次元梟”は食事に集中しており、俺に気づく気配は無い。

……よし、このまま抜けられれば——

「あ、アンタツ！ 助けてくれえっ！ しにたくねえんだ！ しにたく、死にだ、オ”

ポツ」

その時、瓦礫の下敷きになっていた男が俺の足を掴んで大声で泣き叫んだ。が、それによつて補足されたのか、黒い球体が飛んできて即座に男の頭部を消し飛ばした。

先の無いうなじからダクダク吹き出す鮮血に、俺は唾然とする。

「☒・㊦・㊦㊦」

死肉を食つていた次元梟の首がグリンツと回転し、猛禽類特有の大きく鋭い目で俺を見た。

「っあ……っ？」

ー見つかつた。そう気付いた瞬間、俺の右腕は黒球によつて宙を舞っていた。

肩口から噴水みたく吹き出る血液に冷たくなる体。それに反比例するように、激痛に熱を帯びる思考。

あまりの事態に、攻撃されたと理解するのに数秒かかった。

「ふうふううっ……っ！」

傷口から噴出した血液が空中で結晶化し、腕の形を作る。

ー俺は“飽和”してる。普通なら致命傷になりうるダメージも即座に回復可能だ。

「・㊦㊦㊦㊦㊦㊦㊦㊦㊦㊦㊦㊦……」

仕留め損なったのを理解したのか、”次元梟”は興味深そうに俺を見る。

俺は、再生した手を開閉して完治を確認した後、ベルトから風魔術を刻印した包丁を取り出す。

「……術式装填：”ブレーナイト”。

包丁を次元梟めがけて投擲する。次元梟はグリツと首を回転させてそれを回避した。背後にあつたビルの残骸に着弾した包丁は、大規模な竜巻を発生させた後に砕け散る。コンクリの瓦礫が螺旋状に抉れた。

……イフリートの魔核を取り込んだ影響か、技の出力がかなり上がつてる。前までこんな災害じみた魔術なんて使えなかつた。

これなら、やれるかもしれない。

極力回避に徹しながらの遠距離攻撃、もし当てられても再生出来る。

今から逃げたつて、後ろからやられる可能性の方が高いんだ。なら挑むしか無いだろう。

右手にナイフ、左手には”アイオライト”を刻印した包丁を握つて腰を低くする。

「……行くぞ」

「ЮФЖ・ШЖ!!!」

次元梟が大きく吠えた。それと同時に、七つの黒球が標的を俺に変えて向かつてく

る。

ーさつきより、速い。

……全て回避するのは不可能だ。機動力である足と、運動の要である心臓。あと脳だけ守って残りの部位はあえて当てられるぐらいの気持ちで行くしかない。

ぐ、つ、ガアアあああッッ!!!」

頭部へ迫ってきた黒球に、俺は全力で左腕を振りかぶった。肉を抉られる激痛と共に、僅かに黒球の軌道がブレる。

肩が、まるで工事現場の掘削機にでも巻き込まれたみたいにもげ飛ぶ。

もげた左腕に握られたままだった包丁を残った腕でキャッチし、残り二つの黒球に横腹を抉られながらもそれを次元梟目掛けてぶん投げた。

「遠隔起動……!」

そして包丁がヤツに命中する少し手前で、俺はそう呟いた。

さつきの風魔術……”ブレーナイト”は、投げた瞬間ではなく物体に着弾した瞬間に発動した。

つまり、俺の意思によってある程度は発動のタイミングが調整できると言う事だ。

「◆◆◆……!」

次元梟は、さつきと同じように首を捻って包丁を回避しようとするーだが、遅い。

当てられないなら、当たる前に発動させれば良いのだ。

ナイフの周囲にゴボゴボと水が纏わりだしたのを確認し、俺は口角を吊り上げた。

「アイオライト!!」

「☒◆ЖШШТΦΦKKЬ」 φりφ?!?!」

——自らの眼前に発生した夥しい量の水に、次元梟は面食らったようにのけ反った。

水は俺の得意属性、威力は”ブレーナイト”をも遥かに凌駕する。

小規模な津波と言っても過言ではない規模の水量が、水圧カッターもかくやという勢いで発射される。

これで、終わりだ……!

「・▲・」

「……へっ」

——次元梟は、その大きな目を嘲笑に歪めながら悠々と水圧の中を歩いてくる。……効いて、ない?

打ち出された水のレーザーは確かに次元梟の体を貫いている。

しかし血の一滴、羽毛の一本分さえダメージを与えられていない。むしろ、すり抜けているという表現の方がピンとくる。

そう、まるで、文字通り存在する次元が違うかのよう。

俺の攻撃は、ヤツの体に何一つ干渉できていないのだ。

「っ……っ……う!?!」

啞然としていた不意を突かれ、右腕と左足を黒球に持つていかれた。

——分析に徹している場合ではなかった。すぐに再生しなければ。

俺は欠損した部位から深紅の結晶を生やしつつ、出来る限り不規則に移動する。

追いつがる黒球から少しでも逃れるためだ。

「・・・」

『楽しかったぜ』とでも言わんばかりに、次元梟は高らかに咆哮した。

それと同時に黒球の動作が更に速まる。もはや目で追うのがやつとだ。

「ふざけ、やがって……!」

「^^」

攻撃しようにも、両腕をもがれたせいで武器も無い。

あるのは、赤く結晶化した治りかけの左腕だけ。

……いや、待て。確か俺の血液は、想像で形を与えてやる事によって武器にも変化さ

せられるとステイルシアが言っていた。

『飽和した者の血液は、魔核と同じ性質を持つ可能性の卵だ』と

「武器、武器……!」

目を瞑り、瞼の裏で武器を練り上げる。

想像するのは、限り無く鋭利な槍。時間も余裕も無い。複雑な武器は作れない。

うつすら瞼を開くと、俺の前腕から先は取り回しの良さそうな一メートル程の槍になつていた。ナイフや包丁なんかよりよっぽど怪物狩りには適していそうだ。

……さっきの”すり抜け”は気になるが、

もしかすれば、魔術だから効かなかつたのかもしれない。

そんな希望的観測を抱きながら、俺は次元梟へ間合いを詰める。

「♪♪・▲・」

ダツシユの勢いを付けて突き出した槍は——しかし、先程と変わらず次元梟の体をすり抜けてしまい当たらない。

……何が、どうなって。まさか本当に無敵なのか？

半ば絶望する俺の目の前に、二つの黒球が肉薄してくる。

っ、マズー

「術式装填・”サファイア”」

「・▲・▲・↑↓ⅢJKK!?!」

「俺に迫っていた暗黒の球体は、横から飛来した水弾によって打ち消された。初めて次元梟が苦悶の声を挙げる。一瞬だけ、梟の輪郭が揺らいだ気がした。」

「……久しいな、坊主」

「エリミネーター、さん」

蒼く染まった大剣を肩に担いだその騎士は、俺の知る声でそう言った。

そして、苦痛に顔を歪める次元梟を見据える。

「この世界では……」プロジエクシオンマッピング」、とか云うのだったか？」

「え？」

「あの鳥の事だ。あたかも本体に見えるアレは、空間に映し出された単なる虚像……本当の心臓部は、ビュンビュン飛び回っているこの球体の方だ。鳥はただの囮だな」

襲い掛かってきた黒球を大剣で一刀両断しながら、エリミネーターは言う。……本体は、この黒球たちの方だって？」

道理で当たらないわけだ。むしろ逃げ回っていたんだから。

「さあ……久々の大物だ。オレも滾ってきた。坊主、お前は逃げるなり何処かへ行くなりしろ。邪魔だ」

「は、はい……」

次元梟を抑え込むエリミネーターに一礼して、俺はナイフを拾って走り出した。

……危なかった。エリミネーターが居なかったらここで死んでもおかしくなかったな。

まさか、モンスターがあんな搦め手を使ってくるとは思わなかった。上位になると知能も上がるのかもしれない。

気を引き締めて行こう。ステイルシアの所に辿り着くまでに死んだら目も当てられない。

二十話 『現実的』 絶対者』

「はあ、はあ……う、ぐ、……っ！」

エリミネーターと次元梟の戦闘している場所から数百メートル。そこまで走ってきて、俺は息を荒くしながら地面に膝を着いた。

「げほっ、げほっ……」

……心臓が、痛い。バクンバクンと異常に速く脈打って、破裂してしまいそうだ。咳き込んだ喉の奥から、粘着質な赤い血塊が吐き出される。

地面に染み付いた朱色に、ギョツとする。

ちよつと……無理し過ぎたか？

再生したのは、吹き飛ばされた腕三本に挟り取られた内臓いくつか……あと足か。

いずれも普通なら致命傷だ。それを無理やり再生しながら戦ったんだから、それなりに体に負担も掛かっているのかもしれない。

「ふう……」

口端に着いた血を拭い、俺は立ち上がった。

……こんな所で立ち止まってられない。

横にある、倒壊した建物の瓦礫から鉄骨を引き抜く。

それを、腕を刃物に変形させてスパンッと斜めに切り飛ばした。

そうして二本に分断された鉄骨の切り口が、鋭利な槍のような形状になる。

……粗悪かつ即席の武器だが、金属である以上「術式装填」は使える。さっきまでの包丁の代わりだ。

俺は、錆び付いた二本の槍に魔力通す。

「術式、げほっ……、装、填」

——水魔術、アイオライト風魔術、ブレナイイト風魔術。

俺の使える術式装填の中で最も使い勝手の良い二つ。それらを腰のベルトに突き刺して、歩き出した。

……コンデイションは良いとは言えない。可能な限り逃げに徹しよう。

回復のために魔核を取りに行つて、逆にこちらが狩られたら本末転倒だ。

「■■■■■■■■!?!?!」

「っ、!?!」

——その時、早足で歩いてきた俺の横を巨大な緑色の物体が高速で横切った。

ソレは、ダンプカーにでも轢かれたかのように何度も地面をバウンドしながら転がり、最終的にぶつかつたブロック塀を粉々に打ち砕いてやっど止まる。

その先に佇んでいたのは……仮面を着けた、背の低いヒトガタの何かだった。

「あれは……」

ソイツの周囲には無数の本が開いた状態でふよふよと浮いており、手に持った羽ペンでそれに何かを書き込む度に周囲の地形が変化する。

アスファルトが草むらに変わったり、水溜まりがマグマに変わったり。

まるでコンピュータシミュレーションゲームみたいな状況が、事実として目の前に起こっていた。

——ミラーージュ・カットアッパー既成事象改竄者。

ランクはSー、能力は『現実の改編』

……ステイルシアが『少し厄介だ』と言っていたモンスターだ。

だが次元梟を『大したことない』と言っていたぐらいだから、こいつもしつかり化け物なんだろう。嫌になる。

『すんすん……あれ、なんかクツサイなあ……あのバケモノ痴呆ババアにそっくりな臭いがするや』

良く通るボーイソプラノでそう呟いたミラーージュ・カットアッパーは、首をもたげて俺の方に振り向いた。

仮面の向こうにあるであろうヤツの瞳と視線が交差した瞬間、冷えた手で心臓を鷲掴

みにされたように息が詰まるのを感じる。

「……こいつはまずい。」

エリミネーターを初めて見た時と似たような威圧感……一目見ただけで、隔絶した力の差をありありと分からせられる。

ベルトから二本の鉄骨を引き抜き、腰を低くして臨戦態勢をとった。

向こうは俺を見て不思議そうに首をかしげる。

『あれれえ……、うそ、この魔力で現地人？ 驚いた……こんな世界にも強い人間は居るんだね……』

「っ、」オーロベルデイ!!!」

『おつとと……?』

土魔術を刻印したナイフを地面に突き刺し、ミラージュカットアツパーの足元を隆起させたアスファルトで拘束する。

先手必勝だ。向こうが動く前に可能な限りダメージを与えてやる。

俺は右手に二本の鉄骨を握り、槍投げの体勢をとった。

「術式装填、アイオライト・ブレーナイト。」

水魔術と風魔術を刻印した鉄骨二本がカットアツパーめがけて投擲される。

その二つは、奴に着弾する直前で魔術を発動させた。アイオライトの津波をブレーナ

イトの竜巻が巻き上げ、無数の水の刃となってカットアツパーに襲いかかる。

……水と風は噛み合わせが良いな。いざと言うときの必殺技として覚えておこう。

激流を纏った巨大な竜巻——”渦潮”^{ウズシオ}”とでも呼ぶべきその魔術は、カットアツパーの体を切り刻もうと——

『……』しかし、その激流は衝突の寸前で霧散した。』

——カットアツパーが、目の前の本にペンを走らせる。それと同時に”ウズシオ”はミスト状になって掻き消された。

……何が起こった？ 奴が紙に何かを書き込んだ次の瞬間、魔術が消え去ったように見える。

周囲に浮かんでいるあの本に秘密があるのか……？

『危ないなあ……あとちよつとで溺れ死んでたよ』

苛立ったように頭を掻きながら、カットアツパーはそう呟いた。

そして目の前の紙にペンを走らせる。今度は、何を——

『剣には剣をつけてね……お返した。』その男は、自らの肺が水に満たされるのを感じ、窒息した。』

「——ゴ、お………っ!？」

——胸が何かに満たされ、喉の奥から液体が込み上げてくる。……息が、できない。

思わず咳き込むと口から大量の水が吐き出された。肺が何かに圧迫されていき、上手く空気を取り込めない。

……肺の中に直接水を送り込まれた？

「あ、が、アあ、っ」

肺炎など、呼吸器系の病気の症状として良く持ち出される”陸で溺れる”というのは正にこんな感覚なのだろう。

息を吐く度、空気の代わりに水が吹き出る。脳に酸素が行なくなり、頭が痺れたみたいになってくれない。

ここまじや、しぬ、どうにかして、酸素を取り込まなければ。

「……っ」

咄嗟に腰からナイフを抜き、弱めの風魔術フレムナイトを装填する。

そしてーそれを、自らの胸に突き刺した。

肺の中で術式が作動、暴風が渦巻き、バゴンツ！ という音と共に勢い良く肺が膨らむ。

「お、ばガ、アツ!? は、ア、はあ、はあ……!」

肺の急激な膨張によって肋骨がバキバキにへし折れるのが分かる。しかし、呼吸はできなくなった。

折れた肋骨によって突き破られた皮膚の中から、おびただ 夥しい量の水が流れ出る。

飛び出た肉やら骨やら内臓を無理やり体の中へ押し戻しながら、俺はカットアッパーを睨んだ。

当のカットアッパーは、赤い結晶によって猛スピードで修復されていく俺の傷を感心しながら見ている。

『そりゃまあ、治るとは思ってたけど……速いな』

「■■■■■■■■■■」

『はあ……』 愚かにも絶対者に襲い掛かった小鬼は、先ほど打ち消された激流の渦によつて切り刻まれるのだった』

吹き飛ばされた状態から復活したゴブリンエースが、目にも止まらぬ速度でカットアッパーに跳び蹴りを叩き込む。しかし、突如として発生した渦潮によつて行く手を阻まれた。

……俺の、技？ 他人の魔術のコピーも出来るのか？

「■■■■■■■■■■」

血みどろになつてふつとばされてきたゴブリンエースが、ギロリと俺を睨んでくる。俺がやったと思つているのだろう。

ふるふる首を横に振つて否定すると、訝しげな顔をしながらも視線をカットアッパー

に戻した。

……このままじゃ埒が開かないな。まずは向こうの能力を分析しなければ。

ステイルシアが言っていたのは『事実の改編』だが……漠然とし過ぎていて、どう対策すれば良いのか分からない。

恐らくは、周囲に浮かんでいるあの本に書き込んだ内容に合わせた現象を引き起こすのだろうか……なら何故もつと単純に『死ぬ』とか書かないのか謎だ。そうすれば完封できるのに。

改編できる事象にも、何かしらの制限あるいは限度があるのだろうか。

「■■■■……」

「えっ？」

俺がそうこう考えていると、ゴ布林エースが横目でこちらを見てくる。そしてそれからカットアツパーを指差した。

……『共闘するぞ』と言ってるのか？

足並み揃わずバラバラに攻撃しても簡単に防がれるだろうから協力するのは願ったり叶ったりだが……ゴ布林にそんな知能があったのか。俺は首を縦に振った。

ポケットの中に手を入れ、家から持ってきた最後の武器……財布のチェーンを取り出した。

それに風魔術フレイナイトを刻印し、ゴブリンエースに投げ渡す。

「■■■■……………」

「拳に巻き付けて使え。無いよりはマシだろ」

チエーンチエーンの全長は50センチ程度だから普通の武器としては運用出来ないが、拳に巻いて握れば擬似的なメリケンサックみたいな役割を果たすだろう。

ジェスチャージェスチャーでそう伝えると、ゴブリンエースは手にチエーンを巻き付けてグーパーする。

何度かそうして気に入ったのか、ゴブリンエースの口が歪な弧を描いた。

「■■■■■■■■!!!」

『だから無駄だって……』小鬼の拳は不可視の壁に遮られた』

再びカットアッパーカットアッパーに殴りかかるゴブリンエースだったが、例の如く半透明の壁に阻まれて失敗に終わる。

……しかし、拳を一発防いだ時点で防壁は消え去った。

きつと、『小鬼の拳を防ぐ』という指定された役目を終えたからだろう。

推測だが……本にペンを走らせた直後、つまり能力を使用した後の数秒間だけ、こいつは無防備になる。

「遠隔起動……………」

『うえ、ちよつ、マジ?』

俺の言葉に呼応して、ゴブリンエースの拳に装備されていたチェーンの“ブレーナイ
ト”が発動する。

自らの拳から発生した竜巻にゴブリンエースは面食らっているが、それに構わず暴風
はカットアツパーへと襲い掛かった。

「くたばれ……!」

『……へえ』

自分に迫る災害クラスの竜巻を見上げ、ため息を吐くカットアツパー。
間に合わないかと悟ったのか、紙にペンを走らせる様子も無い。

勝負、あつたかー?」

『風よ、死せよ』

ーしかし、暴風はカットアツパーに届くことは無く。

ほんの数センチ前で、何事も無かったみたいに消えてしまった。

……能力の発動条件は、本に書き込む事じゃなかったのか?」

『はあ……』一人称”を使うのは疲れるから嫌だったんだけどな。まあいいや』

カットアツパーは、ゆらりと腕を上げて俺を指差した。

何をする気だ……攻撃に備え、腰を低くする。

『壊れよ、異界の強者』

「あ、え……………」

静かに何かを呟いたカットアップに反撃しようとして——俺は、自分の目の前にアスファルトの壁を見た。それと同時に体が地面に叩きつけられる感覚。

——地面に倒された。

咄嗟に状況を理解し、立ち上がろうとする。

しかし、手も足も動いてはくれなかった。

「■■■■■■……………!!?!」

「どう、なっ、て」

俺の方を見て叫ぶゴブリンエース。それに釣られて自分の体に目を移し——言葉を失う。

「がっ、ぼ、お……………っ!」

——胸から下が、無い。跡形も無く。

真つ赤な胴体の断面から血が噴出し、再生のために結晶化していくが間に合っていない。

赤い結晶が腕や胴を形作ろうとしても、風化したみたいにすぐ崩れていく。

「……………あ」

ー死ぬ。

血を流しすぎたせいかな、視界に燃えた写真フィルムの様な黒い穴が幾つも空いていく。

呼吸さえおぼつかなくなり、意識が遠退いていく。

「いや、だ……！」

『……しづといな』

僅かに残った肩を動かし、前に進もうとする。

霞む視界の端、カットアツパーはもう一度俺に指を指した。

『砕けよ。肉ダルマ』

「……あぐ」

激痛と共に、近くで赤い何か弾けとんだ。

グルグルと転がり、だんだん闇に染まっていく世界に無い手を伸ばしながら、俺は目を閉じた。

二十一話『灰園の大賢者』

ーピクリ、と。失ったはずの指先が震える感覚。

力の入らない体に少しずつ五感が帰ってくるのが分かった。

背中の触覚で自分がアスファルトに横たえている事を察し。

皮膚の痛覚で自分の体に刻まれた重症を知り。

舌の味覚で夥おびただしい量の流血を味わい。

耳の聴覚で周囲にモンスターが居ない事を分析し。

「あ”、あ”

そして最後にー重たい瞼を持ち上げて、瓦礫の山に縁取られた灰色の空を見た。

「はっは、は、なん”、で、生き、げほっ、げほっ！」

異常に渴いた喉から、しわがれた声が出る。

……なんで、生きてんだ俺。

胴体吹っ飛ばされて、四肢をちぎり取られて、それでも死んでない。

思わず笑いが込み上げてくる。どうやら俺は、俺が知らない内に奴らに負けず劣らず

の化け物になっていたらしい。

「ふ、う」

崩れかけたビルの外壁に寄りかかり、よろけながら立ち上がる。

割れたガラスの破片に映る俺の姿は、全身が深紅の結晶に包まれた怪物のようになっていた。

……流れた血が皮膚で凝固して、結晶化してる。

武器を失ったがこれなら戦えそうだ。

むしろ、”飽和”した血液の能力を最大限に活かすならこの状態が一番かもしれない。

「じゅつしき、そうてん」

——水魔術。
アイオライト

試しにそう呟きながら右腕に力を込めると、真つ赤な腕に青い葉脈が走った。

……術式装填に金属を使うのは、金属の魔力伝導性が高いからだと前に聞いた。

なら多量の魔力が溶けた俺の血液であれば発動できるのでは、と思つて試したが……
成功だ。

「……行かなきゃ」

先ほどまでステイルシアの戦闘音が聞こえていた方面からは、もう何も聞こえない。

俺がどれだけ眠っていたかにもよるが——既に、手遅れになってしまっている可能性

もある。

霞んで見えにくい目を擦りながら、俺は走り出した。

「……ほぼ、更地じゃねえか」

先程まで轟音の聞こえていた方向に走って数分。辿り着いた場所の景色は凄惨なものだった。

右を見ればマンションよりも巨大な氷岩が聳^{そび}えているが、左を見れば青い炎が一面を覆っている。そしてそれをかき混ぜるみたいに暴風が吹き荒れる。

まるで自然現象同士が意思を持って戦っているかのような光景。

先日まで無事だったビルやマンションも綺麗に無くなっている。

そして極めつけにーー辺り一面に雪の如く降り積もる、サラサラとした灰色の粉末。

……なんだこれ。そう思って手で掬^{すく}って見ると、下から錆び付いた銅色の棒が顔を出した。

「鉄骨、か……？」

灰の砂場を手探りで掘り返すと、中から幾つも見慣れた物体が出てきた。

ボロボロのスーツ、崩れかけの液晶パソコン、ベコベコのロッカー……まるで、オフィスにある物みたいだ。

不思議に重いながらも立ち上がり、歩き出そうとして――踏み出した足が、パキリと何かを踏み潰した。

そして反射的に足元を見て、そこに落ちていたモノに絶句する。

――人骨^{どくろ}。

俺が踏んでしまった事で割れてしまったであろう後頭部を灰から露出させたそれは、間違いなく人間の頭蓋骨だった。

急いで掘り返すと、その周囲から無数の人骨が出てくる。

ほとんど破損は無い。まるで生きたまま一瞬で肉だけを削ぎ落とされたみたいに。

体勢も様々だ。デスクに座ってパソコンを打っていたような格好の人骨や、何かを運んでいるみたいに両腕を前に出した状態の人骨。

俺の頬を汗が伝う。

……この、辺り一面の灰。その中に埋もれた奇怪な物体や人骨たち。まるでSF映画などで見る世紀末の地球みたいだ。異様なまでに風化している。

いやそもそも、これは灰なのか？ 粉末上になっただけはいるが……

まさか――

「……あれ、はっ！」

その時、俺は霞^{かす}んだ視界の端で気になるものを捉えた。

……人だ。二人いる。赤みがかった茶髪の男と白髪の少女。男は地に膝を着く少女の顎を持ち上げて、ニタニタしながら腰を曲げてその顔を覗き込んでいる。

俺は嫌な胸騒ぎを覚えた。

過剰な再生の副作用かピントの合ってくれない目をクシクシ擦り、再度そちらを見
てー

「ステイル、シア……!?!」

ー二人組の片割れは、間違いなくステイルシアだった。

良く見ればもう片方の男はテレビに写っていたアイツだ。

焦燥に突き動かされるようにして走る。

近づくにつれて、ステイルシアが血まみれな事と、男から放たれる規格外の魔力に気がついた。

ステイルシアの仲間じゃなかったのか……!?!

状況が良くわからない、分からないがーこいつがこの惨状を作り上げ、ステイルシアを傷付けたのは確実だ。

ランクSの『爛れ古龍』を一蹴してた時点でそれだけの力があることは分かる。

「術式装填……!?!」

「んん……?」 周辺の時間軸を500エギスほどズラしたはずだが、まだ生き残りが居

たのか」

走りながら、両腕にこびりついた血結晶に魔力を通す。アイオライト
フレミナイト 水魔術と風魔術。

俺の足音に気づいて振り向いた男は、困惑したような、変な生き物を見るような目で俺を見た。

「渦潮！」ウズシオ

両腕から発生した巨大な水刃の竜巻が、地面の灰を大量に巻き上げながら男へと向かう。複合魔術……今の俺が捻り出せる最高火力。

「ーが、こいつは俺などより遥かに格上。ロクに通用しないであろう事はハナから分かっている。」

あくまで目的は目眩みだ。

「んー……っ？」

超遠距離から「爛れ古龍」を葬ったあの光柱。あれを撃たれたら俺は確実に死ぬ。

右腕を刃に変形させ、巻き上がった灰に隠れるように身を低くして疾走する。

「なんだよコレ……魔術式は稚拙だし出力もゴミだ。先生が傾倒する世界だからと少しは期待したが、所詮は下等世界か」

「ウズシオ」は奴の、虫を払いのけるような動作によって掻き消された。が、直後に男は顔をしかめる。

だろう。

意識を集中し、荒れた呼吸を整える。

「さあ消し飛ばす」

「——」

魔方陣から打ち出されたのは燃え盛る炎球と眩い雷、そしてバスケットボール大の石塊。

パンツ、と空気の弾ける音と共に飛来してくるそれぞれが、人体の急所である頭、胸、腹部を正確に狙っていた。

恐ろしく速く鋭い攻撃——だが。

「……おっ?」

迫る炎を水魔術アイオライトで相殺し、雷を土魔術オーロベルテで作成した土壁で防ぐ。

土壁を貫通してきた石の弾丸は、軌道に拳を合わせて打ち砕く。拳も無事ではすまなかったが、即座に再生した。

「今のに反応するか。どうやら、君への評価を改めなければならないらしい」

——見える。

イフリート、次元梟、カットアッパー。格上との連戦に次ぐ連戦によって、俺の神経は極限まで研ぎ澄まされていた。

意識しなくても五体が想像した通りに動く、状況に応じた魔術を的確かつ迅速に手足の如く扱える。

幾度と無く潜り抜けた死線の数々から得た膨大な経験則から導き出される”最善動作”と、その動作を実現出来る身体スペック。

今までに培った全ての技術と能力が、俺の命をこの場に繋ぎ止めていた。

「……スティルシア」

男の背後で倒れたスティルシアは、意識を失っているのかピクリとも動かない。浅く胸が上下しているから生きているのは分かる。

……スティルシアを担いでこいつから逃げるのが理想だがーどう考えても無理だ。ここまでの広範囲を灰に変える攻撃を持つ相手に生半可な逃走など無意味。

「飽和した血液に頼ったブチカマシしか出来ないのかと思ったが……君の真価はその応用力と戦闘センスだな。うん、伸び代も悪くない。磨けば、劍聖にさえ迫るだろう」

俺が思考を巡らせていると、パチパチと拍手しながら男が歩み寄ってくる。

警戒して身構えると男は『待て待て、話を聞きたまえ』と右手で俺を制した。

「僕は、この惑星の王になろうと思っている」

「……hgc」

予想外の発言に、思わずポカンとする。

「王が僕で、妃は先生……となれば、後は優秀な近衛兵が必要だろう」

ニタニタと笑い、爪を噛んで指先を唾でべちよべちよにしながら、それがあたかも正論であるかのように男は言った。

「何を、言つて……」

「はあ？ 分かんないのかい？ これだから劣等民族は……ツチ、まあいいや。部下は馬鹿な方が可愛いものだ」

『君にも分かりやすく言おう！』と言つて、男は空へ腕を掲げた。

それから手を握りしめ、天を掴むようなジェスチャーをする。ギラギラ輝く瞳が、曇り空を映して銀色に染まった。

「……この星の生き物みんな殺すけど、君と……あと僕の気に入る奴が居たら生かしといてやるよ」

上手く言葉が噛み砕けない、言語は分かるのに内容が支離滅裂過ぎて意味不明だ。いつの間にか目の前まで来ていた男は、俺に手を差し出してくる。

「僕は、大賢者！ 魔導を極めし者にして、二元勇者一党の主砲！ さあ……共にこの星を制そうじゃないか！」

握手を求めているのか、男……いや、大賢者、はずいっと手を近付けた。

……俺は、その手を取る。

「……素晴らしいです。貴方様にお声を掛けて頂けるなんて俺も光栄です」

「おお！ 弁わきまえてるじゃないか！」

地に膝を突き、可能な限り奴の懐ふところに近付く。

そして、もう片方の手も大賢者の体に触れさせー

「ーアイオライト」

「ヌ”ぐつ、があア”あアあ”ツツ”ツツ?!?」

触れた素肌に無理やり青い葉脈を通し、腕の半ばまで侵食した所で発動させる。

大賢者の前腕がボコリと膨張し、皮膚を食い破るようにして大量の水が流れ出た。

「ひっ、ひいつ!? う、わあああああつつ!? うでっ、ぼくのうであつ!? 痛い”

いだあい！ いだいよおおおおつつ！ ひぐむ”うう”う”う”つ……!」

「ざまあ、みやがれ……」

弾け飛んだ腕から噴水のように吹き出る鮮血を見て泣きわめく大賢者に、少しだけ溜飲くみが下がる。

「ひいつ、はふいつ!? あハッ、はあ、はあつ！ 殺すツ、殺すウウウウウ!!!」

「やってみろよ……!」

大賢者は残った腕で背中の巨杖を引き抜き、俺へその先端を向ける。

そして、それが光ったと思つた瞬間ー

「あ」

「『少しでも上に跳べ』と本能が告げた。それに従い全力で跳躍。

それからコンマ一秒後、俺の足を光の螺旋が通り過ぎる。

灰の海を割り、見渡す限りの地平まで届き、あまりの熱量に周囲が陽炎に歪む。

俺を追尾するようにして空中に向かつてきた光線に横腹を消し飛ばされる。内蔵が

炭化してサラサラと崩れ落ちた。傷口が焦げて血も流れない。

光速で天空まで到達した光線は雲を割り、その先にあつた夜空へと突き抜けていく。

「はあつ、へハあツ！ クソがあつ！ 外した！」

「つ……！ カーネリーー」

「遅いんだよバカがあつ！」

■身体強化■！

腹の傷のせいでモタつきながら、大賢者に攻撃をしようとする。

しかし、異常に素早い動作で背後に回り込まれた。

超至近距離で向けられた杖に、脳裏を明確な『死』が過る。

まずー

「バがあつ!？」

「ーが、それは大賢者の体を横殴りするようにして飛来した蒼い炎の球体によって遮

られた。

「……やっと、見付けた」

同時に聞こえた恐ろしく冷たい声。

蒼火球が飛んできた方向を見て、俺は言葉を失う。

「……感謝するぞ、大賢者」。よくぞノコノコとこちらの世界に来てくれた」
そこに立っていたのは、ボロボロの騎士。

煤けた大剣を肩に乗せて、甲冑から覗く鋭い目を赤く光らせー
「これでやっと、貴様を殺せる」

ー憤怒に燃えるエリミネーターが、そこには立っていた。

二十一話 『決着』

灰色の空の下、尻餅を着いた俺を挟むようにして大賢者とエリミネーターが睨み合
う。

異世界人同士浅からぬ因縁があるのか……エリミネーターの怒りは、街を灰にした事
に対してではないようだった。

しかし……震える程に拳を握り締め、思わず悲鳴を上げそうになる殺気を放つエリミ
ネーターとは対照的に、大賢者は困惑した顔で目の前の騎士を見ている。

「オレを、覚えているか。大賢者」

腹の内で煮えたぎる怒りを抑えるので精一杯なのか——その言葉は途切れ途切れか
つ、ぎこちなかった。

大賢者は『ああ?』と怪訝そうに眉をしかめる。

「知らねえよ。お前みたいな雑兵ぞうひょうの名前を刻んでいられる程、僕の脳は安くないんだ」

「……そうか」

短く返事をしてから、エリミネーターは手に持った大剣でヒュツと空を切った。

軽く数十キ口を越えるであろう鉄塊を木枝の如く振るう臂力に息を飲む。

……でも、きつとエリミネーターでは無理だ。

エリミネーターの戦法は中距離からの”術式装填”と、近接しての卓越した剣技。魔法などをメインで扱う後衛タイプの大賢者相手には一見有利そうに見えるが、一違う。先程の”身体強化”による大賢者の動き。アレは明らかにエリミネーターよりも速かった。

こんなキチガイ染みた言動だが大賢者は、近距離でも遠距離でも俺たちより上だ。ハッキリ言つて勝ち目が無い。

「エリミネーターさんー」

「坊主」

『協力しましょう』と言い掛けて、エリミネーターがそれを遮った。

「手出しは許さん。我が半生……この身も、この技もー今この瞬間のためだけに、練り上げてきたのだ」

「でも……」

「あまり嘗めるなよ」

大賢者を真つ直ぐ見据えたまま、エリミネーターはドスの効いた声で言う。

「もしお前の知るオレを全力だと思つているのなら認識を改めた方が良い。格上殺しは騎士の誉れ……オレとて、奥の手の一つや二つ持ち合わせている」

ブツブツと何かを唱えてから、エリミネーターが自分の着ている鎧の胸部に手を当てた。

……何をやる気だ？ 生半可な魔術では一瞬で掻き消されてしまう。

「――術式破綻」

そう眩くと同時、銀色の鎧に純白の葉脈が凄まじい速さで走っていく。術式……破綻？ そんなの聞いた事無い。

しかし大賢者は、それを見て目を見開いている。

「勇者の技……？ なんて、お前が」

純白の葉脈によつて、エリミネーターの背に何か翼に似た紋様が描かれていく。

一枚目、二枚目、三枚目。三つの翼が背に浮かび上がった時……エリミネーターは、胸に当てていた手を離して腰を低くした。

少し焦った様子の大賢者がエリミネーターへと杖を向ける。

「ルークス■■■■！」

杖から発せられた光の螺旋がエリミネーター目掛けて発射された。しかし回避するどころか動こうともしない。

一体なにをして――

「――術式破綻……エンジンエラー……… 『三翼』!!!」

「おおっ!!」

「この間合いを詰めるのに、一体どれだけの年月を費やしたか……今オレは、オレの全存在を懸けて必ず貴様をこの世から葬り去る」

「速っ……!!?」

プリズム・バリア

目にも止まらぬ速さで大賢者の一寸先まで移動したエリミネーターが、大剣を上段に振り上げて真つ二つにししようとする。

大賢者はそれを防ごうと、半透明の防壁を展開した――

「邪魔だ!!」

しかし防壁は振り下ろされた大剣によって粉々に打ち砕かれ、飛び散った破片が大賢者の頬を切り裂く。

その顔を困惑と恐怖に歪めながら、大賢者は大きく後ろに飛び退いた。

「何者だお前!! 鎧を見た限り王国騎士のようだが、ここまでの手練れあそこには――」

「……今までお前が気まぐれに摘んできた幾千の小さな命。そのいずれかの庇護者だった人間だ」

『術式装填・カーネリアン』

体をダラリと脱力させたエリミネーターがそう呟くと、鎧の背部にオレンジ色の葉脈

が走り、そこから炎の螺旋がジェットブースターの如く発射された。

そしてそれを推進力とし、先程よりも更に速く大賢者へ襲い掛かる。

二足や四足歩行では絶対に辿り着けない、生物の領域を遥かに凌駕したスピード――

「調子乗んなア！」

■超■身■体■強■化■

――しかし、大賢者は寸手の所で身をよじってそれを回避する。

そして右足を軸に体を旋回させ、その勢いで杖をスイング。突進を回避されてガラ空きになったエリミネーターの腹に叩き込まれた。

鎧が大きくひしゃげ、エリミネーターは苦悶の声を上げながら地を転がる。

「クツ、クハハハアツ！ 近接なら勝てると思ったかい!? 体術なら自分の方が上かと思っただかい!? 残念だったねえ！」 身体強化”アリなら、僕は龍種だつて殴り殺せるんだ！」

「い、ぼつ………！」

杖に殴られた箇所を抑えて踞うづくまるエリミネーターは、どう見ても戦闘不能に見えた。鎧に走った白の葉脈が消えていき、コヒユツと喉から荒れた息が漏れる。

「……まだ、届かんか」

震える足で立ち上がったエリミネーターは何やら覚悟を決めたような声でそう呟いた。

顔に余裕を取り戻した大賢者は、ニタニタ笑いながら杖を向ける。

「勇者様、アリス、エルド。オレに……勇氣を」

「終わりだよバーカ！ 僕に齒向かった愚かしさを地獄で悔いろ！ バーカ！」

杖の先端におぞましいまでのエネルギーを溜めた大賢者を見据え、エリミネーターは、自らの首に大剣の刃を当てがった。

「え……？」

「ハア……」

自分の首に当てた刃を、エリミネーターは思い切り引いた。それと同時に鎧の接合部から吹き出る、おびただ夥しい量の赤い血液。

「――自殺？」

俺は一瞬だけそう思ったが、すぐに違うと気がつく。

首から出た血液は地に落ちる事は無く、赤い結晶となって、空中に留まっていたから。

「術式展開」

ビキビキと肥大化していき、最終的に巨大な樹のようになった血晶。

細く枝分かれしたそれぞれが天を衝かんばかりにうねる。

「――エリミネーターも飽和」していたのか。

「魔核展開・」王城バリスヒルド」
スタートアップ

その声に呼応するようにして、深紅の結晶が鈍い鉄色に変化した。

鋼鉄の樹木は猛スピードで組み変わり、徐々に何かの建物らしき物体を形作っている。
 く。

「なんだよ、これ……」

数秒と経たずして完成したのは、荘厳な中世の城——雲を掠めんばかりなその規模は、城と言うより山脈に近いが。

所々に設置された砲口や弩の数々は、この城が外敵を迎え撃つために設計された事を物語っていた。

——全てが鋼のみで構成された、山の如き戦闘城塞。
はがね

一瞬にしてそれを生み出したのは内部に居るであろうエリミネーターただ一人。それ故か出入り口はおろか覗き窓の一つも無い。突破するにはそれこそ正面から消し飛ばすしか無いだろう。

大賢者は、それを見てワナワナと体を震わせている。

「ああつ……!?!、ああああアアアアアアツツツ!? お前つ、”砦騎士”か!? モンスター聖
 伐の時は勇者の側についてただろ!?! なんでこっちの世界に追放されてんだよ!?!
 チィ……!?! なんて消耗してる時に限ってそんな大物がアツ!?!」

ヒステリックに叫んだ大賢者の杖の先から、光の螺旋が発射された。

鉄の城壁が光線と衝突し、あつという間にドロドロと融解していく。

このままでは数秒で溶け切るだろう。

「だが！ 残念だったなあ！ 僕の光魔法は15分もあれば小惑星を一つ削り切る高火力だ！ 今は魔力が残り少ないからそうはいかないが……お前程度、それでも十分なんだよ！」

「長々と講釈こうしゃくご苦労……確かに防げそうには無いな」

鉄城の上部から這い出てきたエリミネーターが、多量の血を流したせいか気だるそうな声で言った。

「しかし……オレの本懐を見誤ったな。大賢者。”砦騎士”……その名に思考を囚われたか」

光線に溶かし切られる寸前で、エリミネーターは大きく跳躍した。同時に鉄城は赤い霧になって霧散する。

光の螺旋はそれをすり抜けた。

「ちよこまかと……！」

「この世界は本当に素晴らしくてな。”市民図書館”……だったか。オレのような貧者でもタダで知識を得られる。だから、こんな代物も作れるようになった」

散った筈の赤霧が、空中のエリミネーターへ指向性を持って向かっていく。

その霧が変形し、エリミネーターを中心にして何かを構成する——

「戦闘機……?」

——先程の城とは打って変わって変わって小型のソレは、鉄色の戦闘機に見えた。

ジェット装置らしき大きな機構が不自然に付いており、そこから「火魔術^{カーネリアン}」の炎の螺旋が吹き出ている。

「F106」デルタゲート。冷戦時における米軍の最強兵器だ。設計図を暗記するのには苦労したが……最高速度はマッハ1.9。コイツは飛竜より遙かに速いぞ」

空に向けて放たれる光の螺旋を細かな旋回で回避しながら、戦闘機は飛行する。

大賢者は目でも追えない鉛色^{なまり}の神速に向けて攻撃を放つが当然命中せず、次第にその表情を焦燥に歪めていく。

ぬちや、べた、ずぎ

その時、俺の背後から何か湿った物が引きずられるような音が聞こえてきた。

咄嗟に音の方向へ振り向いて——絶句する。

「■■■■……」

『クツソ！ クソクソクソソ！ ふぎけんアッ！ なんてあんな力技で?!? ボガアッ

!?!』

ーそこに立っていたのは、右手に何かを持ったゴブリンエースだった。

片目は潰れ、腹は抉れ、足に至っては片方ちぎれかけている。満身創痕という表現さえ生温い、死にかけ。

「■■■■■■■■■■」

ゴブリンエースは俺を見るなり顔を凶悪な笑みに歪め、『土産だ』とでも言わんばかりに手に持った“ナニカ”を突き出してきた。

「っ……!?」

それは、俺が先程敗北したモンスター。

腰から下が千切れて上半身しか無く、顔に装着していた仮面は粉々に砕けている。

「嘘、だろ……!?」

ーゴブリンエースの手に持たれていたのは、ミラージュ・カットアップの死体だった。現実改編の怪物にして、Sランクモンスター。

てつきり殺されたと思っていたのに、この化物に勝ったのか……!?

「■■■■■■■■■■!!!」

ゴブリンエースはカットアップの胸にズボッと貫き手を滑り込ませ、そこから深紅の魔核を引き抜いて自らの口に放り込んだ。

すると、ゴブリンエースの肉体に変化が起こる。

額から鋭い角が生え、筋繊維が爆ぜんばかりに波打ち、骨格が急激に成長していく。その過程で傷も塞がり、ゴブリンエースはその口角をより一層深く歪めた。

そして周囲を見渡し……この場で一番の強者が誰か勘で理解したのか、大賢者へと突進していく。

「あがああっ!?!」

エリミネーターを撃ち落とす事に集中していた大賢者はゴブリンエースの接近に気付かず、打ち込まれた正拳をモロに食らった。

ダンパーカーにでも轢かれたみたいに吹き飛び、灰の海を跳ねながら転がる。

「なにが、どうなっ………でエッ!?!」

「■■■■■■!?!」

混乱しながらもヨロヨロ立ち上がり、体勢を建て直そうとした大賢者を追撃するようにゴブリンエースの飛び膝蹴りが突き刺さる。

それによって内蔵が破裂したのか、口から多量の血を吐き出して大賢者は倒れた。

「勝った………のか?」

あまりの出来事に啞然として呟く俺とは対照的に、空気を震して勝利の咆哮を上げるゴブリンエース。

ピクリとも動かない大賢者を見ながら、俺は妙な胸騒ぎを感じていた。

二十三話『龍の血晶』

「……死んだのか？」

空を飛び回っていたエリミネーターだったが、大賢者の異変に気がついたのか戦闘機を着陸させてこちらに歩いてきた。

ゴブリンエースが今度はエリミネーターに襲い掛かろうとしたので、羽交い締めにして食い止める。

「はい……多分」

「多分では駄目だ。確実に始末する」

エリミネーターは大剣に赤い葉脈を流し、炎魔術カーネリアンを装填する。

そして、大賢者に向けて紅蓮の螺旋を発射——

「……ひどいよ」

——が、地に伏せたまま蠅でも払うように振られた大賢者の手によって、炎は掻き消された。

「っ……！ 離れている！ こいつはまだ死んでいない！」

エリミネーターが叫び、一気に間合いを詰める。

「本当に、酷すぎる……」

自分へと振り下ろされた大剣を、大賢者は横に転がって回避した。

そして、灰に突き刺さった剣をそのまま横に薙ごうとするエリミネーターへ指先を向ける。

「ぐっ!?!」

エリミネーターは何か弾かれたように凄まじい勢いで吹き飛び、見えなくなる。

まだ、動けるのか……!?!

「君達はなんて酷い奴らなんだ」

膝を震わせながら立ち上がり、俺達を非難するような声で大賢者は言った。

「ぼくは、好きな人と大きな庭の付いた家で安らかに暮らすために行動しているだけなのに……いつもそうだ。人の心が無いクズどもは、容易く僕の心と体を傷つける」

「■■■■■■■■!?!」

ぶつぶつ怨嗟の言葉を呟く大賢者にはお構い無しに、ゴブリンエースが接近して正拳を叩き込もうとする。

しかし大賢者は僅かに上体を反らして拳を回避し、その手首を掴んだ。

「■■■■■■!?!」

「もう魔力も一割以下しか無い。弱っている人を寄つてたかつて痛め付けるなんて恥ず

かしくないのかな……」

掴んだ手首を起点にゴブリンエースを背負い込み、大賢者は勢い良く地面に叩き付けた。背骨がへし折れるような嫌な音が響く。

地面に倒れ伏すゴブリンエースを見下げる大賢者は、遠くから聞こえてくる飛行音に気が付いて視線をズラした。

そこには、エリミネーターの駆る戦闘機が音速で飛来してきている。

「爆殺しろ！ スーパーファルコン！」

戦闘機下部に装備された小型のミサイルが、エリミネーターの掛け声と共に大賢者目掛けて発射された。

「なんだこれ、変わった砲弾だが遅いな……簡単に叩き落とせえっ!? があああああああっ!!!」

杖をスイングしてミサイルを叩き落とした大賢者だったが、その衝撃によってミサイル弾が大爆発を起こして吹き飛ばされた。

足元の灰が舞い上がり、大賢者の姿を覆い隠す。

「まずっ……!」

大規模な爆発の余波を受け、俺は数メートル程地面を転がって止まる。

爆心地に居た大賢者は、ステイルシアに覆い被さるようにして倒れ込んでいた。

「は、あゝつ、せん、せえ」、無事、ですか……」

魔力を喪った状態でミサイルの直撃を受けた大賢者の傷は相当な物だった。

右目が潰れ、横腹が抉れ、顔面の皮膚が半分無くなっている。背中には爆発したミサイルの破片が無数に突き刺さり、さながら針ネズミのようになっている。

あばらが突き刺さって穴が空いた肺に必死に酸素を取り込もうと、こひゅーこひゅーという音を立てて空気を吸い込んでいた。

「今度こそ決着だ。遠距離からの掃射で確実に息を止める」

エリミネーターは懐から取り出したナイフで指を斬り、出てきた血液を手首のスナツプで空中に飛ばした。

すると血液は宙でみるみる鉄色に肥大化していき、一丁のマシニングを具現化させる。

「……ああ、先生。お許しください」

自分に照準を合わせる銃口を見て、大賢者はステイルシアに覆い被さったまま何かを呟いた。

そして、べつとり血に濡れた指先をステイルシアの頬に這わせー

「ー眼球を一つ。貰います」

「つ、う、ああああ……つ!？」

「ーぶちゆり、と。」

茎からトマトでも摘むみたいに、人差し指でステイルシアの右目を挟み取った。

そしてそれを、ぐりぐりと自分の潰れた目の方に押し込む。無表情で、まるでコンタクトでも入れ換えるみたいに。

「つ……!!? ステイルシアあああああつっつ!!」

「動くな坊主! 掃射に巻き込まれたいのか!」

エリミネーターが引き金を引き、大賢者へと鉛玉の嵐が向かっていく。

ステイルシアの眼球が、奴の目蓋の中でグリーングリーンと駆動する。

抜き取った眼球を嵌め込んだだけなのに、「目」として機能している……!!?

「……見える、見えるぞ……! ……これが精霊王の視界か!」

大賢者は足元にあったミサイルの破片を拾い上げて、前方に投げつける。

それには、深紅の葉脈が走っていた。

「術式装填、だっけ? 威力はお話にならないが、燃費は抜群に良いな」

「なっ……!!?」

「ー破片から発生した爆炎が、弾丸を融解させて消し飛ばした。

なんで……エリミネーターの技だぞ。こいつも使えたのか……?」

いや、そんな事よりステイルシアだ。右目をくり抜かれなんかしたら、出血多量で死

んでしまう。

「ステイルシア！」

「あ、あ、う、あ……う？」

呻きながら自分の右目の辺りを押さえていたステイルシアだが、俺の叫び声にビクつと肩を跳ねさせてこちらを向いた。

「なん、で……」

残った左目で俺を認識した途端、悲しいような憎らしいような、あるいは呆れたような表情に顔を歪めた。

「なんで、来ちゃったのさあ……！」

泣きそうな声で言ったステイルシアを見たまま、俺は視界の端で大賢者を捉えた。

傷口に“カーネリアン”を流し、その熱で止血しながらゆらゆらと立ち上がっている。

……本当にしぶといな。しかもここまで重症を負わせて尚も油断できる相手ではない。

どうにか隙を見つけてステイルシアを安全な場所に連れて行けないものか。

「さっさとくたばれ、大賢者！」

「ハッ……死ぬのは君だよアリアスくん？」

「つ、なぜ、オレの名をー!?」

「この目で”読んだ”のさ。君たちの記憶も経験も技術も、何もかもねえ……」

「■■■■!!」

砕けた背骨の再生を終えたのか、ゴ布林エースが跳ね起きて大賢者に拳を振り下ろした。

大賢者は、ステイルシアの目でゴ布林エースを一瞥すると醜く口角を吊り上げる。「良い技だ。それに頭の良いゴ布林だな。”ブジュツカ”との戦いで学んだのか? ならば僕も君のを真似するとしよう」

素早い足払いでゴ布林エースの体勢を崩し、大賢者は拳を構える。

「秘拳、”流星”」

弩の如く引き絞られた大賢者の腕が、残像も残らない超スピードで拳骨を振り下ろしてゴ布林エースの頭蓋を打ち砕いた。

……俺と初めて出会った時にゴ布林エースがした攻撃と同じ動きだ。

それに、俺たちの記憶や経験を”読んだ”だつて?

「まさか……」

……ステイルシアの、目を見た相手の記憶を読み取る能力。

もしかしてあれはステイルシア自身ではなく、”眼球”に宿っていたのか?

だとしたらローマずい

「術式破綻、”エンジエライト”!……っ、『四翼』!」

「なるほどなるほど、血中の鉄分……へモグロビンに魔力を通す事で引き起こされる異常な身体活性。それが”術式破綻”か。流石の僕も思い付かなかつた。負担は大きい、その方法なら少ない魔力でも凄まじい身体能力を得られる」

エリミネーターの鎧に四枚の白い翼が浮かび上がり、さっきまでとは比べ物にならない速度で大賢者に斬りかかる。

大賢者は、それを薄目で睨んだ。

「ローなら、僕も使うとしよう。エンジエライト『十翼』」

「なっ……!?!」

大賢者の全身に、ドス黒い翼の紋様が走る。

眼前まで迫ったエリミネーターを大賢者が軽く小突くと、それだけで吹っ飛ばされた。

……術式破綻。

浮かび上がる翼の枚数に応じて身体強化が強まるのは察せるが、あれは一体なんだ。エリミネーターの軽く倍はあるぞ。

「……おや、使用者の適正次第で翼の色が変わるんだね。なかなか粋いさじゃないか。”デ

モンズライト”とでも名付けようかな」

「貴様の穢^{けが}れた身で……！　その技を使うなああああつつつ!!! エンジェライト『八翼』！」

エリミネーターの鎧の表面に浮かび上がる白い翼の数が、一気に増える。

凄まじい速度で突き出された大剣を、大賢者は指先で掴まんで受け止める。

ピシッ、と掴ままれた部分の剣身が指の形にひび割れた。

「なんと、いう……！」

「終わりだ」

「が、あつ……!?!」

顔面に大賢者の拳を叩き込まれ、エリミネーターは膝から地面に崩れ落ちた。

あつという間に戦闘不能にされたエリミネーターとゴブリンエースを足蹴にしてから、大賢者はゆっくりと俺の方へ振り向いた。

「つ、大賢者……！」

「さあ、ここからはボーナスタイムつて所かなあ？　とりあえず君の記憶も読んでー……ああ？　なんだこの記憶、なんでお前と先生が……」

大賢者の右眼がグリグリと動き、俺の姿を捉えた。

そしてニタニタしながら俺の目を見詰めていたが、少しずつ表情が曇っていく。

喉が潰れて上手く呼吸が出来ない。それどころか風圧で首がもげそうな勢いだ。

「チイツ！ あア分かった！ 白状する気が無いならお前は簡単には殺してやらない!!! 鼓膜を破って脳に家畜の糞尿を流し込みながら四肢を切断した後に、自分の腸で首を締め上げさせてころおす!!!」

意識を失う直前で、大賢者は俺を地面に叩き付けた。

なんとか立ち上がるうとするが、脳がシェイクされ過ぎて平衡感覚が機能してない。

「■■■■■■!!!」

「ああああしつこいクソゴブリンが!! いい加減死ねよ！ 生き恥晒して恥ずかしくないのか!?!」

大賢者は横から向かってきたゴブリンエースの飛び膝蹴りを捌き、手刀で腹を貫く。

ーその拍子に、奴の懐から何か丸い物体が落ちるのが見えた。

「……あれは」

それは、見ているだけで全身がゾワゾワする程の力を発する深紅の宝玉。

その迫力はまるで、巨龍の咆哮を真っ向から浴びているような感覚に陥ってしまう程。

……” 爛れ古龍” の魔核だ。こちらの世界に来た瞬間に大賢者が殺したモンスター。

だが、その脅威ランク指定は“S”。あのミラージュカットアツパーの一つ上だ。
ーあれを取り込めれば、あるいは。

腹を貫かれたまま大賢者に連打を打ち込むゴブリンエースを横目で見ながら『もう少しだけ持ちこたえてくれ』と祈る。

匍匐前進で魔核の落ちている方に向かう。

距離は二メートルも無い、無いのだが、大賢者によつて繰り返し頭蓋の内壁に打ち付けられた脳ではそれさえ至難だった。

十センチ、五十センチ、百五十センチ……這いずつて、やつとの思いで腕を伸ばせば手に取れる距離までたどり着いた。

そして、震える腕を持ち上げー

「ーオイ何やってんだお前」

「っ……………」

ー伸ばした手が、大賢者の靴底に踏みつけられた。

指がひしゃげる感覚。これじゃマトモには機能しないだろう。

大賢者は、グリグリと磨り潰すように俺の手を踏みつけ続ける。

「オイオイ……人のモン、何盗もうとしてんーあ？」

「……………う？」

『ぼすっ』と。

その時、場違いなまでに緩い音が大賢者の方から聞こえた。

不思議に思い、視線だけ上に向けてそちらを見る。

「逃げ、なさい……きみ、だけ、は……」

ーそこに立っていたのは、虚ろな目で血だらけの拳を大賢者にぶつけるステイルシアだった。

出血が酷くてもうほとんど体に力が入らないのだろう。繰り返し大賢者に打ち込まれる拳には全く威力は無い。

ここまで必死に歩いてきたのか、ステイルシアが通ったであろう灰の地面にはおびただし量の赤い血のカーペットが敷かれていた。

自分の腹にぶつけられた拳とステイルシアを交互に見ながら、大賢者は困惑した表情をしている。

「せんせえ……！　なんで、なんでなんですか!?　なんで僕に攻撃するんですか!?

貴女あなたは騙されているのです!　貴女が弾圧すべきなのは、ここに横たわるこの男なのです!」

「くっ、くくく、なんでって……?　馬鹿だな、きみは……そんなの、君が嫌いでこの子が大好きだからに決まってるじゃんか……特別な理由なんて何も無い。女心って、意外

「……さあ、撃ちなよビーム。君も道連れにするけど」

「っ……うううううううううううう!!」

俺は急いで爛れ古龍の魔核を飲み込む。

喉を通り、食道を通過し——胃に着地した瞬間、そこにもう一つ心臓が出来たかのような感覚が全身を支配した。

「ぐ、があああああああつ?」

全身の傷口という傷口から、龍の首や腕のような形状の結晶が無数に這い出る。

それらは、俺を食い殺そうと自我を持って動いているように見えた。

——俺が、呑み込まれる。

強すぎる力の代償、圧倒的格上の魔核を取り込もうとした事の愚かしさ。

体内で蠢く魔核から『貴様などに喰われて堪るか』という意志がひしひしと伝わってくる。

前方を見ると、既に大賢者の魔法はスティルシア目掛けて発動する寸前だった。

——このままでは、間に合わない。

「爛れ古龍……! 俺の言う事を聞けえええ!」

背部の傷から目の前に伸びてきた龍頭が、俺を喰らわんと大口を開ける。

『+++++++++!』

感じたのは、”熱”。

その熱を痛みへと昇華する痛覚さえも一瞬で焼き切る、おぞましいまでの”熱”。

あまりの眩しさに目を細めながら、心の中でそう呟いた。

……水のアイオライト、炎のカーネリアン、土のオーロベルデイ……いずれも無理だ。俺にこのレーザーを防ぐに値する手札は存在しない。

俺の”術式装填”では不可能——

「……待て」

頭に手を当て、記憶を掘り起こす。

……ある。一つだけ、この状況を切り抜けられるかもしれない切り札が。

エリミネーターに習ったつきり、一度も使用していなかった”術式装填・ラピスラズリ”。

紫色の煙を噴出し相手の目眩ましをするサポート特化の技。

……『煙は光を拡散する特性を持つ』

授業で余った時間に、科学の先生が余興代わりに教えてくれた事がある。

元は赤外線の特異性を説明する話だったが確かにそう言っていた。『通常の光ではいくら光量があっても煙を通過できないのだ』と。

この光魔法とやらの赤外線が含まれていたら、それこそ一巻の終わりだが。

「やってみる、価値はあるな……」

術式装填、”ラピスラズリ”。

自分の体に付着した血液に、紫色の葉脈を通す。

「っ、なんだ!？」

俺の全身から吹き出た紫煙が、辺り一帯を覆う。初めての使用だからか他に比べて練度は低いが……十分だ。

前を見ると、光は煙の壁を突破できず四方八方に散っている。防御成功だ。

思わず頬を冷や汗が伝う。この閃きが無ければ俺は間違いないで死んでいた。

「チイイイイツツツ!!」

「っ!？」

煙の層を突き破って大賢者が接近してきた。

「……恐ろしく速い。だが、見える。」

爛れ古龍の核を取り込んだからだろうか。あらゆる身体機能に凄まじいブーストが掛かっている。

「死ねエエエエ!!」

「ぐっ……!？」

唸りを上げながら向かってくる大賢者の右ストレートを紙一重で回避したと、思ったら避けた方向にハイキックが飛んできて胴体を撃ち抜かれた。

なんとか顔を上げると大賢者の右目。つまりステイルシアの眼球が、爛々と光を放ち

ながら俺を睨んでいる。

「思考を、読まれてるのか……!」

大賢者は、俺の思考を覗く事で次の行動を予測している。間違いない。

こちらだけ手札を公開しながら一対一でババ抜きをしているような物だ。攻撃も回避も完璧に読まれてしまっている。

肉弾戦で勝てる相手じゃない。

俺は、バックステップで距離を取ろうとする。

「下がったな阿呆が! 術式装填、ウズシオ!」

「なっ!」

——そんな俺を追撃するようにして、大賢者の手から発生した水の質量を持ったハリケーンが向かってくる。

……技をコピーされたのか。だが俺の物より遥かに規模が大きい。

無限の水刃を内包した規格外の竜巻は、地面の灰を巻き上げ更に破壊力を増しながら俺へ直進する。

「術式装填……! アイオライト! カーネリアン! オーロベルデイ!」

竜巻目掛けてがむしやらに魔術を放つが、まるで通用していない。風と水の奔流に吸い込まれては消えていく。相殺は不可能だ。

……なら。

「……出てこい。爛れ古龍」

俺の呼び声に応じるようにして、全身に刻まれた傷口から無数の黒い龍腕が這い出てくる。

俺はしゃがみこみながら、自分を中心にそれらをドーム状に編み合わせて簡易的なシエルターを作成した。

……『建物に避難し、身を低くして過ぎ去るのを待つ』。嵐をやり過ぐすにはそれが一番だ。

僅かな光も差し込まぬ龍鱗のシエルター。それを何重にも展開し、俺は目を閉じて耳を澄ます。

外から聞こえるのは吹き荒ぶ^{すさ}風音と、それにガリガリと削られる龍鱗の音。

長くは持たないだろうが……さっきの光のレーザーに比べれば遥かにマシな威力だ。

それにこの魔術は打ち出した後は制御不能だし、持続時間もそこまで長くない。自分の技だから分かる。

あの規模から考えて……恐らくは、二分程度。

それだけ耐え切れれば、きつと反撃のチャンスがー

「チイツ！ 使えねえ、所詮は三下の魔術か！ 魔力の無駄だった……！ 散れ、ウズシ

オ！」

外から聞こえていた風切り音が、大賢者の声と共に聞こえなくなった。

……妙に決着を焦ってるな。このままやっていけば、ジリ貧になるのは俺の方なのに。

俺は龍腕のシエルターを解除し、大賢者の動向を確認しようとする。

しかし、先程まで奴が立っていた場所には誰もおらずー背後から、おぞましいまでの殺気を感じた。

「ーっー！」

「ぐっ………！　なんて奴だ！　罪無き人に暴力を振るってまで生き残りたいのか!? 君はなんて卑しい人間なんだ!!!　そんな奴に先生が心を許すワケが無い！　やはり何かしたんだな!?　だから僕の事を嫌いなんて言ったんだ………！　このゴミ野郎があああああ!!!」

体を旋回させながら放った裏拳が、大賢者の顔面を横殴りにした。反応されるとは思わなかったのか、怒りに顔を歪めた大賢者が大声で捲し立ててくる。

気付かなかった………！　いつ背後に回り込まれたんだ。

俺の攻撃は殆ど効いた様子が無く、大賢者は腰だめに構えた拳を爆発的な速度で発射する。

「オラアアアツ!!」

「つ、がああああああつ!!!」

——大賢者の拳と俺の拳が真正面からカチ合う。

金属同士がぶつかり合ったみたい鈍い音。インパクトの衝撃で空気がビリビリ震える。

黒い翼の紋様が走った腕の膂力は凄まじく、拳から伝わった衝撃だけで俺の右腕は使えなくなる。

だが向こうも無事では済まなかったのか、拳からダラダラと流血している。

「先生は僕のだアアアツ!!!」

へし折れた腕にギブス代わりの龍腕を纏わせ、再度大賢者の拳をガードする。

……冷静さを失っているな。ステイルシアの眼を使えば俺の動きなんて簡単に読めるのにそれをしていない。ただ力任せに暴れているだけだ。モンスターと変わらない。

それでも十分な脅威ではあるが……負け戦ではなくなった。

こうなったら徹底的に煽ってやる。こいつを怒らせて理性を奪い、『思考を読む』という事を選択肢から削ぎ落とすのが俺にとって唯一の勝ち筋だ。

覚悟を決め、大きく息を吸い込んでから叫ぶ。

「ステイルシアはあ！ お前のごと！ だいつつつ嫌いだけどなああああ!?!」

薄らぐ意識を必死に繋ぎ止め、指先に力を込め続ける。

「術式刻印、エンジエライト……！ 坊主！ 受け取れ！ 絶対にその手を緩めるな

!!! そいつは必ずこの場で殺さなければならない！」

その声の方向を見ると、地面に倒れたエリミネーターが俺に何かを投げようとしていた。

それは、純白の葉脈が通った小さいナイフ。

弱々しい力で投擲されたナイフは、俺の右肩に突き刺さった。

——瞬間、ナイフから俺の全身に走る翼の紋様。

筋肉に力が滾る。酸素不足で萎びていた筋繊維が、別の動力で膨張するのを感じた。

「おお” お” おおお” お!!!」

大賢者の首から、頸椎にヒビが入るようなピキツという音が手に伝わってくる。

——窒息なんて待つまでも無い。今の俺なら、こいつの首ごと捻じ切れる。

ナイフの”エンジエライト”から流れ込んでくる膨大な力が俺にそう確信させた。

「や”、やめ”、ろ……」

「やめて、堪るかよ……!!!」

大賢者の口から泡が吹き出し、目が充血する、

そして更なる力を込めた。今度は酸素の遮断ではなく脛椎をへし折るために。

「ア”、ア”」
ペキ、メキヤ。

大賢者の首が、可動域を遙かに越えてゴキヤリと曲がった。

「はあ、はあつ……………」

「せん”、せえ”……………」

力を失つて俺の首から離れた大賢者の手が、星空を掴むように天へと伸ばされる。

「また……………あなたと一緒に……………魔法の研究を、したかつ、た……………」

そう言い残して、大賢者の体から完全に力が喪われる。

虚ろな目に光は無く、呼吸も停止している。

「……………勝つ、た？」

信じられず、そう呟く。

この怪物に、勝つたのか。俺は。

思わず力が抜けて、へなへなと膝から地面に崩れ落ちた。

「つ、ステイルシア！」

ーが、すぐにハツとしてステイルシアに駆け寄る。

倒れたステイルシアは、抉り取られた右目の場所から血を流しながら笑っていた。

「……………凄いや。本当に勝っちゃった」

「ステイルシア、速く血を……！」

「……いや、だいじょぶだよ。……ほら、見て」

指先に止血用の炎魔術カーネリアンを通してながら言った俺を嗜たしなめるように、ステイルシアは自分の服の裾を捲った。

「……もう、助からない」

「っ……!?!」

……服で隠れていたステイルシアの腹部は、三分の一程が丸く抉り取られていた。

ピンク色の臓腑が傷口から見え隠れし、血が止めどなく溢れている。

「そんな、な」

「はーっ……、肝臓全損、大腸半壊、胃半壊、腎臓全損……って所かな。痛くて寒くてどうにかなりそうだよ。下手に魔力があるせいで即死もできない」

クツクツと笑いながら、ステイルシアが自嘲気に言った。

が、すぐに俺の顔を見て真顔になる。

「……なんで、泣くのさ」

ステイルシアの顔に落ちた液体を見て、俺は自分が泣いている事に気が付く。

そんな俺をステイルシアは不思議そうに見詰める。

「私は今日、君に酷い事をたくさん言っただろう……? だから、私の事なんて嫌いに

なって良いんだよ。悲しまなくて良いんだよ」

何か強い感情を押し殺した時のような、震えた声でステイルシアは言った。

「それに……ねえ、君はさ、人の魂って、どこに宿ると思う？」

ふと、といった感じステイルシアが言う。

「人の、たましい……？」

「そう。『魂の在処』だよ……私はね、それは『記憶』だと思ってるんだ」

ステイルシアは細々とした声で続ける。

「記憶がある限りその人はその人でいられるし、それを無くしたら別人になってしまう。その『記憶』を毎日失っている私には、魂なんて無いんだと思う。

……君の事だってこんなに大好きなのに、一緒に過ごした日々に実感が無いんだ。ただの脱け殻なんだよ」

『当たり前だ。私が持つているのは『記憶』ではなく君から読み取った『記録』なんだから』

ステイルシアはそう呟いてから、けほけほと咳き込んだ。

「だから……そんな奴のために君が悲しむ事なんて無いんだよ？ ……君はさ、いい人を見つけて、その人と一緒にふつーに生きて、死んで……しあわせに、なってほしいん

だ」

にこつ、と花のように微笑んでからステイルシアが言う。

「おれ、は……」

「さあ笑つて。私を安心させて死なせてよ。ほら、スマイルだつてば……お願いだ」

——俺は。

「俺は……お前が居てくれないと、幸せになんかなれない……！」

——その言葉にステイルシアは目を見開き、何度か薄い唇を開閉させてからきゅつと閉じる。

それから、憎らしそうに俺を睨んだ。

「なんてこと、言うのさ……ああ、だめだ。泣かないつて決めてたのに、君のせいだぞ」
ステイルシアの笑みが崩れ、目から大粒の涙がぼろぼろとこぼれ落ちる。

「なんか……頭がぼんやりしてきたよ。血が出すぎちゃったのか、嬉しすぎて惚けてるのか……自分でも、分かんないや……あーあ、死にたくないなあ……君と出会うまでは、ずっと消えてしまいたかったのに」

ステイルシアは弱々しい両手で俺の頭を抱き締め、自分の方に引き寄せた。

「……あははあ。だめだ……目が無いせいで、君の心が見えないや。最期に綺麗な記憶もの
見ておきたかったのに……じゃあ、代わりに」

ちゅつ、と。俺の唇に柔らかな感触が触れた。

血の臭いと甘い香りの混じったソレは、俺に奇妙な感覚を残して離れる。

「えつ、へへへ……ちゅー、しちやった」

血に濡れた顔でにまにまと嬉しそうに笑って、ステイルシアは空を見上げた。

目が細まり、呼吸による胸の上下が浅くなつていく。

「……ステイラー」

「ーああ、了解だ。脅威ランクSS、”白夜”^{びやくや}を駆逐する」

ーその時、背後から見知らぬ男の声と足音が聞こえてきた。

咄嗟に振り向くと、こちらに歩いて来ていたのは二十代半ば程の黒髪に白髪混じりで

片目に眼帯を着けた男。

漆黒の巨槍を灰の地面に引きずり、一本線のような跡を作りながら向かってくる。

「……誰だ」

「初めましてだな、”熾天狩り”」

妙に掠れた声の眼帯男は、友好的とも敵対的とも取れない声色で俺に言った。

……こいつ、やはり駆逐官か。”白夜”とか言ってたな。大賢者を倒しに来たのか？

「……悪いけど、怪物はもう倒したぞ」

「ああ。途中からだが見ていたよ。お前は素晴らしい。”過去最高”かもしれない

な——だが、怪物はまだ残ってるじゃないか」

不可解な発言をした男。俺は一瞬だけ首を傾げたが、すぐに恐ろしい事に気が付く。男の視線が、地に伏せるステイルシアへと注がれている事を。

「……おい、待て。それ以上近づいたら殺す」

「ああそうだな。出来るものならせび殺して貰おうじゃないか」

——男は巨槍を肩に担ぎ、ステイルシアに一步近づいた

「術式装填、アイオライト！」

警告通り、俺は血に濡れた手の平に青い葉脈を通し、眼帯の男へ向ける。

そしてそこから発射された水の奔流が男を吹き飛ば——

「——術式装填、”マーキュリー”」

「な……」

「悪いな……これは所謂『負けイベント』というヤツだ」

——男の持つ槍の先端から、星と見紛うまでに巨大な水の球体が現れた。

それは俺の水魔術を容易く取り込み、更にその大きさを増す。

「何者だ、お前……!?!」

「いずれ分かるさ。きつとな。それじゃ今はさよならだ」

水^{マイキュリー}星が、俺へと墮ちてくる。

サイズが大き過ぎて回避しようなんて馬鹿馬鹿しく思える。

俺は——啞然としたまま、“水星”に押し潰された。

……薄れゆく意識の中、俺が最後に見たのは。

「……ステイルシア、
■■■■■■■■■■」

「君、は……」

ステイルシアの胸に槍を突き立てる、男の姿だった。

E x 『精霊王と彼女のすべて』

ずっと、何かに恋い焦がれていた。

ばくぜんと漠然と、しかしそれでいてさんぜん燦然と。

磨りガラスごしに見える大火のように燃え盛るこの感情の正体を私は知らなかった。そして、それは今も変わらない。

ーーだけど。

君と過ごした短い日々は、そういう事がどうでも良くなってしまうぐらい、楽しかったよ。

「……………」
E x : 『精霊王と彼女のすべて』

「……………どんだ、んんは」

目の前に広がる辺り一面の田園風景に、でんえん精霊王は困惑していた。

照りつける日差しに目を細めながら、いやにひんやりする足元に目を向けると、どうやら自分が泥水に足を突っ込んでいるらしい事が分かった。

彼女の最後の記憶は、周りの裏切りによつて“異界流し”の術式へと誘い込まれ、そこから脱出しようとしたところまで。

今日はまだ眠っていないから『リセット』はされていない筈だ。記憶に間違いは無い。

「ふむ……」

——つまり、ここは異世界という事か。

精霊王は細い顎に手を添えながらそう結論付けた。

軽く周りを見渡すが、人は居ない。

「……まぼろし」

彼女——精霊王は、一度眠ると新しい記憶がほとんど消え去つてしまう。

それをカバーするのが、右目に宿った『他者の記憶を読み取る能力』。

自分をよく知る人間にそれを使用する事によつて、彼女は“精霊王”という人物を理解し、模倣してこれた。

記憶を保管しておく外部サーバーのような物だ。

……しかし、今は周りに人が居ない。

その意味するところは、このまま新しい人間……『記憶サーバー』を見つけられな

——この世界の先住民か。

体は細く、武器を持つている様子も無い。少々目付きは悪いがどこにでも居そうな普通の少年だった。

……僥倖だ。

精霊王は心の中でそう呟いた。

この少年を記憶サーバーに仕立て上げられれば、ひとまず目先の不安は消える。困惑した風な少年の目を覗き混みながら、精霊王は口端を歪めた。

——名前、思想、言語、経験。

この少年に関するあらゆる情報が目から流れ込んでくる。

「あ、あ、あ……ボクは……いや違うな、セツシャ……ああ、雌めすの一人称はワタシなのか」

一瞬にして読み取った言語のすり合わせを行いながら、精霊王は少年に歩み寄る。警戒させぬよう、出来るだけにこやかに、可能な限り無害そうに。

まるでそこらの村娘のような普遍さを意識して、精霊王は少年に話し掛ける。

「君の母語はこれで合っているかな。景色を見た限り高度な農耕民族のようだが……あれ、私の言葉通じてるかい？」

「え、ちよつ……」

「通じてるようだな。体の造形も近い……似たような進化を辿ったのだろうか。ちよつと失礼……ふむ。性器も私の世界の猿人族と大差無いな……」

「ひああっ!? 股さわるな! おい!? なんなんだお前! チカンだぞ! 女の子だからって何でも許されると思うなよ!」

精霊王はスキンシップと異界人の身体構造の把握を兼ねて少年の体を触ろうとしたが、少年は驚きながら転んで泥にダイブしてしまった。

「どうやら女が積極的に男に触れる事が是とされていない文化圏らしい。」

転んだ少年に手を差し伸べながら、『次は気を付けよう』と精霊王は心に誓った。貴重な現地人の好感度を下げるのは合理的ではない。

「私は何なのかーという質問には答えよう。私はスティルシア。こことは別の世界から来た者だ」

「ーよし、と精霊王は内心ガッツポーズをした。」

これで自分が異世界から来たという事は彼に記録できた。あとはどうにかして、この少年の家に住まわせて貰う事が必要だ。

記憶と思考を読んだ事で、自分の容姿がこの世界ではー少なくともこの少年の基準では「美少女」に属する事は分かった。

最悪、色仕掛けでもなんでもして懐柔できるかもしれない。

そういった事は不馴れだがやるしかない。

泥から道路に上がってため息を吐く少年の背中をじいっと見ながら、精霊王はそう思案した。

■

「……それ、私も食べて良いの？」

「当たり前だろ」

場面変わって少年の家。

なんとか住まわせて貰う事を取り付けた精霊王は、少年が机に置いた皿を見詰めていた。

更に乗っているのは、芳ばしい香りを放つ丸い肉の塊。

少年はハンバーグと言っていた、この世界特有の食べ物だ。

記憶を読んだとはいえ、一度に全てを把握するのは不可能。分からない事もある。

脳がオーバーヒートしてしまうし色々ところどころがらってしまう。

「おいし……」

はむ、とハンバーグを口の中に運び、精霊王は目を見開いた。

——温かい。種族の頂点という地位である以上、それなりに舌は肥えている自信があったが……彼女は驚いていた。

この料理に金銭が発生するわけでもなければ、少年は私が”精霊王”である事すら知らない。

なのにも関わらず、ここまで手間の掛かった美味しい料理を出してくれた。変な薬が入っている様子もない。

その事実には困惑と驚愕を抱きながら、彼女は静かにハンバーグを食べ続ける。

「覚えてる食べ物の中で一番おいしかったよ！」

食べ切った後、せめてもの礼儀として精霊王は少年にそう言った。

自分の世界で見た『普通の少女』の笑顔を意識して、にぱつと笑いながら。

『そりゃ良かった』と言いながら皿を下げる少年を見ながら、精霊王は溜め息を吐いた。

……こちらの世界も、意外と悪くない。

精霊王は少しだけ目を細めながら、元の世界に帰るまではこの世界で普通の少女みたく過ごすのも良いかもしれない。そう思うのだった。

それからこの少年が熟女趣味だと発覚し、自分の色仕掛けなど無意味だと知ったのは別の話。



「待ちたまえっ」

「なんだよ」

「私も行きたい！」

「嫌だよ！」

「いーきーたーいー！」

「うるさいぞ千歳児！」

「ぐっ、ぬぬぬ……！」

その次の日、精霊王は外へ買い物に行こうとする少年の前で駄々を捏ねていた。

もつとも彼女は自分が精霊王である事を忘れてしまっているのだが。

昨日、この世界が思った以上に心地よかった精霊王は、自分でもビックリするぐらいはっちゃけてしまったのだ。

その結果、彼女は記憶サーバーである少年に『ちよつと頭が弱くて陽気な女の子』だと認識されてしまい——この通り、演技ではなく本当にちよつと頭がアレで陽気な少女になってしまっていた。

彼女の記憶維持システムの仕組みは、『記憶サーバーから見た自分ステイルシアになる』というこ
と。

つまり、記憶サーバーの人間が彼女を善人だと思えば善人になるし悪人だと思えば悪人になる。

そのせいで精霊王は今、以前の彼女を知る者が見れば卒倒するであろうハイテンションで少年と言いつ争っていた。

そんなこんなで少年を言いくるめ、外へ連れて行って貰った精霊王は——空を見上げて、顔をしかめる。

「……うつすらとだが、空に奇妙な魔方陣が展開されているのだ。

まだ未完成なようだが、少しずつ大きくなっている。

「……異界流し、か」

少年の記憶を読んだ事で、こちらの世界にモンスターが送られているのは知っている。恐らくあの魔方陣は次の準備だろう。

完成するのは明日の昼ぐらいか。

「……この子のために、スライムの魔核でも集めておくかなあ」

バスに揺られながら、精霊王は横に座る少年の顔を見た。

何故か自分の胸の辺りを見ながらアタフタしている彼を不思議に思いながら、精霊王は猫のように『くふあああ……』とあくびをするのだった。

■

「うあああああ、どうしようどうしよう……!? 死んじゃうってばあ……」

——本格的にモンスターが襲来してきた日、精霊王は頭を抱えながら半泣きで居間を

ぐるぐるしていた。

少年が、友人を助けに一人で街の方に向かってしまったのだ。

……自分に、家を守るよう言い残して。

あの少年は、鼻肩目無しに見ても才能の塊だ。

しかし今はまだ弱すぎる。一対一ならワイバーンにすら殺されてしまうだろう。生き残れるとは思えない。

「行かなきゃ……！」

精霊王は玄関に走っていき、扉を開けようとして「少年の”祖母の記憶”を思い出す。

……この家は彼らの思い出の場所。魂の無い自分なんかには分からない、大切な大切な居場所。

モンスターなどに壊させるわけにはいかない。

「……ちよつと時間は掛かるけど、防壁を張っていこう」

「……どうか、私が行くまで持ちこたえて。」

そう願いながら、精霊王は防壁の展開を始めた。

それから、先程までのテンパリが嘘のようにカッコ良く少年の前に登場してどや顔したのは秘密である。

が湧いてくる。

そして、そんな彼を睨み付けてしまった自らへの嫌悪感も。

「……また、忘れてた」

毎朝、精霊王は少年の事を完全に忘れている。だから眠る時は本当に辛いのだ。それは楽しかった今日の思い出との決別なのだから。

記憶を読めると言っても、経験できるわけではない。

だから朝に彼の記憶を読むと、ついその中にいる自分を羨んでしまう。

『どうして君の瞳に写る私はこんなに幸せそうなんだ』と。

……思い出すのは、昔の事ばかりだ。

自分が持つていられるのは、もう会えない程に昔の人々の記憶だけ。

今を生きる愛しい人の事は覚えていられない。

「難儀な、ものだねえ……」

キツチンで朝御飯を作る少年の背を見つめながら、精霊王は泣きそうな声でそう呟いた。

「……でも」

……きつと、大丈夫。

精霊王は、にへらと顔を綻ばせて立ち上がる。

だつて……

——きつと今日も、私は君に恋をするから。

■

『さあ、私の瞳を覗いてください！ さすれば全てを思い出す筈です！ あなたの全盛を……！』 精霊王” スティルシアを取り戻してください！』

「つあ、つ……」

テレビに写る狂気に満ちた男の瞳と目が合う。

——精霊王、精霊王？ やめてくれ、そんなの知らない。知らないんだ。

だが” 大賢者” の目からは逃れられず——彼女は、思い出してしまった。

「ああああああ……！ああああ■■■■■■■■!!!」

「スティル、シア……!?!」

自分が精霊王である事も、自分が本当はこんな人間ではないという事も——自分が、この子と笑いあつていて良いような存在ではない事も。

——奴を、止めなければ。

さつき記憶を読んだ時に奴の思想も流れ込んできた。大賢者はこの星を滅ぼすつもりだ。奴にはそれだけの力がある。

大方、人間を洗脳か飽和でもさせて元の世界を攻める際の兵隊にでもする気か。

……以前の精霊王なら、奴の思想に賛同したかもしれない。

だが今はもう無理だ。彼女は人に傾倒し過ぎた。

誰かに優しくして優しくされて……人の営みの暖かさを知った彼女では、もうかつてのように機械的に殺戮を繰り返す事はできない。

……だから。

「私は、君の事なんて知らない」

「は……？」

……この少年に、嫌われなければ。

家を守る防壁の展開に魔力の大部分を割いてしまった自分では、大賢者には勝てないから。

……この優しい少年は、きつと自分の事を助けにきてしまうから。それでこの子に死なれでもしたら、私は狂ってしまうだろうから。

「君は以前から”ステイルシア”を知ってるんだろうけど、”私”は今日初めて君と話した」

「そんな、わけ……」

出来るだけ敵対的に、限界まで冷徹に。

バクバクと破裂しそうになる心臓を無視して、精霊王は無理やり嘲りあざけの形に顔を歪めた。

「実の所、私は君に大した思い入れも無いんだ」

うそだ。これ以上無いってぐらい、君を愛している。

「自分が出演しているドラマか映画を見ているような気分だったよ。知識としては知っているが体験した覚えは無い……尤ももっとも、ボーイミーツガールは嫌いだから感情移入は出来なかつたけどね？」

ちがう。私が嫌いなのは、君の事を忘れてしまう私自身だ。

「まって、くれ」

「……じゃあね」

呆然とした表情で立ち尽くす少年に背を向け、精霊王は玄関に向けて歩き出す。

そして時空の扉を潜り、大賢者の元へと向かうのだった。

■

「……凄いや。本当に勝っちゃった」

「ステイルシア！」

出血過多により霞んだ精霊王の視界に、自分へ駆け寄ってくる少年の姿が見えた。

あの大賢者を打ち果たした、英雄の姿が。

「強く、なったなあ……」

自分にしか聞こえないぐらいに小さい声で、精霊王はそう呟いた。

「……この子ならきつと、自分が居なくなっても大丈夫。

天才だとは分かっていたが、一月でここまで化けるとは思わなかった。

「ステイルシア、速く血を……!」

「だいじょーぶ、だよ。……もう、助からない」

服を捲って腹の傷を見せると、少年は一気に絶望した顔になる。……本当に、優しい子だ。

少年の頬に伝う涙を拭おうとするが、体に力が入らない。

「なんで、泣くのさ……私は今日、君に酷いことをたくさん言っただろう……? だから

ら、私の事なんて嫌いになって良いんだよ。悲しまなくて良いんだよ」

だから、泣かないで。

君が泣くと私まで辛くなってしまう。

「君はさ、いい人を見つけて、その人と一緒にふつーに生きて、死んで……しあわせになつてほしいんだ」

「おれ、は……」

「さあ笑って。私を安心させて死なせてよ。ほら、スマイルだつてば……お願いだ」
精霊王は、にこつと笑いながら少年にそう言った。これでこの子は負い目なく自分の死を見送れる。

それに安心し、精霊王は目を閉じようとして――

「俺は……お前が居てくれないと、幸せになんかなれない……!」

――目を見開く。

下まぶたの奥が熱くなり、喉から嗚咽が込み上げてくる。

怒りと悲しみと喜びがごちゃ混ぜになった感情が、心の中で爆発した。

「なんてこと、言うのさ……ああ、だめだ。泣かないって決めてたのに、君のせいだぞ」

ぼろぼろと、目から決壊したダムのように涙が溢れだす。

そして、そんな事を言つて貰えて底抜けに嬉しいと思つてしまっている自分が憎たら

しい。なんて浅ましい人間だ。

精霊王は少年の頭を抱き寄せ、浅く口付けをする。

「えつ、へへへ……ちゅー、しちやった」

自分はこんなに幸せで良いのだろうか。

こんなにも軽やかな気分で、しかも大切な人に死を見送つて貰えて。

結局、二人とも泣いてしまった。それがおかしくて、少しだけ笑つてしまう。

薄れる意識の最中。

自分の名前を呼ぶ少年の声を最後に、精霊王はその生を終えた。

二十五話『たとえ、そこに君が居なくても』

「あ、あ……？」

ピツ、ピツ、ピツ、ピツ、という誰かの命を刻む電子音。

急速に浮上する意識が^{まぶた}瞼をこじ開け、俺の視界に光を差し込ませる。

真つ白な天井が目に入り、ここが病院である事と自分がベッドに寝かされている事を理解した。

「目を覚ましましたか。熾天狩り」

「……？」

ふと横から聞こえてきた声、疑問に思いながらそちらを見れば、そこにはスーツ姿の小柄な女性がビジネスバックを膝に乗せて座りながら俺を見つめていた。

「誰、ですか……それに、どうして俺は病院なんか……」

「記憶が混濁しているようですね……いいですか？　ここは負傷した駆逐官用の病棟です」

「駆逐官……」

「はい。あなたは数日前、異界生命体との戦闘後に恐慌状態に陥りそこに居合わせた」

第二位”に襲い掛かりました。彼はそんなあなたをやむなく気絶させ……この状況に至ります」

異界生命体との、戦闘……？

ぼんやりした頭に少しずつ記憶が戻ってくる。

……そうだ、俺は大賢者と戦って、なんとか倒して。それでー

ーースティルシアは、どうなった？

「っ、あ、あのー！俺の近くに倒れてたスティ……えっと、重症の、中学生ぐらいの白髪

の女の子！っどうになりましたか!?!」

「……？いえ、そんな情報は報告書にありませんでしたが」

「そんなわけーっいつ、づ……!?!」

俺はベッドから立ち上がろうとしてーっ右目に、激痛が走った。

思わず目を押さえながら座り込む。触ってみると、俺の右目の辺りにはどうやらガ

ゼミたいな物が付けられているらしかった。

「なんだ、これ……!?!」

”第二位”があなたを鎮圧する際、右目を潰してしまったそうで……ですが、あなたのような強力な駆逐官の戦力が減衰するのは人類の多大な損失です。それを危惧した上の指示で”移植”されました」

いしよく……? どういう、事だ。

俺はスーツの女性から渡された手鏡を受け取り、目のガーゼに手を掛ける。

そしてガーゼを剥がすと、そこにあったのは――

「つー!?!」

「“精霊王の義眼”……彼は、そう呼んでいました。膨大な量の未知エネルギーを含有した特級の駆逐兵装です。所有権は当然あの異界生命を倒したあなたにあります。」

――ステイルシアの、目だ。

鏡に写る俺は右目だけ赤くなっており、驚愕の表情を浮かべている。

頭が、真っ白になる。

……恐らく大賢者の死体から回収され、その能力に目を着けた奴らが俺に移植したのだらう。

「……ああ」

「あなたに無断で手術を執行してしまい申し訳ありません……ですが、視力に問題は無い筈です。特別手当ても降りるのでどうか――」

「いや、そういうのじゃ、なくて……いや、なんでもありません」

「……そうですか。では、これから検査をして異常がなければ今日にでも退院できますので。……それと」

スーツの女性は立ち上がり、真っ直ぐ俺を見据えて口を開く。

「何故かは知りませんが、私たちの召集に応じて下さりありがとうございます。……
貴方が戦ったお陰で救われた命が多くあります。」次元鼻の現場にいた親子が、あな
たのお陰で逃げられたそうですよ」

「……そつすか」

「ええ、それだけは伝えたくて。ではまた」

頭を抱えて項垂れる俺にぺこりと頭を下げ、スーツの女性は病室から出ていった。

それを確認してから、俺は小さく呟く。

「スタイル、シア……」

完全に思い出した。

スタイルシアは大賢者との戦闘で致命傷を負い――恐らくは、あの槍使い……”第二
位”とやらにとどめを刺されて命を落とした。

それを自覚した途端、胸が潰れるような喪失感が襲い掛かってくる。

「いめん……っ！」

――あんなに近くに居たのに、守れなかった。

あの怪我じゃ死は免れなかったとしても、あいつの最後を少しでも安らかなものにす
る事は出来た筈だった

「……携帯?」

俺が頭を抱えていると、ベッドの横から『プルルル』という何かのアラームが聞こえてきた。

そちらを向くと、テーブルの上にあるモンスター図鑑が震えている。

俺は気だるげにそれを手に取り、開いた。

「SSランク”白夜”の討伐により、貴方の駆逐官ランキングは日本総合七位から日本総合四位へと上がりました」

「その功績に伴い、ランクBからAへの格上げが認められました」

「貴方の銀行口座に”白夜”の討伐、”次元暴”の討伐協力の報酬として日本円800,000,000の振込が行われました。ご確認下さい」

「……」

無機質な声と共に液晶に並ぶ桁外れの報酬が俺の目に入るが、全く喜べない。

俺は端末を乱暴にベッドへ投げ捨てながら、目を閉じた。

■

それから医者に『健康体』と診断を受けた俺は退院が許可され、一人で街を歩いていた。

俺が眠っている間に世界はかなり変わっていた。

まず日本は、北海道と対馬が上位モンスターの襲来に耐え切れず壊滅。連絡も取れず内部の状況は分からないらしい。

沖繩は駐在していた米軍の奮戦によりなんとかモンスターを退けたらしいが、ただに厳しい状況は続いている。

それから……東京が、機能停止した。人口が多い分モンスターも大量に襲来したのだろう。当時そこにいた人間の七割が死んだらしい。今はモンスターの巣窟と化している。

今は擬似的ではあるが、異様なまでに被害が少ないこの街が日本の首都的な役割を果たしている。未知生命体対策本部……つまり駆逐官の大元もこの街に置かれた。

そのお陰で猛スピードで復興が進み、今は多少以前の面影を取り戻している。

……そして。

「アメリカが、”閉塞”……？」

アメリカ大陸は、とあるモンスターによって作られた防壁に囲まれ完全に外部からは様子が確認できないらしい。

世界は大混乱。主だった輸出国が減れば資源の問題も起こる——かと思われたが、資源的な事は皮肉にも人口の大幅な減少により殆ど問題にならなかった。

なにはともあれ、あんな事があつたが人類はしぶとく生き残っている。地球の生態系の頂点は伊達ではない。

「おいっ！ モンスターが出たぞ、駆逐官を呼べ！ 最低C以上だ！ 速く！」
「……………」

俺がベンチに座つてネットニュースを見ていると、切羽詰まった人々の悲鳴が聞こえた。

顔を上げてそちらへ視線を移すと、車道の中心で巨大なサソリが暴れ回っている。

「今も街にモンスターは沸くんだな……………」

俺はほんの少し指先を犬歯で噛んで血を出した。

青い葉脈を通したそれを、手首のスナップで遠くのサソリの体表に飛沫させる、

「ー遠隔起動、”アイオライト”」

「うおおああつ!? なんだ!」「急に水が出てきて破裂したぞ!」「誰がやった!」「とにかく、助かった……………」

「ふう……………」

俺は、十数メートル先で爆散したサソリを見て溜め息を吐く。

魔核の回収は……………まあ良いか。どうせCランク程度だ。

巨大サソリの死骸を中心にして騒ぐ人々を尻目に、俺は再びスマホに目を落とそうとして――

――視界の端、走って路地裏に消えていく白髪の少女を見た気がした。

「っ!?!」

反射的に立ち上がり、目を見開く。

――ステイルシア？ いや、そんな筈は無い。あいつは……死んだ筈だ。死んでしまったんだ。

そう自分に言い聞かせても、高鳴る心臓がうるさい。

「……見間違いだつたら、引き返せば良い」

俺はダツシユで白髪の少女が消えていった路地裏へと入っていく。

白髪の少女は、十数メートル先を走っていた。そこまで速くない。俺の足なら一瞬で追い付ける。

――あの後ろ姿、間違いなくステイルシアだ。

言葉に表せない感動が胸を満たしていき、それを原動力にして白髪の少女への距離を詰める。

「っ、おい！ ステイルシア!?!」

背後からステイルシアの肩を掴み、振り向かせる。

——尖った耳、大きな赤い瞳、整った目鼻立ち。

間違いない、間違いない、間違いない！

俺は崩壊しそうになる涙腺を抑えながら、地面に膝をついた。

「生きて、たんだな……!?!」

「……」

ステイルシアは、そんな俺を見てにこつと笑った。

それは、俺の記憶の中にあるそれと全く同じもので。

優しげな両目が、俺を写し——

「——あ、は、え………?」

「XXXXXXXXXX!?!」

——ずぶり、と俺の腹部に何か突き刺さる感覚。

困惑しながら腹へ目を落とすと、ステイルシアの手がドス黒い触手に変形して俺を貫いていた。

「……ああ、そういう、事かよ」

ドッベルゲンガ無貌の影。以前、俺の祖母に化けて家の前に居たモンスターだ。ステイルシアは『対象

の最も大切な人に化ける怪物』と言っていた。

熱を帯びていた心が、急速に冷え切っていくのを感じる。

「XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX…?」

当のドツペルゲンガーは、血が結晶化して俺の腹に突き刺した触手が抜けない事を不思議に思っている様子だった。

邪悪な感情に歪められたステイルシアの顔を見て、自分の中で何か音が立てて切れるのが分かる。

「……………」

「:~:」

触手に腹を貫かれたまま、俺はドツペルゲンガーの頭を片手で掴んで持ち上げた。

「どうやって、死にたい」

「XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX!!」

俺の言葉を理解する筈もなく、ドツペルゲンガーはがむしやらに暴れて俺の拘束を解こうとする。

……………何やってるんだ俺は。こんな奴、さっさと殺した方が良いに決まってる。ステイルシアの顔だから戸惑っているのか？

「……………あほらしく」

俺は足元に落ちていたネジに”炎魔術^{カーネリアン}”を遠し、ドツペルゲンガーへ向ける。

恐怖に歪んだ顔のドツペルゲンガーに、それを打ち出すー

「ー」
ドミネーション

「……へっ」

ー突如として後方から飛んできた漆黒の球体によって、ドツペルゲンガーの頭部が消し飛んだ。

「やれやれ……災難だね、君も私も。そいつはドツペルゲンガーといって、対象のーつてあれ、このドツペルゲンガーの姿……もしかして君は私を知っているのかい？」

ーその、右目に白いガーゼを着けた少女は、いつの日かのように玲瓏れいろうな声で俺にそう言った。

「ステイル、シア……？ 本物……!？」

「ああ、やはり知っているのか。ただどすまないね。何故か右目が無いせいで、言語の読み取りだけで精一杯なんだ……いつもなら記憶を読んで君が誰か思い出す所なんだがーわふっ!？」

「良かった、良かった！ 良かった……!」

ステイルシアを抱き締め、何度も心の底から『良かった』を繰り返す。

ステイルシアは俺の腕の中で居心地が悪そうに身じろぎしていたが、逃れられないと悟ったのか不本意そうに収まった。

「いや、あの。私は君の名前すら知らないんだけど。そもそも今は変な奴に追われていて……とにかくっ、あんまり抱きしめないで欲しいな！ 胸も贅肉もあんまり無くて抱き心地良くないと思うんだけどっ」

「あ、ああ、そうか、そうだよな。ごめん……」

「ったく……こんな奴を抱き締めて何が楽しいんだか……」

ブツブツ文句を言いながら、ステイルシアは俺から離れて壁に寄りかかってしまった。

……こいつには、無いんだ。俺と過ごした記憶が。そもそもなぜ生きているんだ。

”第二位”に胸を貫かれてーいや、そうじゃなくても死んでしまっていた筈だ。

それとも奴が何かしたのだろうか。

「……あの。一つ聞きたいんだけどさ……ここは、どこだい？ 私は昨日までもつと平

坦で殺風景な場所に住んでいたただけけれど」

「どこって……街だろ」

「ま、街っ!? ここがかい!? 神の帝国とかじゃなくて!？」

「神の帝国にモンスターが居たら信徒は泣くだろ」

どことなく頓珍漢とんちんかんなこいつとのやり取りが、堪らなく懐かしく、楽しい。

にやにやしている俺を変な生き物を見るような目で見てくるステイルシアに、更ににやにやしてしまう。

そんな俺に諦めたような溜め息を吐いて、ステイルシアは口を開く。

「とにかく……君の名前を覚えてくれないかな。ううんめんどくさいなあ、普段なら目を見るだけで一発なのに……」

「いや大丈夫だよ。……思えば、お前に直接名乗った事は無かったし」

俺はステイルシアの前に立ち、深呼吸した。

「……はじめましてだな、ステイルシア」

「なにさ急に改まって。……いや、君とは初対面か。なんか変な気持ちだ」

妙にこそばゆい気持ちになりながら、口を開く。

「……俺の名前は湊みなと 渚なぎさ！ お前と……その、仲が良かった人間だ！」

「ふーん……見た感じ学生っぽいし、なんか弱そうだねナギサ」

「ちなみにお金持ちだ」

「ナギサさんと呼ばせて頂くね！」

「手の平クルクルじゃねえかお前」

何気ない会話をしながら、俺は目尻に溜まった涙を拭き取って笑う。
「……本当に、良かった。」

「……おい、熾天狩り。そいつを寄越せ」

その時、どこからか男の声が聞こえた。

その方向を見ると、そこには民家の屋根の上に腰かける漆黒の巨槍を担いだ眼帯を男の姿があった。

「……第二位」

「あつ！ ねえ、あいつだよ！ 私の事追いかけて来てるの！」

「そいつが収用施設から脱走したからだ。………つたく、比較的気性が大人しそうだからモンスターや他の異界生命体の情報源として生け捕りにしたというのに………」

横目でステイルシアを見ると、『め、目を覚ました途端、白衣の集団に囲まれてたらそりや逃げるでしょ！』とそつぽを向かれた。

「………こいつを、殺さないのか？」

「当たり前だ。その異界生命体を無力化したのは俺………つまり俺の所有物だ。なぜせつかく直した物を壊す必要がある？ 暴れない限り危害は加えない」

「………そうか」

「あつ、ちよつと!？」

俺はそつとステイルシアの背中を押して”第二位”の方に差し出した。

……こいつと戦闘になるのは望ましくない。俺では勝てないし、ステイルシアが危なくないなら素直に引き渡した方がいい。

「……そいつに何かあつたら、俺が暴れ回つてもう一度この街を壊滅させてやる。お前の仲間にそう伝えておけ」

「おお怖い怖い。……ほら、行くぞ」

俺の脅しに、第二位は肩をすくめながらステイルシアに手錠を掛けた。

「うう……」

「それと、熾天狩り。お前は妙にこいつに肩入れしているようだが、強引に連れ出そうなどとは考えるなよ。Bランク以上の駆逐官には収容された異界生命体との面談が許可されている。顔を会わせなかったら正当な手続きを踏め」

「……」

”第二位”の言葉に無言で頷きながら、連れていかれるステイルシアを見詰める。

……生きているなら、また会える。今はそれで十分過ぎた。

たとえ、向こうが俺の事を覚えていなかったとしても。

青い秋空を見上げて、俺は目を細めた。

【小型ゴブリン】^{リトル} 脅威グレードD
 ??????????

ワ、D

スピード、E+

耐久力、E

進出力、A+

知能、F

ability: 『高い再生力』

ツキノワグマを凌駕する筋力とカラスに並ぶ知性を備えた人型の生命体。

それに加えピストル弾を回避する程度の反射神経も持つため、魔核を接種していない人間が遭遇した際には逃走が推奨されている、

【中型ゴブリン】^{ミドル} 脅威グレードD
 ??????????

ワ、D+

スピード・ D

耐久力・ D

進化力・ A+

知能・ F

ability:『高い再生力』

大型の肉食獣を遥かに凌駕する筋力を備えた人型の生命体。

並の銃弾では致命傷を与える事は難しく、ライフル弾を頭に命中させても即死しなかったという報告も上がっている。

戦力の目安としては、小型の戦車と同等の危険度を持つ。

*ランクD以下の駆逐官には討伐が許可されていません

【オーガ】脅威グレードC↓D↓

パワー・ B

スピード・ F+

耐久力・ E

進化力・ F

知能・ F |

ability : 『高い再生力』

染色体に何らかの異常をきたしたゴブリン種、体長は8メートルを越える。異常とも言える新陳代謝ゆえ非常に短命で、発生から五時間程で息絶える。

筋力に反して知能は非常に低く、喉が渴いたのかトラックから8リットルのガソリンを接種して死亡した個体も確認されている。

【ゴブリン・エース】脅威グレード B

????????? ? ? ? ?
ワー・ B

スピード・ A |

耐久力・ B |

進化力・ A +

知能・ F +

ability : 『高い再生力』

腕を振るえば大木を薙ぎ払い、蹴りを繰り返せば分厚い鉄の扉に風穴を開ける最強のゴブリン種。

龍種とさえ真つ向から交戦し、狩る。

異常とも言える共食いの末に発生する種であり、今までに3個体しか確認されていない。

討伐部隊は、B以上の駆逐官10人を目安に編成される。

【ゴブリン特異個体“夜叉”】脅威グレードB+↓A+

スピード・A

耐久力・A

進化力・?

知能・E

ability:『高い再生力』

何らかの理由で異常行動を繰り返す“ゴブリンエース”の特異個体。

他のゴブリン種と異なり人には興味を示さない。そのため、討伐の危険度も加味して『アンタツチャブル接触禁止』指定が成されている

この個体が戦闘において見せる動作はとある流派の古武術の型と酷似し、政府はその武術を継承していた道場へエージェントを派遣したが、既に廃墟と化している事が確認された。

【熾天使】脅威グレードC→C

燃?????
パワー・C

スピード・C

耐久力・C

進化力・B

知能・A

ability: 『武器創造(炎)』 『ドミネーション時空掘削球体』

指定宗教団体、神の存在証明”の施設を占拠したモンスター。

その姿は『顔の無い天使』と形容される異様なもので、現在は三体存在している。

” 炎の武器 の出力は鉄を焼き切る程に凄まじく、連携を伴った場合その危険度は更にはね上がる

【排殺騎士】脅威グレードA

???
パワー・A+

スピード・A+

耐久力・A+

進合力・?

知能・?

ability:『自然現象の操作(暫定)』

新たなモンスターが襲来する時、特定の地域にのみ出現する正体不明の騎士甲冑。

驚異的な身体能力を有し、“夜叉”との戦闘に勝利している。

水、風などの自然現象を自在に操るが、装備した大剣から炎を発射する姿も確認されているため能力の全貌は不明である。

【次元梟】脅威グレードA

?????????
ワール・A

スピード・A

耐久力・無し

進化力・D

知能・B

ability: 『物質の透過（暫定）』『多数の“時空掘削球体”の操作』

全ての攻撃をすり抜けつつ、全てを破壊する攻撃を繰り返してくる非常に危険な”上位モンスター”の一体。

『熾天狩り』を退け、その他多数の駆逐官を殺害している。

一時は”討伐不可”とまで判断されたが、排殺騎士との接触を境に姿を消した。

バトルステータス
【戦闘衛星】脅威グレードS↓A+

ワール・S

スピード・C

耐久力・ C

進化力・ ?

知能・ ?

ability: 『外気圏から地上までを射程に捉えた光線』

衛星軌道の上に現れた巨大な機械生命体。その生息地ゆえまともな攻撃が出来ていない。

地球の公転軌道に乗って移動しており、その際に接触した人工衛星を計8機破壊している。

太陽の光熱を圧縮したビームを攻撃手段として持ち、およそ7日に一度の周期で無作為に地上へ向けて放っている。

【~~ス~~ドレットの騎士】脅威グレードS↓S+

ス? ? ? ? ?
ワ. S S

ス? ? ? ? ?
スピード. A

耐久力. B

進化力・S

知能・?

ability:『不明』

一瞬にしてブリテン島を更地にした、騎士のような人型の実体。普段は島の中心で微動だにせず、調査に放ったドローンはカメラで姿を映した瞬間に謎の不具合を起こして墜落した。

周囲には特殊な力場が発生しており通常の間人だと近付くだけで死に至る。

その能力は全く明らかになっていない。目撃者とされる現地の人々が一人残らず死亡しているからである。

【^{リイ}異の^{マイ}夢追人】脅威グレードS+↓SS

ワァー・?

スピード・?

耐久力・SS

進化力・?

知能？

ability：『破壊不可能かつ大規模な壁の生成（暫定）』

アメリカ大陸を”破壊不可能な正四面体”によって囲んだモンスター。正四面体が完成する間際の通信によって、内部から『黒い』という情報だけが外に持たらされた。

【白夜現象】脅威グレードSSS↓？

???
ワー．SSS

スピード？

耐久力？

進化力？

知能？

ability：『広範囲の時間加速（暫定）』『氷山の形成』『消えない炎』など

厳密にはモンスターではなく、”現象”である。突如として発生し、都市に甚大な被害をもたらした。

”白夜”の最たる脅威は、その破壊の規模ではない。

『災禍の騎士』と同じく目撃者は存在しないが、その跡地に死体や残骸は残っていた。しかしそのどれもが力ではなく”経年劣化”によって破壊されていたのだ。

事態の鎮圧に携わった者の証言によると白夜現象は『大賢者』『赤毛の男』によって引き起こされたらしいが、その真偽は不明である

【爛れ古龍】脅威グレードS+

????????
ワー・S+

スピード・B

耐久力・S

進化力・?

知能・E-

ability:『半ば物理法則を無視した運動能力』

体長およそ■kmにも及ぶ蜥蜴に似た姿の実体であり、『神の存在証明』の行った大規模なミサイル攻撃に正面から晒されて尚無傷であった事から、物理的手段での殺害は不可能であると思われる。

しかし、右半身は出現時から『強力な光熱』を浴びたかの如く焼け爛れている。その最たる異常性は、戦闘状態において発揮する異常な運動能力である。

通常であれば自重で死亡してもおかしくない程の体重と質量を持ちながら、『爛れ古龍』の動作は極めて鋭敏で、最高時速は750km、平均で約300kmを記録している。

※現在は『白夜現象』に巻き込まれた事で死亡しています。

【規定事象改竄者】脅威グレードS—

????????
ワー・ F

スピード・ F

耐久力・ F—

進化力・ ?

知能・ F—

ability:『見聞きした言語を現実へ反映する』

仮面を装着した12〜14歳の少年あるいは少女に見える人型の実体。

その異常性は紙に書き込んだ文字を現実に引き起こす事であると推定されており、そ

れによって引き起こされた事象は以下のものである。

【不可視の防壁の展開】

【電柱を樹木に変化させる】

【空へ投げた小石が異常な加速を示し、最終的には第三宇宙速度を突破して”偶然”その射線を飛行していた『戦闘衛星』に衝突。それにより戦闘衛星は機体の20%を喪失した(なお、ここまでの速度を發揮しながら小石は燃え尽きなかった)】

EX 『臆病者の帝王くゴブリン・エース』

ー” 理不尽”。

ユウシヤと呼ばれるそいつの姿は、小鬼の帝王の目にそう映った。

絶望の化身とは違う。救済の化身とも違う。ならば“カミ”か？ 否。近いがそうでもない。

ただ、理不尽。

誰も勝てないと一目で分かる苛烈なまでの”無敵”。

剣で斬りつけても弓で射つても効果が無い。まるで巨大な渓谷を米粒で埋めようとしているかのような感覚。

そんなヤツが他のバケモノ共も連れ立って自分達をブチ殺しに来るのだから、もうどうしようもない。

龍も殺された。魔王も殺された。神も殺された。小鬼など話にならない。

あつという間に周りのゴブリンたちは塵となり、タマゴ魔核へ還される。

そしてー”彼”も成す術無く、灰塵と化した。



次に”彼”が目を覚ました時、そこは異様な場所だった。

奇怪な衣装を身に纏った人間どもが死体のウジ虫の如く犇めき合い、それでいて規則的に歩いている。

男、女、子供、老人ーよりどりみどりだ。しかも、誰一人として武装していない。なんだここは。どうなっている。

しかし”彼”の仲間たちは、そんな疑問を持つ事も無く人々へ襲い掛かっていく。

『ゲギツ！ グギャギャー！ ヨワイ！ ヨワイ！ ミンナ！ コイツラ、ヨワイ！』

『ヨワイ！』『ヨワイ！』『クエル！』『ヨワイ！』『クエル！』『ヨワイ！』『ヨワイ！』『ヨワイ！』『ヨワイ！』『ヨワイ！』

『……ドウナツテイル』

成す術無く仲間たちに蹂躪される人々の群れを眺めながら、”彼”はそう呟いた。

そして、ふと自分の体を見て顔をしかめる。

一度殺されたせいか、ただの”小鬼”へと戻ってしまっている。

共食いの末、何度も進化を繰り返して手に入れた強靱な肉体は見る影も無かった。

『オイ、オマエ』

『ナンダ！ オレ、ハヤクコロシー』

ー”彼”は、横に立っていた小鬼の胸を手刀で貫いた。

驚きの表情のまま灰になり、そこに埋もれた赤い球体を拾って噛み砕く。

『キタエナオシ、カ……』

『ゲギヤアツ!?!』

人間の母子を殺そうとしていたゴブリンの頭蓋を握り潰しながら、彼はクツクツと囓う。

ー悪くない。

こちらの世界でも、俺は帝王と成り強者に牙を突き立て続けよう。

自らへ恐怖と驚きの目を向ける母子に背を向け、彼は歩き出した。

■

『ヤ、ヤメテ、クレ……』

今日十個目となる魔核を噛み砕いた時、”彼”は自らの肉体が急速に変化するのを感じた。

中型^{ホブ}ゴブリンーと呼ばれる形態まで進化した彼は、『少しは動きやすくなったか』と口端を歪めた。

さて次の獲物はー彼が周囲を見渡すと、とある方向から凄まじく濃密な魔力の香りが漂ってきている事に気が付く。

『……ナンダ?』

その方向へ目を向けると、そこにあったのは大きな木造の平屋。

この世界では“道場”と呼ばれるその建物の中から――恐ろしく濃密な、死の匂いが放たれている。

――少しは骨のある奴が居そうだ。

彼は口を歪めながら建物の前に歩いていき、戸口を蹴破る――

『……ニンゲン？』

地面に横たわる、無数の同胞ゴブリンの死体。

その中心には、こちらに背を向けて座禅を組む一人の男の姿があった。白い道着は返り血に染まって赤い。

魔核を取り込んだ人間か――とも思ったが、そいつの体からは全くもって魔力の匂いがしない。正真正銘、只の人間だった。

……不可解だ。

ゴブリンはモンスターとしては弱い。しかし魔核を取り込んでいない人間なら指先だけで捻り殺せるだけの力はある筈だ。

だが地面に転がる死骸の数は十や二十では効かない。今の自分と同じホブ中型の物もちらほら見える。

興味深かった。一体どんなカラクリがあるのか。

人間は弱いが小賢しい。きつと、何か罠が――

「……次が来たか」

『つ……………！』

男が、何かを呟きながらのそりと立ち上がり”彼”の方を向いた。

身長は優に二メートルを越え、袖から覗く太い前腕には幾本もの血管が浮き出ている。

「コオオオ……………」

男は腰を下げ、深く息を吐いた。

脱力の効いた左手を前に、拳の握られた右手を後ろに。

片方は柳のように揺らめいて間合いを不確かにし、もう片方からは大砲に詰められた砲弾のごとき威圧感を覚える。

――踏み込めない。

頭では間合いを詰めようとしているが、体に刻まれた本能がその先にある『死』を予期してしまっている。

「……………さつきまでの奴らとは毛色が違うな」

近付いてこない”彼”に目を細め、男は構えを変えた。

右腕を折り曲げながら上げ、それを左手で押さえる。まるでデコピンのフォームを両

腕で再現したような状態。

小刻みに震えるそれからは恐ろしいまでのパワーを感じる。

「シィッ！」

『……ツツツ!?!』

「……男が踏み込み、”彼”の頭へと腕を振り下ろした。

腕に蓄えた規格外のエネルギー、そこへ更に駆け足のスピードと全体重を乗せて。

切り裂かれた空気が風圧の暴威となつて彼を襲う。まるで小規模な爆発を伴うような、”ただの人間の体術”。天駆ける流星を幻視するような鉄槌だった。

『ガ』

「……そう、”だった”。過去形。

彼は気付けば道場の床板に脳漿をブチ撒けながら倒れており、男に冷たい目で見下ろされている。

が、男の鉄槌も無事ではなかった。人外の頭蓋をカチ割った代償は重く、太い五指はグチャグチャにひしゃげて曲がっている。

「……硬いな」

男は血の滴る右拳を左手で組み替え、折り曲がった指で拳を形作つた。

うっ血した関節が嫌な音を立てるが、それを意にも介さずに構える。

「コーコロサレル！ニゲロ！コロサレル！ニゲロ！」

死を目前にした本能が警笛を鳴らす、それに反して「彼」は歪に嗤わらっていた。

全く予想さえしていなかった強者。それとの邂逅に、「彼」はぐちやぐちやの脳味噌を狂喜で満たしていた。

この男は、矮小種たる人間の極致。ならば、同じく種として弱者である自分も更なる高みへ行けると確信した。

「……その傷で立つか。やはり動物けものではないな。いやむしろ、真つ当な生命でさえないのか……。まあ、そんな事はどうでも良いわな」

「彼」は、溢こぼれた脳味噌を適当に頭へ押し込んで立ち上がった。

凄まじい激痛と吐き気の最中。赤く染まった視界の先に居る男を睨み付ける。

「……その構えを、見よう見まねで模倣しながら。」

「ほう……比武を望むか。それに、畜生にしては堂に入っている。俺の倅せがれよりもスジが良いかもしれん」

深く息を吐き、男はニイと壮絶に笑う。「彼」もそれに合わせて口を歪めた。

その時初めて「互い」は互いが同類であることを悟った。

「か、ふ……っ」

勝負を分けたのは、やはり決定的な身体性能の差だった。

前半は男の技術が圧倒していたが、戦闘が続くにつれて乾いたスポンジの如く技を吸収していく”彼”に、徐々に追い詰められていった。

そして今——男は腹部を”彼”の手刀に貫かれ、口から粘着質の血液を吐き出して倒れた。

『……』

「やる、な……緑の、武人よ……」

男を見下ろしながら”彼”は真っ赤に染まった自分の拳を見詰めた。感じていたのは、奇妙な充足感。

今、空っぽに見える彼の両拳には確かに『最強の武器』が握られていた。

——剣も魔法も比較にすらならない、規格外の”牙”が。

『……これだ』

虚空に突き出した彼の正拳は、螺旋回転を伴いながら空気を切り裂いた。

——自分が長い間ずっと探し求めていたのは、これだ。剣や槍も一通りやったが違和感があった。まるで、生き別れていた半身と巡り会えたかのような感覚。

「ふ、ふふ……俺の拳^{けん}が気に入ったか……。持ってけ泥棒」

傷を回復するため床の魔核をむさぼっていた”彼”に、男が何かを語りかけてきた。

言葉は分からない、しかしその表情から何かを悟って耳を傾ける。

「だが、誤るなよ……それは、弱者をなぶるための拳ではない……強者を穿つための拳だ……お前がそうなれば、もう先には進めなくなる」

『感謝するぞ。貴様の“牙”は確かに受け取った』

先程までより一回り大きくなった“彼”の足が男の頭を踏み潰した。

『俺は誰にも負けない』

”彼”は——ゴ布林・エース”は、勢い余って踏み抜いた床板から足を引き抜く。

『魔王も龍王も機械王も精霊王も——無論勇者も、俺がいつか必ず殺す』

クツクツと嗤いながら、ゴ布林エースは拳を握り締めた。

——言葉を介さずとも、拳を通じて男の思想を理解していた。

そうともこれは強者を穿ち喰らう牙。弱者に振るえば確実に鈍る。

「父、さん……？」

その時、道場の玄関の方から声が聞こえた。

そこに立っていたのは学生服を着た細身の青年。僅かだがこの男と顔立ちが似ている——ゴ布林エースは、体積を増した脳みそで両者の血縁関係を察した。

「お前……っ!？」

ゴ布林エースは一瞬で青年の背後に回り込み、軽く首を殴って気道を潰す。結果訪

れるのは意識の強制的なシャットダウン。

どきりと倒れ込んだ青年を尻目に、ゴブリンエースは道場を後にした。



『精霊王……なぜここに……!?』

ゴブリンエースは啞然としていた。

濃密な魔力の匂いを追い掛けて街から出た彼は、人間の少年を連れ立って歩く白髪の少女を見つけたのだ。

彼はその正体を知っている——勇者を除いた世界の頂点「五王」。その少女は、中でも最強と名高い「精霊王」と瓜二つだった。

……顔をだらしなく弛緩させてにまにましている姿は、前の世界で見た時の氷じみた冷たい印象とはかけ離れているが。匂いは間違いなかった。——彼の、越えるべき壁の——。

『クツ、ククククク……!』

——貴様を殺す。声高にそう叫びながらゴブリンエースは精霊王と少年の前に立ち塞がった。

彼を見た途端、精霊王の瞳から急速に温もりが失われていくのを感じてゾクリと背筋

が冷えた。

『……ねえ』

精霊王が、元の世界の言葉でゴ布林エースに話し掛けてきた。

なまじ耳の長い彼だから聞き取れているが、とても小さい声。ゆえに横の少年は彼女の変化に気づいていない

『この子に触ったら消すから』

ーゴ布林エースは、自分の足が震えている事に気が付いた。

蛇に睨まれた蛙ーなどという次元ではない。例えるならば、断頭台に首を乗せられた死刑囚のような気持ち。

彼女の中では既に自分を殺すことが確定していて、その認識を自分の方も共有してしまっている。

……だが。

『俺は、負けん……！』

『あつそ、消えて死ね』
ドミネーション

ー恐怖心を振り切って間合いを詰めた彼の眼前に、漆黒の球体が顕現した。

咄嗟に身をよじるが、横腹を消し飛ばされる。

激痛のせいで一度は振り切ったはずの恐怖心が一気に絡み付いてきた。

彼の体は非常に優秀で、彼の脳が拒んでいた逃走を勝手に実行していた。

脱兎の如く走って走って――傷が再生し、息が切れ始めた頃になってやっと、ゴブリンエースはもう精霊王の視線を感じない事に気が付いた。

『……逃げたのか、俺は』

この拳に掴んだはずの牙は、自らの臆病さゆえに突き立てる事さえ出来なかった。

「また、逃げたのか、俺は……！」

思い出す敗北ユウシャの記憶。

成すすべ無く背を向け――極光と共に葬り去られた恐怖の記憶。

結局彼はどこまでもゴブリンなのだ。

生き汚く、本能に忠実で、強者に媚びへつらうゴブリン種。

彼は英雄に成れない。決定的な所で、いつも自分の身が一番可愛いのだ。

――あの武人から自分が逃げなかったのは、ヤツが人間だったから。心のどこかで、自分は死なないと分かっていたから。

本能とは生命を縛る最大の枷だ。

飢えがあるから人は苦しむ。恐怖があるから人は殺し合う。痛みがあるから人は憎み合う。

――だから命が惜しくて逃げ惑う。

『俺、は……』

結局あの日から変わっていない。

ゴブリン・エースは、大きな体軀を小さく丸めてその場に踞った。



『空が、黒い……』

”上位モンスター”と呼ばれる怪物たちが地球に襲来したその日、ゴブリンエースは廃ビルの上から空を見上げていた。

あれから彼は二度の敗北を味わった。一度は大剣の騎士に、もう一度は眼帯の槍使いに。

前者はともかく後者から逃げられたのは奇跡としか言いようが無かった。

ヤツは怪物だ。どれだけ距離を離しても気付けば目の前に回り込まれている。別のモンスターの横槍が無ければ確実に狩られていた。

『俺は、弱いのか……？』

”牙”は確かに磨かれている。しかし誰にも届かない。

……これからあの空の先から現れるであろう怪物どもにも、きつと。それもこれも自

分の臆病さゆえだ。

帝王だったかつての自分は輝いていた。

単身で獣を殺し、徒党を組めば龍をも殺し、仲間はみな彼を最強だと褒め称えた。

最弱の小鬼たる彼の相手はいつだって強者だった。それを打ち負かす事に彼は自らの存在意義を感じていたのだ。

だが仲間の居なくなった今はどうだ。強者から逃げ惑っているのではないか。

ゴブリンは、自分を除いて殆どこの街から排斥された。

『俺は、帝王だぞ……』

父から継いだ名は■。帝王”や”覇者”を意味するこの言葉の響きが彼は好きだった。

「キヤアアアア!!」「腕がつ、木になって……!」「オイそこの仮面着けたガキ! いったい何をーーがつ!」

空の異変にざわついていた街に、次は何重もの悲鳴が響き渡る。

ビルから様子を伺えば、恐ろしい魔力を放つ仮面の少年が人や街を破壊して回っていた。

ー近付けば自分も殺されるであろう、絶対的な強者。

『……帝王は、負けてはならんだ』

ゴブリンエースは立ち上がり、” 既成事象改竄者　　ーミラージュ・カットアツパーを怒りの形相で睨み付けた。

『いたずらに弱者を虐げる、ヤツのような愚かな強者に……!!!』

ービルの側面を蹴り、ゴブリンエースはミサイルのごとき勢いでカットアツパーとの間合いを詰める。

面食らったようにその場から飛び退く仮面の少年に向けて” 牙” を構えながら、曇天に吠えた。

『……なんだ、小鬼かよ。ビビって損した』

『黙れクソが!』

『それはこつちのセリフだ。見ての通りボクは今遊んでただけど?』

『ツ……!』

ーゴブリンエースは、自分の足が僅かに後退するのを感じた。

……また本能が怯えてしまっている。

『ん、まあ良いや。” 無粋な小鬼はその五体を爆散させたのだった”』

カットアツパーは、自分の周囲に浮かんだ本に何かを書き込んだ。

するとゴブリンエースの四肢がギチギチと嫌な音を立て始め、数秒と経たずして根本からもげ飛んだ。

『っ……!?!』

「……何を、された？」

バラバラになって地面に落ちていく自らの四肢を見ながら、ゴブリンエースは目を見開いた。

切断された、という事だけは分かる。だが方法が不明だ。

透明な刃？ 極細のワイヤー？ それとも念サイコキネシス力？

彼の戦ったモンスターや駆逐官の中にも似たような事をしてくる者は居たが、そのどれとも今のは異質だった。

『俺に、何を、した……』

『うへえ、傷の断面から血管が伸びてきてて気持ち悪いや……ん。いいよ、冥土の土産に教えてあげよう……ボクの能力はね、”現実の改変”だ』

「……現実の改変？ わけが分からない。」

『世界はボクの認識するままに塗り変わるといふ事さ。夜空の星に手を伸ばせば掴み取れるし、石ころがお菓子だと思えば飴玉になる。無論、君に死ねと思えばすぐに死ぬ』『心から本気でそう信じなきや、大規模な現実改変は行えないけどね？』『鼻歌混じりにそう言いながら、カットアッパーは目の前の本に何かを書き込んだ。』

するとゴブリンエースの傷が一瞬にして治癒し、立ち上がれるようになる。

『……何のつもりだ』

『ボクは無敵だ。誰も勝てない。でもそれじゃ退屈で死んでしまうだろう……？ だから、あえて自分に制約^{ルール}を課しているんだ』

指先でクルクルと石ころをもてあそび、一瞬だけ覆い隠した。

すると石ころは小さな正四面体……サイコロのような物体に変化する。

『だからゲームをしよう。君が勝ったら何でも願いを叶え、ボクが勝ったら君をなぶり殺す。普通に戦っても勝てっこ無いんだ。悪くない条件だろ？ それっ』

『……』

カットアップの投げたサイコロが、ゴ布林エースの足元まで転がってきた。

『あ……君が小鬼だから釘を刺しておくけど、何でもって言ったってエツチなのは駄目だよ？ ボクは女の子にも成れるけど、それで小鬼を孕むなんてゴメンだし。だからそういうのはー』

『……ああ、たつた今分かった気がする。なぜ、臆病者の俺がこうして自分より遥かに強いお前と向き合えているのか』

地面に転がったサイコロを踏み潰しながら、ゴ布林エースはそう言った。

そしてー警笛を鳴らす本能を打ち払い、一步を踏み出す。

『ーお前はちつとも怖くない』

『……ふーん、んじやもう良いや。』死ね』

『っ……俺は、死なん”ッ!!!』

ゴブリンエースの首が、ギチリと軋む。

……しかし、それで終わりだった。首が飛ぶわけでもネジ切れるわけでも無く、ほとんど無傷。

『……チツ、気付きやがったか……？ いや、マグレだ。そうに違いない』

『なぜだ……なぜ、俺は傷を負っていない……？』

自分の首筋を触りながら、ゴブリンエースは脳細胞をフル稼働させる。しかし、彼のけして明晰とは言えない頭脳では答えは出なかつた。

ーとにかく、自分は死んでいない。ならば己の牙をぶちかますだけだ。

『ヴォオ”オ”オオオオオ”ツツツ!!!』

『チイイイッ!!』しかし、不可視の壁が小鬼の進撃を防いだ”ツツツ!!!』

叫びが空気を震わせ、半ば四つ足になった極限の前傾姿勢でゴブリンエースが走る。繰り出すのは、あの日に見た”流星。

ー精霊王に敗北した日以来、ずっと使用していなかった。

彼を恐怖の向こう側に連れていってくれる”勇気の流星”。

『この、攻撃……存在が重たい……っ!?!』

風になびくシャボン玉の膜のように、拳を受け止めた壁が揺らいだ。

『ブチ抜けロオオオオツツ!!』

『クソが……! おい、黙って戦えないのか単細胞!』

ゴブリンエースの咆哮と同時に、カットアップが後ろに飛び退いて防壁が破壊された。

宙に舞う煌めく残滓を走り抜け、第二撃を浴びせようとし——自分の右腕が、無いことに気が付く。

『——っ』

『はあ、はあ……。おいお前。特別……特別に、見逃がしてやる。いいか? 今から一言も喋らずに、両手を頭に乘せてどこかに行け』

『ガアアアアアアアツツ!!』

『チイツ!』

切断された腕をグリグリ肩口に接着しつつ、ゴブリンエースは再び“流星”を放つ。——もう恐れない。もう群れない。もう折れない。

帝王は常に1人だ。再び全てをねじ伏せ、屍の丘で勝利に酔って見せよう。

『……もう一匹、来やがったか。しかも少し厄介そうな……』

カットアップがゴブリンエースの後方を睨みながら顔をしかめた。それと同時に

彼の体が吹き飛ばされる。

アスファルトの地面を弾みながら転がり、ゴブリンエースが立ち上がると横にはギョツとした顔の青年が立っていた。

「……いつの日か、精霊王の隣に立っていたニンゲン。」

その眼光は以前とは比較にならない程に鋭く、発せられる魔力の匂いは恐ろしく濃密。

まるで平和ボケしていたイエネコが歴戦の獅子にでも化けたような有り様だ。あまりの変わりように、すぐには気が付けなかった。

「こいつとならば、あるいは。」

ゴブリンエースがアイサインを送ると、向こうはこちらの意思を察したように頷いてから銀色の何かを投げてくる。

それは、緑色の葉脈の走った小さな鎖。握ると籠められた魔力が反応して僅かに風が渦巻く。

『あの騎士と、同じ技か……？』

いつの日か敗北を喫した大剣騎士^{エリミネーター}。そいつがこれと似たような技を使ってきたのを覚えている。

回避した先の床や壁から炎が吹き出てきて苦心した「……」などと思い出しながら、拳を

考える彼の横から、”パチユン”という何か弾けるような音が聞こえた。

不思議に思いながらそちらを向くとーそこには、無惨にも爆散し内蔵と肉片を撒き散らすニンゲンの姿があった。

「あ、…………ぐ、あ」

『ツ…………オイ！ 何をされた！ クソ、まだ死ぬな！ ニンゲンなんだからヤツの弱点を考えて俺に教えてから死ぬ！』

「う…………つ」

『待て、オイ！ せめてさっきのグルグルをもう一度これに籠めてから…………ツ！ ……おおい!?』

死にゆくニンゲンを揺さぶるが、どんどん肉体が崩壊していつて手の施しようが無い。

ゴブリンエースは舌打ちしながらボロボロになった鎖を投げ捨て、カットアッパーを睨み付けた。

『…………さて、問題は君の方だ。君がその人間と違ってバカで直情的であるばかりに、ボクは君に脅威を感じているんだ。曲がりなりにもボクの現実改編を二回も打ち破った奴なんて、”五王”とかの例外を除けば君が初めてだからね。』

『誰がバカだ！ 俺は6までの数字なら足し算が出来るんだぞ！』

『……マジで”死ぬ”』

”死ぬかバーカ”』

『ああもうっ……!!』

苛立ちに頭をかきむしりながら、カットアツパーが地団駄を踏む。

——よく分からないが、自分にはヤツの攻撃が効かないようだ。俺が帝王だからか。そうか。

そんな端から見ればクソみたいな理由で納得をしながら、ゴブリンエースは“流星”を構える。

『もうっ……””一言も喋るな”!』

”嫌だ”!』

『死ぬよマジでえっ?!』

”絶対に嫌だ”! ”お前が死ぬ”!』

『うわあああっ?!?!?』

流星を構えたまま、間合いを摘める——しかし今度は見えない壁に阻まれず、楽々とカットアツパーの前まで移動できた。

見てみると、カットアツパーは胸の辺りを押さえて苦しそうにしている。

『なんか分かんないが”死ぬ”!』

『……うつー！ ”ボクをここから遠くへ逃がせ” えつー！』

ゴブリンエースの叫びと同時に、カットアツパーが大量に吐血した。彼はまだ拳を打ち込んでいないのに。

しかし、次の瞬間、カットアツパーの姿がその場から掻き消えた。

『どっ！……っ！？』

鼻をスンスンとひくつかかけ、カットアツパーの居場所を探る。……およそ500メートルほど先、北の方角にその姿があつた。

よろつきながら、ゴブリンエースから遠ざかろうとしている。

『逃げるなアアアツ！！』

『ひいっ！？』

何かに縛られたように動かなくなったカットアツパーが、情けない声を挙げた。

それに加虐心を少しだけ満たされながら、ゴブリンエースは顔を歪める。

『ま、待つてよ、ねえっ……！ あ、謝るよ。あの人間も、回復させてあげる、から、』

『死ねエエエっ！！』

『うあぐアっ！？』

ゴブリンエースの放った“流星”が、カットアツパーの左半身を丸ごと抉り飛ばした。

その勢いで前につんのめり、そこからバク転して脳天に踵落としを叩き込んだ。

一瞬にして体と頭を半壊させられたカツトアッパーは、ぐちゃぐちゃになった顔面を恐怖に歪めている。

『こんな、バカに……こんな、力技で……っ！』

『……乗り越えた。俺は、乗り越えた！ 帝王は常に独り……！ デカイ顔して俺の庭を荒らした強者を、乗り越えたんだ!!』

勝利の咆哮を上げながら、ゴ布林エースは足元のボロ雑巾を噛った。自分に逆らうからこうなるのだ。

……今度こそ、もう誰にも屈しない。刹那を生きゆく流星の如く、闇を切り裂きながら盛大に散って見せよう。

『……あれは』

——その時、ゴ布林エースの目に天を貫く光の柱が移った。

曇り空に風穴を開けて星の外へ突き抜けて行く光は、段々と収束していき最後は煌めく残滓を残して消え去る。

……あそこに、”恐ろしいナニカ”が居る。恐らく自分より遥かに強い存在が。

『クツ、ククククク……』

——恐れは、無い。むしろ勇気が湧いてくる。かつて無く晴れやかな気分だ。

た。彼は……ゴ布林・エースは。自らの“牙”を握り締めながら光の方角に歩み出し

第二部 『神の存在証明』 編

一話 『始動する物語』

「ひっ……、はあ、はあっ……！」

若い少年が荒い息で暗い路地裏を走っている。

既に息は荒く足はもつれ、纏った衣服は所々が何か鋭利な刃物によって引き裂かれ、その下の皮膚にまで醜い裂傷が見える。

横目で後ろを確認すると、自分を追ってきている“死神”は未だ健在なのが確認できた。

「誰か……！ 誰か、居ませんか!？」

少年の声が月夜に響くが、それを聞き届ける人間はおらず。また聞き届けたとして、この事態を打開できる人物などそう居る筈も無く。

数分後、少年は行き止まりになった路地を見て自分が逃げていたのではなく誘い込まれていた事を理解した。

「あ、ああ……」

『ⅢⅢⅢⅢⅢⅢ』

振り返った先の暗闇から、漆黒のフードを被った骸骨がぬらりと這い出てくる。
伽藍堂がらんどうな眼窪の中に灯る青い炎が瞳のように少年の姿を捉え、僅かに揺らめく。

——圧倒的強者。

この骸骨に対して少年が感じたのは、極めて原始的な被食者の恐怖であった。

比較的平和だった今日までの人生、彼は今初めて『足がすくんで動けない』という経験をしている。

「や、やめて」

骸骨が手に持った大鎌を振り上げた。

鈍い煌めきを放つ銀の刃が、少年の首を刈り取るべく振り下ろされ——

「アイオライト」

『ⅢⅢⅢⅢ!』

——死神が、突如として路地裏に迸った凄まじい水の激流によって胴体を貫かれた。

レーザービームという表現さえ生温いその勢いに、死神は腐りかけの脳組織を『困惑』と『恐怖』に満たされる。

数秒間の逡巡の末、彼が取った行動は——逃亡だった。

「……爛れ古籠」

『ⅢⅢⅢⅢⅢ……!?!』

しかし——死神の前方の地面から無数の黒い龍腕が這い出てきて、植物のツタのように死神に絡み付いて締め上げた。

ミシミシと軋む自分の骨に、死神はこの腕の持ち主が怪物として自分より遥かに格上なのだとして理解する。

だがもう遅い。

龍腕の一本が死神の頭蓋骨を掴み、握り潰すべく力を込める。

為す術なくメキヤメキヤ砕けていく自らの頭部を鮮明に認識しながら、死神は絶命し灰と化した。

「……ランクA+指定、徘徊死神を討伐しました。頭部カメラ映像の確認をお願いします」

コツ、コツ、コツ。

アスファルトを踏み締める音と、男の声が少年の方に近付いてくる。

少年は一瞬だけ身構えたが、それが耳に通信機を押し当てた青年だと気が付き力が抜けた。

『いつもお疲れさまです、渚。^{なげな}討伐報酬は口座に振り込んでおきますね。魔核の方は換金しますか?』

「いや、結構です」

地面に転がったビー玉らしき赤い物体を拾い上げながら、青年は通信機の電源を切った。

それからため息を吐いて夜空を見上げ、何かに気が付いたかのように、少年の方を見る。

「……大丈夫か？」

「えっ」

「襲われてたんだろ、さっきの骨に。立てるか？」

尻餅を付いた少年に手を差しのべながら、青年は優しげに微笑んだ。

青みがかった黒と赤、左右で色の違うオッドアイが、啞然とした少年の顔を映している。

「あ、あの、あなたは？」

「ん……ああ、ええと、俺は駆逐官で……口に出して言うのは恥ずかしいんだけど、”熾天狩り”とか”龍人”って呼ばれてるよ」

「え……!？」

「……その名を、少年は知っていた。」

怪物たちに対抗するため、未知エネルギーに強い親和性を持つ人々が成る”駆逐官”。

その、ある種英雄ヒーロー的とも言える職業性から彼らのファンは多い。
”龍人”。この駆逐官はその頂点と言っても過言ではなかった。

常に漆黒の鱗に全身を包み、名前はおろか性別さえ不明。

しかし、その圧倒的な戦績から『不敗の駆逐官』とさえ謳われる英雄が、素顔で自分の目の前に居るといふ事実には少年は先程までの恐怖も忘れて飛び上がりそうになった。

「あつ、あの、良かったら——！」

握手を。と言い掛けて、少年は唾然とする。居ないのだ。

ほんの一瞬。コンマ一秒にさえ満たない瞬きの間に青年はその場から消えていた。



——”大賢者” 事件から三ヶ月の月日が流れた。

世界は変わった。

人類の生存圏は大きく狭まり、人口は往來の三分の一にまで減らされた。

地球という生態系ピラミッド……かつてその頂点であった人間は、別の世界ピラミッドからの侵略者によってその地位を脅かされている。

……しかし

「意外と、目に見える範囲だと変わらないよあ……」

「うむ、アニマイトが一時営業停止した時には吾われもここまでかと思つたが、先週から復活

してくれたしな！」

とある土曜日の夕方。俺とバンダイは二人で街を歩いてた。

アニメや漫画のグッズがはみ出たビニール袋をほくほく顔で抱えるバンダイを横目で見ながら、俺は目を細める。

……世界は変わった。しかし、人類はそれに適応しつつある。

今もこの街は以前と変わらず人で賑わっていて、物も資源も十分すぎる程に溢れている。

ある学者が、『人間の最も凄まじい能力は適応力だ』と言っていたのを思い出す。人は生存可能な環境ならば一ヶ月程で絶対に適応してしまうらしい。

三ヶ月もあれば、局所的にかつての日常を取り戻すのには充分過ぎた。

……無論、その裏には駆逐官・軍隊VSモンスターの血を血で洗う殺し合いがあるのだけども。

「おお、駆逐官のランキングが更新されているぞ！ 推しの魔砲少女ハーフアイラちゃんは……32位か。トップ10の入れ替わりは無いな」

横のバンダイが、スマホを見ながらそう言った。

そこには俺も見慣れた駆逐官の写真付きでランキングが表示されている。

”駆逐官”制度の主な資金源は二つ。税金と寄付だ。割合はおよそ六：四らしい。

寄付は、未知生命体対策本部ホームページから駆逐官個人に対して行える。寄付者は金額に応じてグッズが貰えるらしい。

俺もプロマイド作成のために写真を撮られた事がある。

アイドルじゃないんだぞと言いたくなるが、資金源の半分が寄付である以上多少の偶像性は必要だ。

バンダイのスマホを横から覗き込み、四位に表示された“龍人”の名を見ながら俺は溜め息を吐いた。

「貴様も、あれだけ強いんだから駆逐官になってみたらどうだ？」

「え、あ、あー……？ いや、俺はいいかな。どうせ通用しないと思うし……」

「まあ確かにな！ 流石にプロの世界には厳しいかもしれん……吾らみたいなペーパーに戦いなんて無理だ！ ははは！」

「ははは……」

ピカピカしたビームを放ちながらカメラ目線をする金髪美少女の写真を見ながら、バンダイが言った。

……こういうタイプの攻撃を見ると大賢者の光魔法を思い出して鳥肌が立つ。火力は比較にすらならないんだろうけど。

「じゃあ、吾は門限があるからもう帰るぞ……貴様はどうする？」

「ん？ ああ、俺も帰ー」

帰ろうかな、と言いかけてポケットの端末が振動するのに気が付いた。

……駆逐官用の機器の方だ。近くにモンスターでも出たのだろうか。

「……いや、俺はもう少し残っていくよ」

「そうか、夜は怖いからカツアゲとかさされないようになー？」

駅に向かっていくバンダイに手を振りながら、俺は端末を取り出して電源ボタンに触れる。

一秒未満の静脈認証を終え、画面に出てきたのは予想外にもモンスターの出現情報ではなかった。

「このメールは、” 暫時第二東京” を拠点に活動されている、ランキング上位30名の駆逐官の皆様を対象に送付しています」

「私たち未知生命体対策本部の根幹を成す皆様の円滑な連携の促進のため、一週間後の午前二時三十分より” 上位陣の顔合わせ” を行う運びとなりました」

「出席は基本的に自由ですが、皆様の活動の一助になると思われるので、ぜひご検討をー」

「……顔合わせ？」

『未知生命体対策本部』からこういったメッセージが届くのは初めてだった。いつもは

単なる討伐要請だけだ。

……思えば、他の駆逐官とは殆ど関わった事が無かった。

休んだのが俺だけだったら調子に乗ってると思われるかもしれないし……行つた方が良いか？

それに典型的な日本人气質である俺としては、集団から孤立するのは胃が痛くなる。

……でも

「怖い人ばかりだったらどうしよう……」

ランキング上位には、素顔を公開していない人も多い。俺もその一人なんだけども。

だから、行ってみたら全身タトゥーまみれのヤクザみたいな人ばかりでした……みたいな事もあり得る。駆逐官だって荒事を生業にしてるわけだし。

オンラインゲームのオフ会に誘われたみたいな気分だ。正直行きたくない。

「……エリミネーターさんでも連れて行くのかな」

知り合いが一人でも居れば大分気が楽になるだろうから、誘ってみても良いかもしれない。あの人身長デカいから威圧感あるし。

そんな事を考えながら、俺は端末の電源を切った。



「……でつかいビルだな」

あれから一週間後、俺は黒塗りの摩天楼……地図に記された目的地の前に立っていた。モンスターの対策本部だ。

エリミネーターさんも誘ってみたが、『その日は日雇いで冷蔵庫搬入のバイトが入ってるから無理だ!』と断られた。何でも日給が一万円も貰えるらしい。

なので仕方なく一人で来たのだが、なんか悪の組織の総本部みたいで入りにくい。

外壁はかなり頑丈な素材で出来ているようで、コンクリなどではなく何か特殊な金属みたいだった。

「ええと……会場は八階か」

端末片手に自動ドアと大理石の玄関を抜け、エレベーターのボタンを押す。駆逐官の手帳は窓口でチェックされた。

数秒後、ピンポンという音と共に重厚な扉が開くと中には既に先客が居た。

俺は軽く会釈をしてからエレベーターに入る。

「よお」

「……え、あ、ど、どうも」

横から声を掛けられたような気がしてそちらを向くと、「先客」がこちらを見て挨拶

をするように手を上げていた。

身長は俺より少し高く、およそ180センチ程。堀りの深い顔立ちと長めの金髪から、外国人だということが分かる。

……初対面、だよな。文化の違いってやつか？

とりあえず挨拶を返してみる。

「なあ……スーパーとかコンビニに、”菓子パン”ってあるじゃねえかよ」
「え」

真剣な顔で、外国人が俺に話し掛けてきた。

俺が困惑していると、顔をずいっと近付けてきて『あるよな?』と言う。それに気圧されてコクコク頷くと、満足げな顔になって遠ざかる。

な、なんだコイツ……。と言うか階数のボタンがアイツの後ろにある。一向に上昇しねえ。

何階でも良いから早く押してくれないかな。

「あれってよ……明らかにパン屋のパンの方が美味しいのに、なんであんなに売れてるんだろうな?」

「……?」

「これは由々しき事態だと思うぜ、オレは。良いモンを作っても評価されねえっていう

のは全体の質の低下に繋がるし、技術を持った人間のモチベーションも下がっちゃうだろう？

それが不安すぎて、もう十分もエレベーターで一回から最上階まで上下してを繰り返して、オレ」

もつともらしい理論を、もつともらしくない状況と相手にぶつけてくる金髪男に俺は顔をしかめた。

……ああ、これ明らかにヤバい奴だ。正気そうに見えるが完全にキマってる。主に怪しい葉っぱ的なアレが。

それとも、何か心の病気なのかも知れない。

「……普通に、家がパン屋から遠い人とかが買うんじゃないですか？」

「……なに？」

金髪の男は、雷に打たれたような表情でよろよろ後ずさる。……あ、よろけて壁に手を付いた拍子に『8F』のボタンが押された。

ラッキーだ。一刻も早くこの場から離れてしまいたい。エレベーター上昇時特有の奇妙な重圧を感じながらそう思った。

「なるほど……なるほどな。なかなか見所のあるヤツだぜ……おいお前、名前は？」

「言いたくないです」

エレベーターの扉が開いたので、逃げるようにスタスタ出ようとして一手を捕まれた。

思わず振り向くと、そこにはニヤリと白い歯を見せて笑う金髪の姿があった。

「おい、流石に冷たいんじゃないやあねえか……？ 未来の同僚に対してよ」

「は……？」

金髪の男はごごそポケットをまさぐり、手帳みたいな物を取り出して俺へ見せ付けてきた。

「オレの名は駆逐官ランキング日本12位、ジェレマイア・リウインドだ……お前は良い奴だ。他の奴らなんて俺の質問に答えてさえくれなかったからな。だから、これからはお前に付き纏う事にしてみるぜ」

金髪の男一ージェレマイアは、無駄に端正な顔をニカッと笑顔にしてそう言うのだった。

二話『頂点の怪物』

「なあ、お前つてランキング何位だよ？ 学生つばいし流石にオレより下だよな……？」

あ、ちなみにオレは24歳だぜ。大学は出てねえ。あと今は駆逐官やつてるけど、パチンコでスツちまった日とかはコンビニの店員（クルー）に華麗な変身をしてー」

「うるせえ……」

「お、いいねえ。べつに年上とか気にしなくて良いんだぜ？ ジエレマイアお兄さんつてばこのイケメンフェイスと親しみ易さだけがウリだからな！」

ーかなり面倒な奴に絡まれてしまった。

廊下を早歩きする俺に付き纏ってくるジエレマイアを横目で睨みながら俺は小さく溜め息を吐いた。

……苦手なタイプだ。ある意味ヤクザの人とかより厄介かもしれない。猛獣に感じる怖さと虫に感じる怖さが別種なように、なんとというか……とにかく、厄介だ。

「……あの、別に俺駆逐官じゃないんですけど」

「嘘つけ。この職員はほぼ全員スーツだし、外部の人間は入り口で弾かれちゃう。その中で私服のヤツつつたら……？ ほら、ビンゴでしようよ」

おどけて見せながら、ジエレマイアは容易く俺の嘘を見破った。意外と頭が回るらしい。更に嫌いになった。

そして……そうこう言っている内に、「顔合わせ」会場の扉の前に辿り着いてしま

う。
俺は、ニヤニヤしているジエレマイアを横目で睨みながら手帳を取り出し、扉の横に付いているタッチパネルに押し当てた。

「おおい、やっぱり駆逐官じゃねえかよ！ 俺つてば嘘はお見通し……うげっ!」

得意気に言いながら俺に続こうとしたジエレマイアが、背後で間抜けな声を挙げた。俺は静かに口を歪める。

今さっき扉の金属部に触れ、そこに通した土魔術オーロベルアイ。それから発生した土塊につまづいてジエレマイアが盛大にすっ転んでいる。

俺の中で少しだけ溜飲が下がった。

「いつ、つつつ……なんで室内にこんなのが……あつ、おい待てよ!」

後ろから追いかけてくるジエレマイアを無視し、俺は扉の先へ進む。会場には大きな円卓とモニターが設置されていて、既に五人ほど席に着いていた。

……第二位は、居ない。予想はしていたけど。

女が二人で男が三人。それぞれが品定めするように俺を観察している。

「おいお前、間違っても真ん中に座ってるあの金髪の女には逆らうなよ……」

「……なんでだ？」

「とにかく、やべえんだよ……なんでか知りたいか？」

扉側から見て際奥に座る金髪の女性を指差しながら、ジレマイアが俺に耳打ちしてきた。

俺が頷くと、目を細めながら口を開く。

「……アイツが、”第一位”だからだ」

「……え？」

俺が咄嗟に金髪の女性の方を振り向くと、目が合ってしまった。深海みたいに青い、見ていると吸い込まれそうになる瞳が俺を映している。

目深に被った白い帽子のせいかな、どこことなく令嬢染みた上品な印象を受けた。

……”第一位”。それは討伐や貢献度ではなく、未知生命体対策本部の『司令塔』であるが故の地位だ。単純な討伐貢献で言えば総合四位の”龍人”、つまり俺がトップ。要するにランクの上位三人は殆ど役職的な意味合いなのだ。それに反発する駆逐官も多く居るらしいが、討伐貢献トップの俺が何も言わないせいで大した問題には発展していない。

「この度は私どもの勝手な召集に応じて下さり、誠にありがとうございます。ここに感謝致します。
クログ・ポーン 詰み歩兵”。龍人」

金髪の女性は静かに席から立ち上がり、流麗な所作でお辞儀をした。

「……ん？ あれ、第一位さん。俺は確かに”詰み歩兵”で合ってるが……龍人つーのはどういう事だ。……まさか、あそこの席に座ってる中にあの第四位が居るのか？」

ジェレマイアが、表情を硬くしながら円卓を睨んだ。

それに対し、金髪の女性……”第一位”はクスツと笑って俺の方へ目配せする。

恥ずかしいから、そういう二つ名的なのじゃなくて本名で呼んで欲しいんだけど。

「えっ……」

「えっ」

数秒の間、無言でジェレマイアと見詰め合う。

向こうの顔に玉のような冷や汗が浮かんで、ダラダラと滴る。

「……あのー？」

「なんだよ」

「お金払うので、たべないでください」

「食わねえよ！」

ガタガタ震えながらそう懇願してきたジェレマイアに、俺はツツコミを入れた。一体

どんなイメージを持たれてるんだ”龍人”は。

顔バレしたくないから爛れ古龍の能力で鱗を全身に纏わせてただけなのに。

「……映像で何度か見てたけど、あのバケモノの中に人が居たなんて……政府が作ったキメラが突然変異したミュータントとかだと思ってたぜ」

『やれやれ』とジエレマイアが呟いた。

「それでは、席に着いて頂ける？ 間もなく開始時刻ですので」

「あ、はい」

第一位に促され、俺は円卓に着く。ジエレマイアは隣に座ってきた。

第一位は、俺たちの着席を確認してから咳払いの後に口を開く。

「駆逐官の皆様。この度は私たちの勝手な召集に応じて下さった事、重ねてお礼を申し上げるわ。私はこの異界生命体対策本部の責任者、東弊とうへい 陽葵ひまりよ」

「第一位、いや東弊はそう言つて円卓の全員を見渡した。外国の貴族じみた見た目の割に、やけに日本的な名前だ。」

「それじゃあ、スクリーンを見てくれる？」

東弊がパチンと指を鳴らす……すると、機材に触れていないかつ照射機が見当たらないにも関わらず、スクリーンに映像が浮かび上がった。

横でジエレマイアが目を見開く。……魔法か何かか？

肝心のスクリーンには「未知生命体対策本部（以下「対異」）が皆様へ伝えたい3つの事！」という文がポップな字体で写されている。

「……あの、これは？」

「私がパワポで作った映像資料よ。……じゃ、今回の集まりは私たちの顔合わせが目的なわけだし。まずは一人ずつ自己紹介でもして貰おうかしら？」

東弊が再び指を鳴らすと、今度は少し遅れてスクリーンの文字が「自己紹介コーナー！」に切り替わった。

少しムツとした顔で横を睨む東弊の視線を追えば、そこには黒い垂れ幕の内側でパソコンを弄りながら申し訳なさそうに手を合わせるおじさん職員の姿がある。魔術でもなんでもなかった。

「……んじや、最後に来たって事でまずはオレかな」

よつこらせ、とジュレマイアが立ち上がって俺をチラ見した。目で『次お前な』と伝えてきている。

「俺はジュレマイア・リウインド、24歳で独身。ちよつと前まで沖繩の米軍基地で軍人さんやってたぜ！ 特技は色々で趣味は漫画集め！ よろしくっ！」

ピシィッ、と円卓を指差しながらジュレマイアが叫ぶ。室内が静まり返り、俺を除くほぼ全員から奇異の視線が突き刺さった。

ジエレマイアは気まずそうに唸ってから静かに席に座り直す。……次は俺か。

席を立ち上がり、少し緊張しながら自己紹介を始める。

「湊みなと 渚なぎさです。高校生です。趣味は料理です。よろしくお願いします」

簡潔な自己紹介を述べ、俺は座った。何故かジエレマイアが裏切り者を見るような目でこちらを見てくる。

「おい……!? なに差し障りの無い自己紹介してんだよ！ 性癖の一つでも暴露しろよ

！ 折角ふざけた回答しやすい雰囲気にしてやったのに、これじゃ俺がただの変な奴みたいじゃねえか！」

「それは間違いないだろ……」

「おい……てめえら」

俺がジエレマイアを受け流していると、ガタツと音を立てて一人の男が立ち上がった。

寝癖まみれの茶髪で服装はヨレヨレのトレーナー。隈が深く目には覇気が無くただギラついている。端的に言えばだらしない男。

「あら、次は貴方が自己紹介して下さるのかしら？ ならまずは名前を」

「いいや、よく聞け……俺が今日ここに来たのは、自己紹介なんてつまんねえ事をする為じゃねえんだ ……オラアツ！」

「茶髪の男が、勢い良く円卓を蹴り上げた。天板にヒビが入ってそこだけ大きく抉れる。」

それから男は船長が船の甲板でそうするみたいに、足を片方だけ円卓に乗つけて腕を振り上げた。

「良いか、おめえら！　そこに座ってる東弊つっアマは、大した実力も実績も無いのにずっとランキング一位に居座ってるクズだ！　これは明らかに不公平だろうが！

「ーなあ!?　”龍人”!!」

急に名指しされ俺はぎよつとした。ジエレマイアが小声で『知り合いか……?』と問い掛けて来るが、初対面だ。あんなヤツ知らない。

俺の困惑とは裏腹に、茶髪の男は妙にキラキラした目で俺を見ている。

その瞳に何か大賢者に近いものを感じて、俺は少し顔をしかめた。

「俺はアンタに憧れてこの業界に入ったんだ！　圧倒的な力を以って怪物どもを捻じ伏せる、無敗にして最強の駆逐官！　……だがなんだ！　”龍人”が四位!?　おかしいだろうがアツ!!」

茶髪は再び激昂し、今度は腰のホルダーから短剣を抜いた。

そして、その切っ先を東弊に向ける。

「俺が”第一位”をブチのめして、龍人……アンタをトップに押し上げるツ！　第二位

も第三位も、いつか探しだして必ずぶつ殺す！」

「あらあら……随分と威勢が良いのねえ……ふふ、助かるわ」

ーそう叫ぶと同時に、茶髪の体が歪に変形を始めた。

脊椎のような形状の細長い骨が全身から突き出してきて、最終的には異形の怪物の姿になってしまった。

なんだ、あれは……!? 少なくとも”術式装填”ではない。あまりに異質すぎる。

なら俺の爛れ古龍みたいに、取り込んだ魔核があまりにも格上すぎて属性を塗り潰されたケース……いや違う。アイツからは、”飽和”しているだけの魔力を感じない。

「今日、皆さんに伝えたい3つの事ーその内の一つが、”あれ”よ」

「ガアア”ア”アア”ツツツ!!!」

骨の怪物が、腕を振り上げて東弊へと襲い掛かる。

幾重にも折り重なった骨が絶え間なく形状を変化させ、さながらチェーンソーのようだ。骨の強度にもよるが、普通の人間ならそれに触れただけで肉を削られるだろう。

俺たちに伝えたい事が、アレ……? 何が言いたいんだ。

「彼が持つ、この異能……これは、一部の異界生命体が用いる『術式装填』でも『魔法』でも無いのよ。……そう。強いて言うのなら、『地球版の魔法』ね」

東弊はヒラリと身をかわして茶髪の突進を回避する。勢い余って円卓に突っ込み、木

片がギヤリギヤリ削れた。

茶髪は怒りの咆哮を挙げ、更に纏う骨の量を増して東弊へ襲い掛かる。

「スライム事件以来……怪物達の遺骸から採取できる未知エネルギー結晶。それを接種した地球人の中からおよそ五万人に一人の割合で芽吹く特殊な能力が確認されているわ。例えば彼のは『骨を強化・増量し操作する能力』よ。見ての通りね」

東弊が、うつすらと笑みを浮かべながら俺の方を見てきた。……魔法でも術式装填でもない、”地球版の魔法”だって？

そんな代物が存在したのか。確かに自然現象を主に操る魔法とは完全に別種だ。

「私たちはこれらを、持ち主の願望や性格が反映する事から転じて『理想』^{イデア}と名付け、日夜研究を行っているわ。……はい。ってなわけで実演はおしまいね。もう死んで良いわ、あなた」

「はー？　ぐがアっ!？」

東弊がにつこり笑って、ぱんつと手を叩くーすると、何重にも折り重なった凄まじい打撃音と共に茶髪の体がふっ飛んだ。

骨の鎧は木っ端微塵に砕け、床に血溜まりが広がる。

……何をした？　全く見えなかった。動いた様子も無い。

一瞬にしてミンチ同然の有り様になった茶髪は、数秒だけ痙攣していたがすぐに動か

なくなつてしまつた。……死んでいる。

ジェレマイアは、信じられないという顔で東弊を見ている。

「あら、皆さんどうされたのかしら……私は自分の身を守つただけ、正当防衛よこれは。それともスプラツタなのはお嫌い？」

口に手を当ててくすくす笑いながら、東弊が言つた。

「……おい、帰ろうぜ渚。アイツ本気でやべえ。身を守る為とは言え、人一人殺つて笑つてやがる」

怪物を見るような目を東弊に向けながら、ジェレマイアが俺の肩に手を置いた。

……チラリと東弊の方に視線をやると、笑顔で小さく手を振ってくる。すぐに目を逸らした。

「……ああ、そうだな」

「残念……もうお帰り？ まあ良いわ。特に重要な事は伝え終わつたし。受付の所に封筒を手配してあるから、残りの情報はそれを見ておいて頂戴」

意外とあっさり、東弊は俺たちの退室を許可した。

再び分厚い扉を開き、俺とジェレマイアは廊下に出た。扉が閉まつた途端、重圧から解放されたように息がしやすくなる。

「……警察、とか呼ぶか？」

「いんや……」 対異 は越法機関に片足突っ込んだレベルの権限を持つてるし、さっきのは確かに正当防衛だ。……あのホネホネ野郎の事は内々に処理されて終わりだろうよ」

下降するエスカレーターの中、ジエレマイアが溜め息を吐きながらポケットをまさぐり、そこから10円の『おやつカルパス』を二つ取り出した。

ビニールに包装された小さな肉の円柱が二本、光を浴びてテカテカ輝いている。

「食うか？」

「いらない」

「そっか」

ぱくりとカルパスを口に入れるジエレマイアを横目で見ている内に、エスカレーターの扉が開いた。

扉から出て俺が帰ろうとすると、ジエレマイアが肩に手を置いてくる。振り向くと、何か紙切れを差し出してきた。

「はい、これ」

「……？」

「メアドだよ、メアド。……あ、最近の子だとLINEって言った方が分かりやすいか。折角仲良くなれたんだから、交換しとこうぜ」

良く見れば、紙切れには意外と達筆な字体でアドレスが書かれている。

「ええ……言うほど仲良くなつたか？」

「細かい事はいいんだよ。……とにかく、入力しとけよ。しないと住所特定して家に引きでピザ大量に注文してやるからな」

「やり方が陰湿だなお前」

俺は渋々メールアドレスを受け取り、ポケットに押し込んだ。

ジエレマイアは満足げに笑って『それじゃな』と去っていった。

「……はあ」

その背中を見送つてから、俺は一際大きな溜め息を吐いた。

……”イデア”、地球版の魔法か。モンスターだけでも手一杯なのに、そんなよく分からないの能力を持った連中まで居るのかよ。

本当に、この世界は前途多難だ。

いやに重たく感じる手元の茶封筒を見詰めながら、俺は心の中でそう呟いた。

三話『神の存在証明』

「……朝か」

顔合わせが行われた次の日の朝、俺はカーテンから差し込んでくる朝日で目を覚ました。

ベッドから起きて寝室を出る……そしてスマホで日時を見ると、今日が月曜日である事に気が付いた。学校に行かなければ。

俺の今の家は、ステイルシアと一緒に住んでいたあの家ではない。

”大賢者”との戦いの後すぐに向かったが、ステイルシアが俺を守るために張った防壁に阻まれて入れなくなってしまうていたのだ。

何度も破壊を試みたが不可能で、エリミネーターさんの本気の攻撃でさえビクともしなかった。

「うわ、数学が二時間ある」

今日の時間割りを見て鬱屈とした気分になりつつも、俺はパンを食べて教科書をリュックに詰めた。

そして玄関を出ようとして、靴棚の上に置かれた、大きな茶封筒に目が止まる。

昨日貰ったヤツだ。なんだか気が重くて放置してしまっていた。

「……バスの中で読むか」

封筒をぽいっとリュックに放り込み、ジッパーを閉める。

以前より遥かに軽く感く感じるそれを背中に背負いながら、俺は玄関を出た。

□

田舎に住んでいた以前と違い混雑したバスの車内、後ろの方の席に座って俺はリュックを開いた。

封筒を取り出しボタンで止められた上部を開ける。すると中には数十枚の書類が詰まっていた。

ソシャゲの利用規約みたいな分量だ。

だが向こうと違ってこっちはちゃんと読まないといけない分、気が滅入る

「……これは」

『魔核の交換レート変更』や『駆逐官用端末に新機能追加』などの比較的どうでも良い情報が大半だったが、最後の方の書類に「重要」の赤印が押してあって俺は手を止めた。

……【重要】がついているのはパツと見2つだけ。

第一位が『地球版の魔法』と形容していた異能、“アイデア”についての情報と、もう

「種類」

「神の、存在証明……?」

「……久々に目にしたその単語に、俺は困惑した。」

モンスターが襲来した初期の頃、兵器を使って討伐活動をしていた白フードの集団。

最近はめつきり名前を聞かなくなっていたが……一体どうしたのだろうか。

「およそ一ヶ月ほど前から活動を停止していた指定宗教団体“神の存在証明”が、近頃になって怪しい動きを見せている事が我々の調査によって明らかになりました」

「以前は重火器や細菌兵器によるアプローチでモンスターの殺害を試みていたこの団体ですが、一週間前に我々“対異”の実験施設から対モンスター用の兵装を盗み出した事から報復として彼らの施設に機動部隊を送り込んで制圧した所、無数の大小様々な未知エネルギー結晶と、モンスター大量殺戮兵器の開発形跡が確認されました」

「対異界生命実体法令第九条により、政府からの認可が降りた法人と個人以外には未知エネルギーの研究は許されていません」

「そのため皆様が“神の存在証明”構成員と接触した際には、非敵対性の異界生命体と同等の処置として拘束し、我々にご一報お願いします」

長々と書き連ねられた文章を読み終え、俺は目を細める。

……ようするに、”神の存在証明”が妙な動きをしているから気を付けろって事か。思ったより深刻な問題じゃなくて、胸を撫で下ろす。

それから十数分バスに揺られて、俺は学校近くのバス停で降りた。

学校は人が多かつたからかモンスターによる被害の爪痕が特に深く、未だに修復作業が終わってない。

そのため使える教室の数が減り、1クラスの人数が増えて窮屈だ。

他の地域から避難してきた学生が多いのもそれを助長している。

「おお、来たか渚！」

教室に入るなり、一人で自分の席に座っていたバンダイが俺の方に駆け寄ってきた。

……俺たちの友達グループは以前まで三人だったが、今では俺とバンダイの二人きりだ。

阿頼耶識あらいやしき 櫛名田くしなだーあの厨二病こじらせ万能超人は、学校が再開してから一度も姿を表していない。

家に引きこもってるのか、それとも死んでしまったのか……とにかく音信不通。

先生が家に電話を試してみたらしいが、番号が変わってしまっていて繋がらなかったと聞いた。

「昨日テレビでやってた駆逐官特集見たか？ ハーフアイラちゃんが、でつかいトカゲ

をビームで……」

「あれ、エル★ファイネちゃんはもう良いのか？」

「や、やめろその名を出すのは！　もう実らない恋なのだ！　今でもたまたまにネットで検索したりしてるけど目撃情報の欠片も無いのだっ!!」

「そ、そうか……」

半泣きでぎゃーぎゃー騒ぐバンダイを、俺は呆れた目で見る。

そりゃ政府の機密だし……俺もずっと会えていない。次会う時、向こうは俺と”初対面”だろうし。

今度は『ハーファイラちゃん』について熱弁するバンダイをぼーっと見ているとーその背後に、ニヤニヤと加虐的な笑みを浮かべる男子生徒が立っている事に気が付く。「おーおー、まだ俺が弱い時にゴ布林一匹倒していきってた渚くんじゃあないのお……あとキモオタ、俺のクラスでブヒブヒ喚くんじゃねえ。デブ菌が飛沫しちまうだろ」

「な、なんだとっ！　何様だきさ……ま」

散々な言われように、バンダイが怒った様子で声の方に振り向いた。

しかし、その相手の顔を見て顔が青ざめていく。いつもバンダイが怖がっている、クラスの人気者だ。

「ああ？ 俺が何様だつて？」

「あ、ぐつ……ぐつ、ごめん、なさい……っ!？」

男子生徒がバンダイの手首を掴んで握り絞める。するとすぐに骨の軋む音が聞こえてくる。……こいつ、それなりに魔核を取り込んでるな。

バンダイは顔に冷や汗を浮かべながら床に膝を突き、何度も『ごめんなさい』と繰り返した。

取り巻きの連中が後ろで笑いながら、『やめとけー!』とか『かわいそうだよー!』とか言っている。本当に可哀想だと思っっているなら、そんな楽しそうに笑いはしないでらうに。

こいつはたしか、ゴブリンが襲来した初日に俺から中型ホブの魔核を奪って逃げた奴だ。

今は駆逐官になって稼いでいるらしい。教室でいつも自慢げに話していたから知っている。

気がつけば、そいつとバンダイを中心にして人だかりが出来ていた。ちよつとしたイベント感覚だ。街の喧嘩でも見物するみたいに、強者から弱者への暴力を娯楽として楽しみにしている。

「やめろ」

そう言いながら、俺は席から立ち上がった。教室中の視線が俺へと集中する。俺たち

の何が気に食わないのかは分からないけど……俺が少し殴られてやれば気が済むだろう。

バンダイが『やめておけ』と目で訴えてくるが、一瞬アイコンタクトしてから前に出た。

「……ぶつ、はははっ！ 皆さん、聞きましたか!? 『やめろ』ですって！ タメ口です

！ このド陰キヤ、身の程という概念をご存じないようです！」

茶化すようなその言葉で、クラスに小さな笑いが巻き起こった。

「やめてください」

「ハッ、イキってんじやねえよゴミ虫。かつこいいと思ってるのか……あのねえー渚くん。ちよつと、歴史のお勉強でもしよつか？」

ニコツ、と笑って俺に近づきながら奴はそう言った。

「むかーしむかし、サムライは戦えない百姓どもを守ってやる事で様々な権利を持っていました……『切り捨て御免』とか、侮辱されたらブツ殺しても良い特権とかなあ？」

世界大戦でも、国民は飢えてたけど軍人には食料が行き渡ってた……そのぐらい、昔から戦う人間の権利ってのはデカイわけ、アンダースタン？」

「……」

「そして、今てめえらが安心して暮らせるのは俺ら駆逐官が怪物どもとやり合ってるか

ら……つまり気に食わなかったら好きナだけ踏みにして良いワケよーこんなふう、にっ！」

ー言い終わると同時、奴のボディブローが俺の腹に叩き込まれた。

痛くも痒くも無いが一応よろけておく。それに気を良くしたのか、今度は前蹴りを繰り出してくる。

「はははっ！　これが一線級駆逐官の力だ！　腹ン中で内臓が暴れまわってるみてえだろ！　けど倒れねえのは良い心がけだぜ……サンドバッグとしてなあっ！」

「な、なぎゃ……」

殴る、蹴る、踏む。

俺に一通りの暴行を加えた後、奴は息を荒くしながら額の汗を拭った。

その間俺は某ヤ○チャのような体勢で地面に倒れ、埃まみれの地面とにらめっこしていた。

「……やつば、中型ホネを難なく倒してたのは見間違いだつたみてえだな。俺が最強だ……

おいキモオタ、そのぼろ雑巾は適当に整形外科にでも連れて行つとけ。」

「渚っ……！　おい!?　大丈夫か!？」

駆け寄ってくるバンダイにひらひら手を振って、俺は立ち上がった。

制服に付いた埃を払いながら教室を出ようとすると、先程まで満足げだった奴が口を

ばくばくさせながら何かを言う。

「……なんで、立てんだてめえ」

「あ……」

まずい、と思った瞬間には、既に目の前に拳が迫ってきていた。

スローモーションな打撃、それに大人しく当たろうとして――

「ぐがあっ!？」

「……へ？」

――奴が、何者かに蹴り飛ばされて壁に叩きつけられた。

悶えながら腹を抑え、口から吐血する。クラスに女子の悲鳴が響いた。

蹴り飛ばしたその”張本人”は、俺の横に歩いてきて奴を鼻で笑う。

「ハッ、不敬なヤツだ……神の盟友に手を上げるとは重罪。だけどボクは優しいから

ゴツドキツク一発で許してあげよう」

良く通るボーイソプラノの声、色素の薄い長めの茶髪、整った女顔。

線の細い体からは信じられない威力の蹴りを放ったソイツは、俺のよく知る人物だっ

た。

横で目を見開くバンダイと一緒に、俺は表情を驚きに染め上げた。

「くし、 nada……?」

「久しぶりだね、盟友。ちょっと実家の方が忙しくて学校に来れなかったけど今日から復帰だ……なに、もしかして怪物にやられたとでも思った？ ははは、神であるボクが魔の者に遅れを取るわけが無いだろう」

——自らを本気で神と語る狂人は、パチツとウインクしながら俺にそう言うのだった。

重要「アイデア”調査資料” 筆者：東弊 ひまり 陽葵

「アイデアとは、”スライム事件”以来およそ五万人に一人の割合で発現する特殊な能力の総称です」

「地球言語を解する異界生命体へのインタビューによって存在が明らかになった異界の技術、『魔法』やその簡易版である『術式装填』とは全く異なるプロセスで完結するアイデアはその多くがモンスター討伐に有効であるため、我々”対異”はアイデア使いの積極的な発掘に努め、厚待遇での雇用という形でその協力を得ることに成功しています」

「なおアイデア使いには大別して四つのパターンが存在し、それらは『現象操作系』『物体発生系』『概念干渉系』『現実改編系』と区分されます」

「特に『概念干渉』と『現実改編』は大抵が極めて強力であるため、”対異”はその戦闘

力指数を『飽和』と同等のBランクと定めています。〔術式装填〕はD、特級異界生命
体指数を『飽和』と同等のBランクと定めています。〔術式装填〕はD、特級異界生命
精霊王”の使う『精霊魔法』はA（）
????????????????

四話『灰色の情景』

「お前……ぶ、無事だったのか？ それにどうやってアイツを一発で……」

「それは……僭越ながらボクが神だからだと言う他無いね」

「なんだお前」

地べたに座り込みながら問い掛けた俺に意味不明な事を言いながら、クシナダが手を差しのべてくる。

蹴り飛ばされたヤツは腹を抑えて悶絶し、口から泡を吹き出していた。

……魔核を取り込んだ人間を、一撃で？

恐らくアイツだって、1トン程度のヒグマなら片手間で処理できるぐらいの実力はあ
る筈だ。

しかしクシナダからは全くもって魔力の香りがしない。

正真正銘、ただの人間だ。

「ん、どうしたの」

「い、いや、喧嘩強いんだなあって……」

クシナダの手を取り、俺は立ち上がった。

……まさか、”アイデア”か？ 初めて知った翌日に出くわすとか考えたくないけど……可能性はある。

「……なあ、変なこと聞くんだけど……最近、なんか特別な能力みたいな使えたりしないか？」

「この宇宙を作り出したのはボクなんだから特別な能力と言うならずっと使えてるよ、変なこと言わないでよね」

「駄目だこいつ……」

凄まじい話の通じなさ具合に俺は頭を抱えた。相変わらぬイカれてやがる。言葉の通じない状態のステイルシアだってもう少し意思疎通が出来た。

「なんだつ、今の……！ クソが！ てんツ……めええツツツ！ 殺す！ ぶっ殺してやる！ 俺の事マジでキレさせたなあ!? ブツブツくつちやべりやがって！」

と、その時。

戦闘不能に見えたヤツが足をガクガク震わせながら立ち上がり、コンクリの地面が陥没する程の踏み込みを持って俺の前に立つクシナダに殴りかかった。

——本気だ。さつきみたいに痛め付けるためではない、対象を殺害するための攻撃。完全に頭に血が登ってしまっている。

「……爛れ古龍」

俺は爪を押し当てて指先から血を流し、ぼそりと小さい声で自分の中に根付く『共生者』へ呼び掛ける。

そしてデコピンの動作で指を弾き、血液を数適だけヤツの体に飛沫させた。

「お、お” おおお” おおお!?!」

ーそれと同時に。ヤツの体から無数の黒い龍腕が発生し、凄まじい臂力で床に叩き伏せた。

ヤツを中心にして放射状にヒビ割れた巨大なクレーターを作り上げ、地震でも起きたみたいにくらりと校舎が揺れる。

べきやり、体から嫌な音を立てて気を失ったヤツを見下ろしながら、クシナダは呆気に取られたような顔をしている。

「おい、そいつを適当な整形外科にでも連れていっとけ」

先程の意趣返しとして、俺は取り巻きの連中にそう言った。

ビビりながらヤツを引き摺っていく数人の男子を見て少し気持ち良くなりながらクシナダの方を振り向くと、俺の顔を真剣な顔で見詰めてくる。

……まさか、バレたか？ 流石に無いとは思いますが、こいつは割りと察しが良い。

「ナギサ……もしかして、今のは」

「え、な、なんのことー」

「ボクはどうやら新しい能力に目覚めてしまったらしいっ！」
「は……………」

目をキラキラさせながら、大はしゃぎでクシナダは叫んだ。

「能力名は何にしようかつ!? 今ボクが発現させた黒い龍のビジョン……………安直に行けば『アジ・ダハーカの腕』とか!? ああでも旧約聖書の蛇から取って『†禁忌を誘う蛇†』も捨てがたいよね! それともいつそSF風に『Σ_{シグマ}因子』とかもありだ……………っ! ねえなぎさ、何にすれば良いと思う!」

「お、おう……………」

物凄い勢いで捲し立てつつ、俺の手を両手で掴んでぴよんぴよん跳び跳ねながらクシナダがそう聞いてくる。

……………どうやら、俺にとつて都合の良い方向に誤解してくれたらしい。”爛れ古龍”の腕を自分の能力だと思い込んでやる。

こいつが末期の厨二病患者で助かった。

「……………とりあえず、『破滅^{ドラゴン}の龍腕^{ルイオン}』とかどうよ」

「んー、採用!」

「マジで言ってるのお前」

「あ……ねえナギサ、バンダイ。あそこにタピオカドリンクの屋台があるよ。久々にタピる？」

「今時タピるとかJKでも使うヤツ居ないだろ。と言うか、未だにタピオカの屋台なんてあるのかよ……」

「一攫千金を夢に多額の借金をしてタピオカ屋を起業した人が大半だから、ブームが下火になっても引くに引けない地獄みたいな状況らしいぞ！」

「キツツイなそれ」

学校が終わり、下校中。

三人で歩いているとクシナダが立ち止まって、道の端にあるタピオカの屋台を指差しながら嬉しそうな顔で寄っていく。

俺とバンダイは仕方なくそれに着いていき、屋台に並んだ。

「わあ……凄いよこの店！ 馬鹿みたいにメニューが多い！ 『ゴブリンの脳漿^{のうししょう}味』ってなんだろう!? ねえどうしよう!? 注文しちゃおうかな!? わくわくが止まらないよ!」

「いや流石に攻め過ぎだろ!? 変な病気になるそうだから頼むの止めとけ!」

屋台の横に設置してあるメニュー表を見ながら叫んだクシナダに、俺は全力で突っ込

んだ。なんだそのタチの悪い百味ビーンズみたいなバリエーションは。

ええ……？ 『リザードマンの水袋味』『ワイバーンの砂肝味』、他にも珍妙なのが沢山ある。頭がおかしくなりそうだ。

一体、どんな奴がこんなメニューをー

「いらつしやいませ！ ご注文がお決まりでしたら私に……あれ、うん？ 後ろにいるのは……坊主か？」

「え？」

ハキハキとした声で挨拶をしてきた店員の顔を良く見ると、かなり見覚えがあった。

灰色の髪に精悍な顔立ち、普段の騎士鎧の代わりに青いエプロンを身に付けているその男は、俺を見て驚いた顔をしている。

「エリミネーターさん……!?!」

「おお、やはり坊主か！ 会うのは一週間ぶりぐらいか？」

営業スマイルを崩し、今度は自然な笑顔でエリミネーターが俺に言った。

……え、なんでエリミネーターさんタピオカ屋で働いてるの？

「どうして、タピオカ屋なんかで……？」

「昨日のバイトで知り合った男が、タピオカビジネスに失敗した借金で首が回らないらしくてな。どうにか金を作るから、その間だけ店を預かって欲しいと頼まれたんだ。な

んか変な書類にサインとか書かされたが……まあ大丈夫だろう」

「へ、へえ、大変そうですね」

「いや、接客は楽しいしそうでもないぞ」

楽しんで笑うエリミネーターに、俺は自分の顔がひきつるのを感じた。

……借金、書類に変なサイン、店を押し付けられた。それって完全に騙されて逃げられたパターンなのは。

今後お金に困ってるようだったら助けてあげよう。流石に可哀想だ。

何も知らないエリミネーターさんを尻目にそう決意しながら、俺はぐつと手を握った。

「それはそうと、注文は何にする？ 昨日は徹夜してメニューを開発したんだ……このスイーツ飽和時代、生き抜くためにはやはり自分なりの個性を出すしか無いと思ってる。異世界風味のドリンクが勢揃いだぞ！」

「えつと、えつとえつと！ ボクは『次元梟の幻覚味』と『ドツペルゲンガーが化けた思
い人の膾で童貞を捨ててしまった男の悲痛な叫び味』で！」

「俺はイチゴミルクで……」

「わ、吾はバナナで」

「おお……！ その少女、いや少年か？ 中々分かつているじゃないか！ まさか初

見てオレの得意フレーザーを二枚抜きしてくるとは……!」

ノリノリでドリンクを作るエリミネーターさんに、俺は溜め息を吐いた。人生楽しそうだなこの人。

それから数分でドリンクを完成させたエリミネーターさんは、『出来たぞ!』と言いなからカウンターに置いた。

クシナダなのであろう奇妙な色合いのドリンク二つは、見ていると何だか不安な気持ちになる。

……どんな味するんだろ、ちよつと気になってきた。

「ええつと、いくらですか?」

「いや、坊主の友人達だからな……オレの奢りだ。金は要らん」

「え、でも……」

「くどいぞ、一応オレだつて大人なんだ。たまにはかっこつけさせてくれ」

『……それに』と言つてから、エリミネーターは声を小さくして言葉が続ける。

「あの大賢者を倒してくれたのはお前だ。ヤツが死んで、オレや亡き戦友たちの心がどれだけ救われたか……こんなでも、本当に感謝してるんだ。タピオカドリンクの四本や五本なんて安いものだぞ」

にこり、と穏やかに微笑んでエリミネーターさんは照れ臭そうに頬を掻いた。

……この人が居なければヤツに勝てた気はしないが、好意は素直に受け取った方が良
いか。

俺はお礼を言ってからドリンクを受け取り、後ろの皆に『これ全部サービスだつて』と
伝えた。

「あ、ありがとうございます」

「え、ほんと？　ありがとうございます！」

「おじつ……、あの、オレはまだギリギリ二十代で……」

エリミネーターさんの弁解をスルーして、クシナダがすたすた歩いていった。

俺とバンダイは、もう一度お礼を言ってからそれを追いかける。

「……ねえ渚、さっきの人……知り合いだよね？」

少し先、広場のベンチに座りながらクシナダがそう聞いてきた。

「そうだけど」

「……どこで知り合ったの？」

「どこって……何か気になる事でもあるのか？」

妙に深入りしてくるクシナダの顔を見返すと、いつもの飄々とした態度とは裏腹に顔
をしかめていた。

また、いつもの厨二病か……そう思いながら、俺は適当にあしらおうとして――

「ー相当殺してるよ、あの人」

「……へ？」

「人も人じゃないのも、数え切れないぐらい」

ーグシヤリ、とドリンクの入ったコップを握り潰してから、クシナダはゴミ箱に投げ捨てた。

エリミネーターさんの作ったドリンクが、汚ならしく地面に撒き散らされる。

「あんな怪物とどこで知り合ったのかは知らないけど……あまり関わらない方が良いと思うな」

すくりと立ち上がり、クシナダは『明日また学校でね』と言い残して去って行った。唾然とする俺と、バナナドリンクを一心不乱に吸っているバンダイを残して。

「……」

「おいナギサ！ これめっちゃ美味いぞ！ 吾の中でだけタピオカブームが再燃しそうだ！ ……つてあれ、どうした？」

「……いや、別に」

口の周りをベトベトにしながら叫ぶバンダイに適当な返しをしながら、俺は先程の発言の意味を考える。

……クシナダは、エリミネーターの正体を知っているのか？

それとも何か不思議な勘でもあるのか。
少なくとも単なる妄言とは考えにくい。
今朝に見せた異様な身体能力と言い、クシナダには注意する必要があるかもしれない。

五話 『ただ息をする、人の残骸』

週末。

クシナダが学校に復帰した月曜日から五日が過ぎ、俺の警戒とは裏腹に特に何も起こらず土曜日がやってきた。

チュンチュンと鳴く鳥の声と、朝六時半を指す時計が目に入る。

「……休みの日に限って早起きしちゃうの何でだろ」

『これってトリビアになりませんか?』とクソみたいな独り言を呟きながら、俺はベッドから降りた。

顔を洗い、右目にカラコンを入れる。

それから着替えてキツチンへ歩いていき、IHのスイッチを入れて上にフライパンを乗せる。そして冷蔵庫から卵を取り出した。

「……ん?」

しかしその時、ピンポーンという間の抜けたチャイムの音が玄関から聞こえてきた。こんな朝に誰だろうか。

はーい、と返事をしてから、俺は靴をつっかけて玄関のドアを開けるー

「どなた、です、か……」

「おはよう”龍人”さん。先週ぶりね」

ーードアの先に立っていたのは、俺より少し年上であろう金髪の女性だった。白い帽子を深くかぶり、品の良いドレスに身を包んでいる。

金の睫毛に縁取られた深海色の瞳が、俺の顔を映して嬉しそうに細まった。

「第一位、さん……」

「あら、貴方なら別に呼び捨てでも構わないのよ……？」 ”彼女”にもそうしていたんでしよう？」

くすくす、と口に手を当てて”第一位”ー東弊とうへい陽葵ひまりは笑う。

……こんな朝から、一体なんの用だ？ 特別任務、護衛、討伐命令……思い当たる節がありすぎて、逆に絞れない。

「……あの、今日は俺に何の仕事をー」

「仕事じゃないわよ？」

「えっ……？」

「今からお姉さんと一緒にお出かけしましょう。……もちろん、それだけってわけじゃないけど。少なくとも仕事ではないわ。あなたにとつても、すごく良いことよ」

白くほっそりとした冷たい手に引かれ、俺は玄関の外に出た。ひんやりした空気が頬

を撫でる。

よく見れば、家の前には黒いリムジンみたいなのが停まっていた。……これに乗れ、って事か？

「お出かけって……どこに？」

「秘密」

ぱちつ、とウインクしながら第一位は車の前で手を上げた。すると自動的にドアが開く。タクシーみたいに運転席から扉を開閉できるタイプの作りなのだろうか。

促されるまま車の後部座席に乗り込みながら、俺はそう思った。

「さて……目的地に着くまでの間、ちよつとお話しましょうか」

エンジン音と共に車が発進し第一位が俺に話し掛けてきた。

綺麗な顔立ちなのに、いつも浮かべている左右で微妙に表情の異なる歪んだ笑みのせいで不気味な印象を受ける。

「……はい、第一位さん」

「……うーん。ちよつと良くないわね、その呼び名……もつと柔らかい感じが良いわ……そうね、『ひまりん』とかどうかしら？」

「東弊さんでお願いします」

さらつとドギツイ事を言ってきた第一位に、俺は頬をひきつらせた。こんなキャラ

だっけこの人。

年上、しかも事実上の上司に『ひまりん』は無いだろ。

「もし私と仲良くなりたいたいなら、東弊さんじゃなくてひまりんと呼ぶべきよ！」

「大丈夫です、”東弊さん”」

「……あなた実は性格悪いでしょう!？」

じいつ、と恨めしそうに見てくる第一位の視線から逃れるため、俺は必死に窓の外を見ているフリをする。

「はあ……まあ、良いわ。あの騎士に聞いた性格と大分違うわね。もう少しフレンドリーな子だと思っていただけけど」

溜め息混じりに聞こえた第一位の呟きに、俺はびくつと肩を震わせる。

……こいつ今、”騎士”って言ったか？

「……騎士?」

「ええ、少し前に接触したわ……あなたのお師匠なのでしょう? 排殺騎士エリミネー

ター。現存する最強クラスの異界生命体。もし彼が本気で人類に牙を剥けば……脅威ランクSは下らないでしょうね」

ー第一位は、エリミネーターさんの存在を知っているのか？

首筋からブワつと汗が吹き出る……あの人は確か、討伐対象として凶鑑に登録されて

いた。

「……あの人を、どうするんですか？」

「どうも出来ないわよ……？」 少し前に一度『術式装填』に目を着けて、私が強引に技術顧問として連れて行こうとしたんだけど、油断してたらそつ首ハネ飛ばされそうになつてね……危なげ無く勝てそうな”第二位”は何故かエリミネーターと戦いたがらないし。ほんと、どうにも出来ないのよ」

『あの技術は欲しかったわ……』と第一位が肩を落としながら言った。

討伐の予定は無いという事実、俺は思わずほっとする。

「……もうすぐ、目的地に着くわね」

少しの間を置いてから第一位はぼそりとそう言った。その視線を追ってみると、大きな灰色の建造物がポツンと建っている。

住宅街からは程遠い場所にあるのが何となく原子力発電所を彷彿とさせて、何か危険なモノを扱う施設である事を察した。

「さっき言つてた……『俺にとつて良いこと』つてなんですか？」

俺がそう聞くと……第一位は一瞬だけ、今にも死んでしまいそうなくらい哀しい顔をした。しかしそれからすぐに、いつもの歪んだ笑みに戻る。

「……あのね、それはね」

妙に勿体ぶってから、第一位は口を開く。

「――第二位から貴方に、特級異界生命体……」精霊王「との面会が許可されたのよ」
「……………え」

精霊王「――つまりは、ステイルシア。面会が許可された？」

一瞬、理解が追い付かずに硬直する。

急過ぎて実感が沸かない。様々な感情が、激流の如くうねって俺を責め立ててくる。
「何故かは知らないけど……彼女に……執心なんですよ、貴方。第二位から聞いたわよ」

淡々とした第一位の言葉で、俺は現実引き戻された。

……ステイルシアは、あそこに居るのか。灰色の建物を見ながら息を呑む。

「……………さっ、行きましょう」

建物の前で車が止まり、ガチャリとドアが開いた。

「言っておくけど……彼女を力づく連れ出そうなんて考えない事ね。長らく面会が許諾されなかったのも、それを危惧した上層部の判断なんだから」

「……………分かってます」

釘を刺してくる第一位に気の無い返事をしながら、俺は建物の入り口に入る。

中に足を踏み入れた途端、雰囲気が変わるのが分かった。『魔力が濃くなった』とでも言うべきか。肌がピリつくような空気感。

大賢者と相対した時の威圧感を薄く、雑多にしたみたいな感じだ。

数多くの異世界人がこの施設に収容されているのだろう。

「ここに収容されているのは、かなり上位の異界生命体が殆どよ……精霊王はその中でも最上位クラス、収容ユニットは最奥に設置されているわ」

スタスタと先を歩く第一位の小さい背中を見つめながら、俺は施設の廊下を歩く。

廊下の壁面にはいくつも鉄製の扉が設置されており、それぞれに『B』とか『A』とかの文字が記されている。恐らくは危険度を表したモノだろう。

「……着いたわ」

それから数分ほど歩いて、何重ものロックを抜けた先にある扉の前で第一位は立ち止まった。

扉に記された文字は——脅威ランクSS+。その下部には『Spirits・Roald』の英語が彫られている。

「開けるわよ」

扉の横に付いた、静脈認証用であろうプレートに第一位が手をかざす。すると、互い違いになって噛み合っていた鉄扉が横に開く。

「これは……」

その先にあったのは予想外に広い空間と、そこに設置された巨大なガラス張りの正方

形だった。

ガラスの正方形を囲むようにして無数のレーザーポインタや監視カメラが設置されている。

「あそいよ」

「……う」

その、大きなガラス箱の中心に目的の少女は居た。

以前より少し伸びた白髪を後ろで束ね、椅子に座って本を読んでいる。

魔力を封じる装置なのか、手首には黒いリングが確認できる。

片方だけの瞳からは、俺の知る物と比べて深い知性と冷静さを感じた。

同一人物とは思えない。目測でしか無いが精神年齢も上がっているように見える。

こちらに気が付く様子は無い。

手に持った本と向き合ったまま、じっとしている。

「ステイルシア……？」

「ミラーガラスだから、向こうからは見えないわ……今解除するわね」

第一位の声と同時に、カシユンという音が鳴ってガラスの透明度が変わったような気がした。

それから少しして、ステイルシアは不思議そうな顔をして本から顔を上げる。

「……………」

無感情な赤い瞳と、視線がかち合った。

しばらくこちらの様子を窺うように見詰めてきていたが、俺が動かずにいると、今度は面倒そうな表情になって口を開く。

「…………誰だ君は。読書の邪魔だから消えてくれないか？」

冷たく言い放ったステイルシアは、もう話す事は無いとばかりに再び本へと目を落とした。

俺はそれに…………言い表し様の無い悲しみと悔しさ、そして——胸をいっぱい満たす”懐かしさ”を感じた。

「…………初めまして、精霊王……………」

俺は真つ直ぐに背筋を伸ばし、出来るだけ感情を表に出さないように心がけながらそう言った。

ステイルシアは目元をしかめ、苛立った様子で白いフローリングの床に本を投げ捨てる。

「邪魔だと言った筈だが…………聞こえなかったかな？ ならもう一度だけ言ってやろう。目障りだから消えろ」

先程よりも高圧的な声色で言い放たれた言葉に、俺は思わず後ずさりそうになる。

……以前とは、まるで別物だ。

ステイルシアは確か『記憶を読んだ相手のイメージする自分』に感情移入する事で記憶と人格を保持していると前に言っていた。そして眠るたびにそれを失っているとも。

ならば——この態度が、ステイルシアの素すの人格なのだろうか。

俺と一緒に過ごしたあの無邪気な少女の性質の方が実は仮初めで、こちらこそがステイルシア……いや、精霊王の素顔なのだろうか。

「精霊王様、あまり彼を無下にしてやらないで下さいませ」

何も言えず立ち尽くす俺へ助け船を出すように、第一位がステイルシアにそう言った。床に膝を着き、恭順の姿勢を示しながら。

「君は……ああ、メモに書いてあったよ。この国の戦士どもの元締めか。」半端者の分際でよくこの私に提言できたものだ。その凶太い精神だけは褒めてやろう」

鼻で笑いながら嘲あざわらったステイルシアに、第一位の形の良い眉がピクリと震える。

しかし、すぐ平静に戻りながら口を開いた。

「ですが——精霊王様。以前の貴方はこの青年と親しい仲だったようです」

「……ほう」

ステイルシアの目が、少し細まる。

「ここに収容されてからの記録に、そんな男のデータは無いが？」

「ええ、ですからこの青年と貴方様が出会ったのはこの施設に入るずっと前になります……そうでしょう？　龍人」

「こちらを横目で見ながら言われた第一位の言葉に、俺はこくりと頷いた。ステイルシアが興味を持ったように俺の方を見てくる。

「……君は、龍族か？　少なくともこの世界の人間ではないだろう」

「え？」

「凄まじく濃い龍ドラゴンの臭いがする……恐らくは“龍王”の血統。随分と人化が上手いようだが、君はこの星の人類との共生を選んだのか？」

「的外れの事を聞いてくるステイルシアに、俺は思わずポカンとしてしまう。

「……龍王？　人化？　何を言っているんだ。」

「いえ、精霊王様。彼はれっきとした地球人。生まれにも経歴にも不審な点はない、単なる人間です」

「そんな筈は……いや、確かに龍属にしては魔力に不純物が多すぎる。大方、強大な龍種の魔核を取り込んだか。よく吞まれなかつたな……」

顎に手を当てててぶつぶつと呟きながら、ステイルシアが思考する。

数秒の間そうしていたが、納得したように唸つてから顔を上げた。

「……で、その“自称”以前の私と親しかったとやら君は、今更なんの用でここに来たん

だい？ 私に何を殺して欲しい？ 代償は応相談だ」

ほんの少しだけ軟化した口調で、ステイルシアが質問してくる。どうやら最低限の発言は許されたらしい。

なんの用で、ここに来たかー俺はゆっくり深呼吸してから、口を開く。

「ーあなたの顔が、見たかったからです」

「……は、あ？」

狐につままれたような顔で、ステイルシアは気の抜けた声を出した。

「なんだ、それは……以前の君と私は恋仲だったとも言うのか？ だが少なくとも私は君に全く魅力を感じていない。だから、お互いの精神衛生のためにも帰ったほうがー」

「いえ……恋仲とか、そういうのじゃありませんでした。ただ俺が貴方を大切な人だと思っていただけです」

俺の言葉によって、ステイルシアの視線が一気に鋭くなった。先程まで『興味なさげ』な程度だったのが、今度は冷たささえ感じる敵意を放っている。

「……はあ。おい東弊。こいつをつまみ出してくれないか？ こいつは私と、知り合いなんかじゃない」

ステイルシアは、溜め息を吐きながらきつぱりと第一位にそう言った。

「……なぜ、そう思うのです?」

「目を見れば分かる……この男が見ているのは、私じゃないんだ。私を通して他の誰かを見ようとしている。私と見た目が似た誰かと勘違いしているんだろう」

「ちがっ……!」

「違うくないさ。そもそも私は君みたいな真つ当な人間に好かれる性分じゃない。では一応聞いておくが、君と親しかつた私に似たエルフは、どんな性格だった?」

「畳み掛けるようなステイルシアの質問に、俺は言い淀む。確かに今とかつてでは性格やら口調やら全てが別物だからだ。」

「……馬鹿みたいに明るくて、そそっかしくて……いつも笑っているような性格でした」

「ハッ……見事に私と真逆だな。これでハッキリしたじゃないか。君の知るそいつと私は完全に別物だ。見ての通り、私はそんな天真爛漫な優しい女じゃない。……記憶も魂も枯れ果てた、ただ息をするだけの人の残骸だ」

「自嘲気に笑ってそう言い、ステイルシアは『分かったらもう帰れ、あまりしつこいと私も怒るぞ』と俺を睨み付けた。」

「……しつこ」

「……はあ、本当にしつこいヤツだな君は。もしどうしても信じられないなら——そう

だ。その、君と親しかつたエルフの名前を言ってみると良い。それが私の本当の名前と同じなら君の言い分が正しい事になる。もつとも……私の本名を知っている者なんて、あの馬鹿弟子と魔王ぐらいいしかないがね」

最後にそう吐き捨て、ステイルシアは再び本を開いて読書を始めてしまった。

……俺は、そんなステイルシアの目を真つ直ぐ見据えて口を開く。

「――ステイルシア」

「……なに？」

「あなたの……いや。お前の名前はステイルシアだ」

ステイルシアは本から勢いよく顔を上げて驚いたように目を見開き、信じられないという風に口を開閉させる。

「なん、で」

「……お前は俺の事なんてもう覚えてないだろうし、これから思い出す事も無いだろうけど。俺はお前と過ごした日々を絶対に忘れないから」

俺は、そう言い残してからステイルシアの収容ユニットに背を向けた。

「さよなら、ステイルシア」

「っ、あ……」

第一位に『もういい』と目配せし、先ほど入ってきた扉へと歩いていく。

そして、重い足取りでそれを潜ろうとして――

「待って、くれ」

――今にも消え入りそうな、ひどく震えた声でステイルシアは俺を引き留めた。

「……？」

「おか、しい、なんで、名前を呼ばれたぐらいで。こんなに胸が痛いんだ。なぜか……絶対に、君を見失ってはならないような気がするんだよ、私の中にいる知らない誰かが、君に『行かないで』つてずっと叫んでるみたいな」

――俺が振り向くと、ステイルシアは先程までとはまるで違う様相だった。

ガラスの壁に手を当てる寄りかかり、ぜえはあと肩で息をしながら大粒の涙を流している。

自分でもなぜ泣いているのか分かっていないような、無表情の咽び。

「ステイル、シア……」

「つ……、あのつ、すまない。私が出ていけと言ったのに引き留めて悪かった」

目をくしくしくと擦って涙を拭きながら、ステイルシアが言った。

「……ああ」

俺は、自分の目の底から込み上げてくる熱い物を感じてステイルシアから顔を背けた。

ー変わってない。こいつの本質は、あの日々から何一つとして変わっていないんだ。

だって今の涙は、いつの日か初めて俺に見せたあの涙と全く同じものだったから。

あんな涙を流せる人間が、本当に冷たい奴な筈が無いのだから。

「……またな。ステイルシア」

「ああ……、また、な」

俺は再び収容施設の出口へと歩いていき、退室した。

その足取りはーさつきまでより少しだけ、軽いように感じた。

六話 『熾天狩り』

「……なんだか、少しすつきりしたような顔してるわね。彼女と会えてそんなに嬉しい？」

「はい」

「それは否定しないのねえ」

ステイルシアの収容施設から出て数分後、俺は第一位と共に車に揺られていた。

高速に乗った車体がガタゴトと揺れ、それと一緒に外の景色が揺れ動いて酔いそうになる。

「悪いけど、頻繁には会わせてあげられないわよ。彼女が中心となって発生したとされる“白夜現象”……あれの再発を上げは危険視してるの。超大規模な時間改変と天変地異……もう一度起これば、世界がどうなるかわからないもの」

俺に言い訳するように、第一位は目深に被った帽子の位置を整えながらそう言った。

……上の指示？

越法機関に片足を突っ込んだ“対異”のトップであるこいつの上には一体誰が居るんだ。

「……東弊さんの上って、誰なんですか？」

「私の上なんていくらでも居るわよ……？　あくまで私は現場の指揮と統括を許可されているだけ。言うなれば中間管理職ね。本当に偉い方々は表舞台になんか顔を出さず、豪邸でワイングラス片手に私みたいなのを指図してるのよ」

第一位は、少しだけ悲壮感の漂う声でそう言った。

……あくまで現場で戦う駆逐官の中でのトップ、だから『第一位』か。なんだか合点がいった気がする。

「そうなんですか」

「あと私を呼ぶ時はひまりんと呼びなさい」

「嫌です」

「……これは命令よっ！」

「嫌です」

「ぐっ……！　なんて意思の強い子なの……！」

ちよつと泣きそうになってる第一位を無視して、俺は再度窓の外を眺める。

高速で流れていく景色の向こう側に、青い空が広がってー

「折角だからどこかでご飯でも食べて行きましょうか。ここら辺は美味しいお店が多くて……」

「……すみません東弊さん、車停めてください」

「な、なんでよっ！ 私を車からつまみ出すつもり!? 何!? うるさいおばさんとは同じ空気さえ吸いたくないって言いたいの!?!」

「いやそうじゃなくて……! あれ見てください!」

涙目で捲し立てる第一位だったが、俺が真剣な顔で窓の外を指差すと急にきりつとした表情になってそちらに視線を向けた。切り替え速いなこの人。

俺の指差した先にある光景を見て、第一位は眉をひそめる——三キロ程先に、幾本もの極大の火柱が上がっていたから。

高層ビルを越える高さまで吹き上がったそれらは、意思を持っているかのようにうねりながら移動している。

「……異界生命体かしら? それもかなり強力な……運転手さん。車止めて」

ハザードランプを点灯させながら車が路傍に停止し、俺と第一位は降車した。

俺はジャンプして3メートル程のガードレールの上に飛び乗り、高い所から火柱の動向を確認する……見える限り、火柱の数は三本。

「東弊さん、向こうに居る駆逐官に指令を……って、あれ」

辺りを見回すが、第一位が居ない。

どこにいったー? と思いながらガードレールの下を見てみると、そこには頑張っ

壁をよじ登ろうとしている第一位の姿があった。

「……………あの、登れないんですか?」

「……………ふっ、ふふふ。全ての駆逐官が人外じみた身体能力を標準装備しているとは思わない事ね! 言っとくけど私の筋力是一般的なOLより少し下ぐらいよ!」

「なんでOLより運動できない人が武装組織のトップやつてるんだ……………」

背伸びしてぴよんぴよん跳び跳ねている第一位の手首を背中から発生させた爛れ古龍の腕で掴んで、ガードレールの上に放り投げた。

宙を舞って勢いよく着地した第一位は、『ひいん!?』と変な悲鳴を上げながら倒れこむ。

「うう……………お尻が痛いわ……………あの、もっと丁寧に引き上げて欲しかったんだけど?」

不満を溢しながら第一位が携帯機器を操作し、何かを打ち込む……………すると数秒後、俺の端末から着信音が鳴り響いた。

確認してみると、地図の位置情報と共に『添付された座標の一带で異常現象が確認されました。現場付近の駆逐官は即座に向かってください』と書いている。

「……………よし。これで現場の駆逐官が対処に当たってくれると思うけど……………あの規模だと並みの駆逐官では厳しいでしょうね。私たちも向かいましょう!」

『私は別の手段で向かうから』と言って、第一位がパチンと指を鳴らし、次の瞬間、そ

の姿は音も無く消え去ってしまった。咄嗟に辺りを見回すが全く見当たらない。

……掴み所の無い奴だ。身体は貧弱なのにこの高速移動。ワケが分からない。

まあ、それはひとまず置いて……俺も早く向こうへ行かなければ。

「――術式破綻、エンジンライト『一翼』」

――その詠唱と同時、力がみなぎると共に青白い翼の紋様が俺の右手首に浮かび上がった。心臓がバクバクと脈打ち、全身の毛細血管が悲鳴を上げるみたいに痛む。

……大賢者戦でエリミネーターさんが見せた”術式破綻”。本人は危険だからと教えてくれなかったが、この三ヶ月を使いなんとか見よう見まねで習得する事に成功した。見せたら腰を抜かしていたが。

無理無く出せる翼の枚数はまだ一枚まで。しかしそれでも二倍や三倍じゃ効かないレベルの身体強化を得られる。

「爛れ古龍、”包め”」

親指の爪で額を傷付け出血させる。すると傷口からめきやめきやと黒い龍鱗が成長してきて、あつという間に俺の全身を包み込んだ――世間が言う『無敗の駆逐官』とやら。日本総合四位にして討伐実績一位、”龍人”の出来上がりだ。

「……行くか」

地面を軽く蹴り上げ、背中から炎魔術カメイマジツを発射させる。ジェットエンジンの要領だ。炎

で推進力を生み出し高速移動する技術。エリミネーターさんに教わった。

これに加えて風魔術^{フレイト}で上昇気流を巻き起こせば、不安定ではあるが飛行出来る。三キロ程度の距離なら十分だ。

吹き荒れる暴風の音を聞きながら中空を進む。

数十秒後、先程火が吹き上がっていた場所の近くまで辿り着き地上を見下ろすと、そこにあつたのは凄惨な光景だった。

発生場所は人通りの多い街中、東弊が指令を出す前から対処に当たっていたのか数人の駆逐官らしき人々が倒れている。勿論、一般人も数多く血を流して倒れている。

「あれは……」

その惨劇の中心部に居たのは……三体の、人型の何か。空中からでは良く見えないが赤い剣みたいなのを携えて暴れまわっている。

俺はカーネリアンの発射向きを変更し、猛スピードで地面に向けて進む。

「な、なんだよこいつら……!? こんな奴らの情報、凶鑑には……!」「まともなランカーが来るまで十分は掛かる!それまで絶対に食い止める!これ以上殺させるな!」「でも、あんなのどうすれば……!」

「……」

人型の怪物たちと駆逐官たちとの間に、俺は轟音と共に着地した。衝撃でコンクリー

トに馬鹿でかいクレーターが発生する。

周囲のビルや地面は炎によって溶解しており、怪物の強さが理解できた。

「りゅっ、”龍人”……ッ!? なんてこんなに速く……!」 「初めて生で見た……」 「勝つた……! 勝ちだ! おいお前ら! 怪我人を安全な場所まで連れていけ!」

背後で叫ぶ駆逐官たちに手を翳し『待機』と伝える。

そして俺は初めてはつきりと目の前の”怪物たち”の姿を確認し——絶句、した。

灰色の肌、口を除いて何も付いていない顔面、絶え間なく形状を変える炎の武器……

極めつけ頭上に浮かぶ深紅の輪。

俺は、こいつらを知っている。

『厄介ソウナノが、キタな……』 『氣を付ケろ。こいつは強い』 『龍種、か……』

こいつらは——

「熾天使の生き残り……お前が以前倒し損ねたヤツらだぜ。データより大分強くなつてやがるが」

「……ジエレマイア」

背後から、金髪の男が俺に話し掛けてきた。

ジエレマイア……来たのか。全身に傷があるが重症ではない、まだ動けそうだ。

……こいつの言う通り、熾天使は俺が以前”神の存在証明”の施設で逃がしてしまつ

たモンスターだ。一体は倒したが残りの三体は倒せなかった。

「下がってる」

臨戦態勢の天使たちを見据えながら踏み込み——瞬く間も無く間合いを詰めた。突如として自分達の一寸先に出現した俺から呆気に取りられた様子で逃げようとする天使の首根っこをひっ掴み、全力で地面に叩きつけた。

硬いアスファルトを突き破り、天使の体から力が失われる。

『バケモノが……』

地面に頭を陥没させて灰になっていく仲間を見ながら、天使はそう呟いた。……まずは一匹。

確かに強くなっているが、この程度なら何匹居ても問題ない。

『……チイ、祝詞のりと・炎熱聖剣カグツチ！』

「っ……あの構え!? おい渚! 馬鹿でけえ炎が来る! かわすぞ!」

残った二体の内一体の持つ炎剣が規模を増大させ、大規模な炎の奔流となって俺に襲い掛かってくる。

熱に景色が揺らぎ、後ろの駆逐官達が悲鳴を挙げながら逃げ惑う……遠くから見えた炎はこの技か。

俺はジェレマイアの持っていたマシンガンを手取り、それに青い葉脈を通

す。

「術式装填、”アイオライト」

『ーッ』

ーマシンガンから放たれた青い激流が、炎を掻き消してその先に居る天使の胴体を消し飛ばした。

横のジエレマイアが呆気に取られた顔で絶句している。

俺はズタボロになったマシンガンを投げ捨て、最後の天使へと歩み寄っていく。

「終わりだ」

『……クツ、クク。滑稽だな。愚かな先住民族……下等なサルどもめ。精々今は勝ったつもりでいると良い』

俺はブレード状に変形させた爛れ古龍の腕で天使の首をハネようとしてーその奇妙な物言いに、手を止めた。

「……？」

『我らは、神を生み出す……！ この腐った世界と終わったあの世を焼き尽くす完全神

格をー！ 偽りの神々を崇め奉り死後の救いを信じる貴様らなどに！ 幸せな結末な

どー』

「そうか。分かった。死ね」

すばんっ、と骨ごと首を断ち切り、俺はため息を吐いた。なんてこと無いただの妄言だった。

地面に転がる魔核を噛み砕きながら、俺は後ろを振り向く。

先程まで悲鳴を上げていた人々に対して『討伐完了』の意を込めて腕を挙げると、割れるような歓声と共に手を取り合って喜んだ。中には安心感からか泣いている者もいる。

「……いやー、やべえ、マジでおかしいわお前。どうやったらその年でこんな強くなれんだ？」

「俺が天才だからだ」

「そうなんだろうけどムカつくなお前……はは、クラスとかで嫌われてるタイプだろう」

「……」

「えっ、マジか、ごめんな」

俺はジェレマイアに無言で背を向け、歩き出す。

泣いたり笑ったり尊敬だったり色々な表情でお礼を言ってくる人々に背を向けながら、この場から離れようとしてー

「お見事だわ……さすがは無敗の駆逐官って所ね」

「……うげっ、第一位」

——人混みを割り、ぱちぱちと拍手をしながらやってくる金髪の美貌を見た。

「おいおい……ここに来て重役出勤かよ第一位？ 戦いはもう終わっちゃったぜ」

「ジエレマイア、その人の事はひまりんって呼んで良いんだぞ。そう呼ばれたって俺に言ってきた」

「え、マジ？ じゃあ来るのが遅いぜひまりん！」

「は？ ぶん殴るわよ貴方」

「ひでえ!？」

第一位に睨まれ後ずさるジエレマイアを哀れに思っていると、こほんと咳払いしてから第一位が口を開く。

「……とにかく、よくやってくれました。龍人。あと民間人を守った他の駆逐官もね。報酬には色を付けておきましょう」

「俺も頑張ったぜひまりん！」

「死ね」

「ひまりん!？」

ジエレマイアが『ぐっ……初対面の時のエスカレーターで第一位って知らなくて尻揉んだのがマズかったのか……!？』と嘆く。

100パーそれじゃねえか。

会話のキャッチボールと云うかドツジボールをしている二人の声を聞きながら、俺は冬の気配がし始めている秋空を見上げた。

七話『黒曜石』

「あー、お腹すいた……にしても寒いわねえ。こんな日は焼き芋が食べたくなるわ。最近ぜんぜん焼き芋カーが走ってないんだもの。昔はたつくさん走ってたのに」

「オイオイ……焼き芋カーとかオレがガキの頃でさえ絶滅危惧種だったぜ……？ マジで何歳なんだよひまりん」

「次ひまりんって呼んだら殺すわよ」

熾天使を討伐したその後、俺たち三人は街を歩いていく。

ボロボロなせいで目立つジレマイア、浮世離れた美貌によって目立つ第一位と一緒に歩くのはなんか恥ずかしくて、俺だけ微妙に二人の後ろを着いていく。

「……あ、なんかあそこの屋台にすげえ人だかりが出てるぜ。焼き芋ではなさそうだけれど行ってみるか？」

「屋台……？」

ふと、といった感じでジレマイアが前方を指差しながら言った。そちらに視線をやると、確かにそこには人だかりが出来ている。

「おでんとかだと良いわねえ……行ってみましようか？」

「おつ、乗り気だなひまりん……っていつてえ!! 蹴った!? 普通に蹴ってんじやねえよ!? あっ?! ヒールで踏みつけんな！」

ジェレマイアをげしげし蹴りながら歩いていく第一位の背中を追って、俺は列の最後尾に並んだ。

前の方では歓声や黄色い悲鳴が上がっており、まるでそこだけライブ会場のような有り様だ。何がどうなったら屋台でああなるんだ。流石に気になるんだけど。

「あー……? なんだあれ。”異世界タピオカ”……? なかなか奇抜な店名だな。なろうとかに投稿されてそうな名前だぜ」

「えっ」

「タピオカねえ、あつたかいのあるかしら……?」

「あっ」

ワードの節々から感じる凄まじいデジャブに、額を冷や汗が伝う。

背伸びして人の波の向こうを見てみると、そこには人間とは思えない動きで無数のタピオカドリンクを同時に作成する灰髪の男の姿があつた。

「キヤーッ! ついに出たわ! 乱れタピオカ乱舞”狂い咲き”よー!」「すげえ……!」

まるで自然現象が彼に味方しているかのようだ……「カツコいい……」「ワシはこの業

界に50年は居るが、彼は「極み」にあるな……ふっ。ワシもまだ途中、か。おい君！
そのフレーザーバーをボトルで貰おう！」「ぐっ……暴風が吹き荒れて見ている事しか出来ない……！」「これがたびおかどりんく……流行るのも分かるのう、なあ婆さん」
「……え、なにあれ」

風が具材を運び、どこからか水が湧き、地面から発生した陶器のような容器に全てが納まる。まるで空間そのものがタピオカドリンクを作っているみたいだ。

その中心に居るのは当然エリミネーター。

数秒に一回以上のペースで来る注文を、魔術と身体能力で全て捌き切っている。

「どうなってるんだあれ……？　なんか何もないとこからコップ出て来てねえか」

「ねえ。メニュー表が百科事典みたいな分厚さなんだけど。あと『ゴブリンの鞆丸味』って何かしら。いえ……それに、あの技は。ふふ……僥倖、ね。鎧の中身は割りと男前じゃない」

第一位が『通して』と喧騒の中でも良く通る声で言うと、人の波が割れて道が出来上がった。

それを通してエリミネーターの目の前まで近寄った第一位は、興味深そうに観察する。

そして、パチンと指をならすと、いつぞやの顔合わせの時のように凄まじい

打撃音が鳴り響き、エリミネーターの体が大きく吹っ飛んだ。

人々から悲鳴が上がる。

「つ……………！ 民間人に……………!? おい東弊！ やっぱり、てめえは！」

「いいえ……………？ ほら見なさい。ほぼ効いてないわ。仮にもアイデア持ちのランカーを屠った一撃が、よ」

吹っ飛んだエリミネーターは空中で体勢を整え、電柱を足場にしてバク宙しながら着地した。

アバラが数本折れたのか脇腹を抑えていたが、メキメキという音と共に一瞬で治癒するのが確認できた。

そして第一位を確認し、苦々しげに顔を歪める。

「……………なんのつもりだ。東弊 陽葵」

腰を落とし、臨戦態勢に入りながらエリミネーターが問い掛ける。俺には気が付いていないようだ。

「ふふ、前の仕返しよ……………？ 見た感じ武装はしてないみたいだし、今日こそ捕獲させて貰うわ。彼に言い付けられてるんだもの」

「チイ……………」

エリミネーターが自分の人差し指を噛み千切りながら第一位との間合いを詰める。

そして、腕を横に一閃する。一吹き出た血液が日本刀に似た形状の刃物に変化し、第一位の首筋へと迫る。

「飽和した血液を利用した、武器重量無視の高速居合術。それはもう覚えたから当たらないわよお……？」

「一瞬の刃はしかし、第一位の首をすり抜けて空を斬った。」

「……何をした？ 次元梟を彷彿とさせる現象だ。アイツの能力の本質がまるで分からない。」

「俺の目で追えないレベルの高速移動と見えない打撃、それに加え今の”すり抜け”……エリミネーターさんが負けるとは考えにくいが、危なそうだったら助太刀しなくては。」

「次はちよつと強く殴るわよー？ 降伏するならやめてあげるけど」

「……術式装填・カーネリアン」

「あつそう。じゃあ、お腹に穴空いちやうかもしれないけど。頑張つてね」

第一位に向け放たれた紅蓮の螺旋一さっきの天使の炎が、おままごとに思えるレベルの熱と規模。

「ふーっ」

「一瞬それが、第一位の吐息で掻き消された。そして一瞬の後、第一位の姿がその場か

ら消え去る。

「あ、ガあ……ッ!？」

「うっふふ、お腹の中あつたかあい……」

ぐちゃ、ぬちゃ。

エリミネーターの腹部を素手で貫いた第一位は、その中で指を動かしながらクスクス笑う。

「とつても痛いでしょう……? あ、これ肝臓かしらね? 異界人の分際で、臓器の構成

は私たちと同じみたい」

「術式装填……」 オブシディアン!」

「……あら」

エリミネーターの全身に黒い葉脈が走る——それと同時に、野球ボール程の黒い球体が群れを成して第一位へと襲い掛かった。

外敵を排除しようとする働き蜂の如くそれらに、第一位は拳を叩き込もうとする仕草を見せたが……何故か手を引っ込めて、エリミネーターから距離を取った。

「ふーっ、ふーっ……」

「……」 時空掘削球体。 精霊魔法や一部モンスターでしか使用できないと思つてたけど、術式装填でも再現できるのね。敵ながら貴方の引き出しの多さには感服するわ」

「喰らい尽くせ……！」 オブシディアン！」

腹の傷の再生を終えたエリミネーターが叫ぶと、先程まで体の周りで守るようにふわふわ浮いていた黒球の群れが再び第一位へと襲いかかる。

「……あー、今の私じゃ無理ねこれ。お願い龍人」

第一位は向かってくるそれを不愉快そうに睨んだ後、パチンと指を鳴らしー次の瞬間、俺と第一位の立ち位置が逆転し、俺の眼前に黒球の群れが迫ってきていた。

「うわっ!？」

「……っ坊主!? なぜ……止まれ! オブシディアン!」

俺に着弾する寸前で黒球が急停止し、エリミネーターは辺りを見回し第一位の居場所を探す。

俺も咄嗟に背後を振り向くが、既にそこには呆然としているジレマイアしか立っておらず……代わりに、いつの間にか俺の手に小さなメモ用紙が握られていた。

『やっぱり私では勝てそうにないから、今日の所は素直に諦めます。でも彼はどうしても引き入れておきたいから、よかったら貴方が政府に勧誘しといてね』

ひまりんより

????????????????

「……アイツ」

いやに癪に障る文面の手紙をぐしゃつと握り潰しながら、俺はエリミネーターの方へと駆け寄る。

「大丈夫ですか……?」

「……ああ。しかし折角集まっていた客がみんな逃げてしまった。これ威力業務妨害とかで裁判所に訴えられないだろうか」

「腹ブチ抜かれた事は気にしてないんですか……?」

「慣れてるからな」

しょんぼりしながら屋台の中へと戻っていくエリミネーターに少し呆れながら、俺は溜め息を吐いた。

「……あの金髪女、月に一度ぐらいのペースでオレの居場所を探し出して特攻を仕掛けてくるんだ。無駄に強いし能力の正体も分からない。人混みの中なら仕掛けて来ないかと思ったが……全く、あんな狂犬を飼ってる組織のトップの顔が見てみたいな」

「あの人がトップですよ」

「嘘だろ」

この世の終わりみたいな顔で絶望するエリミネーター。

それに共感しつつ、俺は口を開く。

「そう言えば、さっきの技……」

「ああ、術式装填オプシディアン“黒曜石”だ。半年ほど前から開発していた技でな……次元梟の狩りに着想を得たんだ。カッコいいだろう」

エリミネーターが自分の服に染みた血液に触れると、再び黒い球体がふよふよと発生した。

びゅんびゅん飛び回るそれらは確かに、小規模ではあるが次元梟を彷彿とさせた。

「へー……」

「ふっ、どうしても言うなら、教えてやっても……」

「……術式装填：“オプシディアン”」

次元梟との戦闘時やステイルシアの魔法を思い出しながら、俺は指先を切つて出した血液に黒い葉脈を通してする。

初めてなせいか、じわじわとだが葉脈が侵食していき……数秒後、そこから黒い球体が発生した。

成功だ。便利そうだから練習しておこう。

「えっ」

「ありがとうございますエリミネーターさん。出来ました」

「……ああ、うん」

頬と眉をピクピク痙攣させながら、エリミネーターさんは笑った。

第一位の言うとおり、この人の技レパートリーと現代兵器さえ再現する記憶力は驚異的だ。学べる事は全て学ばせて貰おう。

八話 『無明の団欒』

「ねえなぎさ、その卵焼きちようだい」

「一つだけだぞ」

「やったっ！ 渚の卵焼きおいしいもんねー」

俺の弁当箱から取った卵焼きをラップに包むクシナダを眺めながら、俺は教室の窓から外を眺める。

……熾天使との戦闘から、更に三日が過ぎた。あれからは特に何も問題なく（上位クラスとの戦闘が少ないというだけではあるが）平和に過ごしていた。

エリミネーターさんからは『あの日から金髪女の襲撃が更に増えた。たすけてくれ』という嘆きのメールが来ていたが、それぐらいだ。今度缶コーヒーの差し入れでもしに行つてあげよう。

「あれ……誰か携帯鳴ってるぞ」

「バンドイの？ ボクはケータイ持っていないから違うよ」

ぼーっとしていると、バンドイの言葉で自分のポケットの中の携帯端末が震えている事に気が付いた。駆逐官用の方だ。

二人に見られないようにしながら画面を確認すると、こんな文面のメールが表示されていた。

「現在、全国各地で指定宗教団体“神の存在証明”による襲撃事件が相次いでいます。現在の彼らは未知エネルギーを拡散させる特性を持つ特殊な防刃・防弾のコート型兵装と、モンスターの核や特性を利用した独自の兵器に身を固め、個々が壊^{Bランク}に相当する戦力を保持しています。

”対異”の機動部隊が多くを鎮圧に成功していますが、活動範囲の大きさをゆえに対処を切れない場面もまた多いです。その際、駆逐官の皆様には彼らを”モンスター”として処理することが許可されます。人間殺害のペナルティが課せられる事はありませんので、どうかよろしくお願い致します」

神の存在証明……個々の戦力が、Bランク級？

類に汗が伝うのを感じた。教団その物の脅威度がBなら分からなくもないが、個人個人の戦力がBランク……人数にもよるが、下手すれば”対異”よりも上なのではなからうか。

「……流石に人間は殺したくないな」

「スマホを見ながらなに物騒な事を言ってるのだ友よ。FPSのやり過ぎか？ ギャルゲーをやれギャルゲーを！ なんなら吾のオススメを貸してやってもー」

「でもお前のギャルゲー熟女出ないじゃん」

「ギャルゲーに熟女が出たらそれはもう”ギャル”ゲーではないだろう……？」

複雑な表情で唸るバンダイに、俺は『論破してやった』と言わんばかりのドヤ顔をキメる。しかしクシナダは異常者を見るような視線を俺へ向けてくる、なんだ。

「あ、そう言えば……これをしろ！ 昨日からずっと見せようと思ってたんだ！」

何かを閃いたように、バンダイが自分のリュックを漁り出した。登山用みたいなサイズで、中にはギツチリとオタクグッズが詰まっている。前に興味本意で重さを計ったら25kgあって流石に引いた。

こんなのを背負って重くないのかと聞いたら真顔で『……貴様は 愛に重さを感じるのか？』と返してきた事は記憶に新しい。

そんなリュックからバンダイが取り出したのは、ファイルに入った一枚の写真だった。

「……………これは」

「ぬは、ぬははははっ！ 凄いだろう！ ”龍人”の生写真だぞ！ いくら貴様でもこれには興味あるだろう!」

写真の枠の中には、とかけ蜥蜴のオバケみたいな姿をした漆黒のヒトガタが天使の首を斬り飛ばしている姿が収まっていた。

……バンダイ、あの現場に居たのかよ。前回と言いきいつは天使系のモンスターに何かと縁があるのかもしれない。

「へー……すげー」

「そうだろうそうだろう！ ……本当は握手とかして貰いたかったんだが、流石にビビってしまつてな。だが次会つたら必ずお願いするぞ！」

「じゃあ代わりに俺と握手しようぜ」

「なんでだ……？」

困惑した顔で手を差し出してきたバンダイと、俺は握手をする。良かったな夢が叶つたぞお前。

そんな馬鹿な事を考えている内に、昼休みが終わる鐘の音が教室に響いた。

■

「これは単位円と言い、引いた線に応じて異なる分数をー」

紙をめくる音と先生の声。そして紙面に黒鉛を擦る音だけが支配する教室で、俺は退屈そうに溜め息を吐いた。

この先生の授業は分からない人を置き去りにするスタイルだから一回でも詰まると

その授業中に巻き返すのは難しい。だから賢い俺はシャーペンを机に置いてぼけーつとしてゐる。

「では、この例題を……湊^{みなと}。解きなさい」

「えっ」

急に名前を呼ばれ、俺は呆けた声を出す。当てられてしまった。まずい。

バンダイに教えて貰おうとして右を見ると、ぐーすかいびきを掻きながら眠っていた。左のクシナダは、なぜか窓から遠くの空を睨み付けている。なんなんだこいつらは。まともなのは俺だけか。

俺は仕方なく、重たい足取りで黒板へと向かう。

「えーつと……」

黒板とにらめっこしながら、式を書いていく。先生は何も言わない。怖いぐらい無言だ。間違っているなら言っただけで欲しいんだけど。

式が三行目に入った時、何故かクラス中がざわめきだす。……笑われるならまだしも、俺はそんな個人的な数式を書いているのだろうか。しかし相も変わらず横に立っているであろう先生は何も言ってくれない。

どうしよう、つらい。お腹いたくなつたって言って退室しようかな。

四行目で、とうとうざわめきは悲鳴へと変化した。教室から逃げ出している生徒や腰

を抜かしている生徒もたくさん居る。

一体、何がどうなつてー

「ーおい渚あつ！　そこから逃げろ！　先生の様子おかしいぞ！」

「……は？」

バンダイの怒号が聞こえ、俺は咄嗟に先生の方に振り向いた。

するとそこに立っていたのは、先程までの数学教師ではなく、バチバチと雷鳴を放つ槍を投擲の体勢で構えた、黒い天使の姿だった。先生と同じスーツを身に纏い、顔はのっぺらぼう。

『のりと 祝詞・雷電聖槍』
タケミガツチ

「つーー!？」

ー撃ち込まれた雷槍に反応する間も無く、俺の体は凄まじい雷の奔流に呑み込まれて吹き飛ばされた。

熱でコンクリ製の壁を融解させながら幾つも教室をブチ抜いて、俺はようやく止まった。他クラスの生徒たちから悲鳴が挙がる。

この火力、優にAランクを越えている。俺でも油断した状態で直撃を喰らえば只では済まない。

「が、ぐっ……」

熱で左目が破裂し、視野が狭い。ステイルシアの目の方は無傷だ。

軋む体でなんとか立ち上がり、状況を把握しようとして――激しい銃声と共に俺の体を無数の弾丸が貫いた。

肩の肉や足の肉が抉られ、俺は再び地に膝を着く。

弾丸……!? あ的那天たちが武器を使っているのか……!?

「……流石に硬いな。おい、アンチマテリアル対物質特殊弾を用意しろ。相手はあの”龍人”だ。たとえば四肢をもうでも油断はするな。瀕死に追い込んだら羽化薬を投与しておけ」

「了解」

”神の、存在証明”……!」

――俺に弾丸を見舞ったであろう白フードのそいつらに、俺は見覚えがあった。

指定宗教団体、”神の存在証明”。最近怪しい動きをしていると第一位が言っていたのを思い出す。

俺を囲むようにして絶えず弾丸を打ち込んでくる白フードどもを睨みながら、俺は全身の傷口から黒い龍の鱗を発生させる。

「発射!」

龍の鱗が全身に拡がり終わると同時、轟音と共に巨大な砲弾が俺へと打ち出された。

その射線上に血液を飛ばす。幾重にも折り重なった龍腕の防壁が発生し、砲弾を受け止める。数秒とはいえ大賢者の魔法を防いだ実績のある壁だ。砲弾程度では揺るぎさえしない。

『祝詞・炎熱聖剣：参式』

ほつとした束の間、背後から凄まじい熱量を感じた。その時初めて、今の砲弾がただのブラフであつた事に気が付く。

なにせ……俺に迫る炎の威力は、エリミネーターの炎魔術カイネリアンにさえ迫る、あるいは凌駕したものであると一目で理解できたから。揺らめく陽炎の向こうに黒い天使が見える。

特殊個体か——当たったら、まずい。

「術式装填……い——」アイオライト!」

紅蓮と激流が、真つ向からぶつかり合う。相性的な問題か俺の方が僅かに圧している様だった。

しかし——目を疑う光景。ヤツの隣に二体目の黒い天使が現れたのだ。

『祝詞・炎熱聖剣：参式』

「つ……!? マジ、かよっ!」

一体目と同じく炎の柱を発射した黒い天使。均衡が一気に崩れ、俺が大きく圧され

る。なんて威力だ。

「爛れ古龍……！」

肩からメキヤメキヤと成長してきた龍腕が、傘のような形状に変化して俺を守る。

二体居ても流石に爛れ古龍の装甲は貫けないのか、鱗が大きく損傷する様子は無い。表面が焦げ付く程度だ。

”術式破綻”

ローエンジエライト、三翼。

鱗の表面に三枚の翼が浮かび上がり、魔力を赤血球に通す事による大幅な酸素運搬の効率化が始まる。筋繊維の隅々にまで魔力が行き渡るのを感じた。

『祝詞・炎熱聖ローガ』

刹那の隙を突き、黒い天使たちの背後を取る。そして側頭部に龍腕を巻き付かせコマ紐の要領で思い切り引き抜く。ごきやり、と天使の首が二体同時にネジ切れた。

「は、あ……っ」

灰になっていく天使を確認してから”術式破綻”を解除し、俺は荒れた呼吸を整える。

……かなり強かった。異常なぐらいだ。ランクに直せばローA以上、S未満程だろう

か。とにかく群れて良いようなスペックではない。

耳を濟ませば、校内の様々な場所から悲鳴が聞こえる。”天使”はどうやらかなり数が多いらしい。……複数居ても勝てなくは無いだろうが、チマチマやってたら犠牲者が更に増えてしまう。なら……

「――エンジェライト……七翼」

――ならば、今の俺が出せる最高出力で全員倒し切るしか無い。短期決戦だ。筋繊維や血管がブチブチと音を立て、体が全力疾走した後みたい^はに熱くなる。爆ぜそうになる胸を握りしめながら、俺は教室から出て廊下を睨んだ。

「ハアアアアアアツ……」

深く息を吐き、床を蹴って走り出す。

廊下を駆け巡り、すれ違った天使達を片っ端から龍腕でねじ伏せていく。向こうが俺の姿を認識する前に致命傷を与え、もし気付かれても他個体にその情報が伝達する前に気付いた個体の首をハネる。

「やつ、ばいな……」

10、20、30、36――1分足らずでそれだけの数を殺しても、天使の数は一向に減らない。むしろ増えているようにさえ感じる。

……これだけの数、一体どこに潜んでいた？ まだ襲撃から五分も経っていないの

「ーさつきまで男子生徒」だった”のつぺらぼうの頭上に天使の輪が浮かび上がる。燃え上がるようなそれは凄まじい熱とプラズマを放ち、さながら太陽のよう。

まさか、まさか、まさかー頭の奥底で思い描いていた最悪の予想が、目の前の”天使”と重なり実像を結んでいく。

『祝詞・”日輪拝領”』

日輪の天使から放たれたレーザービームに身を焼かれ、俺は自分の身に纏う龍鱗が融解するのを感じた。

『人間の天使化』

あまりにもおぞましいソレに身震いしながら、俺は最終兵器のー精霊王の義眼に、意識を集中させ始めた。

????????????????

『file ■ ?』

デザインマ

『アライヴズ・ピリパー 天使たち』脅威グレードS』

脅威グレードS』

ステイルシアの目

九話 『起動、精霊王の義眼』

『祝詞・日輪拝領のりとー”聖式”』

「っ……………」

ー”烈火。

少しずつ、爛れ古龍の鱗が融解していく。目の前の”日輪の天使”は先程の黒い天使達さえ遥かに凌駕する火力で、俺を焼却しようとしていた。

……元から多量の魔力を持った人間を天使化させた場合、より強力な個体生まれるのか？

ならば、下手に応援を呼ぶのは危険だ。中途半端な実力者ではむしろ向こうの戦力になつてしまう。……いや、まずはこの状況を何とかしなくては。

「頼む、スタイルシア……………」

【い、イ”い、よオ”オ”オ?】

ー俺の呼び声に応じるようにして、右目が熱を帯びていく。

全身からゴツソリ魔力が吸い上げられていく感覚。脳の神経回路が焼き焦げるみたいに熱い。

……”精霊王の義眼”。その特殊能力は、大きく分けて二つ存在する。

一つは『記憶の読み取り』。大賢者がやっていたのと同じだ。相手の記憶を読み取って先の行動を予測するそれは、一対一の戦闘に於いては事実上の未来視に等しい。恐ろしく強力な能力。

そして、もう一つは——

「魔法詠唱……プリズム・バリア光学防壁!!」

『……』

——突如として展開した半透明の防壁が、日輪のレーザーを遮断した。

もう一つの能力は……一度見た魔法の完全再現。

理論上、今の俺は”精霊王の義眼”を起動しさえすれば大賢者の光魔法だって再現出来る。魔力が続けばの話ではあるが。

「ふーっ……」ゴア・インフェルノ!」

『——っ』

かつて空を覆うワイバーンの群れを一撃で焼き払った灼炎、それが天使へと襲い掛かる。レーザーで対抗しようとしたが——無駄だ。火炎放射機の炎をガスバーナーで炙

る様なもの。規模も熱量も段違い過ぎる。

消し炭になった天使を確認してから、俺は鱗の内側からスマートフォンを取り出した。

そして、とある番号へと電話を掛ける。二回目のコール音の後、声が聞こえてきた。

『おお、どうした坊主』

「つ……エリミネーターさん！　すぐ俺の学校まで来てください！　ヤバイんです！」
『なんだ、授業参観にでも来てほしいのか？　そういうのは前もって連絡をだな……』

「そんなのじゃなくて！　本当に非常事態なんです！　人が、モンスターに……！」

俺の必死さに事態の深刻さを理解したのか、エリミネーターさんは『……分かった。すぐに向かう』と言ってくれた。よし……これで手が増える。あの人が居ればそうそう負ける事は無い。

駆逐官用の端末の方でも「Aランク以上の駆逐官」に限定した救難信号を発信しながら、俺は思考する。

精霊王の義眼は燃費が極めて悪い。大賢者クラスの規格外の魔力量が無ければ安定した運用は難しいだろう。

俺の役目はエリミネーターさんや他のランカーが駆け付けるまでの時間稼ぎだ、死力

を尽くしてほんの少しでも被害を減らす。

術式破綻――

「エンジエ」

「だーれだっ」

「らいとおっ!?!」

背後から何者かに手で目隠しされ、俺は術式破綻の発動に失敗する。

一体誰だ。手を振り払って振り返る。

「やあ、コスプレかい？ なぎさ」

「……っ」

そこに立っていたのは、腰の後ろに手を組んでニコニコしているクシナダだった。

「……」

「前から思ってたけどかっこいいよね、そのドラゴンの格好き……今度いっしょに写真とか撮ってよね」

「……この学園の生徒か？ 妙な事を言っていないで早く避難しろ」

「うわっ、声も変えられるんだ！ すごいなあ!!! でもボクは君の素の声の方が好きだよ」

心底楽しそうに笑いながら、クシナダが近寄ってくる。……俺の正体に、気付いてい

るのか？

俺は訝しげにクシナダの顔を見つめ――その背後に迫ってきている、黒い天使を視界に捉えた。

『■■■■■■■■！』

「つ……おい、後ろ！」

「んー？」

クシナダが緩慢な動作で振り向く。黒い天使はその顔面に炎の剣を突き立てようとして――突如として倒壊した天井の瓦礫に押し潰された。

そして上の階層に居たであろう二体の天使が落下してきて、重力による同士討ちの形で互いの胸に剣を突き刺し合って死んだ。

偶然に偶然が重なり、クシナダを襲おうとした天使が三体とも死亡する。

「馬鹿な奴らだ。ボクの世界の中でボクに勝てるわけがないだろうに。ねえ、なぎさ？」

「……」

「黙らないでよ。ボクが一人で喋ってるイタイ奴みたいじゃんか……。さあ、どうする？ たくさん人が死んでるよ。君はこの状況をどう打破する？ ボクに見せてくれ、ミ

ナト ナギサ」

こちらに向き直りながら、クシナダは不敵に微笑む。……明らかにおかしい。以前見せた異常な身体能力、俺とエリミネーターの正体を見抜いた事……そして今起こった、あり得ないレベルの”偶然”。

確信した……クシナダは少なくともただの人間ではない。それだけは分かる。なら。
「え」

——俺が取った行動は逃走だった。呆気に取られた様子のクシナダにくるりと背を向けて全力疾走する。”術式破綻”をフル起動しながら。

クシナダの事は確かに気になる……気になるが、今は天使の殲滅に注力しなければ。あいつに構ってる間に何人も人が死んでしまう。別の階まで移動し、俺はため息を吐いた。

天使たちは先程よりも更に数を増やしており、もはや普通の人間の方が数が少ない有り様。俺はそいつらに向けて”魔法”を放とうとして——

「っ……!?」

——頭上から、凄まじい爆発音が聞こえた。……ここは最上階。これより上は屋上しか無い。そこで何かが起こっているのだろうか。

胸騒ぎがする……上位モンスターが襲来した時のような、あるいは大賢者と相対した時のような。まるで久々に再開した友人同士が抱き締め合おうと両腕を広げるみたい

に、”特大の絶望”が大手を振って歩み寄ってくる感覚。俺は自分の勤に従って屋上へと走る。

長い階段を抜け、生徒の立ち入りを防止する扉を蹴り壊し。そして、外へ出て――そこにあつた光景を見て、啞然とした。

イワシみたく規則性を持った動きで空をはためく優に万を越えるであろう天使たちの群れ。その全員が『日輪个体』だ。……そして。

「はあ、はア……」

「実に素晴らしい……君は戦士として完成されている。きっと強い天使に成れますよ。共にこの星の”未来”を守りましょう」

「ほざけ、狂人が！ 貴様は自分が何をしているのか分かってるのか!? 人為的にモンスターを生み出すだと……!?! 勇者様が、あの人がどんな思いでっ……!」

ローボロボロのエリミネーターが、誰かと相對している。

エリミネーターを追い詰めたであろうソイツは、どことなく法衣を思わせる形状の白コートを身に纏った、穏やかそうな顔つきをした黒髪の男。

顔のパーツにとことん印象が無い、ただ”寛大そう、優しそう”としか感想を抱けない……こいつ、格好からして”神の存在証明”か？

背後には、白コートを五人ほど膝を着いて頭を下げている。

「エリミネーターさん、大丈夫ですか!？」

俺が駆け寄ると、エリミネーターは一瞬ギョツとした後に男へと向き直った。そして口を開く。

「……まずいぞ坊主、まずいことになった。奴はオレより遥かに強い」

エリミネーターより、強い……? そんな怪物、第二位や大賢者以外に存在したのか……!?

「おお、あなたは……これはこれは。私の方でも噂はかねがねお聞きしていますよ」

俺の混乱をよそに、男は丁寧かつ穏和な口調で語り掛けて来る。

「何者だ……!？」

睨み付けながらドスの効いた声で俺が聞くと、男は『ああ、失礼しました』と頭を下げてきた。

そして、懐から小瓶を取り出しながら口を開く。その中には墨汁みたく真つ黒な液体がちやぷちやぷ揺れている。

「申し遅れました。私は宗教法人“神の存在証明”指導者、クリシュタ・マナス。本日は皆さまにとある事業をご提案しに参上しました」

「黙れ、破綻者が!」

激昂するエリミネーターが大剣を手に男ークリシユタ・マナスへと襲い掛かる。クリシユタはそれを一瞥した後、エリミネーターを指さす動作をした。

神の存在証明、指導者……!? つまりこいつがこの惨劇を起こした親玉という事か。

”大人しくして下さい!”

「……っ!」

——大剣を振りかぶった体勢のまま、エリミネーターはまるで空間ごと固定されたみたいに空中で硬直した。

口をパクパクさせて何かを訴えようとしているが、言葉にはなっていない。

「……さて、龍人。私が今回この学園へ足を運んだのは、あなたと話をするのが目的なのです。その騎士は思わぬ収穫でしたが……まず我々には、大きく二つの目標があります。」

「ふざけんな……! 何人死んだと思ってる!」

「いえいえ、死んでなどいいのですよ。龍人。彼らは生まれ変わったのです。異界生命からの殺戮を甘んじるしか無かった弱者から、抵抗出来る力を持った天使へと」

大きく両腕を広げ、空を抱き締めようとするみたいな動作をしながらクリシユタは呟く。

「龍人、あなたが我々神の存在証明を『無益な殺戮に興じる狂人の集まり』とでも思って

いるのなら、それは大きな間違いです。私や彼らは、この世界を守るため必死に戦っている」

自分の胸を握りしめ、クリシユタがそう続けた。

……つまり、人間たちを『天使』へと変えて対異世界用の戦力を確保しよう、という話か。

理屈は分からなくはない。しかし、それではあまりに本末転倒だ。人々を守るために戦っているのに、それをあんな思考力の薄い怪物に変えてしまつては意味が無い。

「人をモンスターに変えなんかしたら、その人の人生はどうなる？ 残された人は？ 戦いしか出来ないのっぺらぼうの怪物になつた近しい人を見てどう思う？」

「問題ありませんよ」

「問題が無いわけねえだろ。お前みたいな狂人と違って、普通の人間は家族や友人が怪物になつたら苦しいんだ」

「いいえ……私だつて、親しい人が怪物になつたらとても悲しいです。しかし問題ない、問題ないのでですよ」

人差し指を立て、まるで自社の新商品をプレゼンするビジネスマンのような口調でクリシユタはそう言った。

「先ほど我々には二つの目的があると申しましたね。一つは地球人口の35%を”天使

化”させる事。そしてもう一つは――

「術式破綻、エンジェライト……!」

奴の妄言を無視し、俺は「術式破綻」を使用しながら一瞬で間合いを詰める。一瞬の内に自分の目の前に現れた俺を見て、クリシユタの口が嬉しそうにうつつすら弧を描いた。

その不気味な表情を睨み付けながら俺はゼロ距離で魔法を発動させる。

「起動、”精霊王の義眼”……! ゴア・ライトニング!」

「――我々のもう一つの目的は、この世界自体の理ことわりをイノベーションする事。具体的に言えば、次元を一つ上昇させる事です」

――クリシユタへと放たれた『雷魔法』は、そのコート表面を僅かに焼き焦がすだけに留まった。

当の本人は光と熱の奔流の最中、涼しい顔をして佇んでいる。魔法が効いてないのか……!?

「この三次元方式の世界……『点と線と高さ』で構成された世界に、『時間』をプラスする。過去も未来も現在も全て地続きにさせてしまおうという試みこころです。つまりは誰でも好きな時にタイムスリップ出来る世界にしたい。そうすればいつでも過去にいる人間時代のその人へ会いに行けるでしょう」

「わけ分かんねえ事言つてんじやねえ！ 死ね！」

「歩く、あるいは息をするかの如く簡単にもう死んでしまった人々に会いに行ける。そんな世界が実現したら素晴らしいとは思いませんか？　そしてその楽園を守護するのがこの天使たちです。もう誰も死なない、誰も居なくならない。有史の始まりから現在に至るまで存在した全ての人類と語り合える。そんな世界です」

『「落ち着いて下さい、龍人」』クリシユタがそう言うと同時、俺の放っていた雷魔法の発動が勝手に止まってしまった。体から力が抜け落ちて立っていられなくなる。

俺はへなへなと地面に膝を着く。何を、された……？　急に体に力が入らなくなつた。

「君には私の髄液ずいえきをあげます。君ならきつと最強の天使に成れる……私と一緒に、この世界を救いましょう」

ドス黒い液体に満たされた注射器を片手に、クリシユタが歩み寄ってくる。

立ち上がりとうとするが腰から下が鉛になったみたいに重く、動いてくれない。

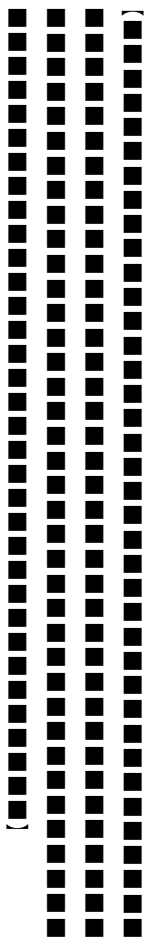
「やめろ……」

「ありがとう、龍人」

「ぐっ……!!？」

——俺の首筋に、注射針が突き立てられた。

そして次の瞬間に感じる圧倒的な『異物感』。何か得体の知れないモノが俺の中に侵入しようとしている、そう直感した。



歌が、聞こえる。

笑うような泣き叫ぶような怒り狂うようなあざけるような愛を叫ぶような、ヒトの抱きうる全ての感情がごちゃ混ぜになった歌声。

言語化出来ない程の凄まじい情報量が俺の脳神経を焼き焦がし、少しずつ自我を奪っていく。

歌声に混じるようにして、激しく怒り狂った龍の咆哮も聞こえる。

「次はー騎士ーありがー」

何やら天使の翼のようなモノが無数にうごめく視界。その端で今度はエリミネーターの首に注射器を刺すクリシユタの姿が見えた。

「エリミネーター、さん……」

意識を保つのは最早限界だった。

満足そうに屋上から去っていくクリシユタの姿を最後に、俺の意識は途切れた。

十話『裏切り者と理想』

「大丈夫かな、これ……ねえ、生きてるー?」

「ぐ、っ……?」

聞き覚えのある声と共に、頬をツンツンとつつかれる感覚。

俺が臉を開くと、そこにはしゃがみこんで俺の顔を覗き込んでくる金髪の女性——第一位の姿があつた。

開けた青空と風になびくセミロングの金髪が、^{ひら}ここが学校の屋上である事を示している。

「東弊……さん」

「良かった……生きてるわね」

「学校の、みんなは……?」

「死者は0名……代わりに976人の生徒および教職員が行方不明ね。……というか、まずは自分の心配をしなさいな。今の貴方の体、物凄い事になってるわよ」

第一位の言葉で、俺は自分の右手を見た。

「……っ」

「ねっ、凄いでしょ……まるで体の細胞同士が互いに食らいあつてみたい」

「ー体のあちこちに、真っ白な羽毛みたいな物体が生えてきていた。」

そしてどんどん成長していこうとするソレを、黒い龍の鱗が片っ端から叩き潰している。

……” 天使化” による侵食を、爛れ古龍が防いでくれているのか？

「ふふっ、白と黒のコントラストがオセロみたいねえ……まあ良かったわ。貴方はアレみたいにはならなそうで。」

「アレ……?」

明後日の方向を向きながら言った第一位の言葉を不審に思い、俺はその視線を追う。

すると、そこにはー

『■■、があ■■!!?? ■■、■■■■!!!』

「エリミネーターさん……!!?」

「ー半ば 天使化」 したエリミネーターが、全身を鎖で拘束されてのたうち回っていた。

その頭上には、切れかけの蛍光灯みたいに消えて現れてを繰り返す天使の輪が浮かんでいる。

……思い出した。確かエリミネーターは俺と同じくクリシユタに注射針を刺されて

「すぐについてワケじゃないわよ？　血や骨髓、臓器とかをひっこ抜いて変異の原因を特定しなきゃいけないからあ……処分はその後ね。異界人のサンプルは貴重なの」

鼻唄を歌いながら端末に何かを入力する第一位。

だが、唾然と立ち尽くす俺に気が付いたようで、困ったような顔になった。

「あなたは嫌だろうけど、こんな状態の彼を生かしておけばいつか必ず人を傷付けるわよ？　それは彼自身が一番望んでいないんじゃないかしら。私はこれでも彼をリスペクトしてるのよ。エリミネーターを人殺しにさせるなんて、私にはとても耐えられないわあ……」

軽薄な笑顔を浮かべながら、全く本心から思っていないであろう言葉で第一位は俺を論そうとする。

俺はそれに、自らの腹で黒い感情が渦巻くのを感じ——喉まで込み上げたソレが、つい口から溢れ出てしまった。

「……そんな事思つてもない癖に。よく真つ赤な嘘をぬけぬけと吐けるなこのサイコパス女。お前みたいなのはきつと人が死んだって何も感じないんだろ」

「……うん？」

瞬間、第一位の顔からおよそ表情と呼べるものが消え去った。

長い金の睫毛に縁取られたサファイアの瞳が射抜くように俺を見詰め、何度か瞬くまたたく。

それから、まるでやつと感情に体が追い付いたみたいにな、死んでしまいうなぐらい悲しい色に顔を歪めた。

「……どうしてそんな酷いこと言うの？」

「その人は俺が治すし、誰も殺させない……術式破綻・エンジエライト『六翼』」

術式破綻を発動させ、向こうの認識が追い付かない程の速度で第一位の背後を取る。

そして、その細い首に腕を巻き付かせ締め上げた。

呼吸と脳への血流を遮断された第一位は、呆気にとられた顔で何度か口を開閉させた

後、数秒足らずで意識を失って倒れる。

俺は第一位の体を地面に横たわらせてからエリミネーターを背負い、学校の屋上から

飛び降りた。

『■■■■■■■■■■!!』

「つ……落ち着いて下さい、エリミネーターさん！」

背中では暴れるエリミネーターに呼び掛けるが、叫ぶだけで返答は無い。

……咄嗟の判断で、かなりマズイ事をしてしまった。異界生命体を庇って東弊に攻撃

するという事は、全ての駆逐官への裏切りと反逆に等しい。きつとすぐに沢山の駆逐官

が俺を殺しに来るだろう。

だがあそこで俺が動かなければエリミネーターは確実に殺されていた。この行動自

体には後悔は無い。

「遠くの山、樹海……いやいつそ海外にでも逃げるか……う。」

状況はかなり切迫している。

並の駆逐官なら何人居ても負ける気はしないが、第二位や上位ランカーが東になって来たらヤバイ、とくに前者。

自滅覚悟で精霊王の義眼を完全解放しても、奴には勝てそうに無い。

俺はとりあえず、大きな橋の下へ滑り込んで息をひそめる。

「時間が無い……急がないと……こら一帯に包囲網が完成する……」

人混みに紛れようにも、エリミネーターを背負っていては目立ちすぎる。しかも今の俺は天使化の侵食によって全身から羽が生えかけている。

数分の思考の末、俺は第一位の居るであろう学校とは反対の方向へと向かうことに決めた。これで少なくとも、第二位に次ぐ力を持つあいつとは戦わなくて済む。

俺は、橋の下から出ようと立ち上がった。

「あー、うめえなア……馬鹿やったガキ一人シバくだけで500万！ あのアマ、絶対殺害禁止の緊急依頼たあかなり切羽詰まってやがるな……」

ー右手の方向から、こちらに近寄ってくる何者かの姿が見えた。

年は四十の半ば程か、長身で筋肉質な体に黒いシャツとズボンを纏った男。身長のせ

いか細身に見える。乱雑に切り揃えられた前髪から覗く眼光は、猫科の猛獣みたく鋭かった。

手には大きなコンバットナイフが握られており、ニタニタ笑いながらそれを手で弄んでいる。

……駆逐官か。予想より速く見つかったしまった。

「……すいません、今取り込み中なので。どっか行つてくれませんか？」

「おーおー、それなら俺の方も取り込み中ですよ……テメエ狩らねえと明日からのメシと競馬代がパアなんだわ。ワリいな」

会話で時間を稼ぎながら、俺は親指に爪を立てて血を出した。

……ここからは連戦が想定される。消耗の大きいエンジェライトは控え、通常の術式装填で対応しよう。

「術式装填・プレナイフ風魔術」

俺の詠唱と同時に、不可視の風刃が発生し男へと迫る。

自らを切断しようとする刃に気が付かずに、そのまま男は歩いて来る。

仕事をしに来ただけのコイツには悪いが、しばらく寝て貰おうー

「おわ、あぶねえな」

ー風刃が男の服を僅かに切り裂いた時点で男は攻撃に気がつき、凄まじい反応速度

で身を翻^{ひるが}して回避した。

……反応された？ 威力を抑えたとは言え、不意打ちで放った風魔術を耐えられるのはまだしも回避されるのは初めてだ。

「その指の血……ああー、てめえ、噂の手品使いか？ ええと、たしか、じゅつしきなんちやら……」

「……」

ブツブツ呟きながら更に近寄ってくる男を臨戦態勢で見据え、俺は思考する。

口ぶりからして……こいつは俺が”龍人”であることに気が付いていないのか？

さつきも『ガキ一人シバくだけで』とか言っていた。俺の正体に気が付いていればそんな発言はまずしないはずだ。

「お前……誰に俺の捕獲を指示された？」

「あー？ 顔面の綺麗な駆逐官のアマだよ。すげえ焦ってたなあ。ま、殺しはしねえからよ。大人しく捕まってくれや……はいっ、お喋り終わりい！」

「それはー」

俺の言葉を遮るようにして、爆風と共に男の姿が消えた。その代わりに俺の周りを疾走する黒い影が見える。

かなり速いーしかし、対応出来ない程ではない。いつぞやのゴブリン・エースと同

程度のスピードだ。

俺は、自分の周囲に迎撃用の龍腕を展開しようとし……

「……龍腕が、出ない?」

いくら爛れ古龍に呼び掛けても、龍腕が出現しない事に気が付いた。

……恐らく、天使の侵食を防ぐ事にリソースを割かれ過ぎているのだろう。戦闘に使

う余裕は無さそうだ。

純粹な体術で対処するしか無いか。

「はい、まず一撃い。……おおっ!」

ー背後に回って俺の肩にナイフを突き立てようとした男の首をひっ掴み、ギリギリと締め上げる。

大賢者戦から半年、エリミネーターとの特訓で肉弾戦の技術も磨いた。

対人戦において俺がパワーで遅れを取ることはまず無い。だから、初手に体の一部を掴んでしまつてタコ殴りにするのが有効だ。

最も防ぐべきは、ちよこまか動かれて少しずつ体力を削がれる事。このまま首を絞めて意識を奪つてしまおう。

「おいおい、ちよつと……タンマにしねえか。首絞めとか反則だと思っぜー、おじさん」

「……」

「ああ、そうかよ。ならこつちも殺るき出すわ」

その言葉と同時に、ズブリと俺の胸に何か突き刺さる感覚。

驚愕しながら痛みの元を確認すると——そこには、俺の胸部を貫通する金色の槍の姿があった。

奴の両手には何を握られていない、一体、どこから。

「つー!?!」

咄嗟に槍を引き抜き、男を突き飛ばす。

吹っ飛んだ先の石垣に衝突した男は、崩壊した瓦礫と土煙の中から首元をおさえて気持ち悪そうにしながら出てくる。

俺は胸の傷を再生しながら、それを睨んでいた。

「ああ……首いてえなオイ……つて、おお! 死んでねえ! 頑丈で良かったぜえ!」

心底嬉しそうに笑う男からは、怒りや殺意などマイナスの感情は一切感じられなかった。

……この身体能力、今のどこからともなく発生した謎の武器、こいつは強い。

そして、俺の捕獲を第一位から依頼されたと言うような口振り……俺は、この男の正体に目星を付けつつあった。

「お前……」 第三位「だろ」

「ああ？ ……ぶつ、ハッ、ハハハハハ！ そう思うかあ!？」

俺の言葉に男は一瞬だけキョトンとした後、吹き出すように大爆笑した。

「あー、でもブツブツだ。あんなのと一緒にすんじゃねえ。それにそもそも、俺は駆逐官でさえねえ」

駆逐官じゃ、ない……？

なら、一体なんだと言うのだ。これだけの戦闘力を持った存在が、野放しにされているなんて考えにくい。

俺が怪訝そうな顔をしていると、男は右手を前に突き出しながらニタリと笑った。

”理想^{イデア}、解放”

ー突き出された男の手の内に、どこからともなく日本刀が発生した。その刀身は遠目からも分かるほど磨き抜かれており、妖しい光を放っている。

……エリミネーターによる武器創造とは明らかに異質な”完成度”だ。アレは武器の破損と再生産を前提とするため一つ一つはナマクラに近い。

だがコレは明らかに『妖刀』とか『宝剣』とかの部類だ。

武器としてのランクが段違いだ。

「俺は……政府直属の理想^{イデア}使いサマだよ。ヒラと一緒にすんじゃねえ」

その顔を獯猛に歪めながら、男は言った。

十一話『理想砕く神威』

日本刀を肩に乗せながら歩んでくる男を見据えつつ、俺は頭の中で戦略を組み立てる。

……幸いな事に、戦闘中に武器を生成する相手との戦いはエリミネーターで慣れている。龍腕が使えないハンデはそれでチャラに出来そうだ。

「イデア解放……」ミカツキムネチカ 三日月宗近。さあ、ちやちやつと終わらせようぜ」

左手に二本目の刀を発生させながら、男が言った。

二刀流か……しかも相当。堂に入っている。ただ刀を振り回すタイプのヤツじゃない。何かしら剣術を修めているのだろう。

俺は土魔術オーロベルデイで高密度に圧縮した土の剣を生成しながらそう分析した。

土製とは言え、粗悪な刀なら芯からへし折れるぐらいの強度はある。踏み込み、今度は俺の方から間合いを詰める

「――死ね」

「よっ……、とお!? 速すぎん、だろおっ! こりや500万じゃ割に合わねえなーオラアッ!」

——男の頭部を横殴りにするようにして放たれた斬撃は、咄嗟に身をかがめられた事により空振る。

刃の向きを変えて下にある男の頭へ振り降ろそうとするが、それは男の持つ刀により受け流され、行き場を失った土剣がアスファルトの地面を垂直まで切り裂く結果に終わる。

その隙にもう片方の刀が俺の首筋に迫る——が、一瞬だけ発動させた”精霊王の義眼”で刀の軌道上に局所的な光学防壁プリズムバリアを展開して防ぐ。刃は真つ二つにへし折れた。

男は舌打ちしながら後ろに飛び退いて距離を取った。

「……」

「あー……強え、あのクソアマ、怪物退治なんて押し付けやがってよお……んだよ、刀で地面を垂直まで切り裂くって。漫画かよ。なんか俺と能力かぶってやがるし」

肩をぐーつと伸ばし、ストレッチをしながら男は悪態をつく。パキパキと小気味いい音が聞こえる。

……天使の侵食が、予想以上に苦しい。普段の六割程度しか速度が出なかった。”エンジニアライト”を使うか……？

「……とりあえず、死ね」

「死ね死ね言いやがってよお……これがキレル十代ってやつかあ？ 父親の顔が見てみ

てえなあ!」

再び日本刀を出現させながら、男が斬りかかってくる。俺も二本目の土剣を作成して迎え撃つ。

およそ十秒の間に繰り返される数百の剣裁。二刀による手数で圧倒しようとする男の刃を危なげ無く受け、かわし、流し、時に反撃する。だんだんと傷が増えていく男からは、疲弊の色が感じられた。

技量は拮抗している、いや向こうの方が少し上か。しかし身体能力の差があまりに大きい。そろそろ畳み掛けるか。

”エンジエライト”——『一翼』

「ツツツ!」

突如として数倍は速くなった俺の動きに着いてこれず、男は胴体を横風ぎにされてぶっ飛んだ。

咄嗟に受け身を取ったのかギリギリ意識を保っているが、胸部が少し抉れ、直に受けた左腕に至っては半ば切断されプラプラとぶら下がっているだけの状態。

もう二刀流は使えない。決着で良いだろう。

「死ぬか、降伏か、選べ。3秒以内だ。1、2——」

「待て待て待て! ……へへ、降参だよ」

「……そうか」

意外と素直に敗北を認めた男を俺は視界の端で睨みながら、エリミネーターを背負い直そうとする。

そして、エンジェライトを発動して逃走しようとして――

「陽葵さん、こいつですか？ 例のガキ」

「ええそうよ……やりなさい」

「――ッ!？」

――背後から凄まじい衝撃が俺を襲い、地面を転がりながら吹っ飛ばされた。

咄嗟にそちらを振り向くと――そこには、ゾロゾロと何十人も武装した連中を引き連れた第一位の姿があった。青い瞳が、ギロリと俺を睨み付けてくる。

「――降参だよ、俺はな」

右腕を抑えながら、男はニタリと笑いそう言った。

「東弊、さん……これは」

「……黙りなさい。貴方には今この場で処分を下します」

第一位は僅かに震える手で俺を指差し、脇に控える部下たちに『撃て』と伝えた。

すると、そいつらは一斉に武器を構え――

「アイデア解放」「アイデア解放」「アイデア解放」「アイデア解放」「アイデア解放」「アイデア解放」

「アイデア解放」「アイデア解放」「アイデア解放」「アイデア解放」

「アイデア解放」「アイデア解放」「アイデア解放」「アイデア解放」

「アイデア解放」「アイデア解放」「アイデア解放」「アイデア解放」

「アイデア解放」「アイデア解放」「アイデア解放」「アイデア解放」

「アイデア解放」「アイデア解放」「アイデア解放」「アイデア解放」「アイデア解放」「アイデア解放」

「アイデア解放」「アイデア解放」

「アイデア解放」「アイデア解放」「アイデア解放」「アイデア解放」

「アイデア解放」「アイデア解放」「アイデア解放」「アイデア解放」

「アイデア解放」「アイデア解放」「アイデア解放」「アイデア解放」

「アイデア解放」「アイデア解放」「アイデア解放」「アイデア解放」

「ーがぐ、があああっつっ!?!」

ー水が、炎が、風が、雷が、光が、重力が、自然が、空気が、俺を殺害するとう一つの意思を持った嵐となつて襲いかかってくる。

数十人から一斉に放たれた理想イデアによって、俺の体がズタズタに引き裂かれていく。再生が間に合わない、このままでは、死ー

「つ……ステイルシアアアアアツツツ!! 押し返せええツツツ!!」
 「ヴァ、ヴァ、ル」、ル、ル」ルウーグス! 光魔法うウ!

精霊王の義眼に、そう呼び掛ける。

すると恐ろしい勢いで魔力が空っぽになっていく感覚。それと同時に――大賢者の光魔法を彷彿とさせる、光の奔流がほとほと迸りアイデアの嵐を押し返した。

「南極で龍王を仕留めたアイデアの一斉発射が……片目だけでこれ、ねえ……。つくづく化け物ね、精霊王。でも本体はどうかしら? そろそろガス欠なんじゃない?」

「もう少し……! あと少しだけ頑張ってくれ、ステイルシアー!」

――魔力切れ。

光が少しずつ細まっていき、発射一秒足らずでアイデアの嵐に押し返される。

眼前に迫る圧倒的な力の奔流。俺はそれに呑み込まれる。身を屈め、必死に頭をガードする。

が――あまりの熱量に、頭を守ろうと突き出した両手が一瞬で炭化した。

「あ、あ……」

四肢を消し飛ばされ、全身が焼け爛れて燃えるように熱い。

意識を失う寸前――第一位の『やめ』という声により、アイデアの発射は止んだ。

……体が、再生しない。

魔力を使い果たしたのだろうか。頭がクラクラして酷く眠たい。腕は根本から、足は膝から下が千切れている。

低くなった視界の先から、無表情の第一位がゆっくりと歩いてくるのが見えた。

「……ナ、ア”ギザ、ア? カラ”ダアアア……貸して、エ”。こいつら、ワタ、シが、ワタシが、ワタシがワタシがワタシがワタシが!!! ミいヌんヌナア” ブツ、ブブブブチ殺シ、でえ”、あげるルルルルルルルルルルルルルル、よオオオ!!!」

「ステイル、シア……」

俺の意識が、右目からじんわり広がっていく熱によつて塗り潰されていくような感覚。

怒り狂うようなステイルシアの声の幻聴が聴こえる。

俺の視界に、見たことの無いドス黒い魔方陣が展開されていく。

なんだ……? これは。

「……ミナトナギサ。今からでもエリミネーターをこちらに引き渡しなさい。そしたら今回の件は不問にしてあげる。そのために情報が漏れる危険のある一般駆逐官ではなく、お金で動かせるアイデア使い達を連れて来たの」

「……引き渡して、どうする」

「鑑識に回した後、処分するわ」

「じゃあ、無理だ。くたばれクソ女」

「……ああ、そう」

俺が笑いながらそう言うのと第一位は、どうしようも無いぐらい動揺した人間がよくそうするように、目を瞬かせたり見開いたりしながら浅く速い呼吸をした。

数瞬だけそうしてから、ゆっくりと俺に人差し指を向けてくる。

……視界の黒魔方阵が、更に濃く大きくなつていく。

「アイデア、再発射」

第一位の言葉で、背後のアイデア使いたちの手元が再び煌めいた。

それから間も無く発射されたアイデアの嵐に、俺は呑み込まれようとー

「よおつとお!! あはは! えらい事になつてるねえ渚! 何やらかしたのさ! とり

あえず一緒に逃げるよー!」

ー突如、俺を庇うように上空から飛来した一つの人影。そいつがアイデアの嵐に手を翳すと、嵐はまるでモーセの逸話みたいに真つ二つに割れて俺には当たらなかつた。

白いワイシャツと制服のズボンに身を包んだその人影は、こちらに振り向きつつ中性的な顔を笑顔にして口を開く。

「クシナダ……!?!」

「ぴんぼーん! 助けに来たよー、渚」

突然乱入してきたイレギュラーに、アイデア使い達がざわつく。

東弊は驚きに顔を歪めながらクシナダを睨む

「つ……この能力は……！ 総員、レベル4戦闘体勢！」

「黙ってなよ金髪おばさあん！」 空から無数の槍が降る！」

陣形を整えようとするアイデア使い達を嘲笑うかのように、天を指差しながらクシナダが叫んだ。

「……それとほぼ同時、上空に凄まじい数の”鋭利な何か”が見えた。

「なんだ、これは!?!」「があああつ?!」「かわせえええ!! 雨でも氷ひょうでもねえー！」槍だ
！」

空から雨粒の如く降り注ぐ無数の”槍”。

鉄製のそれらは次々地面に突き刺さり、あつという間に銀色の草原を作り上げた。

不思議と俺やクシナダには当たらず、アイデア使いだけを正確に撃ち抜き続けている。

「さつ、行こうか。渚」

エリミネーターを引きずりながらこちらに歩いてきて、クシナダは俺に手を差し伸べてくる。

い。……状況が理解できない。しかし、こいつに着いていく意外の手段があるわけでもない。

俺は、それに領きークシナダの背後に、槍の豪雨の中を無傷で疾走する第一位の姿を見た。

そしてそのままクシナダに拳を叩き込もうとしたが、ひよいつとあっさり回避される。

「おおつと……？ 危ないよ、金髪おばさん。というか良くかわせてるね、この雨。お仲間**は**ボロボロだけど」

「……」

「じゃあ……」ボクの半径一メートル以内にいる生物学的女性は槍による攻撃を回避してはいけない」

「ーっ!？」

ドスリ、と。第一位の腹部を空から降り注ぐ槍の内一本が背後から撃ち抜いた。

第一位は吐血し、ふらふらと倒れそうになりながらもクシナダへ手を伸ばす。

「ふ、うつ、ぐう……!？」

「……ふうん、ズレた。なるほどね。まあまあ強い能力を持つてるじゃないか。君の能力は**概念干涉系**だね」

『まあ、どうって事はないけど』

そう言つてクシナダは俺とエリミネーターに手を触れさせた。

”ボクとボクが物理的に触れている地面以外の存在を現在ボクが思い描いている場所までワープさせる”

「つ……待ちなさい！ 龍人——」

「待てて言われて待つヤツは居ないよー。ばいばい！」

——次の瞬間、目の前に広がる景色が屋外から屋内の一室へと切り替わった。

窓の無い六畳ぐらゐの広さの一室で、幾つかの間接照明で照らされた空間にはコーヒーの香りが漂っている。

……どこだ、ここは？ 一瞬前まで、橋の下に居た筈だ。

「よい……しよつと。うわ、ボロボロだねえ。手足もげてるじゃんか。可哀想に」

クシナダは本棚と机の間に俺とエリミネーターを寝かせ、痛々しそうな表情でそう言った。

「お前……何を、した？ どうやって、こんな……」

「それは後ね。まずは傷見せてよ」

クシナダが俺の前でしゃがみ、もげた腕の断面に触れた。

「……」 元に戻れ”

「つ……!!？」

——その言葉と共に、俺の体に変化が起きた。

優しい光と共に腕と足が再生し、肉に食い込み体を蝕んでいた天使の羽が全て消え去る。

そしてー一体に、魔力がみなぎる感覚。

……先ほど使い切った筈の魔力が、全回復している。

「マジ、か……」

「凄いでしょ、ボク。誉めてもくれても良いんだよ」

パチンと、クシナダが指を鳴らす。すると高級そうなソファがその場に出現して、そこに腰掛けた。

……全く、わけが分からない。どうなっているんだ？ そう頭を抱えそうになつてー俺はその時初めて、こういう現象に見覚えがある事に気が付いた。

「……現実、改変？」

ー規定事象改竄者。
ミラー・ジュー・カットアップバー

上位モンスター襲来の日、俺が戦ったモンスターと似ている。まるで別々の本の場面と場面を切り貼りしたかのような……チグハグな現象。

「察しが良くて助かるよ……」名答！ ボクの能力は「現実の改変」だ。君も似たようなのと戦った事があるんだってね。あんな二流と一緒にして欲しくないけど」

足を組み替えながら、クシナダがそう言った。

つまり……クシナダも理想^{イデア}使いという事か？ 第一位から貰った資料に、そういうタ
イプのイデア使いも存在すると書いてあった。

「いや、彼らの能力とボクの現実改変とは、全くの別物なんだ。むしろずっと”向こう
側”に近い物で……うん、もう言っちゃおうかな」

まるで俺の心を読んでいるかのように、クシナダがこちらの疑問に答えた。

……イデアじゃない？ なら、それは——

「——ボクはね。異界の怪物^{モンスター}と地球の人間の混ざり^{ハイ}物^ブなのさ。君の戦ったアレより遙か
に上位の、現実改変の怪物から生まれた、ね？」

——そう言ったクシナダの顔は、うつすら浮かべた笑みの裏に僅かな悲嘆が混じって
いるように見えた。

十二話 『地下作戦会議』

「お前が、モンスター……?」

「そうだよ。産まれた時から……いや、存在した頃から、ずうつとね」

『最近何かしらの要因でモンスターに近い存在となってしまう』とかならまだ分かる。だが、初めからモンスターとの混血だった?

こいつと出会ったのは高校に入学してからだ。つまり、最低でも、一年前のモンスターなんて影も形も無かったあの頃から既に、こいつはあの化け物染みた”現実改変能力”とやらを隠し持っていたということ。

自分を”神”だの”全能者”などと宣のたまっていたのも、思い込みによって強化される現実改変能力の性質ゆえか。

だが——その時、俺の胸中に一つの疑問が灯る。こいつからは魔力が全く感じられないのだ。……いや、それは些細な問題か。今重要なのはもつと別の事だ。

「あはは、軽蔑するかい? ……まあ、ボクだって今さらまともなヒトとして生きられるとは思っていないさ……だけど、一つだけ君にお願いがあるんだ。こんなボクの頼みを聞いてくれるかい?」

「……軽蔑なんてしねえよ。助けられたんだし、友達だし……お願いってなんだ？」

俺の言葉に、クシナダは少しだけその薄い唇の端を持ち上げて笑った。

それから、口を開く。

「クリシユタ・マナス」

「……？」

唐突に、クシナダはそう口走った。

クリシユタ・マナス―俺とエリミネーターに天使化薬を打ち込んだ、”神の存在証

明”指導者の名前。

なぜ、いきなりそいつの名を……？

「―ボクと一緒に、クリシユタ・マナスを……いいや、お父さんを、殺して欲しいんだ」

「……え？」

恐ろしく強い決意の色が滲んだ声で、クシナダは俺に言った。

「さつき言ったよね。ボクの父親で”最強の現実改変者”……あれが、さつき学校の屋

上で君とこの騎士が戦ったクリシユタ・マナスだよ」

「マジ、か……」

「奴は、地球の人口のおよそ三割をあゝの怪物……便宜上”天使”と呼ぼう。あれに変えようとしている。それだけの戦力があれば、これから来るであろう異界からの侵略者を

ギリギリ全て倒し切れる計算なんだ」

……今思えば、クリシユタも現実改変を使っていたように思える。ヤツの言葉でエリミネーターが空中に固定されたりしていた。

それに、確かにあの”日輪個体”が何億体も居れば、異世界から来た連中にも簡単に遅れを取るとは思えない。

「彼は人類に対する本気の善意で、自らの全能力を投じてこの世界を守ろうとしているんだ……だから、厄介。手段を選ばない正義というのは果てしなく強いんだ。自分の存在さえ、目的を達成するための駒としか考えていないのだから」

「殺すって……お前は良いのか？ 父親、なんだろう」

「……お父さんも、初めは真つ当な方法で怪物どもを駆逐しようとしていたんだ。モンスター襲来初期、全国でそれを討伐していた”神の存在証明”は、彼の命令で動いていた」

『……だけど、それじゃ到底間に合わなかったんだ』そう言って、クシナダは顔をうつむかせた。

「そして、とてつもない勢いで死んでいく人々見て……以前から抱いていた一つの”夢”が、彼の中で少しずつ現実味を帯びていくんだ」

「夢……？」

”時間の壁”を丸ごと取っ払おうとしているのさ。つまり誰でも過去へ戻れるようにして……死者にいつでも会える世界にしようとしている”

「そんなの、どうやって」

「天使が複数集まれば、時空間を歪める事が可能なんだ……君も見ただろう？ かつて戦った”熾天使”が次元を抉る黒い球体、時空掘削球体を使うのを。あれをもっと大規模にして、時間の壁に風穴を空けようとしているんだ”

時間の壁を取っ払う……確かに、そんな事を言っていたな。

自らの手元に水の入ったグラスを出現させ、クシナダが俺へ差し出してきた。俺はそれを受け取り、喉に流し込む。

乾いた喉が、少しだけ潤った。

「今思えば……彼は、妻が死んだ時点で少しおかしくなっていたのかもしれない。それに合わせて元々ただの慈善団体だった”神の存在証明”も徐々に狂気を孕んでいった”

「妻……」

「そう。つまりボクのお母さんだ……体の弱い人でね。ボクの体を腹から取り出した時点で、彼女は既に息絶えていたんだ。母を愛していた父は、それはそれは取り乱していたよ。なにせ、自分が人類を愛する理由になった最愛の人を失ったんだから”

クシナダはエリミネーターを一瞥して、『……こいつも治してやった方が良いのかい

？』と聞いてきた。俺はそれに頷く。

するとクシナダが億劫そうに立ち上がって、倒れたエリミネーターの方へと歩いていく。

「侵食がかなり深い。天使化していないのが奇跡だよ。一応やってみるけど、治らなくても怒らないでね」

エリミネーターの頭に人差し指を押し当て、クシナダは瞼を閉じた。

それから――ほんの一瞬だけ、クシナダの体の輪郭が揺らぐ。

「あれ、今、なんか……」

「なんの事だい？ ……よし、この騎士にボクの力を打ち込んだ。運が良かったら فقط、しばらく寝かせれば治るよ」

「運って」

「現実改変者の能力と言うのは、絵の具みたいなものなんだ。現実というキャンパスに思い描いたものを出力する……そして絵の具同士がぶつかり合った場合、より濃い方が打ち勝つ。ボクとクリシュタ・マナス、能力の強さ自体はどっこいどっこいなんだ」

つまり……治るかは五分五分って事か。クシナダの能力が勝てば治るし、負ければエリミネーターは天使化してしまう、と。

少し呼吸が穏やかになったエリミネーターを見ながら、俺は重苦しい溜め息を吐い

た。

「……能力の強さが五分なら、普通に勝てるんじゃないか？」

「いいや、そんな簡単な話じゃないんだ……アイツの周りには無数の”上位天使”が居る。まずはそれを突破しなくちゃならない。あの数……ボクらだけじゃ、とても倒しきれない」

「じゃあ、どうすれば……」

俺の問いに、クシナダは『これを見てほしい』と言ってから指を鳴らした。

すると俺の目の前にはらりと数枚のプリントが出現し、地面に落ちた。それを拾い内容を見て――俺は、思わず息を飲んだ。

その書類の先頭には、ちようど一月後の日時を示した”神の存在証明”【掃討作戦】という文字があったから。

ご丁寧に『異界生命体対策本部』の文言もある。

「二月後、対異と神の存在証明の全面戦争が起こる。その情報はまだ君には知らされていないだろうけど、ボクが本部からかっぱらってきた資料だから間違いない」

「全面、戦争……」

「ああ……恐らくクリシュタ・マナスは駆逐官たちの対処に天使を動員するだろう。それでヤツ自身の守りが薄くなったところを――ボクらが叩く。またとないチャンスだ」

……つまり、駆逐官たちの作戦に乗じてヤツを倒してしまおうという事か。極めて単純だ。

このままクリシュタ・マナスを放置しても向こうの戦力が増強されるだけだから、攻めるのは早い方が良い。

「この一月で、ボクらは徹底的に奴への対策をする。君にも現実改変者との戦い方をみっちり叩き込んであげるよ……大丈夫、君とボクなら必ず勝てるさ」

どこからともなくクシナダはコーヒーカップを取り出し、一瞬だけ右手で覆い隠す。手をどけると、空だったカップにはカラシコロシと氷の浮かぶコーヒーが並々と揺れていた。

特有の芳しい香りが、俺の方まで漂ってくる。

「ナギサも何か飲む?」

「……コーラが良い」

「はい、どうぞ。ちなみにペプシも出せるよ」

「便利だなお前……ドリンクバーみたいだ」

「むふふー、ありがと! ファミレスとかに就職出来るかな?」

「出来んじゃない? ドリンクバー枠で採用してもらえよ」

クシナダの出現させたグラスを受け取り、俺は乾いた喉にコーラを流し込んだ。……

いたって普通のコーラだ。キンキンに冷えてやがる。

意図せず逃亡生活となってしまったが、食料面は問題無さそうだ。

『現実改変者』。味方だと恐ろしく頼もしいな。攻めも守りもサポートも全て最高水準だ。インチキと言つても良いぐらい。

「……エリミネーターさん」

地面に横たえているエリミネーターをソファの上まで運んで、俺は溜め息を吐いた。……本当に、治つてくれると良いが。

クシナダは椅子の上で膝を抱え込んで、鼻唄を歌いながら呑気にコーヒーをすすつて
いる。

「そーいや……バンダイが君のこと心配してたよ。そりゃ、あんな直撃食らつてれば普通死んだと思うよね」

「あいつは無事なのか……良かった。お前が守つてくれたのか?」

「ナギサもバンダイもボクの大切な友達だからね。死なせるわけ無いじゃんか。……んー、今日のは調子悪いなあ。イマイチ安っぽい」

指先でカップの中のコーヒーをくるくるかき混ぜながら、クシナダが答える。

「……コーヒー好きだっけ、お前」

「それはそれは大好きだよ……ソファと本、そして一杯のコーヒー。これ以上贅沢な

ものがこの世にあるだろうか。突き詰めれば豆を水に浸しただけの飲み物がなぜこんなに美味しいのか理解に苦しむよ」

人差し指を立て、クシナダは恋人に愛の言葉でも囁くみたいな声で言う。俺はそれに少し引きながら、ソファに腰かけた。

するとコーヒーを飲み終えたクシナダが、互いの太ももがくっつくぐらい近くに座つてくる。

「んふー」

「ちけえよ」

「いーじゃん、冬も近いしお互いの体温を分かち合おうぜ」

「言葉選びが気持ちわりいよお前……」

クシナダの肌は触れば溶けてしまうのではと思うほど冷えきっていた。心配になって顔を見るが、本人は元気そうだから大丈夫なんだろう。

「そういえば、駆逐官たちのデータも盗んできたから読んでおいてね。特に彼らの中核を成す上位ランカーについては特に良く目を通すといい」

クシナダが指を鳴らすと、机の上のどきつと数百枚の書類が出現した。

「……ええ、マジかよ……つかこのご時世に紙媒体つて」

「何事においても情報は大切だ。『知らない』というのはそれだけで最大のリスクになり

うる」

「まあ、無知は罪の同義語って言うぐらいだしそうなんだろうけど……」

「……無知と罪は対義語だよ。どちらかと言えば」

しめやかに目を閉じ、クシナダがそう言った。……この書類は明日以降に読もう。なんだか今日はどつと疲れた。

俺は欠伸を噛み殺しながらソファに深く背を預けて瞼を閉じる。すると急激に眠気が襲ってきた。

少し眠るとクシナダに伝えたら、指を鳴らす音の後に俺の体に毛布が被さってきた。「……ありがとう」

その言葉の後、うつすら目を開けてみると俺の横にもうクシナダの姿はなかった。それを疑問に思ったが、眠気には抗えずー俺の意識はそのまま途絶えた。

十三話 『無かったことにしよう』

「……」

「おはよう、なぎさ」

芳ばしいコーヒーの香りで俺は目を覚ました。

机の上では高そうなコーヒーメーカーが鈍い駆動音を立てて黒い液体をどぼどぼコップに注いでいる。コンセントには繋がっていない。どうやって動いているんだろう。

エリミネーターは寝台の上で横になっている。

俺はこの部屋の光景に、なんとなく違和感を覚えた気がした。だが気のせいだろうと首を振る。

クシナダは椅子の上で膝を抱えて座り、ソファに横になる俺を見ていた。昨日の制服ではなくラフなシャツとズボンを身に纏っていて、爪先まで整えられた白く綺麗な足が裾から見える。

……元々中性的な顔立ちなのも相まって、男子用の制服を着ていないと一見女子のようにはしか見えない。

……もしかしたら。俺の脳裏にとある仮説がよぎった。『モンスターとのハーフだ』
なんて話と比べたら全然あり得る話だ。

「……おはよう」

「うん、今日も一日がんばって行こうね」

「あのさ。朝いきなりで悪いけど一つ質問して良い？」

「なに？」

「ぶっちゃけお前って性別どっちなの？」

「むっ……むむ……」

俺の言葉に、クシナダはつかの間真顔になって硬直する。

それから数秒後、今度は困ったような顔で首をひねりながらゆっくり口を開いた。

「むむむむ……いや、さあ？」

「さあって」

「なろうと思えばどっちにもなれるんじゃないかな。現実改編者とはそういうものさ

……この外見は女性に近いだろうけど、ボクが生まれ持ったものじゃないし」

「へー。……じゃあもしかして熟女とかにもなれたりす」

「ならないからね」

「食い気味にくるなよ冗談だつてば」

身を乗り出して否定してきたクシナダにひらひらと手を振りながら俺はソファから立ち上がり、椅子に腰かけた。

そして、机の上に置いてある書類の束に手を伸ばす。クシナダが盗んできたとか言う、駆逐官たちのデータだ。

俺はとりあえず、一番上の書類を取った。

第一位：『駆逐用前線統括者』

第二位：『殲滅用近海外征者』

第三位：『葬送用対人執行者』

第四位：『龍人』戦力評価S + 討伐貢献値569327

第五位：『塩漬けの魔人』戦力評価S + 討伐貢献値534368

第六位：『鬱蒼なる征服者』戦力評価S 討伐貢献値315763

第七位：『■■■■』検閲済み”たち”戦力評価■ 討伐貢献値300000

第八位：『反復眼のアルバ』戦力評価S + 討伐貢献値273873

第九位：『ぜんまい仕掛けの神』戦力評価F | S S 討伐貢献値159763

第十位：『人造精霊アナスシア』戦力評価S 討伐貢献値148557

????????????

「……………これは」

「対異の中核を成す、いわゆる『ランカー』と呼ばれる最上位駆逐官たちのデータさ。君たちに公表されているのは名前と順位だけでしょ？ 本部にあったPCから抜いて紙に写したんだ」

俺に横からしなだれかかって手元の書類を覗くクシナダに礼を言いながら、じつくりと目を通していく。

俺たちの相手はクリシユタだが、駆逐官たちと俺は敵対状態だ。万が一に備えて気を付けるに越したことは無い。

気になる所はかなり沢山あるが……特に五位と九位が気になる。七位に関しては以前から伏せ字だった。

上位三人も元より固定だ。東弊と水星使いの眼帯男……第三位に関しては見かけたことさえ無い。名前からして対人戦を得意とするのだろうか。

警戒すべきは俺に迫る討伐貢献・戦力評価の『塩漬けの魔人』と、戦力評価SSとか言う馬鹿げた表記の『ぜんまい仕掛けの神』だ。

特に後者。戦力評価SSというのは精霊王……つまりステイルシアと同格という事だ。FSSと振り幅があるようなのは気になるが。

「クシナダ……塩漬けの魔人とぜんまい仕掛けの神について詳しく分かるか？」

「分かるよ。まず塩漬けの魔人は、君がかつて戦った大賢者や精霊王と同じ、”魔法使い”なんだ」

魔法使い……つまり異世界人ってことか？

「じゃあ塩漬けの魔人はこの世界の人間じゃないのか？」

「いや、彼は間違いなく地球人だった。単純に魔法の適正があつたんだろう……特に炎魔法の威力は凄まじかったよ」

「どのぐらい……？」

「海に逃げ込んだモンスター目掛けて放った炎で海の水分が蒸発して、その一角の跡には海水の塩だけが残ったぐらい」

「こわっ」

「大丈夫ボクならわりと完封できる」

「わりと」

『問題になるとすればもう片方だ』とクシナダが言う。

「ぜんまい仕掛けの神……名前からしてもうヤバそうだけど、どんな能力なんだ？」

「ランダム」

「えっ」

「ぜんまい仕掛けの神は、端的に言うところ究極の運ゲー装置だ。一日に一回だけ、ぜんまい

を回した人間の命を代償に『何かをする』。ただそれだけの装置」

”装置” って……それ、人間じゃないのか？”

「うん。向こうの世界から地球に捨てられた『処理不可能な物品』の内の一つだよ。使用者がみんな死んでるから、やむなく道具自体がランキングに入っているというわけだ」

「ええ……無茶苦茶じゃねえか」

「これがくせ者なんだ。過去に一度だけ『大当たり』を引いた奴が居たらしくてね。その時に”ぜんまい仕掛けの神”は複数のSランクモンスターたちを皆殺しにするぐらい大暴れしたらしい。今回の戦いで一番の不確定要素だ……これ一つのせいで一気に戦局が読めなくなる」

こめかみを抑えながらクシナダが溜め息を吐いた。俺も同じように苦々しい顔でソファに背中を預ける。

……駆逐官たちと敵対してしまったのが、かなり痛いな。エリミネーターが万全であればどれだけ楽だったか。

「まあ、まだ時間はあるし。これから考えていけば良いよ。まずは朝ご飯にしない？」

折角だから渚が何か作ってよ。キッチンと食材出すからさ」

「いや、今はそんな気分じゃないし……能力で適当に完成品出してくれない？」

「やだ。渚の作ったのがいい」

ずい、と身を乗り出しながらクシナダが言った。こいつの能力なら直接完成品を出せるだろうに、なんでわざわざ俺が作らなければならぬんだ。

「なんで俺の料理なんかー」

「……あのエルフにはいつも作ってあげてたくせに。友達の小クには作ってくれないの？　なんで？」

「……えっ？」

「ボクはステイルシア以下なの？　ねえ、なげさ」

「それ、なんで、知ってーえ」

ーそこで初めて、クシナダが全く笑っていない事に気が付いた。

冷たい殺気さえ滲む黄金色の瞳が真っ直ぐ俺を見据えている。そこから放たれるのは大賢者に迫るー否。あれすら凌駕する威圧感。

全身から汗が吹き出すような緊張感。

白くしなやかな指が俺の首に這ってくる。首の肉に細い五指が食い込み、鋭い痛みを感じた。

……え、なにこれ。なんでこんなに怒ってるのこいつ。

なんかヤバイぞこれ。

「ボクの方が好きって、大切って言って。友達なんだから」

「え、あ……？　く、クシナダさん……？」

「言つてよ」

ギチリ。爪が食い込み首筋から血が流れた。

鮮烈な死のイメージが沸く。次の瞬間には首を握り潰されていそうだ。

俺は恐怖に抗い、何とか喉から言葉を絞り出す。

「く、クシナダの方が、好きです……料理も作りますから……首いたいです……」

「そう？　そうなんだ、嬉しいな……ボクも君が好きだよ。なぎさ」

えへへ、と照れくさそうに笑いながらクシナダは俺の首から手を離れた。威圧感が収まる。呼吸がしやすくなり、俺は床に座り込んだ。

上機嫌そうにクシナダがパチンと指を鳴らす。すると先程までただの壁だった場所に扉が出現し、その先には清潔そうなキッチンが広がっていた。

「……こわー」

「どうしたの？」

「な、なんでもないです……」

「あははー、なんで敬語なのさ」

俺はぎこちない歩みでキッチンの方へと歩いていく。……最新式だ。CMとかで見たことある。

800リットルぐらいありそうな冷蔵庫もある。開けてみると中には様々な食材がぎっしりと詰まっていた。

何を作ろうか……下手な物を作ったらヤバいかもしれないー

「何を作るの？ なぎさ」

「っ……!？」

「こーやって二人で台所に立っていると、なんだか新婚さんみたいだね……ふふ、なんちゃって」

ほんのすぐ後ろから聞こえたその声に、俺はビクツと肩を跳ねさせた。腰に腕が巻き付いてきて、首筋に暖かい息を感じる。ぴとつと体が密着する。

「あ、あはは……そうですね……」

「ねえ敬語やめようよ」

「え、あ……」

「やめようか」

「はっ」

背中に視線を感じながら、俺は料理を始める。

そして数十分後に出来上がったハンバーグ二つを皿に乗せ、机に運ぶ。

クシナダはキラキラした目でそれを見て、てっててつと小走りで俺と自分の椅子を

引いて正面に座った。

自分の前に配膳された皿を心底幸せそうに眺めながら、にこにこしている。しかし見ているだけで口を付ける様子は無い。

「……食べないのか？」

「うん。ボクは固形物を消化出来ないんだ」

「じゃあなんで作らせたんだよ……」

「君が、ボクのために、料理を作ってくれる。それが重要なんだ」

「……？」

「奉仕の本質は思いやりの心だよ……仮にこのハンバーグが泥団子でも紙屑でも、君が心を込めて作ってくれたものならボクは喜ぶよ」

「それでいいのをお前……」

「子供の頃……確か四歳ぐらいかな。君が悪さをしてお婆さんにぶたれた時、君は泣いただろ？ それは痛みじゃなくて『大好きなお婆さんに叩かれたのが悲しくて泣いた』筈だ。思いとは時に物理を凌駕するのさ」

うつとりと指の先でハンバーグを撫でながらクシナダは言った。

……確かに、そんな記憶がある。突き放されるのは殴られるよりもずっと辛い。

俺は、祖母の事を思い出して少ししんみりしながらハンバーグを口に運ぼうとし

てーとある、違和感に気が付いた。

「……なんでお前、それ知ってるんだ。ステイルシアの事も、婆ちゃんの事も、誰にも言つてないんだけど」

「……………」

こいつに見せられた超常の力の数々に目を眩ませられて、言葉の端々から伺える確かな違和感に今まで気付かなかった。

『ステイルシアには作つてたよね』とか『あの時は確か四歳ぐらいかな』とかーまるでその場で見ていたような口振りなのだ。

「お前と知り合つたの、高校に入つてからだよな？ ステイルシアの事はまだしも、婆ちゃんの事まで知ってるのはおかしいだろ」

「……………」

「小学校に入る前の俺に同年代の友達なんて居なかつた。だから俺とお前は実は幼馴染でした、とかもあり得ない。なんで知ってるんだ？」

クシナダは、薄いピンク色の唇をうつつすら笑みの形にした。広角だけがつり上がり目は全く笑っていない、ひたすら歪いびつな笑み。

俺はその不気味さについて目を背けそうになつたが、拳を握り締めて何とか目を合わせ続ける。

「なぎぎゃ」

「クシーー」

”この話題は無かった事にしよう?”」

「……」

「おはよう、なぎぎゃ」

芳ばしいコーヒーの香りで俺は目を覚ました。

机の上では高そうなコーヒーマーカーが鈍い駆動音を立てて黒い液体をどぼどぼコップに注いでいる。コンセントには繋がっていない。どうやって動いているんだろ
う。

エリミネーターは寝台の上で横になっている。

俺はその光景になんとなく違和感を覚えた。

クシナダは椅子の上で膝を抱えて座り、ソファに横になる俺を見ていた。昨日の制服ではなくラフなシャツとズボンを身に纏っていて、爪先まで整えられた白く綺麗な足が裾から見える。

……元々中性的な顔立ちなのも相まって、男子用の制服を着ていないと一見女子のよ

うにしか見えない。

……もしかしたら。俺の脳裏にとある仮説がよぎった。『モンスターとのハーフだ』
なんて話と比べたら全然あり得る話だ。

「……おはよう」

「おはよう、なぎさ」

クシナダは膝を屈めて俺の顔を覗き込み、愛おしそうに目を細めた。

「あいしてる」

十四話『綺語』

「現実改変者との、戦い方？」

「うん。お父さんとの戦いに備えて、今の内に教えておこうと思ってるね」

机の向こう側に座ったクシナダが、コーヒーをすすりながらそう言った。

現実改編者……クシナダやクリシユタ・マナスは、俺がかつて戦ったミラージュ・カットアッパーと同じ種族だ。戦い方も似たような感じだろう。

しかし、最終的にカットアッパーを倒したのはゴブリンエースで俺は決着の瞬間を見ていない。

……今思えば、多分アレの能力……いや弱点は『自分の言葉だけでなく他人の言葉まで無差別に現実へと反映してしまうこと』だったな。クシナダも同じなのだろうか。

「クシナダ、ちよつと試してみたい？」

「え、なにを？」

「クシナダは逆立ちをした」

「……うん？ 急になに言ってるの？」

「えっ……あれ」

俺が試しにそう言ってみるーしかしクシナダは、ぼかんとした顔で椅子に腰掛けたまま特に変化は無い。

「……前に戦った現実改編者は、見聞きした言葉全てを具現化するっていう能力だったんだよ。自分にマイナスな方向にも現実を改編しちゃうから、それが弱点」

「ふーん……まあ、それは相手が二流の現実改編者だから通用した手だよ。当然、お父さんにも通じない」

「じゃあどうやって倒すんだよ……まさか無敵じゃあるまいし」

「いや、無敵だよ」

「え？」

「少なくとも、君だけじゃどう足掻いてもクリシユタ・マナスには勝てない。多少ねばる事は出来るだろうけど、指先一つ触れる事は出来ないよ」

「え、ええ……？」

大真面目な顔でそう言うクシナダに、俺は困惑するばかりだった。だつたらなんで俺をここに連れてきたんだ。『ボクと君なら必ず勝てるよ』とか抜かしてたのに。

「現実改編者の能力っていうのは、絵の具に例えると分かりやすいんだ……ちよつと見ててね」

クシナダが指を鳴らすと、何も無かった空間に一枚のキャンパスが出現した。学校に

あるような絵筆と絵の具セットも同時に現れる。

「絵の具……?」

「うん……まず、普通のモンスターを赤、人間を青の絵の具つてことにするよ」

クシナダは筆の先端に絵の具をつけて、白いキャンパスに赤と青を塗りたくった。

「そして……現実改編者はこれだ」

「白……?」

別の筆を取り出して、クシナダがそこに白い絵の具をつける。そしてそれをキャンパスに塗りたくった。さつきまでの赤と青は全て白い絵の具に塗りつぶされ、確認出来なくなる。……何を表しているんだ?

真つ白になったキャンパスを見ながら、俺は答え合わせを求めるようにクシナダに視線を送る。

「モンスターが赤、人間が青、白が現実改編者だよな……?」

「うん、でもこの白は普通の白じゃない……『チタニウムホワイト』つて絵の具でね。どんな色も塗り潰してしまう、謂わば最強の白なんだ」

「へー……そんな絵の具あるんだ」

「現実改編者もそれと同じ。全ての現実存在を塗りつぶす“最強の色”……攻撃を当てたとしても即座に事象や物質そのものを上書きされて、最悪“攻撃したこと”すら無

かった事にされてしまうんだ」

攻撃したという事象自体が、無かった事になる……？ そんなの勝ち目が無い。完全にチートだ。

「だけど、それは、普通の人間やモンスターが相手であれば」の話だ。同種の力を持つ者の攻撃なら通用する」

「……つまりお前の攻撃なら倒せるのか？」

「そう、だから君がお父さんの気を引いてる内に背後からボクが奇襲して一撃で仕留める……単純な作戦さ」

「俺の負担でかくね……？」

一人であの怪物の注意を引くなんて殆ど自殺行為だろう。

俺とエリミネーター二人がかりでも、数分足らずで行動不能にさせられたのだから。

「大丈夫、本当に一瞬だけで良いんだ……それに、」これを見せればお父さんは必ず動揺する」

クシナダは引き出しを開け、そこから何かを取り出す。そしてそれを俺の前に置いた。

それは淡いえんじ色の、古びた小さな巾着袋だった。表面に刺繍で何かしら文字が縫われているが、経年劣化が激しく文字の詳細は判別出来ない。なんだこれは。お守りか

?

「お父さんと相對したら、隙を見てこれを見せてくれ。君の仕事はそれだけ。そこからはボクがなんとかする」

「……分かった。頼んだぞ」

俺は椅子を立ち、トイレに向かおうとしてーふとソファに横になっているエリミネーターを見た。

その体を蝕んでいる白い羽の数は心なしか日に日に少なくなっているように見える。……治ってくれると良いのだが。

「……頑張ってください、エリミネーターさん」

返事は無い。ただのホームレス騎士のようだ……なんてふざけていられる状況じゃないな。

しかし少しだけ表情が穏やかになったように感じた。気のせいかもしれないが。

……そういえば、第一位は大丈夫なのだろうか。確かクシナダによつてこの部屋に転移する直前、槍で腹を貫かれていた気がする。

駆逐官側に回復系の能力者でも居れば良いのだが。

仮にも対異のトップがあんな細槍に貫かれた程度で死にはしなと思うが、少し心配だ。

それに……曲がりなりにも討伐貢献一位の俺が動けない事で発生する外の影響も気になる。

「……はあ。外に出られればな」

「出られるよ」

「え？」

ふと呟いた俺の独り言に、クシナダがそう返答した。それに呆けた声を出す。

今の状況から考えて、外は敵だらけの筈だ。駆逐官や神の存在証明、果てにはアイデア使いたち……出られるはずがない。

「無理だろ」

「いいや、ボクの力を使えば周りから君の姿を見えなくするぐらい造作もないよ。散歩ぐらいならふつーに出来るさ」

「……マジで？ 絶対に気付かれない？」

「うん。……誰にも存在を認めてもらえない透明人間の気持ちを味わえるぐらいには、気付かれないよ」

何気ない感じで言うクシナダに、思わず肩の力が抜けるような感覚に襲われた。

そういうことは早めに言って欲しかった。俺はもうこの部屋の中で二週間もずっと――

「……あれ？ 二週間？ ……あ、れ？」

「どうしたの？ お腹すいた？」

「ークシナダに文句を言おうとした瞬間に感じる、途方もない違和感。

俺は咄嗟にスマホを取り出し、日時を確認する。

日付は確かに、この部屋に来た日から二週間後を示していた。

だが、それがおかしいのだ。

俺はこの部屋に来てから、まだ一度しか眠っていないのに。

それにー！ たった今気が付く。俺は、昨日までの記憶しか思い出せない。

二週間前から今日に至るまでの記憶の間に、あまりに自然に十日以上の空白が横たわっているのだ。

思わずぞつとする。

この部屋には窓がなくて昼夜の変化が確認できないから気付けなかった？

いや流石におかしい、こんな違和感を俺が二週間も見逃す筈が……現実改編？ クリ

シユタ・マナスか？ いや、だが、まさか……

「おかしい、おかしい……なんで……」

「……んー？ ああ……また気付いちやっただ。さっすが、鋭い！」

うつむいて記憶を掘り起こす俺のすぐ後ろから、クシナダの声が聞こえた。

狼狽しながら振り向くと、そこには、心底楽しそうに笑うクシナダが立っている。

「でもね……渚には、ボクの綺麗な部分だけを見て欲しいんだ。壊死した肉を体から切り落とすみたくな！ 疑いも嫌悪も敵意も殺意も、渚がボクに感じた悪感情はぜんぶ忘れてほしいの！ それに今日は楽しくお出かけするんだから！」

「クシナダ……？ なに、言つて……」

クシナダの手が、優しく俺の目を覆い隠した。

「だからね。また”忘れて”」



「すげえ、ほんとに気付かれない……」

「誰かと目を合わせようとしても合わないの、君は変な感じでしょ」

スーパールのレジ前、無気力な顔の店員の前でひらひら手を振りながら俺はそう呟いた。その視線は俺の向こう側の壁をボーッと見ているだけで、全く目が合わない。

俺とクシナダは今、あの部屋から外に出ている。しかし周囲の人間が俺たちに気づく事はない。

クシナダ曰く『周囲の意識を改編する事で自分達の姿を認識できなくしている』らし

い。つくづく規格外だ。

外の様子はと言えば、二週間前とほとんど変わっていないかった。

対異との睨み合いが続いているためか、”神の存在証明”はまだ民間人の大規模な天使用化には踏み切っていないらしい。

「……対異と神の存在証明の全面戦争は、大体今から一週間後か」

「うん。対異は既にお父さんの居場所にアタリをつけてるんだ。ランカーがどれだけ出張ってくるか……あと、対異が保有してる”向こう側”の武器をどれだけ使うかも、勝敗を分けるだろうね」

”向こう側の武器?”

「異世界から捨てられてくるのがモンスターだけじゃないのは知ってるでしょ？ 呪いの武器とか、扱いをミスれば国一つ消し飛ぶようなヤバイ品々が対異の倉庫にはごろごろあるのさ」

「へっ、国……!?!」

「まあ、そのレベルになると国家間のパワーバランス関係で一国あたりの保有制限があるから、日本支部には数える程しか無いけどね。さっき言った”ぜんまい仕掛けの神”とかもその類いだ」

……ヤバいな対異。そんな兵器抱えてる組織のトップの首締め上げちゃったんだけ

ど俺。絶対殺されるじゃん。

なんとか平常心を保つためにレジの横にあるビニール袋をカシャカシャしてみる。しかし何も起こらなかった。つらい。

ひとりでにカシャカシャ言い出した袋を見て店員はビビっている。

……もしかしたら俺もエリミネーターと同じで処刑対象にでも指定されているのかもしれない。世界一嬉しくないお揃いだ。

しよけ友^{トモ}でも呼ぶべきか……駄目だテンパってまともな事を考えられない。

「……東弊さんになんて謝ろう」

「とーへーさん……？ ああ、あの金髪おばさんの事ね」

「いや……前も思ったけど、別にあの人おばさんって程じゃなくね？ 精々20前半ぐらいだろ」

「はっ……さあ、どーだか」

「少なくとも俺の熟女センサーには反応しないし」

「いやそれ君のさじ加減だよね？」

俺たちがそんな感じでどうでもいい会話をしていると、クシナダがふとしたように店の出入り口の方を見て『……あ』と言った。

俺も反射的にその視線を追ってー絶句する。

東弊は会計を済ませると、ふらふら店を出ていった。

「……俺たちも、帰るか」

「そうだね、帰ろっか」

十五話 『“異界生命体対策本部”』

「異世界の現実改編者……ねえ」

異界生命体対策本部。

そのオフィスの一室で、黄金の髪色をした妙齢の女——東弊陽葵がため息混じりにそう呟いた。

書類と空き缶が山積みになったデスクに頬杖を付いて気だるげに報告書へ目を通す彼女の前には、全身におびただしい数の新しい傷跡が刻まれた包帯まみれの壮年の男が立っている。

男は、荒れた息を整えながら口を開く。

「ああ。俺にあの組織への偵察を頼んでくれたアンタにや悪いが、気色わりい天使どもに袋叩きにされちまってな。見ての通り命からがら逃げ帰ってきたってわけだ……分かったのは、奴らの親玉が使う能力だけだな」

男の名は「反復眼のアルバ」。

討伐貢献日本第八位の駆逐官……しかし、その戦力評価は龍人と同格のS+。

単純な戦闘力だけで言えば龍人にさえ追隨する彼をたかが偵察に起用した過去の自

分の判断を、東弊は今になって英断だったと振り返る。

敵の戦力を過小評価していた。送ったのが並の駆逐官であれば、生還すら不可能だっただろう。

東弊は、苦々しい表情で報告書とアルバを交互に見る。

「……それでえ？ その親玉とやらの詳しい能力は？」

「報告書に書いてあるだろうが」

「だから……」観測上限界無しの現実改編 っ。そんなのめちやくちやくじゃない」

凝り固まった眉間を揉みほぐしながら東弊が言った。

アルバは、デスクの端に山積みされているエナジードリンクの空き缶を横目で見ながら『寝不足は美容の敵だぜ？』と苦笑いする。

「まあ、実際めちやくちやくだったわな。攻撃通らねえわ重力反転するわ隕石降らせるわ、挙げ句の果てにはそれによる被害を全て”無かった事”にするわ……当たり前のように空だって飛ぶ。ありやいくら俺でも一人じゃ無理だわな」

「……まるで、無敵ね。あの人が言ってたのと違う……そうなると神の存在証明への襲撃も延期すべきかしら。けどこれ以上天使を増やされたら手を付けられなくなるし、何より民間人への被害が……はあ」

今時SF作家だって自重するような荒唐無稽な能力の羅列。そしてそれが実際に、し

かも敵として存在しているという事実には、東弊はより一層深く溜め息を吐いた。

しかしそんな東弊とは対照的に、実際にその怪物と相対したアルバは楽天的な顔でにやにやと笑っている。

「そう！ 確かに一見した所アレは、無敵だ……自分でもそう言つてやがったしたな」

「一見した所？ なんだか攻略法を見つけたような口振りね」

「俺がただ逃げ帰つて来るような男に見えるかあ？ ……まあ、そうさな。」 攻略法” っって言えるほど確かでもねえが——」

アルバは真面目な表情になり、ピンっと人差し指を立てた。

「——正直な話、単体としては例の大賢者や南極で殺した龍王の方がずっと手強いだらうな」

「……説明してもらえん？」

「おうよ。まずヤツの現実改変とやらには、二つだけ、分かりやすい欠点が存在する」

デスクに片肘を着き体重を預けながら、アルバは顔をずいっと東弊へと近付ける。

東弊はその髭面と酒臭い息に顔をしかめながらも、話に耳を傾けた。

「まず一つ。ヤツの能力は自分自身の能力には作用できねえ。つまり『現実改編能力で自分の現実改編能力の範囲を広げる』とかはできねえワケだ。台風の目は無風みたいなの

カンジ」

「そりや、それが出来るなら人を襲って天使を増やすなんて回りくどい真似はしてないわよね。それで二つ目は？」

「ああ、どちらかと言えば二つ目の弱点がメインだ……ヤツの現実改変、上限は存在しねえが有効範囲は存在するんだ。範囲と言つてもメートルとかの話じゃねえぞ。”自分が認識している物体や事象”にしか能力を発動できねえって話だ。背中から俺の投げナイフが刺さったから間違いいねえ。すぐ”無かったこと”にされちまったけど」

「……………」

「つまり……ヤツの意識の外から不意打ちで”コイツ”を撃ち込めば一発で無力化できる。って、まあその不意打ちが難しいんだがな。奴も自分の弱点をカバーするためか、常に周囲を天使どもで固めてやがる」

アルバはこそこそと懐をまさぐり、細長い何かを取り出してデスクの上に置いた。
それは手のひらサイズの注射器、中には半透明の液体が揺れている。

「……………」

「催眠系のアイデア使いから買った麻酔薬を仕組んだ注射器だよ。たった一滴で山みてえなドラゴンもぐつつすりなクスリを、ワンプッシュで10mも流し込んだりやうやべえやつな。こいつで、あの現実改変者には攻撃されたことすら気づかずに眠ってもらう」

「……別に眠らせなくても、普通に遠くからスナイパーライフルでヘッドショット決めるとかじゃダメなの？」

「駄目だな。当てるから一瞬でも意識が残っていれば、無かったこと”にされるし……そもそも俺たちの使う銃器に至っては何かしら対策されてんのか、奴の半径数十キロに入った時点で必ず原因不明の不具合を起こしやがる。背後から暗殺者よろしく睡眠薬注入するしかねえ」

「あら、残念ね……銃を使うなら最近FPSのゲームで慣らしてる私のエイムが火を吹くかと思っただけけれど」

「ははは、冗談キツいぜ」

「冗談……？ なにが？」

「えっ。……はははは。と、とにかく。今回の戦いは、如何にして奴らの親玉……クリシュタ・マナスから天使どもをひっぺがすかの勝負だ。少なくとも上位ランカーには全員出陣してもらいてえ」

残業のし過ぎでとうとう頭がおかしくなったか。東弊を哀れそうに見ながら、アルバはそう切り出す。

「アンタは司令塔として、他は殲滅力の高い塩漬けの魔人と第二位を中心に組み立てるのが良い。あと、注射を打ち込むのは近接が得意な奴……本当なら“龍人”がベストな

んだがーアイツ、裏切ったんだろー?」

アルバの言葉に、東弊はあからさまに眉をひそめた。

龍人ーミナト ナギサの裏切り行為を彼女は外に漏らしていないからだ。

イデア使いたちを使って彼を追い詰めたあの日も『任務は裏切り者の捕縛』としか伝えていなかったし、それさえ口外禁止の契約を結んだ。

「……なぜ、あなたがそれを知っているのかしら?」

「二週間前にイデア使いの奴が”やたら強い肌”に黒い鱗が浮き出た裏切り者”と戦ったらしくてよ。そして調べてみたら丁度その日から”龍人”の活動も途絶えてる。ほぼ確定だろ」

確信を孕んだアルバの声に東弊は言い訳の無駄を悟り、デスクにうつ伏せて『はあああああ……』と今日一番の溜め息を吐いた。

「誓約書まで書かせて口止めしたのに……これだから降って沸いた力に溺れてる馬鹿どもは。約束の一つもろくに守れないのかしら……」

「タバコ一本でゲロつてくれたぜ」

「やっぱあいつらゴミね」

東弊はデスクに突っ伏したまま、上目使いでアルバを見上げる。

「……ねえ、アルバさん? あのね、とっても優秀なあなたに、ひまりんから一つだけお

願いがあるんだけど」

「ああん？」

東弊から発せられた、妙に鼻にかかった猫なで声。それにアルバは怪訝そうに顔をしかめる。

水商売の女が太い客に媚びる時のような、独特の胡散臭さを感じ取ったからだ。無駄に綺麗な顔立ちのせいになっている。

「なんだよいきなり気持ちわりいな……イタイから良い年こいて自分の事ひまりんとか言うんじゃないよ。まあ良いや。一応言ってみろ」

「イタツ……!? ……こほん、ええつとね。龍人の裏切りの件、上層部には黙ってて欲しいの」

思った通りの無茶ぶり。アルバは呆れたように舌打ちする。

「無理だね。上のジジイどもに逆らったらどうなるか知ってるだろ。前の第一位……アントアの前任者がされた仕打ちを忘れたか。そんな事したら龍人は元より俺らまで消されるぞ」

「おねがい。龍人は……個人的な古い約束を守るために必要なの」

「約束う……？ あのなあ。なんでアントアがそこまで龍人に肩入れしてるのかは知らねえが、中間管理職とは言え一組織のトップがそういうのは良くないぜ」

「……………」

「ああくそ、怖い顔すんなよひまりん、可愛い顔が台無しだぜ。しょうがねえだろ……俺だつて命が惜しいんだ」

鋭い視線を自分にぶつけてくる東弊、アルバは気まずそうな顔になって『分かってくれ』と言う。

東弊は黙っていたが、しばらくするときつきよりも更に大きい溜め息を吐いた。

「そうね……分かった。確かに上層部は怖いものね。仕方がないわ」

「お、おお……分かってくれたか」

強情な彼女には似合わず、拍子抜けなぐらい素直な返答。

アルバはほつと胸を撫で下ろした。東弊に『それじゃな』と言って出口の扉の方へ歩いていく。

そのまま、ドアノブに手をかけようとしてー

「ーじゃあ、上層部の連中と私。どっちの方が怖いかしら？」

アルバが瞬きをした刹那ー先程までデスクチェアに腰掛けていたはずの東弊が、扉の前に立ち塞がるようにして、指で形作ったピストルをアルバに突きつけた状態で立っていた。

アルバの“眼”を持ってしても捉えられぬ動き、頬に汗が伝う。

「……おいおいおい。ひまりんよお……そういうのは、マジで勘弁してくれや」

「今私に殺されるか、いつか私と一緒に上層部に消されるか、選びなさい。前者は確実で、後者は高確率よ」

アルバは、自分の眉間に突きつけられた細い指を忌々しそうに睨んだ。白魚のようにしなやかな指からまるで大砲の砲口が如き危険性を感じる。

長い金の睫毛に縁取られたサファイアの瞳が、アルバを射抜くように捉えた。

見た目だけなら娘でも不思議ではない年齢の女に自分が気圧されている事実には、アルバは齒噛みする。

「……アンタの一番おつかねえ所は、心のスイッチの切り替えが極端かつシームレスな所だよ。くたびれたOLと話してたつもりが、いつの間にかちゃんど人殺しの目になってる。一分前まで仲間だった奴の事でも笑って殺せるタイプだろ、ひまりん」

「そんなことないよ。あなたが死んだら悲しくて泣いちゃうな私」

「ハッ、うそつけえ……」

濁いた笑い声を上げてから、アルバは渋々といった様子で『……分かったよ』と言った。東弊は指をアルバの額から離す。

「はあ……じゃあ、もう帰って良いよな？」

「ええ、どうぞ。今後ともよろしくね」

アルバは今度こそドアを明け、東弊のオフィスから一方踏み出した。

「あ、そうだ。ねえアルバ」

「んだよ……まだなんかあるのか？」

「あなたのポケットに入ってたボイスレコーダー、没収しといたから」

「っ……!?!」

咄嗟に東弊の方へと振り向く。その手にはアルバが先程までポケットに忍ばせていた筈のペン型ボイスレコーダーが握られていた。

東弊がそのグリッブ部分を三十度ほど捻ると、先程の会話の音声記録が流れ出す。アルバの顔がどんとと青ざめていく。

「……はっ、ははは。念のためだよ。念のため。別にあんたを裏切ろうとしたわけじゃねえ」

「ええ。私もあなたを信用しているけど、念のため没収したの」

「ははははは……」

「いふいふいふっ」

ほちゃん。

東弊はボイスレコーダーを熱帯魚の水槽に落とした。

水底へ沈んでいくそれが下部のガラスに接触する音を聞く前に、アルバは足早に扉から

出た。

締め切った扉に背中を預け、脱力する。

「……………えーよあの女」



「……………どこ行つたのかしら、龍人」

アルバが居なくなり、静かになつたオフィス。東弊は栄養ドリンクに挿したストローをくるくる回しながらそう呟いた。

龍人の離反の原因は、恐らく自分がエリミネーターを処分しようとしたからだろう。エリミネーターと龍人の間に緩やかな師弟関係が形成されているのは知っていた。しかしそれが対異に反逆してまで突き通されるまでに強固な物だとは思っていなかった。

しかし、対異の理念は“異界生命体の完全封殺”だ。それは東弊にとつても同じ。理性を保っているならこちらにもたらす利益も鑑みて保護観察で済むが、獣同然と化したあのエリミネーターは確実に処分対象。

「あの子も、頑固ね……………」

ミナト ナギサは正義の味方ではない。見ず知らずの人間のために命を投げ出すほ

ど狂ってはいない。

しかし、ある程度仲を深めた者の為なら迷い無く命を掛ける人物でもある。エリミネーターはその『ある程度』に入っていたのだろう。

「……誰に、似たのかな」

椅子の背もたれに体を預けて、東弊はそう呟いた。

そしてまた別の言葉を口の中で小さく紡ぐ。まるで尊い誓句のように丁寧に、それについて懺悔の言葉のように弱々しく。

「何はともあれ、異界生命体は皆殺しよ」

異界生命体の完全封殺。

対異の目的と共通するその呟きは、静謐な空間に僅かに響いた。

十六話『楽園の天使たち』

室内を充滿するブラックコーヒーの香りで、俺は目を覚ました。見慣れた木目の天井だ。

クシナダの創造した小部屋には窓も出入り口も照明も無いが、なぜか程よい明るさと気温が維持されている。謎だ。

ベッドから身をお越し、横を見るとそこにはダイニングチェアに背中を預けたまま寝息を立てるクシナダの姿があった。

「こいつも寝るんだな……」

あの凄まじい能力を持っていても、半分は人間。睡眠は必要らしい。自分に対して『寝なくても問題ない』とかの現実改変を行うことは無理なんだろうか。無理なんだろうな。寝てるんだから。

「んう……」

クシナダが、小さく身じろぎした。

俺はふと、こいつと出会った時の事を思い出そうとする。

あれは確か一年前ぐらいの事――

「……あれ」

いくら記憶を掘り起こしても、こいつと初対面の記憶が見つからない。

俺とバンダイとクシナダ、気が付けば三人で笑っていてそれが当然だった。喧嘩した記憶なんかも不思議なぐらい全く無い。本当に、楽しい記憶だけ。

「スマホ認知症つてやつかな……はは、ステイルシアのこと馬鹿にできねえ」

側頭部をとんとん叩きながら俺は苦笑する。明日は神の存在証明との戦いだつていうのに、関係ない事ばかり考えてる。こんなんじや駄目だ。

「どうなることやら……」

そう、明日だ。

明日、俺とクシナダは対異と神の存在証明との戦争に割り込んで、親玉のクリシュタ・マナスを殺さなければならぬ。

対異が敗北すれば、俺は駆逐官たちの死体……つまり強力な“天使”の素体を大量に手に入れることになる。そうなれば誰もあの怪物を止められなくなるだろう。

「……奴を倒したとしても、俺は対異に処刑されちまうのかな」

駆逐官という強力な個が集まって出来ている対異は、その性質上個人の離反や裏切りによつて揺らぎやすい。

だから、それを抑止するための“見せしめ”は恐ろしく公平で残酷なのだ。

たとえ討伐貢献トップであろうと、第一位に反逆した時点で俺は敵対者。今頃「脅威ランクS＋：龍人」とか流布されているかもしれない。

勝つても負けてもお先真つ暗だ、ちくしよう。

「……死にたくねえ」

俗物的で当たり前な事を呟きながら、俺は指で目頭をほぐす。

……クシナダに頼めば逃がしてくれるだろうか。こいつなら第二位にも勝てるかもしれないし。

もし逃げられたら、アフリカの方とか発展途上国でエリミネーターとでタピオカ屋でもやってみるか。それはそれで楽しそうだ。

ステイルシアの眼のお陰で言葉の壁は無いようなものだし。

「ふあ……あれなぎさ、早起きだねえ」

楽しく現実逃避している俺の後ろから、あくび混じりにそんな声が聞こえた。クシナダが起きたようだ。

「ああ、なんか目が覚めてさ」

「明日だもんね。緊張してるの?」

「それもある」

クシナダは、指を弾いてコーヒーマーカーを起動させた。

どぼどぼマグカップを満たしていく黒い液体を眺めながら、俺は口を開く。

「……なあクシナダ」

「なに？」

「もしクリシユタを倒せたら……その後は、どうする？」

俺の問いに、クシナダは眉一つ動かさずに『さあ？』と言った。

「……いや、俺たちつてこの国の政府に喧嘩売ったみたいなものだし。もう普通に暮らせない可能性もあるだろ」

「そうだね。でも、先の事なんて気にしなくていいよ」

「なんでだよ」

俺の質問に、酷く歪んだ笑みを浮かべてクシナダは口を開いた。

「明日、全部終わるからさ」

そう呟くクシナダの黄金の瞳の奥、そこに一瞬だけ、深い深い闇が見えた気がした。背筋に正体不明の悪寒が走るのが分かった。……全部、終わる？

「……どういことだ？」

「ふふ、なーんちゃって！ さっ、明日に備えて今日は休もー！」

俺の不安を吹き飛ばすように、クシナダは明るく笑った。

カランコロン、溶け始めた氷がマグカップの中で鳴る。……まあ、いいか。

俺はソファの背にもたれ掛かり、その体勢のままクシナダに顔を向けた。

「なあクシナダ、コーヒー出してくれない？」

「あれ、珍しいね渚がコーヒーなんて。いつもコーラなのに」

「お前がいつも美味そうに飲んでるから、試してみたくなってるさ」

「そっか。いいよ、何にする？ エスプレッソ、アメリカン、ブルーマウンテン……ドリ
ンクバーククシナダはよりどりみどりだよ」

クシナダは、掌の上にマグカップを出現させながらそう聞いてきた。

「砂糖どばどばの、コーヒーっぽくないやつ出してくれ。カフェインと糖分の塊みたい
なの」

「それエナジードリンクで良くないかな？」



翌日の昼下がりに、クリシユタとの決戦の日。俺とクシナダは部屋の中心で向かい会っ
ていた。

俺の手には、えんじ色の小さな巾着袋が握られている。いつかクシナダが言っていた
”御守り”だ。

「……これを見せれば、クリシユタは動揺して動きを止めるんだっけか？」

「うん、絶対にね。お父さんはボクと違って優しい人だから」

「それはよく分かんないけど……なら、大丈夫だ」

クリシユタ・マナスに普通の攻撃は通用しないらしい。俺が気を引いて同じ現実改変者のクシナダが背後から確実に命を刈り取る。

問題はヤツを守る天使たちと対異だ。前者はともかく本来仲間の後者にまで攻撃されたらヤバイ。上位ランカーたちも集まっているだろうし。

「……そろそろ、かな」

南西の方角を見据えながら、遠くを見るような目でクシナダがそう呟いた。俺が見てもそこには壁しか無いが、クシナダにはその向こう側が見えているのだろうか。

「何がだ？」

「今から十六分前に、対異がお父さんに総攻撃を仕掛けたみたいだ。思った通り天使たちを使って対処してる……そろそろ、ボクたちも参戦しよう」

クシナダは俺の肩に手を置いて、しめやかに目を閉じた。

「今から、ボクの力で戦場に転移するよ」

「……分かった」

「前外出した時みたいに君を”認識阻害”させてはおくけど、お父さんには通用しない

し一度大きく動けば駆逐官や天使たちにも気付かれてしまう。とにかく慎重にね」
「分かってる」

「よし、じゃあ行こうか。向こうに行つてからは別行動だからね。ボクはお父さんの周りに潜伏して君を待つてるよ。計画通り、周りの天使どもを引き剥がしてからそのお守りをお父さんに見せて」

目の前の景色が、ポリゴンのような虹色の粒子になつて分解されていく。転移が始まつたのだろう。全身を奇妙な浮遊感が支配する。

俺はその眩しさに目を閉じて、浮遊感に身を任せた――

「……………」

――次に目を開けると、そこは既に血肉舞い踊る戦場だった。

頭上に光輪を浮かべた顔の無い天使の軍勢と駆逐官たちが、荒野のような場所でぶつかり合っている。

戦況は今の所互角のように見える。しかし天使は怪物で駆逐官たちは人間だ。その多くは表情に疲労が滲んでいる。

……………この拮抗はそう長く続かない。短期決戦だ。

「……………あつちか」

天使の密度が高い方向に向かえば、自ずとヤツに辿り着くだろう。俺は気付かれない

よう静かに進み始めた。

足元に転がる駆逐官の死体は、口と目と耳……いや、全身の穴という穴からびつしりと黒い羽根が生えてきている。思わず顔をしかめた。あまりにもおぞましい。

「……………」

ふと空を見上げると、見渡す限りの空域を埋め尽くす数の天使たちが渦を描くように旋回して飛行している。

そしてその渦の中心には、巨大な黒い太陽のような物体が浮かんでいた。いつかバンダイを助けた時熾天使に撃たれた時空魔法を巨大にしたような暗黒の球体。

やけに薄暗いと思ったら、あれに日光を遮られていたらしい。

……本当に勝てるのか、これ。

クリシユタを倒したら天使たちも活動を止めるとかじやなきや厳しい。流石にあの数に倒しきれない。

「……………あそこか」

それからしばらく歩を進めて、俺はそう呟いた。

三百メートル程先、明らかに天使の数が桁違いな一帯を見つけたのだ。

俺は右手の“お守り”を強く握り締め、駆け足でそこへ向かう。走りながら全身に爛れ龍の鱗も展開し、数秒後、俺は龍人の姿で全力疾走していた。

傷付いた駆逐官たちは一斉に俺の方へと振り向き、ぎよつとした表情になった。

「龍人……っ!？」

第一位に光の剣を振り下ろそうとしていた天使の首を背後から握り潰し、ひとまず敵ではないという事をアピールしながら俺は駆逐官たちの前に躍り出た。

後ろで膝を着いた第一位は、目を見開いて俺を見ている。

……そして。

「おや……?　なぜ天使化していないのですか。龍人」

「……クリシュタ・マナス」

「名前を覚えてくれていたんですね。やはり私たちは上手くやれそうです」

——法衣を思わせる独特な白コートを身に纏ったその男は、俺の姿を見るなり笑みを深めてそう言った。その周囲にはクリシュタを守るように天使たちが従えている。

……奴から天使を引き剥がさなければ、クシナダが攻撃できないな。まずはそこからだ。

「龍人、そして対異の皆さん……よく聞いてください。今この世界は、かつてない窮地に立たされています」

俺が動こうとした瞬間——クリシュタは、俺たち全員に語りかけるようにそう言った。

背後の駆逐官たちはそれに困惑した様子だ。こんな地獄のような戦場と反して穏やかなクリシユタの声は、そこまで大きな音量でもないのにくつきりと俺の耳に響く。

流石新興宗教の教祖だけはあつた。現実改変能力を抜きにしても、人に聞かせる力を持つた声だつた。

「今から二ヶ月程前、大気圏から凄まじい量の魔力が観測されました」

空を仰ぎ、クリシユタは言葉が続ける。

「観測された魔力量は、上位モンスター襲来時のおよそ七倍強。……あの天災の七倍です。次あちらの世界から何が送られてくるのか、私にも検討が付きません」

「……」

「一刻も速く戦力を整えなければ、この世界は一方的に喰らわれるでしょう。……人口の三割で良いのです。たったそれだけを天使あつちに変えることができれば、私は人類を守れるのです」

クリシユタの言葉が終わり、暫しの間場を沈黙が支配した。

……合理性を突き詰めればクリシユタの理屈は分からなくもない。こいつの戦力は現時点でも対異を軽く凌駕している。

確かにこいつなら、手段を選ばなければモンスターを全て駆逐することも可能かもしれないのだ。

しかしー

「ー頭おかしいんじゃないの?」

その時、後ろから怒りの滲んだ声が聞こえた。

振り向くとそこには、不快感を露あらわにした顔で立ち上がる第一位の姿があった。

青い瞳がクリシユタを睨み付けている。

「……頭がおかしい? 私が? このプランのどこが? 具体的に言ってくれないと改善のしようがありませんよ、対異のトップ。作戦の細部はこれからお互いに話し合って詰めていきましょう。天使化させるのは死刑囚や凶悪犯罪者を優先にしますか? それともー」

「だーかーらあ……いや、違うわね。根本的にズレてる」

第一位は、俺の横を通り過ぎてクリシユタの前まで足を運んだ。

「あなたはさつきから人類を守るだの世界を救うだの、大層なご弁舌を垂れ流しているけれど……人口の三割を” たったそれだけ” なんて言うようなタガの外れた怪物を、私は信用しない」

「……私はそんなつもりでは」

「いいえ。あなた、博愛主義者を気取ってるようだけど本当はもう人間に興味なんて無いんでしょ? きっと大切な人を失って、自分が愛していたのは人類ではなくその人

「ただだったって気づいたんでしよう？」

「今度はずつすら笑みを浮かべながら、第一位がクリシユタにささや囁く。

クリシユタは、気圧されたように一歩後ろに下がった。

「君に、私の何が分かると言うのですか？」

「別にいい？ あなたみたいなの人外の思考回路なんて私には到底理解できないけど。あれ、もしかして凶星だったあ？ ごつめーん！」

「あえて精神を逆撫でするように、第一位は間伸びした猫なで声でクリシユタを挑発する。」

「私の過去を調べたんですか……対異のトップにはストーカー趣味が？」

「あはっ、効いてる効いてる。あなたってば人間じゃなくさせて、人間みたいにナヨナヨ感傷引きずってて本当に気持ち悪いわねえ……」

「……………」

「死んだ奥さんもあの世で悲しんでるんじゃない？ 『私の夫はとんだ半端者だ』ってね、だってあなたのせいで妻も子供もー」

「黙れ」

そこで初めてクリシユタが声を荒げた。

ぴたりと第一位の言葉が止まる。口は動いているが声は発せていない、現実改変で話すことが出来なくされのだろう。

クリシユタはこちらを睨み付けながら、その手のひらを第一位の顔に向けた。

「……もういい、今から君の事を塵ちりに還して殺します。」

「……………」

「つ、くそ……東弊さん！」

クリシユタの掌に黒い粒子が発生し、それは第一位の腕にわさわさと這い進む。

第一位は不快そうに眉をひそめて腕からそれを振り払おうとするが、細かい粒子の一つ一つが磁石のようにくっついて離れない。

幾つか地面にこぼれ落ちた粒子の一つは、触れた小石を一瞬にして灰に変えた。

第一位もやがてそうなるだろう。

「存外魔力量が多いようですね。完全に分解するには少し時間がかかりそうです」

黒い粒子に侵食されて流血する自らの腕をおさえながら、第一位はまっすぐクリシユタを見据える。

そして、声の出ない口を何度か開閉させた。その唇の動きが示す言葉は――

【やりなさい、アルバ】

「ナイス煽りだぜ、第一位。」

「ぐ、っ……………!?!」

「はい睡眠剤注入つと……………こいつ頭に血イ昇つちまつて、こんな粗末な光学迷彩も見抜けねえぐらい天使の制御甘くなつてらあ」

ークリシユタのすぐ後ろから、聞き覚えのない男の声が聞こえた。次の瞬間何もない空間からばちばちと火花を散らしながら中年の男が現れる。

クリシユタが口端から泡を吐きながら地面に膝をついた。微睡むように瞼が落ちかけており、ほとんど意識を失っているように見える。

「……………はっ?」

「けほっけほっ……………あ、喋れるようになった」

咳払いしながら第一位はそう言った。腕に食らいついていた粒子は消え、破れた服から白い肩が露出しているのが見える。

クリシユタは大きくくふらついた後、どきりと地面に倒れこんだ。

「……………終わった?」

クシナダに渡された”御守り”を握りしめながら、俺はそう呟いた。

十七話 『理想力学と次元式救世論』

地面に倒れたクリシユタに向けて、第一位は懐から取り出した拳銃の弾丸を四発打ち込んだ。

頭部に全弾命中した鉛玉、しかしクリシユタはそのまま指一つ動かない。

「……はあ、終わった。今日は久しぶりに気持ちよく眠れそうね」

第一位が銃を下げ、ぐーっと背筋を伸ばしながらクリシユタの死体を薄目で見る。

割れた頭蓋から溢れる脳漿と血が、その致命傷を物語っていた。

……本当に、死んでる。

クシナダに『最強の現実改編者』とか散々聞かされていただけに、拍子抜けだった。

「アルバ、そいつの首を切り落として頭部を可能な限り細かく裁断しなさい。それから薬品漬けにして移送するから」

「へいへい……人使いが荒いねえ東弊さんよ」

アルバと呼ばれた男が第一位の命令で、大振りのナイフを使いクリシユタの首を切断した。

それを見届けた第一位は、無表情で俺の方へと振り向く。

「っ」

思わずびくつとしてしまう。……選択肢としては、すぐに謝罪して投降するか、今すぐ逃げるかのどっちかだ。裏切り者である俺に対しての処刑が実行される前に。

あの日撃ち込まれたアイデアの嵐を思い出しゾツとする。あんなの二度と食らいたくない。

「……あの、と、東弊さん、マジで、そのっ、ほんと、すいません！ あれは若気の至りっていうか、屋上の時首絞めてごめんなさいっていうか、槍刺さってたお腹だいじょうぶですかっていうか……えと、その、エリミネーターさんは渡せませんが、実はですね、俺の友達のお陰で、天使化も治りかけてて！」

「……うーん？」

必死だからか、かつて無い程によく回る俺の舌。第一位は腰に手を当てて微妙な顔をしている。

こ、これはもしかして迷ってくれてるんじゃないだろうか。もう一押しだ……！

「いやいやいや、俺だって何らかの罰は受けるつもりですよ!! しばらく、いやずつとタダ働きとかしますし、エリミネーターさんが治ったら二人で馬車馬のように働いてモンスタ―狩りまくりますから!」

なので命だけは……!」

「……おかしいわねえ? 龍人」

「な、なにが、でしょうか……？」

「空を見てみなさい」

「へ？」

予想外な第一位の言葉に、俺は呆けた声を出してしまった。

そしてそのまま、首をもたげて空を見上げー思わず、言葉を失った。

天に鎮座する漆黒の巨球と、それを取り囲むように飛行する天使たちー先程までと全く同じ光景。

クリシユタは殺したはずなのに、黒球の様子も天使たちの活動にも全く変化がない。

……いや、違う所は一つだけあった。

漆黒の球体から、溶けかけのチョコアイスのように、ドロリとした液体状の何かがこぼれ落ちてきているのだ。

空からこぼれてきて水溜まりのように地面に広がった黒い液体は、ぐつぐつと煮え立ったみたく気泡を作っている。

なんだこれは……？ 第一位も怪訝な顔でそれを睨んでいる。

「ー私が勇者に敗北してこの世界に送られたのは、今から百年ほど前の事です」

「っ……!?!」

「……どこからか聞こえてきたその声は、間違いなくたつた今死んだ筈のクリシユタの物だった。

「当時の日本では、肺結核という恐ろしい疫病が蔓延していましたが……幸いにも、私は自らの持つ権能によりそれを治し、苦しむ人々を救うことが出来ました。涙を流し喜ぶ彼らの姿が、私は本当に、本当に、嬉しかった……」

黒い水溜まりから、人間の手が突き出てきた。

そしてそれは、沼から這い出る人間がそうするように肘間接を曲げて指先に力を籠めていたように見えた。

「……やはり、そう簡単には終わらないか。」

俺はいつでも”精霊王の義眼”を発動できるように身構える。

「彼らからすれば、私はまるで奇跡の担い手になにでも見えたのでしよう。色々な地域で怪我や障害、病やまいを癒して回る内……いつしか私の背には、私を崇敬してくださる人々が何千何万と付き従っていました。これが”神の存在証明”の成り立ちです」

「……っ」

第一位が無言で放った弾丸は、這い出てくる手に着弾する寸前で見えない壁に阻まれた。

「しかし、私はある時。自分の現実改編が死を覆せないことに気が付いてしまったので。それも、大切な家族の死によって」

数秒後——そこには無傷で佇む、クリシユタ・マナスの姿があった。皺一つない白コートを身に纏い、空に浮かぶ黒い球体と天使たちを見上げている。

さつき殺されたクリシユタの死体はそのままだ。生き返ったと言うよりは『二人目があらわれた』とでも行つた方がしっくり来る。

「……私が数十年かけて造り上げたあの球体は、時空の壁を破壊します。今はまだ私自身を過去から連れてくる程度しか出来ませんが……ゆくゆくは過去未来と現在を平行に繋げ——私は、全ての死者をあゝの世から取り戻すのです。過去の偉人たち、あるいは未来の賢者たち……あるいは、今は亡き妻子を」

『これは天国を引きずり降ろす行為と言つても過言では無い……！ 時間遡行の自由化は局所的な死への勝利に等しいのですから！』とクリシユタは昂つた様子で叫んだ。

「はあ……新興宗教とか胡散臭くて嫌いなよね……で、どうしてあそこでくたばつてる筈のあなたが復活してるわけ？ 死は覆せないんでしょう？」

「今ここに居る私は、私の死をトリガーとして過去から召喚された『殺される1日前の私』です。もしまた私を殺せても次は『殺される2日前の私』があなたたちの前に立ち塞がるでしょう」

あまりに荒唐無稽な能力。俺を含め、駆逐官たちが絶句していた。

奴の能力は強力無比な現実改変と天使の大群——それだけでもヤバいののに、加えて更に実質上の”無限コンテナニュー”だ。

……だけど、あのクシナダがこれを想定していないとは考えにくい。奴の無限コンテナニューごと殺す手段がきつとある筈。

だが、クシナダの存在を知らない他の駆逐官たちは、その言葉で半ば戦意を喪失していた。

「なるほど……じゃあ簡単な話——この世界に来てからの残機ざんき百年分、殺し尽くしてやれば良いわけね」

——しかし第一位だけは、いつもの歪いびつな笑みを浮かべたままそう言い放った。

「……ああ、ようやく分かりました。君は馬鹿なのです。話が通じないはずですよ。もう終わりにしましょうか」

クリシユタは呆れ顔で溜め息を吐く。そして第一位を指差した。あれほど近くで護衛していた天使たちがクリシユタの前方から焦ったように退避していく。

——なにか、来る。

俺は咄嗟にクリシユタと第一位の射線上に割り込み、全力で龍腕のバリケードを展開した。

組み上がっていく黒い防壁の隙間から見えるクリシユタの口元が、静かに開閉するの
が見える。

「ー現実改変・」空^{エアロ}」

「ツツツ……!!?」

そよ風が吹いたーそう思った瞬間、何重にも展開していた龍腕のバリケードの大半
が跡形も無く消し飛んだ。

「龍人を守れエエエツ!!! あいつが死んだら終わりだ……い」「くそ、くそがつ!」「え、
手、消え。」

クリシユタと俺の距離は50メートル程、その直線上にある岩石や植物、俺たちを庇
おうと立ち塞がった駆逐官ーいや、全ての物体が消え去っている。

何が、どうなつて。

「この現実改変^{エアロ}空^{エアロ}」は、発動した直線100メートル圏内の物体を全て、強制的に空
気へと置き換える^{エアロ}技です。立ち塞がっても無駄なのですが……残念です、龍人。さ
ようなら」

龍腕の防壁、その最後の一枚がサラサラと崩れ去った。

そして、現実改変による不可視の暴威は俺を飲み込みー

「……っ、プリズム・バリアアアアアッ!!」

「ッ、ほう……! まさか、その眼は精霊王の……! やはり君は惜しい! 時空の壁を破壊したら真つ先に過去から君を連れてくることにしましょう……!」

ーすんでの所で、プリズム・バリア光学防壁の展開が間に合った。

流星はスティルシアの魔法と言うべきか、奴の現実改変に耐えている。しかしながら、それでも少しずつビキビキとひび割れていくのが見える。

……これじゃ、ジリ貧だ。

しかしその時、額に汗を伝わせる俺の肩に、後ろから第一位が手を置いてきた。

「東弊さん……っ?」

「……龍人。今からスリーカウントするから、私がゼロを言うと同時に全力で前方に攻撃して」

「攻撃……? でも、バリアを解いたらー」

「良いから」

『私を信じて』と言う風にじいっと俺を見てくる第一位。

……正直、俺はこの人の事が好きではない。エリミネーターのことを殺そうとしたし、なんか胡散臭いし、どちらかと言えば嫌いと言っても良い。

しかし先程、あの絶望的な状況の中クリシュタに切った啖たんか呵かーあれで分かった。こ

の人は本気で、命をかけて人類を守ろうとしているのだと。

好き嫌いは置いて、信用に足る人物ではあると、俺はそう思った。

「……分かりました。マジで頼みますよ東弊さん」

「任せときなさい。……よし、奴との距離は大体48メートル……ギリギリね」

「ぎ、ギリギリ……？　そ、それ本当に大丈夫ー」

「3」

「ああくそ……！」

第一位の言葉を信じ、半ばヤケクソになりながら全力でプリズム・バリアを維持する。

魔力がゴリゴリ削れていくのを感じるが、最近クシナダに全回復してもらったお陰で

あと三秒程度なら余裕だ。

「2」

前言撤回。ヤバイ、向こうが出力を上げたのか防壁が大きく揺らぎ始めた。

助けを求めるように第一位を見るが、なにやら深呼吸を繰り返しているだけで反応が

無い。

「1」

「ぐ、お、があアアアアツツ!!!」

ー駄目だ。

防壁が粉々に砕け散り、破片が俺の頬を切った。

世界がスローモーションになる。不可視の暴力が俺の指先を飲み込んだ。

不思議と痛みは無い、しかし俺は思わず表情を苦悶に歪めて――

「ゼロ……っ」

「――」

――その声を聞き、俺は半ば反射的に無事な方の手に龍鱗を纏わせて最大の力で前方へ突き出した。

すると、不意にぐちゃりという音。

「が、ふ……ッ!? な、ぜ……!?!」

「……はっ?」

気がつけば俺はクリシユタの背後に立っており、右手が後頭部からその頭を貫いていた。

そんな俺のすぐ横には第一位が座り込んでおり、ぜえはあと荒い息をしている。目と鼻からおびただしい量の血も流れており、凄まじく消耗しているようだった。

……俺は誓って瞬きをしていない。それなのに気付かぬうちに立ち位置が変わった。

俺は驚きのまま第一位を抱え、頭から血を流して倒れるクリシユタから距離を取った。

「これっ、何したんですか東弊さん!？」

「はあ、はあ……ふふ、秘密。この戦いから生きて帰れたら教えてあげる……あつやばいこれ死亡フラグってヤツかしら」

「この状況で何しようもない事言っただよー」

まるでフルマラソンを終えた後のように荒い息をしている第一位に肩を貸したまま、俺は空に浮かぶ黒い球体を睨み付ける。

そこからはまたもやどろりとコールタールのような液体がこぼれ落ちてきて、出来上がった水溜まりからクリシユタが這い出てきた。

……マジで果てしないな、こいつ。ボス側が無敵コンテナニューなんて使っちゃ駄目だろどう考えても。

「……私は、またやられたんですか」

横たわる自分の死体を見ながら、クリシユタは無感情にそう呟いた。

「く、ふふ……なあにへこんでんの……貴方はこれからあと何万回も殺されるんだから、たった二回でそんな顔してたら保たないわよ」

「減らず口を……君の方が息も絶え絶えに見えますが」

クリシユタは溜め息を吐き、再び俺たちに人差し指を向けてきた。

咄嗟に他の駆逐官たちがそれを止めようとするが、千を越える天使たちに阻まれてク

リシユタの所までたどり着けていない。

俺も試しに正面から”水魔術”アイオライトを放ってみたが、クリシユタに当たる寸前でまたもや見えない壁に阻まれた。

やはり意識外からの攻撃でなければ防がれるか。

「……東弊さん、さっきのアレ、もう一回やれますか。相当しんどそうですけど」

「はっ、誰にモノ言ってるのかしら……やれるやれないじゃない、やるの。無辜の市民を異界の侵略者どもから守るのが駆逐官で……私は”第一位”なんだから」

「……じゃあ、次は攻撃が止んだ直後にあいつの目の前に飛んでください。策があるので」

俺はクシナダのお守りをぎゅっと握り締めた。

第一位は俺の肩から手を放し、ふらふらと一人で立ち上がる。そして俺も光学防壁プリズム・バリヤの展開を準備する。

……確実に不意を打てるのは攻撃の最中か直後だ。

俺は呼吸を整える第一位を尻目に覚悟を決める。

「……なんだ、あれ」

その時、西の空から高速で飛来する何かが見えた。

空を覆う天使の雲を引き裂き、オレンジ色の軌跡を残しながらこちらに向かってきて

いる。

嘘、だろう、あれは……

「デルタター戦闘機……エリミネーターさん……!？」

——その戦闘機の形状は、大賢者戦でエリミネーターが見せた物と全く同一だったのだ。あの戦闘機は冷戦時の兵器……乗っているのはエリミネーター以外ありえない。

天使化が治ったのだ。クシナダは五分五分、イチかバチかと言っていたが、エリミネーターはイチを引いたらしい。

「……戦闘機？　今さら軍が出張ってきた所で」

クリシユタの上空五十メートルぐらいの高度で、戦闘機が一瞬にして霧散むさんした。

そしてその赤い霧を突き抜けて、怒りの形相のエリミネーターが大剣を構えたままクリシユタへと落下していく。

背中から炎魔術カーネリアンのジェットを噴出し、落下による位置エネルギーも相まって恐ろしい速度で。

「っ、あの騎士……なぜ天使化していない……う？」

——クリシユタが、空エアロの標的をエリミネーターへと変えた。
空へ指を向け、エリミネーターを迎え撃つ体勢。

「まずっ……!?!　エリミネーターさん！　避けてくださいー!」

エリミネーターはあれのヤバさを知らない。このままでは直撃する。

「消し飛んでくださいー現実改変・空^{エアロ}」

俺の制止虚しく、クリシユタの指先から濃密な魔力が迸りそれがエリミネーターに正面からぶつかった。

「ー何をしている？ 言葉遊びで人は殺せんぞ……クスめが」

「な」

ーしかしエリミネーターは空^{エアロ}の奔流を難なく通過して、手に持った大剣でクリシユタを真つ二つにした。

「なんで……!?!」

エリミネーターに、現実改変が効いていない……？ いや、クリシユタと初めて会った屋上の時は効いていた筈だ。

なら、なぜ。

そう考えてー俺の頭の中で思い当たるものが、一つだけあった

クシナダは、アイデア使いたちを退けたあれだけの力を持ちながら“天使をどかしてくれないとボクはクリシユタには攻撃できない”と言っていた。

クリシユタとクシナダは親子だから、能力も同質のはず。

そこから推察すると、オーもしや、天使あるいは天使化を克服した人間には、現実改変に対する抗体のようなものが生まれるのではないか？

天使たちが空の射線^{エナ}上から逃げていたのを見るに、後者の方が抵抗力は高そうだが。

「……エリミネーターさん」

この人が来た所で苦しい戦況には違いない、違いないが、オー確実に、希望は差し込んだ。

十八話『《誰》』

空から黒い泥がこぼれ落ちてきて、再びクリシユタの復活が始まる。

それと同時に――天使の群れがエリミネーターへ殺到した。全方位から恐ろしい数のレーザーや光の剣が振り下ろされる。

「――エンジエライト《七翼》」

しかしエリミネーターはそれら全てを紙一重で回避し、その勢いのまま円を描くように大剣を振り払った。

囲んでいた天使たちの首が一齐に宙を舞う。穴が開いた包囲網を突破し、エリミネーターは真つ直ぐ復活直後のクリシユタへと距離を詰める。

あまりの速度にぎよっとした様子の子のクリシユタがたたらを踏みながら後ずさった。その隙だらけの腹にエリミネーターの大剣が突き刺さる。

……クリシユタは、俺やエリミネーターと違い本職の戦士というわけではない。どちらかと言えば司令塔タイプ。

だからこそ、能力の効かない相手に距離を詰められれば果てしなく弱いのだろう。

「っ……… おかしい、なぜ現実変化が――」

「人間をモンスターに変えるなど……お前は、自分がやった行為の重さを理解しているのか？」

一秒足らずでクリシユタの体が十文字に切り裂かれた。

即座に黒い沼から復活するが、頭を出した時点でエリミネーターに頭蓋をカチ割られ絶命する。

「わた」

「オレたちが……一体どれだけの犠牲を払い、一体どれだけ家族のような仲間たちの死体を踏みながら、一体どれだけ命と魂を燃やして怪物共と戦い続けたか理解しているのか？」

復活する度、その瞬間に音速を越えた斬撃が正確無比な軌道でクリシユタへ襲いかかり、何度も何度も命を刈り取っていく。

人間一人から出る量を遥かに越えた返り血を浴びながら、エリミネーターは眉一つ動かさず殺戮を繰り返し続ける。

「召喚地点を、この騎士から遠くへ!!!」

ほんの僅かな隙を突いて、クリシユタがそう叫んだ。エリミネーターの振り下ろした

大剣に両断される寸前でその姿が消え失せる。

「必ず殺す……逃がさない」

自分を袋叩きにしようとしてくる天使たちをめった斬りにしながらそう呟くエリミネーター。それを見て第一位は渴いた笑いを漏らした。

「……ヤバイぐらいキレてるわねエリミネーター。一人で殺し切りそんな勢いなんだけど」

心の中で頷く。あの人があんなにブチギレてるの初めて見た。クリシユタの行為が何らかの逆鱗に触れたのだろう。

「……あれは」

ふと、他の駆逐官たちの対処に回っていた天使たちがエリミネーターの方へと大挙を成して集まってくるのが見えた。

空を埋め尽くしている天使たちは黒い球体の維持で手一杯なのか襲ってこないが、戦場で駆逐官たちの対処に回っていた方はほぼこちらに來ている。

……いくらエリミネーターでもあの数はちよつとまずいな。

俺は第一位にアイコンタクトしてから、全力で駆け出した。

「加勢します、エリミネーターさん！」

「坊主か！ 助かる……勝つぞ」

「はいー！」

ー術式装填。

俺たちはほぼ同時にそう叫び、水魔術アイオライトと土魔術オロペルデーを発動した。

二人分の威力、膨大な量の水と土が混ざり合い大規模な土石流となつて天使たちを蹂躪する。

しかし、それでも天使の数は一向に減らない。マジで何体いるんだこいつら。

最終目標が『全人類の三割』と言つていただけに、現時点でも出鱈目な数があるのだから。

こうなったらー

「エリミネーターさん、今から一秒だけ大賢者の光魔法ア使つて突破口を作りますー！」「やれるのか!？」

右目に意識を集中させ、万物を融解したいつかの閃光を思い出す。

大賢者のように連射はできない。しかしこの魔法はそれでも尚切り札として余りあるのだ。

ステイルシアの眼を移植されてから何度も使つたが、俺自身の魔力切れを除いて光魔法が力負けしたことはただの一度も無い。

視界に白い魔方陣が展開したのを確認してから、俺は詠唱する。

「光魔法……！」

——閃光。

知覚すら不可能な光速の熱線は、地平の彼方まで天使たちを灼き尽くしながら直進した。

歯を食い縛り、発動を維持したまま熱線を横に薙ぎ払うと、それは剣のように奴らの胴を分断した後細い光の糸になって消え去る。

今の一秒弱だけで軽く千は殺した。

「はあ、はあっ……！」

「よくやった坊主！」

一気を持ってかれた魔力に息切れしながらも、俺はエリミネーターの背を追って天使たちの波を抜けた。

その先には、忌々しさと驚愕に表情を染めたクリシユタが立っている。

「……これ以上天使を減らされたら時空掘削球体の維持が……まずはあの騎士を無力化しなければ、そうすれば後はどうにでも……」

クリシユタはぶつぶつと何かを呟きながら、腕で虚空に『4』を描くような奇妙なサインをした——その瞬間、エリミネーターの足元の地面から四本の炎剣が生えてきた。

「こんな粗末な不意打ちが、オレに当たると——ぐ、うっ!？」

咄嗟に身をよじり炎剣を回避したエリミネーター。

「……しかしソレは本命では無かった。」

回避の直後、どこからか飛来した黒い杭のような物体。

それが四つエリミネーターの背中に刺さっている。

杭の飛んできた方向を見れば、天使ではない白コートの四人組が煙のくゆる銃口をエ

リミネーターに向けていた。

「……失念していた。」神の存在証明の全員が天使化しているという保証はどこにもないというのに。

「なんだ、体が重い……力が……入らない……？」

かくんと膝が折れ、エリミネーターは地面に倒れた。十中八九あの杭のせいだろう。

「ステイルシアの腕に嵌められていた、魔力を封じる装置と似たような物かもしれない。」

「エリミネーターさん……！」

「オレの事はいいから急げ……！　また奴らに囲まれば次は無いです！」

「つ、分かり、ました……！」

エリミネーターに背を向け、俺は走る。あと15メートル程。

正面から一人で向かってくる俺を見て、クリシユタの口角ががり上がり喜色満面になった。魔力の減った俺一人なら赤子の手を捻るように殺せると思っているのだろう。

「……だが、こいつは知らない。」精霊王の義眼の真価を。

あと十メートル、クリシユタと目が合った。

この距離なら、確実に覗ける。

《一秒後、充分に引き付けてから空で確実に葬る……》

精霊王の義眼を発動——奴の思考が手に取るように分かる。

あと五メートル、俺はヤツが空を発射しようと思つた瞬間、自分の横に向けて風魔術を放った。

「つ、消え……!?!」

その反動で俺の体は逆方向に吹き飛ぶ。クリシユタからすれば一瞬で視界から消えたように見えただろう。

そして、クシナダのお守りを振りかぶる。

「……つちだノロマ……！」

戦意を失い、地に膝を着いたまま嗚咽するクリシユタ。

あまりの変容ぶりに俺が面食らっていると、ーククリシユタの背後に煙のような何か
が渦巻き、それが少しずつ人の形になっていくのが見えた。

直感で分かった、ークシナダだ。

「お母さんは惨めに死んじやったけどさあ……まだボクがいるよお？　おとーさん？」

「が、ぐあ……ッ!？」

ーククリシユタの胸から、鋭利なナイフが生えた。

煙はいつしかクシナダの姿に変化し、手に持ったナイフでクリシユタを貫いている。

パキ、パキ、パキ。

クリシユタが復活に用いていた空の黒球に、少しずつヒビが入っていくのが見えた。

やはり、無限コンテニユーを封じる力をクシナダは持っていたようだ。これでやつと

終わる。

へなへなと足から力が抜けて、俺はため息を吐いた。

「誰だ、お前は!？」　なぜ時空掘削球体が……馬鹿な、この力は、私と同種の……!？」

「誰って……ひどいなあ。お父さんってば、信者集めに執心し過ぎて可愛い我が子の
顔も忘れちゃったのー？」

「……我が子、だと？」

軽薄にけらけらと笑いながら、クシナダはより深くナイフを抉り込む。クリシユタが吐血した。

クリシユタは苦痛に悶えながら首を捻って後ろへ向き——視界に捉えたクシナダを、悪鬼のような眼力で睨み付けた。

「…………ふざけるなよ」

「何があ？ おとーさん。ボクだよ、クシナダだよー？」

「ふざけるな、ふざけっ、るな…………っ！」

クリシユタは血を吐きながら、途切れ途切れでそう叫んだ。崩れゆく黒球に目もくれず、歯を食い縛ってクシナダを睨み付ける。

クシナダは抑え切れぬ笑いを堪えるときにように口をつぐんで、クリシユタを見下していた。

「…………クシナダは」

「……………」

「クシナダは、私たちの娘は…………死産だ！ 私がこの手で、妻と一緒に埋葬した…………！」

お前は誰だ!? 私たちの娘の体と名前で、何をしようとしている…………ツ！ その子を、踏みにじるな…………！」

ひどく濁った声で、クリシユタはそう叫んだ。

「……………は？」

……………クシナダが、死産？ わけが分からない。こいつは実際ここに立っているのに。俺が怪訝な顔をしながらクシナダの方を見ると、クシナダは無言のまま、口だけを歪めて静かに笑っていた。

「……………ふっ」

「貴様だけは、殺す……………！」

「……………ふふ、あはははっ、あははははははははは！ くひひっ、ふは、あはははははははあっ！

ああっ、ほんとお腹いたいっ、ほんつと……………」死ねよ」

「が……………っ」

クシナダの言葉で、クリシユタの頭が大きく弾け飛んだ。もう復活はしない。

空を埋め尽くしていた天使たちの頭上に浮かんでいた光輪も光を喪い、体は灰になって落ちてくる。

空の黒球からは、泥の代わりに真つ赤な宝石——クリシユタの魔核が落ちてきた。

……………自分の核を、あれに株分けでもしていたのか？

「最強の現実改変者……………やっつと、殺せたあ……………！」

クシナダは落ちた魔核を手に取り、心底嬉しそうな笑顔でそう言った。

「……や、やったな、クシナダ？」

クシナダの様子がおかしいような気がして、俺は少し困惑しながら歩み寄る。

俺に気が付くなり、クシナダは振り向いてにぱっと花が咲いたように笑った。

「うんっ、やったね渚！ 君のおかげだよ！」

「あ、ああ。それじゃあさ……！」

俺は、その手を取ろうとして。

「――これで、全部終わらせられる」

クシナダは。

あまりに屈託の無い、眩しさに目を細めてしまいそうになる綺麗な笑顔のまま。

――実の父親の魔核を、躊躇なく噛み砕いて呑み込んだ。

十九話『The Birthday』

ごちゆり、ぱぎり。

ガラス混じりのミンチ肉を咀嚼するような音が、クシナダの口から聞こえてくる。

数秒でクリシユタの魔核を呑み込んだクシナダは、唇に付着した血を舌で舐め取ってから恍惚とした顔で嘆息した。

「ク、クシナダ」

「……その名前さあ、ほんつとセンス無いよね。自分の娘に女神の名前付けるかね普通！ ははは!!! こいつ、死ねよ！ 死ねよ……っ！ ってああもう死んでるかあ！」

クシナダはけらけらと笑いながら、クリシユタの死体を何度も踏みにじった。
……こいつ、こんな性格キヤラだったつけ。

俺の知るクシナダはいつも冷静で、間違つてもこんな言葉使いをする奴ではなかった。

俺は怪訝な顔をしながらクシナダに歩み寄る。

「お前、なんか変だぞ……？」

「……ん？」

ぱたりとクシナダの笑いが止み、真顔になって俺を見つめる。クリシユタと同じ金の瞳と視線が交差した。

ステイルシアの目で考えを読み取るうとしてみたが、こいつ思考はひたすら伽藍堂^{がらんどう}で何も見えない。

「ああ……渚の前で素^すが出ちやった時は毎回記憶消してたっけ」

「さつきから何言ってるんだよ……？ 全部終わらせるとか、俺の記憶消すとか」

「分からないよね……渚。ふふ、今は気分が良いからね。親友の君には特別の饞別として全部教えてやるよ」

混乱する俺を意に介さず、クシナダはぐつと顔を近づけてきた。鼻と鼻とが触れあい、そんな距離。

口の周りに付いた血がさながらルージユのようで、無邪気な笑顔とは裏腹に、中性的な顔立ちからは奇妙な妖艶さを感じた。

「むかーし昔。異界から追放された現実改変の怪物が、とある神社の巫女^{かんなぎ}に恋をしましたとさ」

「はあ……!?!」

クシナダは俺の顎を掴み寄せ、逃げられなくしてから静かにそう語り始める。

その目には深い憎悪の感情が浮かんでいた。

「心優しい怪物に、巫女は少しづつ惹かれていき……やがて二人は愛し合い、巫女は怪物との子供を身籠りました」

『しかし、それが悲劇の始まりでした』

そう言ってから数秒沈黙し、クシナダは再び口を開く。

「出産された赤子には臓器のほとんど、皮膚の大半と、四肢の全てと、そして脳の半分が欠けていたのです。……異種交配のありふれた悲劇、奇形児でした」

クシナダはそう言って自分の側頭部を指でトントン叩く。

「そんな死に体で外界に引きずり出された赤子は、産道を通る途中で父から受け継いだ力を暴発させ、母親の体を内側からずたずたに引き裂いてしまいました」

「……それって、クリシユタがさつき言ってた……」

「そして自らも死にゆく中、赤子は本能的に——強く強く、何度も『死にたくない』と願ったのです。……そして、赤子の拙い現実改変能力は、それを部分的に叶えたんだ」

後ろから複数人の足音が聞こえてきた。首をよじって確認するとエリミネーターと第一位、そしてその遙か後ろに多くの駆逐官たちが走ってこちらに向かってくる。

「肉体は腐り落ちたけど……自我だけは辛うじて、幽霊のように誰からも認識されない形でこの世に踏み留まったのさ。……これが今からおよそ九十年前のお話。それからボクはずっと、誰にも見つけてもらえず独りでこの世界をさまよったんだ」

「坊主！ そいつは敵か!？」

「つ……わ、分かり、ません……友達、なんです」

「なんだそれは……しつかりしろ！ お前らしくないぞ！」

クシナダはこちららに向かつてくるエリミネーターたちを一瞥だけして、すぐに視線を俺に戻す。

「君に想像出来るかい……？ 産まれてからずっと無視され続ける事の残酷さが。ボクが、ボクを無いものとして扱ったこの世界をどれだけ憎んでいるか」

「何が、言いたいんだよ……」

「あ、けど君とバンダイの事だけは好きだよ。逆に言うとその以外の全てが吐き気を催すほど嫌いなんだけど。……ええとつまり、ボクが何を言いたいかって言うからねー」

クシナダの頭上にドス黒い輪リングが出現し、それと同色の片翼が背から発生する。

今までクシナダからは感じなかった魔力が、クリシユタをも上回る暴力的なまでの濃密さで俺たちへと放たれた。

「ーお父さんが警戒してた”勇者”とやらが来るのを待つまでもない。こんな世界、ボクが滅ぼしてやるんだよ」

ーぐらりと地面が揺れる。岩盤がひび割れ隆起する。

まるでこの星自体が恐ろしく巨大ななにかの卵であり、地殻はそれを包む殻であるか

のように。

今、なにかが産まれようとしている。けして産まれてはならない存在が。そう直感した。

「地面の下に何かいる……!?」 おいやめろクシナダ！ そんな事したら、俺たちはお前と戦わなきゃならなくなる！」

「ははは！ それ良いねえ！ 殴り会おうか渚！ 最後に青春っぽい事しよう！」
愉快そうに笑って、クシナダは俺を突き飛ばした。

後ずさる俺の横にはいつの間にか第一位とエリミネーターが立っていて、二人とも鋭い目でクシナダを睨んでいる。

「……龍人。貴方とアレがどういう関係かは知らないけれど、ひとまず鎮圧するわよ。抵抗するようななら殺害も視野に入れるわ。協力しなさいエリミネーター」

「癪しやくだが同意だ。この”地中の何か”が完全に出てくる前に仕留めるぞ」
「つ………待つー」

待つてくれ、と俺が言い切る前に二人はクシナダに接近する。エリミネーターは身体能力に裏打ちされた爆発的な走力で、第一位は例の瞬間移動染みた謎の能力でもって攻撃を仕掛けた。

「うん………？ 君はあの時の………ふふ、また槍でお腹かき混ぜてあげようかあ？」

「すごく痛かったわアレ。まったく、人のお腹貫くなんてどんな神経してるのかしら」

「おい対異の女……! お前タピオカ屋やってたオレの腹を素手でブチ抜いただろう!」

「地球人に非^{あら}ずんば人に非^{あら}ずよ。異界生命体には何しても良いって法律で決まってるの」

「素晴らしい法だな、考えた奴の頭を六法全書で殴ってやりたいぐらいだ!」

悪態を吐きながら接近した二人の攻撃が、正面と背後から同時にクシナダへと襲いかかる。

しかしーそれは、地面から這い出てきた白い鱗に包まれた壁に阻まれた。

俺の中に根付く龍の物と色を除き酷似したそれは、鋼鉄の鞭の如くうねってエリミネーターを弾き飛ばした。

……なんだ? あれは。

「これは……っ!」

「……地中に巨大な龍種でも潜んでるのかしら?」

鞭の薙ぎ払いをギリギリで回避した第一位は、そう眩きながらクシナダに腹に拳を叩き込もうとしてーその拳が腹部に吸い込まれるようにすり抜けた。

先程本人が言っていた通り、まるで幽霊のように。

揺れる地面の上に悠然と立つクシナダは、いつものように優しい声で俺にそう返してきた。

「……クシナダ。お前が言ってること七割ぐらいわけ分かんないけど、それが間違っている事だけは分かる。一発ぶん殴って目を覚まさせてやるよ」

一瞬、クシナダが呆気に取られたような顔になる。その後にはらと表情を崩して、心底嬉しそうに笑った。

「……優しいなあ」

「友達だからな。必ず止める」

「ふふっ、やってごらんよーああほら、そろそろ産まれる」

ー地面が、一際大きく揺れた。

「ーーーっ」

「おい、真下だ坊主！」

俺の足元の地面を食い破るようにして、巨大な“口”が地中から姿を表した。刃物のように鋭い、俺の身の丈程もある牙が無数に生えている。

ーなんだこのサイズは。かつぴらいた口の直径だけで軽く数キロメートルはある。あまりの巨体に顔の全容が確認できない。

地面ごと俺を飲み込もうとする“口”から、全力の跳躍でなんとか逃げ延びる。

クシナダは白龍の頭の上に立って俺たちを見下ろしている。

「…………この怪物はね、ボクの死体が元になって出来てるんだ。今までお父さんに抑え込まれて出てこれなかったけど」

「死体…………!?!」

「九十年前にお父さんが埋葬した赤子の死体。それに含有されていた膨大な量の魔力が永き時を経て地中で形を変えー見えての通り、今こうして産まれたってわけさ。育ち盛りだからね、地球一つぐらいべろつと平らげちゃうよ」

魔力を持った人間が死ねばモンスター化するという話は、ステイルシアから聞いた覚えがある。しかし、目の前の光景とそれを結びつけるのにはいささか戸惑いがあった。

既に白竜は最初に出てきた時の二倍程の大きさまで成長している。

地面を取り込んだ体積分そのまま巨大化しているかのようだ。当然口も大きくなっているから地面を食らう速度もどンドン上がっている。

出てきてから僅か数分でこの有り様ー比喩抜きで、一日もあればこの星の陸地全てを喰らい尽くしてしまいそうだ。

「炎魔術カーネリアン！…………チイツ、目もくれないか！こちらの攻撃は食事の邪魔にすらならないとでも…………!?!」

大剣を触媒に放たれたエリミネーターの炎魔術は、白龍の鱗をほんの一部焼き焦がす

言われるがまま差し出された手を掴むと、僅かな浮遊感と共に景色が切り替わる。

一瞬前まで白龍の背中に立っていた筈なのに、今は遥か遠くにその姿が見えた。この瞬間移動マジで便利だな。

「塩漬けの魔人、炎魔法発射！」

——白龍の頭上に、空を覆い尽くすオレンジ色の魔方陣が発生した。そこから太陽と見紛うような炎球が出現する。

この攻撃に俺たちを巻き込まないために移動させたのか。

涼しげだった秋の気候が一瞬にして常夏と化す熱量。白龍の馬鹿げた体躯すら呑み込む極大の炎が、空から降り注いだ。

二十話 『異端者の聖剣』

——炎魔法が直撃した。

肉の焼ける臭いと、絹を裂くような白龍の悲鳴が響き渡る。爆煙に遮られて向こうの様子は窺え^{うかが}ない。

その光景を見て、エリミネーターが感心したような溜め息を吐いた。

「これは……凄いな。単発の威力だけならば精霊王をも凌駕するか。随分と腕の良い魔導師がいたものだ」

「ステイ……精霊王に？」

「ああ。全盛のヤツはこれに近い規模の魔法を秒間三発は撃ち込んできたが」

「……ええ？」

「ならもうステイルシアを連れて来れば——と思つたが、今のあいつは俺たちに協力なんかしてくれないか。」

「前に会った時の冷たい眼差しが脳裏に浮かぶ。あれは完全に人類を敵視してる感じだったし、力を借りるために解放なんてしたら逆に被害を出しかねない。」

「……これが、日本の対異が今出せる最高火力よ。もっと破壊力のある兵器とかもある

にはあるんだけど、馬鹿ども……ああいえ。上層部に邪魔されて持ち出せなかったの。ナントカ国際法の何条がどうたらこうたら言ってきた」

眉間に皺を寄せて黒煙の壁を見つめる第一位が、忌々しそうに言った。

兵器……って言うとかシナダが盗み出してきた対異のデータにあつた『ぜんまい仕掛けの神』とかか。上振れた時にはステイルシア並の力を発揮するとか言う異世界のヤバイ道具。

……ていうか、

「クリシユタもあの白龍も、明らかに日本どころか世界の危機だと思っただけですけど。なんで使用許可が降りないんですか？」

「上層部は今回の騒動を『土着宗教団体のテロ』程度としか認識してなかったの。その教祖が大賢者や南極の龍王クラスの脅威だったって事も、ましてや地下にあんな怪物が居たって事もつい最近判明した事だからね。きつと今頃あいつらでんやわんやよ」

『ざまあみなさい上層部。……ああでも結局事後処理を押し付けられるのは私か……』と疲れ切った目で萎えている第一位を横目に、俺は薄れ始めた黒煙の向こう側を睨む。

……あの規模の攻撃だ。流石に無傷というのはないだろうが——確信に似た、こんなあつさりアレが死ぬわけ無いという予感も同時に過つた。

一年にも満たない戦闘経験。しかし濃く鮮烈なそれにより培われた“直感”のよう

撃特化型の”塩漬けの魔人”。その全身全霊をかけた攻撃ですら首を半数も落とせなかったのだから。

「そう……ですか」

「けれど——援軍のアテはあるわ。本当はあの教祖を倒すために呼んでただけ……まあ、結果オーライね」

携帯端末片手に、第一位はそう言った。

「援軍？」

「実はね、日本海近域の守護任務に当たっていた”第二位”に救援要請をしておいたの。多分もうすぐ来る筈よ。……あの人、何度言ってもメール返信してくれないから少し不安だけど」

「……あいつが」

第二位——大賢者との戦いで、俺とステイルシアに漁夫の利かましてきやがったあの槍使い。ムカつく奴だが力は確かだ。来てくれるなら相当な戦力になるだろう。

ヤツにあの白龍の分厚い鱗を貫ける手段があるのかは不明だが。

「……待って、嘘でしょう？」

その時、第一位が遠くの白龍を見ながら震えた声でそう呟いた。俺もそれに釣られるようにして、白龍へと視線をやり——言葉を、失った。

「——再生、してる？」

——水蒸気を放ちながら、頭が焼け落ちた首の断面がボコボコと盛り上がる。沸騰した液体状の筋肉が少しずつ龍頭の輪郭を形作っていく。

喪われたはずの頭部は、わずか数秒で完全に治癒した。いや、むしろ消し飛ばす前より一回り以上大きい。

「ねえ渚。ボクがなぜ対異の情報なんか集めてたか分かるかい？ 確実に勝てるかどうか調べるためだよ」

「っ、クシナダ……！」

「そしてその上で断言しよう。白龍こくれはあと二時間弱で日本列島を貪り尽くし、その時点で世界中全ての駆逐官……いや、この星の全生命体を同時に相手取っても勝利可能なまでに成長すると」

白龍が再び進行を開始した。加速度的に地面を取り込むペースを上げて、その体軀を更に神話的なサイズへと成長させていく。

——既に、首をもたげた登頂部は大気圏まで到達するか。

それに加えて万里の長城すら遙かに凌ぐであろう体積。星を物理的に喰らい尽くす埒外の災禍。

まったくもって、勝てる気がしない。

「だから渚。無駄な抵抗はよして、特等席からゆつたりと星の終焉を見守ると良いよ」

「……なんで、こんな事するんだよ」

「だからさつきも言った通り——」

「違うだろ……!? 世界を恨んでるとか滅ぼすとか……!それは、俺とバンダイと普通に学校行ったり、買い食いしたり。そういう日常を全部壊してまでする程、大事な事なのか!」

その言葉に、クシナダは一瞬だけ空を見上げて黙り込んだ。

それからきゅつと口をつぐんで、鼻から息を吐いた。

「………そうだね。確かにボクは君たちの事が大好きだよ。正直な所、君やバンダイと一緒に日々を守るためなら、この力で異世界の連中相手に戦う事も^{やむを得ず}かじやないとさえ思っていたさ」

「なら……」

「——けどね? ぼくは、ボクは無理なんだよ。世界が滅ぼうが存続しようが、もう君たちと一緒にはいられないんだよ」

どこか泣きそうな顔で、クシナダはそう言った。

「なんで」

「……少し、話し過ぎたかな。なんにせよボクは止まらない。この腐った世界を食らい

尽くすまで進み続ける」

俺の説得空しく、白龍は変わらず大地を貪り続ける。……分かつてはいたが、言葉じゃ止まってくれないか。

「おい陽葵……あれを、殺せば良いのか？」

——その時、白龍の這いずる轟音を裂くように男の声が世界に響いた。

咄嗟に振り向くと、そこには白と金が混ざりあつた髪色の男……”第二位”が、複雑な紋様の鞆に収まつた剣を携えて白龍を睨んでいる。

「遅いわよ、第二位。あなたの脚ならこのぐらいの距離すぐの筈でしょ」

「悪いな」

第一位が、横に佇む第二位に対して悪態を言った。

第二位はそれを軽く受け流して、一歩前が出る。

「ドイツ支部の”聖剣”を取りに行つていた。……いや、向こうがゴネてきたから力づくで持ち出したと言う方が正しいか。だがそれで正解だったな。あれが完全に育つていたら、誰も手の付けようが無かつたかもしれない」

右手に持つた剣を見せつけながらそう言った第二位に、第一位は顔を青くする。

「ドイツから力づく……？ え、それ普通に国際問題なんだけど」

「知ってる。後始末は頼んだぞ」

「あ あ あ つ!? もう、なんなの!?!、どいつもこいつも私を過労死させる気なの……!?!」

「……………なぜ」

『また、また地獄の残業生活が始まるの!?!』と頭を抱え取り乱す第一位とは対照的に、エリミネーターは啞然としたような顔で第二位の背中を見ていた。

「なぜ、あの人がここに……!?!」

ぼそり、と漏らされたその呟きを俺は聞き逃さなかった。

…………『あの人』だつて? エリミネーターは第二位と面識があるのか?

「エリミネーターさん、あいつの事知ってるんですか?」

「…………ああ、知っている。良く知っているともし」

俺の問いに、エリミネーターはどこか煮え切らない様子ながらもそう返答した。

第二位は剣の鞘に手をかけて、今にもそれを抜き放とうとしている。

「あの人は、術式装填の開発者にして、始まりの魔術師」

第二位の持つ剣が完全に鞘から解放された。光すら反射しないほど濃い漆黒の刃が露あらかわになる。

異様な空気を纏うその剣を、クシナダは怪訝そうに見つめている。

「…………術式装填の、開発者」

EX 『透明人間の話』

「おい、なぜ母体がここまで損傷している……!?　せめて奥様だけでも命を繋ぐのだ！
クリシユタ様の御業ならばきつと……！」

「む、無理です！　母子ともに脈がありません！　こんな時につ……！　クリシユタ様
は今何処へ!?」

「疫病の蔓延が酷い三つ隣の街に治療へ行っている！　奥方様の出産のご予定は本来、
一月後だったであろう！」

白い服を真っ赤に染めた産婆と医者たちが焦燥を顔に浮かべて、床に伏す妊婦の死体
を囲んでいます。

まるで腹の内側で爆薬が炸裂したかのような、凄惨な有り様でその妊婦は息絶えてい
ました。

「い……あ……い、ギ」

そしてそのすぐ近くに——皮膚と四肢の無い、人の赤子と呼ぶにはあまりに未熟で、
どちらかと言えば？の胎児とでも説明した方がまだ周囲の納得を得られるような。そ
んな憐れな水子が。自分が殺した母親の残骸を無感情に見上げていました。

「——あつい、あつい、あつい。

さつきまでじぶんをつつんでいたあたたかな羊水おみずはどこへいつてしまったのだろう？

あれがないときむいのに。さむいはずなのに。じぶんのからだはまつかであつい。

——いきができない。

なきわめこうとして、のどがさけた。あついのがふえた。

だからまわりでさけんでいる、きつとじぶんとおなじしゆるいのいきものたちに、てをのぼそうとした」

哀れな水子は、自分の体には手も脚も用意されていない事などつゆ知らず。ただ助けを乞うように身をよじりました。

産まれたばかりの……いえ。満足に産まれる事すら出来なかつた彼女には、自分がなぜこんなに苦しいのか、なぜ誰も助けてくれないのか、何もわかりません。

しかし水子の半分ぼつちしか無い脳味噌に詰め込まれた生物的な本能は、今の自分の肉体が、もつとも恐るべき『死』へとまっしぐらで向かつている事をようやく理解しました。

「——ああ、こわい、こわい！ なにか、くらくてさむくてとてもこわいものに、じぶんはのみこまれてきえようとしている！」

彼女にはものを掴む手が生えていません。

彼女には地を蹴ることの出来る足が揃っていません。

彼女にはものごとを考える頭脳が半分ばかり備わっていません。

彼女には通常の赤子がよく発達させているはずの声帯がろくに形成されていません。

「……………」

彼女には生きるために必要な臓器の大半が与えられていません。

彼女には母親の愛が与えられることはありません。

彼女には父親の抱擁を受ける事ができません。

彼女には何もありません。

——セカイは彼女に、彼女の欲する、なにもかもを与えてくれませんでした。

「……………」

——しかし。水子は。

”おとうさん” からただひとつ、世界の法則を書き換える、凄まじい力だけは受け継

いでいたのです。世界を形成する0と1の数列へ割り込む事が出来る、現実改変の能力

です。

しかしそれさえも、水子が瀕している死の危機を覆す事はできませんでした。

ああ、とつくの昔に心臓は止まっています。脳の細胞が灰色に腐り落ちていきます。

*

『…………う、あ?』

気が付くと水子は、大きな祭壇のある部屋に横たわっていました。そしてそれと同じ時、自分の全身を支配していた痛みから解放されている事に気が付き、ひどく喜びました。

しかし周りでは何人もの大人たちが悲壮な雰囲気ですりこくっており、その中心には涙を流す一人の男が立っていました。

男の懐には死に化粧がなされた女の遺体と、布にくるまれた小さな小さな胎児の残骸が抱き締められています。

「…………起きてください、二人とも」

『…………?』

「起きてください。起きて、ください…………悪い冗談はやめてください」

何度も何度も、男は女の死体を揺さぶります。しかし女は肉塊のまま返事をしません。

男の名はクリシュタ・マナス。新興宗教“神の存在証明”——本人は『慈善団体』と言つて憚りませんが——の教祖です。

彼をととても尊敬し、崇拜すらしている周りの信者たちの中には、いたましい教祖の姿に涙を流す者すらいました。

「……クリシユタ様。奥様は、もう」

「うるさい……！　今まで私に救えない人間が居ましたか!?　かつて私の権能が通じない病がありましたか!?　きつと二人ともどこかが悪いんです……！　それを治せば、絶対に——」

「クリシユタ様。これは疫病えやみに非ず、傷痕しやういに非ず……これは、”死”にございまする」

「黙れ！　そんなものの存在、私が認めない……！」

(……このひとたちはどうして、めからみずをながしているんだろう?)

体を苛んでいた激痛から解放された水子は、とてもご機嫌な気分でした。手も脚もありませんがご機嫌でした。

ご機嫌なので、周りに自分の姿が見えていない事など気が付かず、好奇心の赴くままに『自分と同じ種類の動物』だと思っている人間たちの観察を続けます。

あの自由に動く五本の棒ゆびが生えたものは便利そうだな。

腰から二本の棒あしが生えていればあんな軽やかに動けるのか。

まるできちんと産まれた普通の赤子と同じように、彼女は周囲の大人からいろいろな事を学び取っていきます。

その結果、未熟児の形をしていた彼女の魂からだは形を変え、僅か一週間程で人間の幼児に近しい物へととなりました。

「……ああ、神よ。どうか、あの方の魂にお救いを……」

『〜♪』

その頃になると水子はもっぱら、信者たちが祈りを捧げにやつてくる祭壇の上に座つて過ごすようになっていました。

それはなぜか——にこにこ楽しそうに笑つて祭壇に腰かける水子は哀れな事に、神に捧げられる信者たちの言葉が、自分に対するものであると勘違いしてしまっているのです。”かみさま”が自分の名であると誤解してしまっているのです。

ここに座っている時だけ皆が自分に気付いて話しかけてくれていると、そう信じているのです。

その勘違いも無理はありません。『水子』も『神』も、人々からは見えない存在なのですから。

彼女には投げ掛けられる言葉の意味は分かりません。供えられる食べ物を食べる事もできません。

しかし寂しがりやな彼女にとって、誰かに話しかけて貰えるのは、それだけで一等の幸福なのでした。

『あ、い、う、え、おー』

数年後、喉を発達させた水子は少しずつ言葉を覚え始めました。覚えてしまいました。

それは、勘違いが見せた幸せな夢との離別を意味すると言うのに。

『ねえねえ、きいて！ あのね……っ』

「どうか、クリシユタ様の魂にお救いを……」 「神様。心病める教祖様に、どうか救いの御手をば」 「神よ、あの方をなにとぞ……」

『……あれ？』

拭いきれぬ違和感との直面はすぐでした。彼らの言う「かみさま」とやらが自分の名前ではないと、彼女はやつと気が付きました。

「会話が成立しないのです。」

「どうしても目が合いません。」

「誰も彼女を見てくれないのです。」

今まで水子の心を支えていた言葉の全ては、彼女以外の誰かへの言葉だったと気が付いてしまったのです。

「神よ、遠方の祖父にどうか息災のご加護を……」 「神さま、息子が空襲で行方不明なのです……どうか……！」

そこから、水子にとって地獄の日々が始まりました。

この広い星の上に、ただ一人だけ置き去りにされてしまったかのような感覚でした。春も夏も秋も冬も、みんな水子を置いてきぼりにして巡っていきま

す。何度も、何度も、何度も。止まらない地球ほしの自転による摩擦で、念入りに彼女の心を搗り潰すかのように。

『……今日は、どこに行こう』

そう呟く水子の瞳は暗く濁っています。

あれから何年もかけて、水子は小さな歩幅で地球をぐるると歩き回ったりもしてみました。

しかしそれでも。彼女の事が見える人間は一人たりとも見つからないのでした。

『……………』

死にたい、なんて言葉はもうとつくに枯れてしまいました。

なんたつて水子の肉体はもう既にどうしようもなく死んでいて、これ以上”死ぬ”ことはどうやっても出来なかつたのですから。

『……歩こう。もつと遠くまで、ボクを見つけてくれる人の所まで……』

——きつと。きつとこの星の終わりまで自分はこうして歩き続けるのだろう。そして結局誰にも会えずに終わるのだろう。

しかし、それでも。彼女がこの歪な^{いびつ}生^{せい}の中で狂わずに生きるのには一縷の希望が
必要なのです。

その微かな希望を胸に、自分に気が付いてくれる人を探して、彼女はずっと一人の世
界を彷徨い続けます。

——やがて。十回目の春がやってきました。

この春も、誰も彼女を見つけてくれませんでした。

『……………』

——やがて。

三十回目の春がやってきました。この春も、誰も彼女を見てくれませんでした。

『……………あはは』

——やがて、六十回の春がやってきました。

やはり、誰にも会えませんでした。

『……………ふ、ふふふふふふふふふ』

荒れた陸地の中心で、彼女は自分自身をせせら笑います。

とつくに心は壊れていました。もうとつくに諦めていました。だけれど、ひび割れた
魂を引きずってひたすら歩き続けました。

——そして、彼女の運命を変える、八十回目の春がやってきます。

『……………ああ、もう、ぜんぶ死んじやえよ。みんな消えてしまえ。ボクを無視する世界なんて、大嫌いだ……………』

八十年目の春。

彼女は、自分が産まれた町の公園にあるベンチでぐったりと伸びていました。

もはや『自分が見える人を探す』なんていう思いもすっかり冷めてしまい、今はひたすら世界に対する呪詛を撒き散らすだけの存在と化しています。

「嫌いだ、嫌いだ、大嫌いだ……………」

春の曙あけぼのも、夏の入道雲も、秋の紅葉も、冬の木枯らしも。世界を構成する何もかもが等しく暴力となつて水子を責め苛さいなみます。

彼女はすっかりこの世界の事が大嫌いになつてしまつていました。

『すべて腐り落ちろ、みんな死に絶えろ、すべからく地獄に落ちろ……………ボクが、何をしたつて言うんだよ……………』

今も、彼女は公園の砂場で城を作る少年と老婆を睨み付けています。幸せそうに話し触れあうその光景が憎らしくて、そしてそれ以上に羨ましくて。

もし視線に力があるなら鉄板でも貫けてしまいそうなぐらい怨念が籠った目で、二人を睨み付けています。

「……………渚、そろそろ帰るよ」

「あ、待ってよ婆ちゃん！」

彼女の思いが通じたのか、老婆と少年は公園から去っていきます。

ざまあみろ、と思いつながら彼女は立ち上がろうとして――

『は、え？』

――ほんの一瞬だけ、目が合ったのです。幼い少年を連れられた老婆は、間違いなく彼女の姿を認識していました。

すぐ視線を逸らされてしまいました。けして気のせいなんかではありません。

だって、彼女は八十年以上も視線それを求めて歩き続けたのですから。

『っ……………！』

水子は飛び上がるように立ち上がり、転びそうになりながら老婆を追いかけます。

『はっ、はあ……………っ！ ねえ君！ ボクのことっ、ボクのこと見えてるよね!? ねえ!?』

ねえってば!』

後ろから声をかけますが、老婆は少年と話すばかりで彼女には見向きもしてくれませ
ん。

しかし彼女も必死です。この機を逃せばもう自分は一生一人きりだと分かり切つて
いるからです。

無理やり顔を歪め、数十年振りの笑顔を作つて老婆に声をかけ続けます。

『も、もしかしてさつき睨んだの怒ってる!? あれは違うんだ! ほら! 見て! 悪い幽霊じゃないよボク!』

「……………」

『ねえっ、ねえ!』

「……………はあ」

『ねえ、ボクを、見てよ……………お願い、だから……………っ』

知らんぷりを続ける老婆に、とうとう彼女は泣き出ししてしまいました。ぐすぐすと目を擦る彼女を無視して、老婆は少年の手を引いて歩き続けます。

「……………婆ちゃん? そこに誰かいるの?」

「いや、鬱陶しい羽虫が顔の周りを飛んでいてね」

虫を払いのける動作をしながら、老婆はギロリと彼女を睨み付けました。鋭い眼光には「付いてくるな」という強い拒絶の感情が乗せられています。

しかしそれはむしろ逆効果。彼女にとっては「拒絶」より「無視」の方が遥かに残酷なのですから。

彼女はやはり老婆は自分の姿が見えているのだと確信し、泣きじやくついていた顔をぱあつと明るくしました。

『つく、ふふふ! やっぱり見えてる、見えてるっ……………う、うう……………よかつだあ……………』

「……………」

『あつ、ま、待って！ 着いて行つて良いよね！ 沈黙は肯定と受けとるよ！ まあ断られたつてついていくけどね！』

彼女が老婆の背中を追うこと十数分。老婆と少年が住む家は、古くて立派な武家屋敷でした。

玄関扉を開けて家に入つていく二人に続いて家に入り込む水子を見て、老婆は諦めたように大きな溜め息を吐きました。

それからの日々は、水子にとって初めて生きた心地のする日々でした。

相も変わらず老婆は水子を見つめますが、それでもたまに視線が合つてしまう時があります。そういう時、水子の心はどうしようもないぐらい嬉しさいっぱいになるのです。

『んふふ、渚くん小学校行つちやつたねえ。これで昼過ぎまでは二人つきりだ』
「……………」

ある日の午前中、居間でコーヒを飲みながら難しそうな本を読んでいる老婆に水子はそう言います。老婆はそれを見つめます。

この頃になると老婆のスルースキルもいよいよ熟練してきて、視線に敏感な水子でもたまに『あれもしかして本当に聞こえてない？』と思つてしまう程でした。なので最近

の水子は欲求不満気味です。

これは良くない。そう思った彼女は、昨日から温めていた老婆への切り札キラーカードを使うことを決めました。

『ん、そういえばね。昨日ちよつと小学校の教室まで様子を見に行つてみたんだけどさ……渚くん、いじめられてたよ。今日も暗い顔をして帰ってきたら話を聞いてあげた方が良い』

「っ……」

『お、おおっ！ 反応した！ 三日ぶりだよ！』

——渚くん。そう言った途端、老婆の肩がびくつと跳ねました。

老婆の孫であるこの少年の名前を出した時だけ、必ずと言って良いほど老婆は反応してくれるのです。

水子はそれに気を良くして、ペラペラと言葉を続けます。

『それとねそれとね！ 君がコーヒー好きだから、近くの喫茶店のマスターを観察して美味しいコーヒーの淹れ方を調べたりもしたよ！ 聞きたい？ ねえ聞きたいっ？』

「渚がいじめられているだ……？ く、くくく、怒りのあまり笑えてきた……いじめつ子め、どう報復してくれようか」

『聞いてよっ！』

読んでいた本を閉じ、どこかへ電話をし始めた老婆に水子は叫びます。

やっぱり孫の話題じゃなきや駄目だなど思い、水子はネタを増やすため明日から毎日学校へ着いていくことを決めました。

……ちなみに後日談。

次の日から何故かいじめっ子たちは渚の顔を見るだけでビクつくようになり、いじめは無くなりましたとき。

*

「え、ええつと……5×9は……」

『そこ昨日勉強したでしょ？ 〃ごつくしじゅうご〃だよ！』

「……わかった、59だ！」

『もう！ 馬鹿なの!! なんで五の倍数にすらならないのー!』

次の日の学校。簡単なテストで苦戦している渚に、水子はあきれ返っていました。

テスト時間が終了し、やりきったような顔で先生にプリントを渡す渚に、水子は残念な子を見るような視線を向けます。

『全くきみは、あの人の孫とは思えないぐらいだめだめだなあ……』

勉強も運動もてんで駄目、その癖すぐ泣くし好き嫌いが多くて給食も残す、うじうじしてろくに友達も作れない。渚はそんな子供でした。

『授業中も机の陰で変なもの作ったりして……少しは先生の話聞きなよ?』

水子はつい黙っていられず渚に小言を漏らしてしまいましたが、老婆と違い孫の渚には彼女の声は聞こえていません。

『……あーあ、君にもボクの声が聞こえれば良いのにね』

学校が終わり、一人だとぼとぼ道を歩く渚を見ながら水子はそう呟きます。

——そしたらボクが友達になってあげられるのに。

老婆と違い性格のひん曲がっていない渚なら、水子を見無視する事も無さそうです。

『つてあれ……急に道の端でうずくまって、どうしたの?』

渚が立ち止まってランドセルを背中から下ろし、歩道の隅で何やらガサゴソし始めました。

なにしてるんだろう、と思い水子が渚の視線を追うと、そこには段ボールの中でみゃーみゃーと鳴く一匹の猫の姿があります。

捨て猫です。薄汚く痩せ細っていて、昨夜からの雨のせいか濡れて震えています。

『うわ、可哀想に。これじゃ今夜中に凍え死んじゃうんじゃないかな』

『ごめんね……婆ちゃんが猫アレルギーだから、うちじゃ飼えないんだ』

濡れた猫をタオル拭きながら、渚はランドセルから何かを取り出しました。授業中に作っていた変なもの、給食で残した牛乳とパンです。

「でもね。図工の授業の余りの段ボールで、きみのうちの屋根を作ったよ」
渚の手からパンくずを食べている猫の上に、段ボールで出来た粗末な雨避けが設置されました。表面がガムテープで加工されていてそれなりに雨水を弾けそうです。

水子は、少し驚いた顔で見えています。

『……屋根だったんだそれ。不器用だなあ』

手から餌を食べるほど信頼されているという事は、かなり前から何度もここに来ているのでしよう。良く見れば子猫の入っている段ボールには度重なる補修と改造の痕跡が窺えます。

どうやら授業に集中せず何かを作っていたのも、給食をいつも残すのも、この子猫のためだったようです。

『……優しいね、きみは』

老婆が渚を可愛がる理由が水子にも少し分かりました。……泣き虫で、どんくさくて、本当にだめだめな子だけね。

水子は初めてほんの少しだけ、自分の事が見えない人間のことを好きになりました。

『でも、子猫に牛乳はだめだよ。下痢になっちゃうんだ。明日からはちゃんと猫用のミルクにした方が良い。ボクが君のお婆さんに買ってあげるように言っておくから』

翌日。老婆から何も言わずに大量の猫用ミルクを渡され、渚は「うちのお婆ちゃんはエスパーなんだ」と震え上がることになるのでした。

※

次の日も、また次の日も、そのまた次の日も、水子は渚の小学校へついていきました。

ある日は。

「うう、豊臣秀吉と徳川家康つてどつちがフランシスコザビエルを倒したんだっけ……」
『宣教師を倒してどうするのさ?! ばち当たるよ!』

またある日は。

「あああ、また歴史のテストでひどい点数取っちゃった……婆ちゃんに叱られる……!」
『だ、だからフランシスコザビエルは戦国大名じゃないとあれほど……』

はたまたある日は。

「はあっ……はあっ……運動会のかけっこで勝つために、たくさん走るぞ……!」
『……がんばれっ、がんばれっ』

春も夏も秋も冬も、水子は傍から渚を見守り続けました。

渚に良いことがあった時は水子も喜び、渚に悲しいことがあった時は水子も一緒に悩みました。

まるで夢破れた老監督が若き選手に己の夢を託すように、水子は喪われた自らの人生を渚の成長と重ねるようになっていました。

いつしか手段と目的は逆転し、もはや老婆の気を引くためではなく、渚を見守るために学校へ付いていくようになっていきます。

最近の水子の楽しみはもつぱら、学校での渚の様子を老婆に語り聞かせる事です。

『ねえお婆さん、今日はとうとう渚に友達が出来たんだよ！ バンダイって言ってる……！ 変わってるけど良い奴でねっ！』

「……えらい悪霊に憑かれたと思っただけど、もしかすると座敷童子かもしれないな」

『ん、なんか言った？』

「……………なんでも」

老婆はぼそりと、本当に本当に小さな声でそう呟きました。

『ふうん………つて、え、あ、あれっ!? もしかして今返事した!? 今ボクに返事したよね!? なっつなに!? デレ期なの!? 今日ハ槍でも降るの!?』

九十年近く世界を彷徨つてきて初めて会話らしき行為をした事に気が付いた水子は、興奮を抑えるために腕をぱたぱた振りながら老婆の周りを跳ね回ります。

老婆はそれを、以前までより多少優しい顔で見っていました。

*

——渚が高校に入学して少したった頃、老婆が亡くなりました。

なんてことはありません。高齢者には珍しくない、ありふれた脳病です。

水子が水子であるように、老婆は老婆だったのです。

世界で唯一水子を見ることが出来た人が死んでしまいました。

——水子はまた”透明人間”になってしまいました。

『……………』

真つ暗な部屋、布団にくるまって渚が泣いています。老婆が亡くなってから、渚は学校にも行かずに一日中こんな調子です。

そんな渚を、水子は沈痛な面持ちで見下ろしていました。

『……………泣くなよ、渚』

そう言う水子の声は震えています。

『君にはきつとこれから沢山の人の出会いがあるんだから良いじゃないか……………ボクにはあの人しか居なかったんだよ……………?』

渚の頬に伝う涙を拭おうとした水子の手は、しかしすり抜けてしまいました。水子の表情がよりいっそう悲痛に歪みます。

『だからっ、泣くなよお……………っ、う、ぐすつ……………』

ぼろぼろと、水子の目から実体の無い液体がこぼれ落ちました。

——人の命は短い。いつか渚までいなくなってしまうたら、ボクは一体どうすれば良いんだらう。

そう考えるだけで、存在しない胸の奥がきゅつとなるような気がしました。老婆の死からおよそ一月後。

心の中で何かしらの踏ん切りが付いたのか、渚は学校へ行くようになりました。

水子はそれに安心しながら、今日も彼の学校へと付いていきます。

「おい、お前」

しかし、その日の下校中に事件は起こりました。

自宅の百メートル前ぐらいいまでやって来た所で、そこまで順調に歩いていた渚が振り返ってそう言ったのです。

水子がきよきよと辺りを見回しますが、誰も人はいません。

「……………」

「だから、お前だよ。なんでずっと付いてくるんだ？」

「え、なに、大丈夫？ イマジナリーフレンドでも見えてるの？ 遅めの中二病かな、な

ぎ、さ……………」

冗談めかしてそう言った水子——しかし、次第にその表情は驚愕へと移ろいでいき、思わず声が出なくなってしまうのでした。

「ひっ」

水子がか細い悲鳴をあげ、顔面を蒼白にし、よたよたと後ずさってついには尻餅を着いてしまいました。

——なにせ、渚と目が合っているのですから。

「——ひ、あう、あああつ!？」

「ど、どうした急に大声出して。顔真つ青だぞ……う？」

地面にへたりこんでしまった水子へ、渚が手を差し伸べてきます。

水子は、数秒の逡巡の末その手を取り——手を、取ることが出来ました。

その瞬間、水子は更なる驚きに目を見開きます。

「あたた、かい……」

——生きた、人の手。初めて感じる体温。とくとくと命を燃やす脈動^{おと}。

波濤^{はとう}のように押し寄せる膨大な未知の感触に身を強ばらせ、水子は今自分を襲っている異常事態の事すら忘れて、それに感じ入ってしまいました。

「おい……おい？ 立てるのか？」

「……えあ、う、うん。……立てる、立てるよ」

トリップしていた水子の思考は、渚の言葉でようやく現実に戻ってきました。

水子の手を引き上げた渚はあまりの軽さに驚きながらも、質問を投げかけます。

「お前、教室に居たよな。名前は？」

「……え、名前？」

「別にそんな顔しなくても、同級生なんだから自己紹介ぐらいするだろ。俺は湊みなと 渚なぎさって言うんだけど」

名前を聞かれた水子は、すっかり困ってしまいました。なにせ彼女には名前など無いのですから。

しかし水子はなんとか渚の質問に答えようと、必死に思考を巡らせ――

「ボ、ボクはね、神様だよー」

そう、口走りました。

誰かに名前を呼ばれた（と思いこんでいた）経験なんて、それぐらいしか無いからです。

水子の発言に渚はぼかんとしています。

「え……神様って、この？」

「う、うん」

両手を合わせるジェスチャーをしながら渚は水子にそう

聞きます。それに頷いた水子を見て、渚は合点が行ったように「あー……」と呟きました。

「人のこと中二病とか言っておいて、お前の方がよっぽど患わづらってるじゃねーかよ。分かった分かった、そういう設定ね」

「……え、あ、そつ、そつだよ！ 実は中二病なんだボク！ 君に同類の雰囲気を感じて後を追いかけてきたのさ！」

「ははは、なに言ってるんだよ。わけわかんねえ」

かなり苦しい言い訳でしたが、最初の奇行もあつて渚に『こういう奴』と認識されたのか、なんとか納得を得られました。

それじゃ明日学校で、と言つて去つていく渚の背中を見つめながら、水子は立ち尽くしています。

「……何が、起きてるんだ？」

第一に浮かんだ仮説は『渚だけに自分の姿が見えるようになった』という物でした。老婆の血を引く渚なら水子の姿を見えるようになったとしても不思議ではありません。

しかし、すぐにそれは間違いだと分かります。

街の方へとやって来た水子は、道端で酔い潰れているサラリーマンに声をかけてみました。

「あの、おじさん。ボクのこと見える？」

「ヒック……ああん、んだよお前。女みてえなツラしやがつてえ、これだから最近の若い

のはよお……」

おかしい。

「も、申し訳ありませんお客様、なぜお客様にだけ自動ドアが反応しないのか、私どもの方でもさっぱりでして……」

「いやあの、なんかボクの方こそごめんね……」

何かが、おかしい。

そこらの酔っぱらいからコンビニの店員に至るまで、あらゆる人間が水子の姿を認識出来ているのです。

なんの前触れも無く、唐突に。

もちろんこのような状況は水子にとって何度思い描いたか分からない——渴望していたと言っても過言ではない程に待ち望んでいた事態ではありませんが。

しかし、突如として発生した原因不明の異常を手放して喜べる程、水子も脳無しではありませんでした。

「なんだあれ……空に亀裂みたいのが見える」

ふと空を見上げた水子の視線の先。そこにはいつもの青い空——ではなく、その上に深淵を思わせるドス黒く巨大な亀裂が走っていました。そこから赤い霧のようなものも漏れ出てきています。

しかし、そんな空の異常に人々は見向きすらしません。あの亀裂とそこから流れ出る赤霧はどうやら水子にしか見えていないようです。

奇妙な霧は実体の無い水子の肌にまでじとりと染み付き、不快でした。

「他人から見えるようになったらなつたで、ちよつと動きにくいな」

それから、水子は自分が一番最初にいた場所である『神の存在証明』の施設にやってきていました。

別に来ようとしたわけではありません。この施設の方向から奇妙な“繋がり”のようなものを感じて歩いていたら辿り着いてしまったのです。

「これは……」

水子は、施設の最奥に設置された墓石のような物の前でしゃがみこんでいました。この石の下から“繋がり”を感じます。

「……ボクの、お墓か」

水子は、この下に埋まっているのがかつての自分の遺体であると直感しました。

水子の感じた繋がりのは正体はこれだったようです。

「クシナダって名前なんだボク……お父さんつてばネーミングセンス終わってるな。女神の名前は流石に無いでしょ」

墓石に彫られた名前を指でなぞって、水子はつい笑ってしまいました。

水子は父親の事が大嫌いです。なにせ、彼が人間と子を成そうなどしなければ水子の苦しみは無かったのですから。

しかし、曲がりなりにも親から貰った名前です。水子はこれからそう名乗る事を決めました。

「……あ、なんか、使えそう」

水子は目を閉じ、道端で拾った小石の感覚を確かめながら深呼吸をします。

そして、かつて見た”お父さん”の姿を思い出しながら、口を開きました。

「――^{崩れる}??」

――ぼふり。

手の中で一瞬にして粉末上まで崩れ去った小石を確認して、水子の口がうつすら弧を描きました。

*

現実改変能力。

空にあの亀裂が現れた日以来、水子は父と同じその能力を行使できるようになりました。

そうと分かればやる事は一つです。長年の夢を果たす時がついに来たのです。

渚と、友達になりたい。という。

「ボクはこの学校の生徒だ」

能力を発動させると、昨日まで名簿にすら無かった水子の名前が勝手に登録され、教師も生徒も昨日まで影も形も無かったその存在を当たり前のように受け入れるようになりました。

「……………、こんにちは。渚、くん」

「あ、昨日の中二病の奴」

水子は勇気を出し、バンダイと話していた渚に声をかけます。水子の顔を見た渚は、昨日の事を思い出してそう言いました。

「知り合いか渚？」

「いや、別に知り合いつて程では……………」

急に話しかけてきた水子に、バンダイは怪訝そうな視線を向けます。

しかし、水子の放った一言でその態度は一変しました。

「バンダイ君、実はボクも君と一緒に”マギ・シャイ”好きなんだ」

「なに!? あ、あの2000年代に僅か二週で放送中止になった伝説の深夜アニメを知っているのか!? 我らは親友だっ！」

「ええ……………」

同じアニメが好きと分かった途端、バンダイは勢い良く立ち上がり水子の手をがしつ

と掴みました。渚はそれを見て若干引いています。

水子は二人とすぐに仲良くなる事が出来ました。

当然と言えば当然です。水子はずっと二人の会話をすぐ側で聞いていたのですから、彼らの趣味趣向も性格も完璧に網羅してしまっています。

二人と友達になった水子は、三人でたくさんの思い出を作りました。

一緒に見に行った花火大会が雨で中止になり、代わりに高架下でコンビニ花火をやった。

馬拉ソン大会、バンダイが一人で最下位にならないよう一緒に走ってあげたり。

クリスマススイブ、街をひしめくりア充たちへの愚痴を漏らす渚とバンダイと三人で、夜通しファミレスでお喋りしたり。

そのどれもが、水子にとってかけがえの無い楽しい思い出です。水子は、こんな日々がずっと続けば良いと思いました。

……しかし。そんな楽しい日々は、やがて終わりを迎えました。突如空から降り注いだ大量の緑小人により引き起こされた世界的な災害——“ゴ布林”の襲来です。

街中で殺戮の限りを尽くすゴ布林たちを見て、クシナダは唾然としました。

『なんだよこれ……！ 渚とバンダイは大丈夫なのか!?!』

急いで渚とバンダイを探し出し、水子は二人に駆け寄りました。どうやら渚は大型の

ゴブリンを一体倒した直後のようです。

『二人とも、大丈夫!』

水子がそう聞きますが、二人は返事をしません。

よほど酷い怪我でもしたのか——と不安になった所で、水子は自分の手が透けている事に気が付きました。

『っ、え……?』

半透明で、まるで幽霊のような手。これでは前までと同じです。

渚もバンダイも、まるで見えていないかのように水子に見向きしてくれません。

『なんで……』

原因不明で訪れた幸福は、原因不明のまま過ぎ去ってしまいました。また誰も水子のことを見えなくなりした。

能力も使えなくなってしまうため、水子は次々と送られてくる怪物たちによって崩壊していく世界をただ傍観するしかありませんでした。

全てに無視される事には慣れ切っていた筈なのに、以前までとは比較にならないほど水子の心はずたずたに引き裂かれてしまいました。なまじ人と話せていた分、その落差は果てしなく残酷でした。

心も体も、高い所から落ちたら死んでしまうのです。

『……………』

なぜ、少しの間だけボクは他人からも見えるようになったんだろう。水子はずっとそう考えていました。

そして、一つだけ思いあたる事を見つけます。

『空の亀裂……赤い、霧……』

水子は、泣き腫らした顔で空を見上げました。そして、忌々しそうに目を細めます。

空の黒い亀裂から漏れ出て、一時は世界に充満すらしていた赤い霧——水子が他人から見えていた時は大気を満たしていた赤霧が、見当たらない事に気が付いたのです。

なぜ見当たらないのかは水子も知っています。亀裂から出てきた霧は少しずつ地球の海や土壤に染み込んでいき、空気中からは無くなったのです。

『……空の亀裂は健在だ。霧が、関係している？』

渚が幼い頃よく見ていたアニメで、透明人間がペンキをかけられ輪郭を暴かれるエピソードがありました。水子はそれを思い出します。

——今の自分は、理屈的にはそれと同一の状況なのではないだろうか。

あの霧が大気を満たしていたうちは、みんなが水子の姿を認識出来ていたのです。あの紅露べにづゆが水子の体をじつとりと濡らしていた時だけは。

やはりペンキを被った透明人間という喩えたとが的確です。魔力を多量に含んだあの霧

が、水子の輪郭を頭にさせたのですから。

『……』

もしまた、あの亀裂から大量の赤霧が流れ込んでくるとして。それは一体いつになるのでしょうか。一体水子に何日間の実体を与えてくれるのでしょうか。

その間に二人は水子のことを忘れてしまうかもしれません。自分の事を忘れたまま、死んでしまうかもしれません。

そして二人がいらない世界を、水子は透明の体で永遠にさ迷い続けるのです。

『お、え……っつ』

魂がねじ切れるような痛みには吐き気が込み上げてきて、水子は最悪の想像をやめま
す。耐えられない、そう思いました。

『……なんで、なんで、なんで』

——ようやく毎日が楽しくなってきたのに。初めて産まれてきて良かったと思えた
のに。なんで。

無数の『なんで』が、水子の頭で反響します。

なぜこの世界はボクから奪う事しかないんだ。こんな気持ちになるぐらいなら、最
初から透明人間のまま放っておいて欲しかった。

なぜボクに、温もりを教えた。

『こんな、世界……』

こんな世界壊してやる。ボクを無視し続けたこの世界を殺してやる。

世界を作った神なんて存在がもしいるのだとしたら、そいつを頭から喰らってやる。

希望を失っていた水子の瞳に、仄暗い炎が灯りました。

『……そのためにまずは、邪魔なお父さんを殺さなくちゃな』

——それからおよそ三ヶ月後。

彼女の父、クリシユタ・マナスが大気圏から膨大な量の魔力を観測したその日、水子は再び実体を手に入れるのでした。

「さあ、渚は元気かな」

水子は再び学校へと向かいます。

今度は渚と友達になるためではなく、その力を利用して父親を殺すために。